

丹波小学校校舎整備事業に伴う発掘調査報告書

南丹波遺跡Ⅱ

2010. 3

指宿市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成19年4月16日から平成20年3月31日、及び平成20年10月10日から平成21年2月27日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する丹波小学校校舎整備事業に伴う南丹波遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、指宿市教育委員会で実施した。調査は渡部徹也が担当し、中摩浩太郎・鎌田洋昭の協力を得た。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	教 育 長	田中 民也
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 部 長	屋代 和雄
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	社会教育課長	中間 竜郎 (平成19年度)
		社会教育課長	大浦 誠 (平成20年度)
		社会教育係長	川路 潔
		社会教育係主査	東中川睦子
		社会教育係主事	岩松 友美 (平成19年度)
		社会教育係主査	大道 裕子 (平成20年度)
		社会教育係主査	宮地 主税
		社会教育係主査	西村陽一郎 (平成19年度)
		文化係長兼主幹	西野 実 (平成19年度)
		文化財係長兼主幹	下玉利 泉 (平成19年度)
		文化係長兼主幹	下玉利 泉 (平成20年度)
		文化係主事	吹留 義輝
		文化係非常勤	鎌田真由美 (平成19年度)
発掘調査・報告書作成担当		文化財係主査	中摩浩太郎 (平成20年度より文化係主査)
		同 上	渡部 徹也 (同 上)
		同 上	鎌田 洋昭 (同 上)

発掘調査・整理事業員 林 美加子、堂蘭真弓、馬場シズ子、上玉利孝志、吉元 妙、堀口ツユ子、下拂喜代志、濱田文男、吉満淳子、東 富子、立石弥生、立石安容、高崎浩子、肥後啓子、吉元鈴子、吉元よみ子、福村健一、山本登喜子、内村 昭、井上ヒサ子、吉元まり子、折田孝善、大迫貴美子、福元洋美、内村 勲、清 秀子、富宿富美子、竹下珠代、亀之園清子、鎌田真由美 (平成20年度)

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、渡部徹也が主に行い鎌田洋昭の協力を得た。なお、石器に関する図面作成・本文執筆は鎌田洋昭が行い、その他については渡部徹也が行った。
4. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
5. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡Ⅲ』(1992、指宿市教育委員会)と『水迫遺跡Ⅰ』(2000、指宿市教育委員会)に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。

土器の混和材【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】
土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】
調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】
色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※地層・遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。

6. 自然科学分析については櫛古環境研究所に委託し報告を得た。
7. 空撮については、ふじた航空写真に委託した。
8. 現場での遺構図面作成については、一部を櫛古埋蔵文化財サポートシステム鹿児島営業所に委託し実施した。
9. 主な参考文献を以下に記す。

中摩浩太郎「南部九州弥生時代竪穴住居の分類」『人類史研究』第10号 人類史研究会 1998

中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室 1987

「南摺ヶ浜遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(144) 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009

10. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれで保管し、活用する。

目 次

第1章 経緯と調査概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 発掘調査の概要	2
第2章 遺跡の層序	2
第3章 調査成果	7
第1節 弥生時代終末～古墳時代	7
1. ピット群	7
2. 道跡	18
3. 旧河川出土の壺	19
4. 一括出土遺物	21
5. 土器捨て場	24
6. 竪穴式住居群	55
第2節 自然科学分析	102
1. 放射性炭素年代測定	102
2. 植物珪酸体分析	105
第3節 弥生時代中期	115
1. 道跡	115
2. ピット群	115
3. 第12層出土の石器	118
4. 第12層出土の土器	118
第4章 まとめ	119
第1節 調査地点の生活痕跡の変遷	119
第2節 土器捨て場と出土土器について	119
第3節 竪穴式住居群について	119
第4節 竪穴式住居群と土器捨て場、一括出土遺物、道跡cの関係について	120
第5節 出土石器について	120
第6節 橋牟礼川遺跡、南摺ヶ浜遺跡との関係	121
写真図版	123
別図	
別図A 土器捨て場報告書掲載遺物出土位置図	
別図B 土器捨て場平面図	

第1章 経緯と調査概要

第1節 遺跡の位置と環境

南丹波遺跡は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の西側隣接地、指宿市十二町湯の浜に位置する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔10m前後の火山性扇状地に立地し、現在は市街地の一角をなす住宅地となっている。

南丹波遺跡は、昭和27年に刊行された「薩南民俗第1号」に指宿地方の新発見遺跡として掲載され、その存在が知られるようになった。今回調査した丹波小学校の南側にある字小牟礼原からは、成川式土器や石器、縄文土器に加え魚の骨格が描かれた軽石加工品が採集されている。また、昭和34年には指宿高等学校郷土研究部による発掘調査も実施され、多量の成川式土器が発見されている。平成5年度には、橋牟礼川遺跡の範囲確認調査の一環として、南丹波遺跡地内で2箇所のトレンチが設けられ確認調査が行われた。その結果、奈良～平安時代の道跡や古墳時代のピット等が確認され、橋牟礼川遺跡で検出された集落の東側縁辺部の一部が明らかになった。また、平成6年度と9年度には市道拡幅工事に伴い発掘調査が実施され縄文時代～古墳時代にかけてのピット群や遺物が確認されている。

今回、指宿市立丹波小学校の新築工事に先立ち、鉄筋コンクリート校舎建設予定地と遺物包含層に掘削が及ぶ木造校舎の基礎部分について発掘調査を実施することとなった。調査地点である丹波小学校は、北側を流れる丹波川と南側を流れる橋牟礼川の小河川に挟まれた標高8m前後の扇状地で、橋牟礼川遺跡の北、直線距離にして約300mの地点に位置する。

南丹波遺跡の周辺には、橋牟礼川遺跡をはじめ、弥生時代の終末～古墳時代の土壙墓が発見された南摺ヶ浜遺跡や同時期の祭祀遺構が検出された向吉遺跡があり、南丹波遺跡の評価については、これらの一連の遺跡との関係の中で検討していく必要がある。



図1. 指宿市の位置

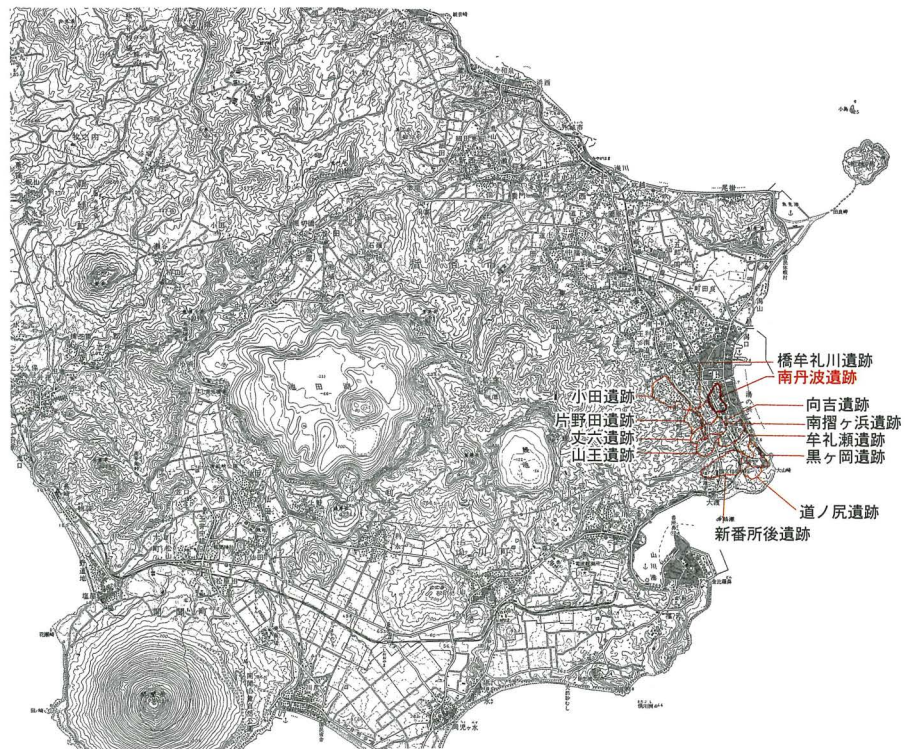


図2. 遺跡の位置 1

第2節 調査に至る経緯

平成18年、丹波小学校校舎整備事業が大規模改修から建て替え工事に変更となり、校庭内9箇所を試掘調査を実施した結果、いずれの地点においても遺物の出土が見られ、発掘調査の必要性がでてきた。工事着工は平成21年度に予定されていたため、建築設計と平行して調査にかかることとなった。そのため、平成19年度は、建築予定面積より周囲2mずつ広めに調査区を設定し調査を行った。平成20年度においても同様である。



図3. 遺跡の位置2 (S=1/20,000)

第3節 発掘調査の概要

調査は2ヵ年にまたがったが、本報告では一連のものとして取り扱う。

19年度は、現校庭の西側に東西25m、南北50mの調査区を、20年度は19年度調査区の南西隅に一部重なる形で東西15m、南北30mの調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代のピット群、道跡、弥生時代終末から古墳時代にかけての土器捨て場、弥生時代の竪穴式住居群等が検出され、調査地点が同時期の集落の一部であることがわかった。



図4. 調査位置図 (S=1/5,000)

第2章 遺跡の層序

南丹波遺跡の層序は、開聞岳火山灰層が鍵層となっている。基本的な堆積状況は、橋牟礼川遺跡と同様であることから、橋牟礼川遺跡と対比する形で層名を決定した。以下、本調査地点の地層の堆積状況を記す。

第1層は表土、校庭造成時の盛り土である。その下位には、874年3月25日の開聞岳噴火で堆積した第5層、紫コラが堆積している。しかし、調査区の東側をのぞいては、大部分の範囲で校庭造成時に削平されている。奈良～874年までの包含層である第6層も同様で部分的にしか残存しない。



図5. 層位模式柱状図

第7層は、7世紀第4四半期に比定されている開聞岳噴出物の青コラである。第5層、6層同様に広い範囲で削平されており、部分的にしか残っていない。第8層は、橙色土層で軽石片や成川式土器を包含する土層である。第9層はa～cに細分できた。橋牟礼川遺跡の第9層から出土する土器は、成川式土器の中でも辻堂原式～笹貫式と呼ばれる一群が主体であるが、本調査地点では、中津野式土器を主体とする。なお、9層cとした包含層からは、弥生時代後期の土器片も散見されるため、橋牟礼川遺跡の第10層の時期を含む堆積層ととらえた。第11層は、弥生時代中期に比定されている開聞岳噴出物の暗紫コラである。上位には、粒径1cm前後のスコリアが5cm程度堆積し、その下位に青灰色を呈する細粒の火山灰が1cm程度堆積している。なお、細粒火山灰が見られずスコリアのみが堆積している範囲もある。第12層は、弥生時代中期の包含層に該当する土層でその色合いと含まれる小礫や軽石の割合の違いから、a～dの4層に細分した。なお、第12層cと第12層dの間に場所によっては、細粒の青灰色を帯びたスコリアが堆積する。南丹波遺跡の南約1kmにある新番所後遺跡では、このスコリアが入来式土器を直接被覆しており、縄文時代晩期の開聞岳噴出物である灰ゴラと暗紫コラの上に堆積した開聞岳起源のKm7あるいはKm8と呼ばれるテフラのいずれかであると推定される。なお、先行トレンチを設け、縄文時代晩期に該当する第13層まで確認した。

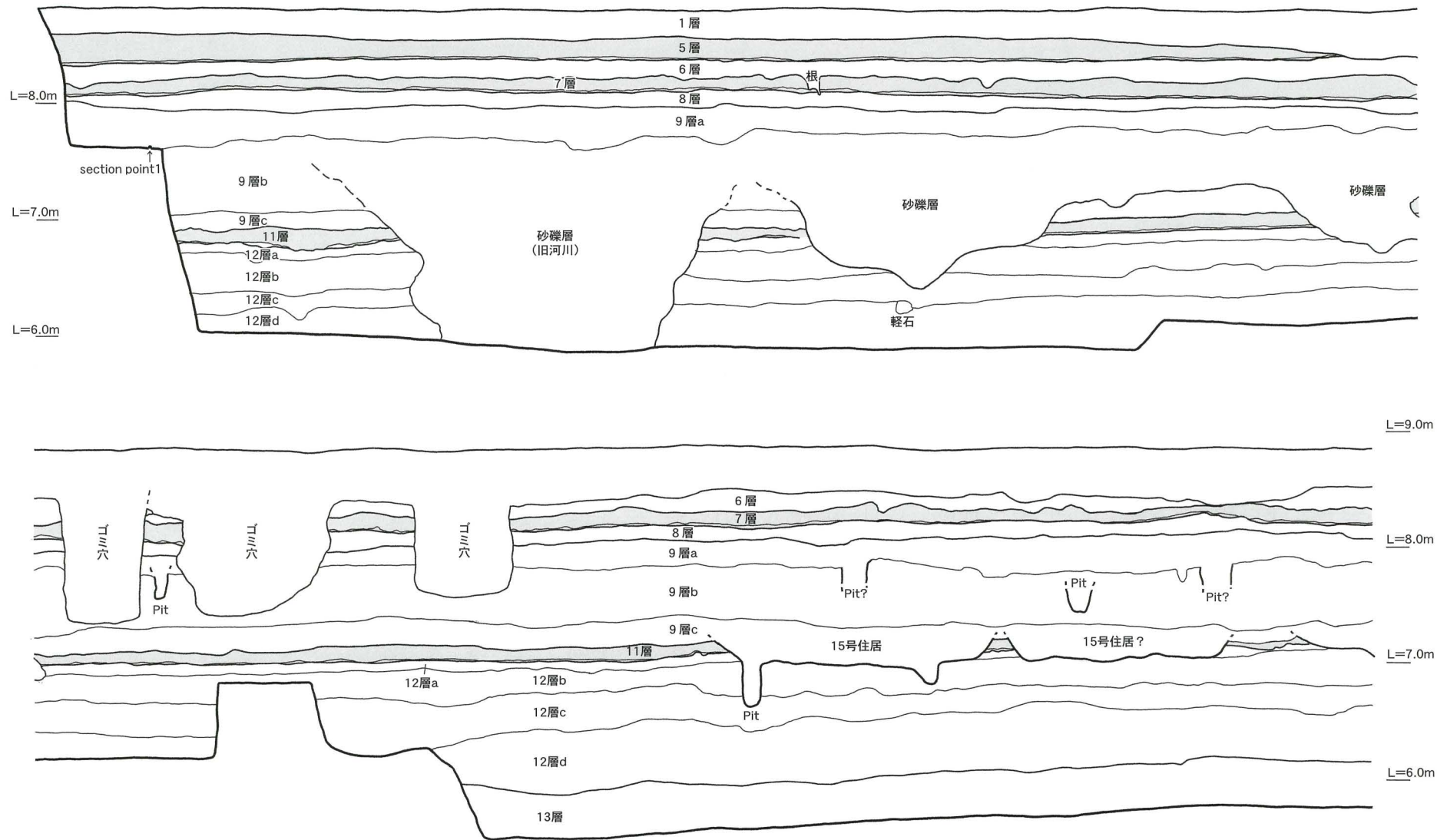


図6. 19年度調査区東壁層位断面図① (S=1/50)

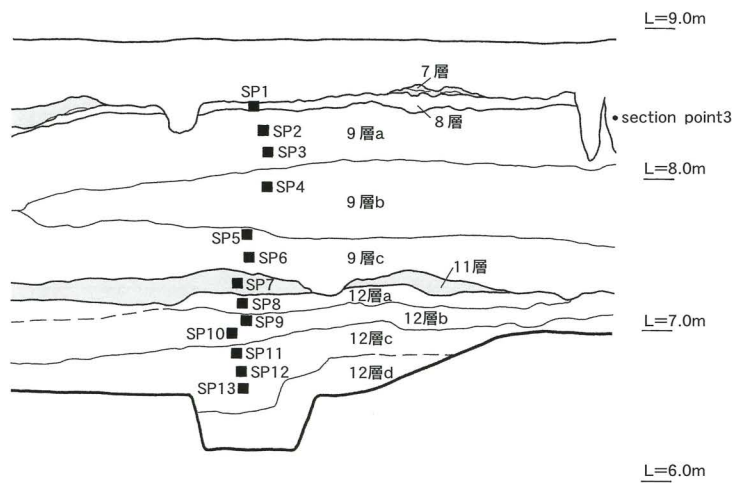
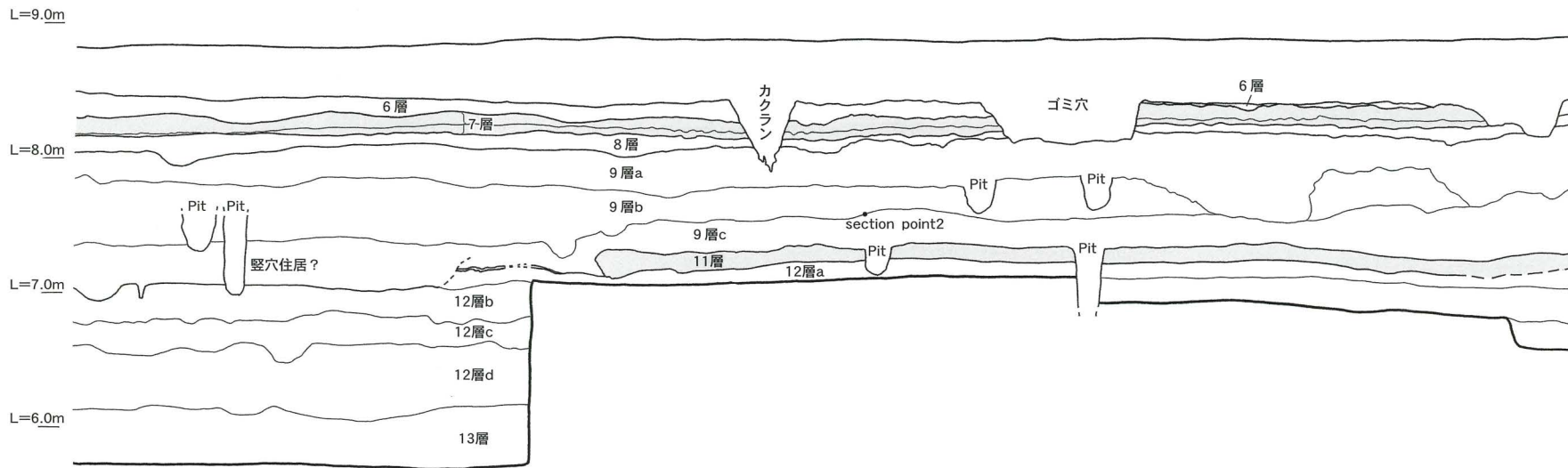


図7. 19年度調査区東壁層位断面図② (S=1/50)

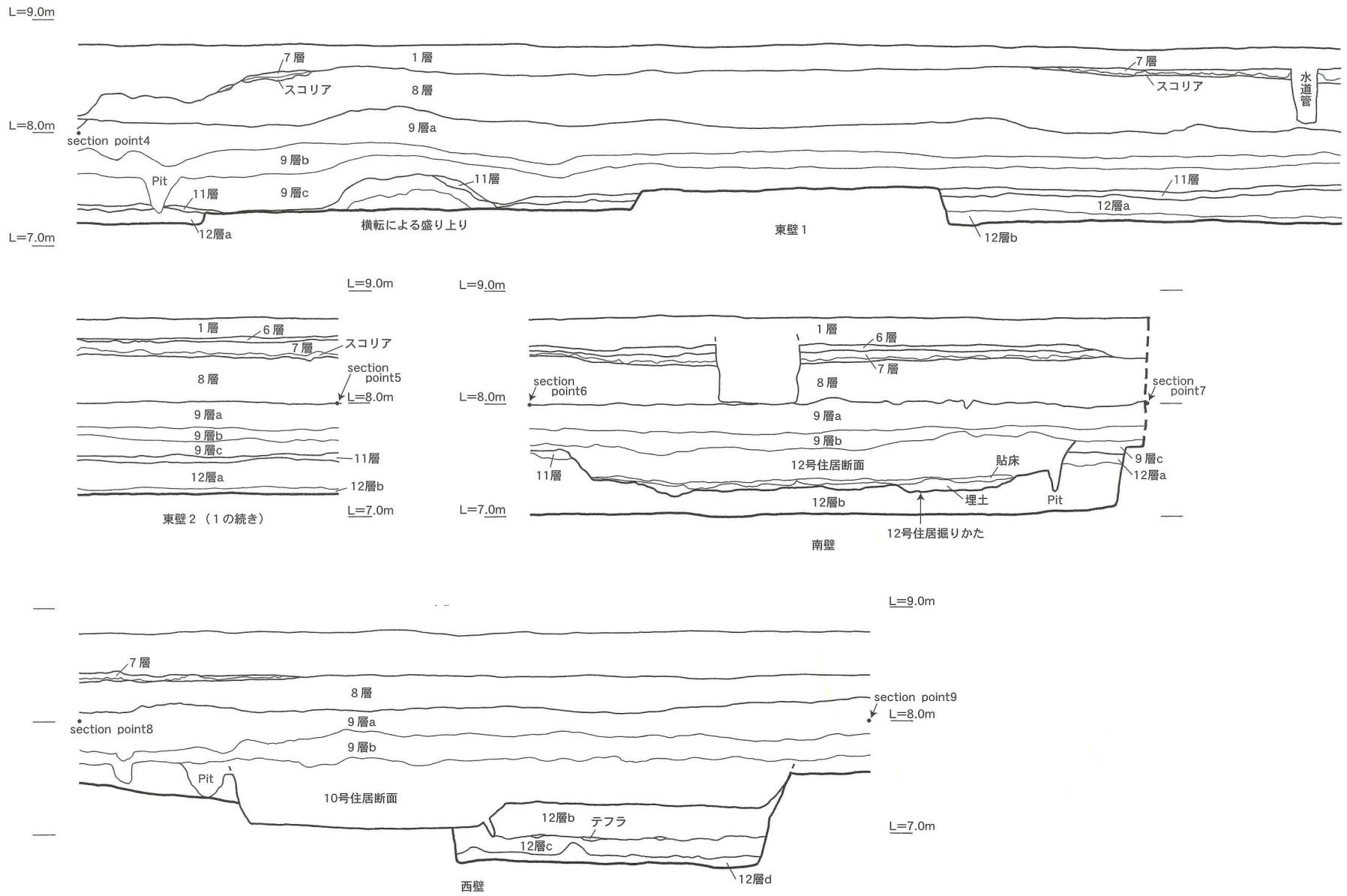


図 8. 20年度調査区層位断面図 (S=1/50)

第3章 調査成果

第1節 弥生時代後期～古墳時代

1. ピット群

第8層、第9層a、第9層cを埋土とするピット群を検出した。特に第9層aを埋土とするピットの数が多く図12に示すとおり19年度調査区に集中する傾向がみられた。

第8層を埋土とするピットは、図11のP4、P6、P7の3基である。いずれも直径20cm程度を測る。

第9層aを埋土とするピット452基を検出したが、掘立柱建物等明確なプランを看取できるものはなくピット群の性格については判然としない。これは、第9層cを埋土とするピット群についても同様である。

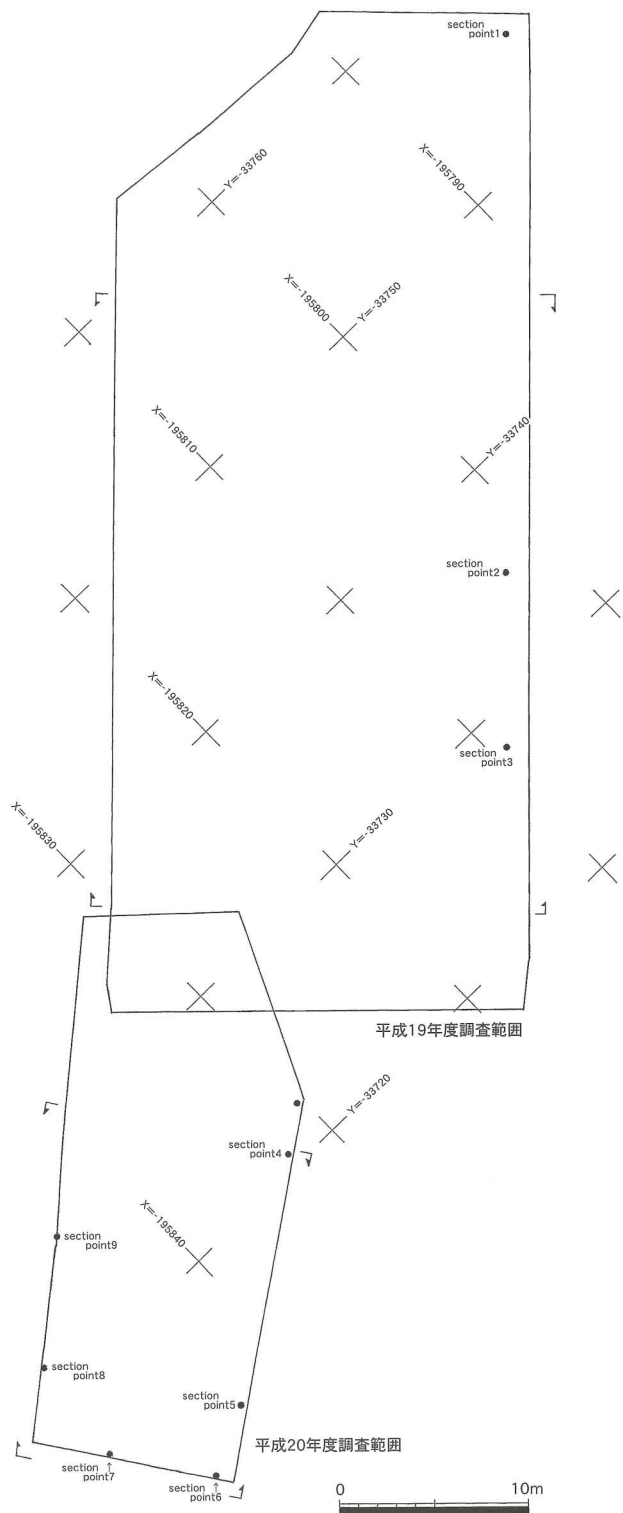


図9. 調査区全体図 (S=1/400)

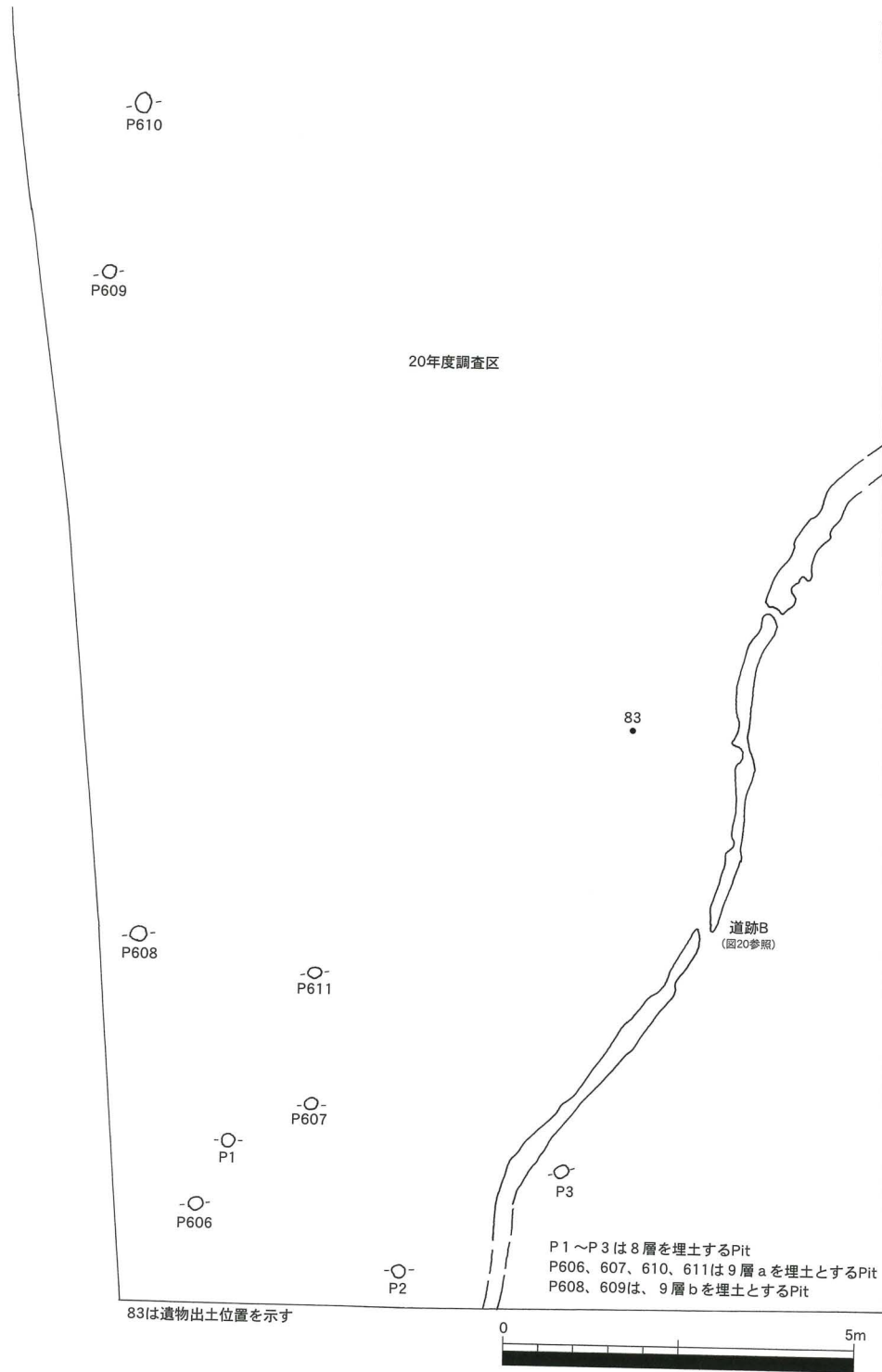


図10. 8・9層 遺構配置図① (S=1/100)

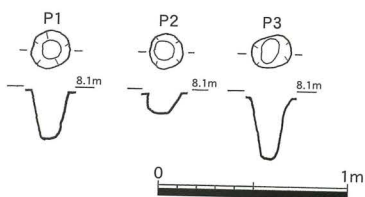
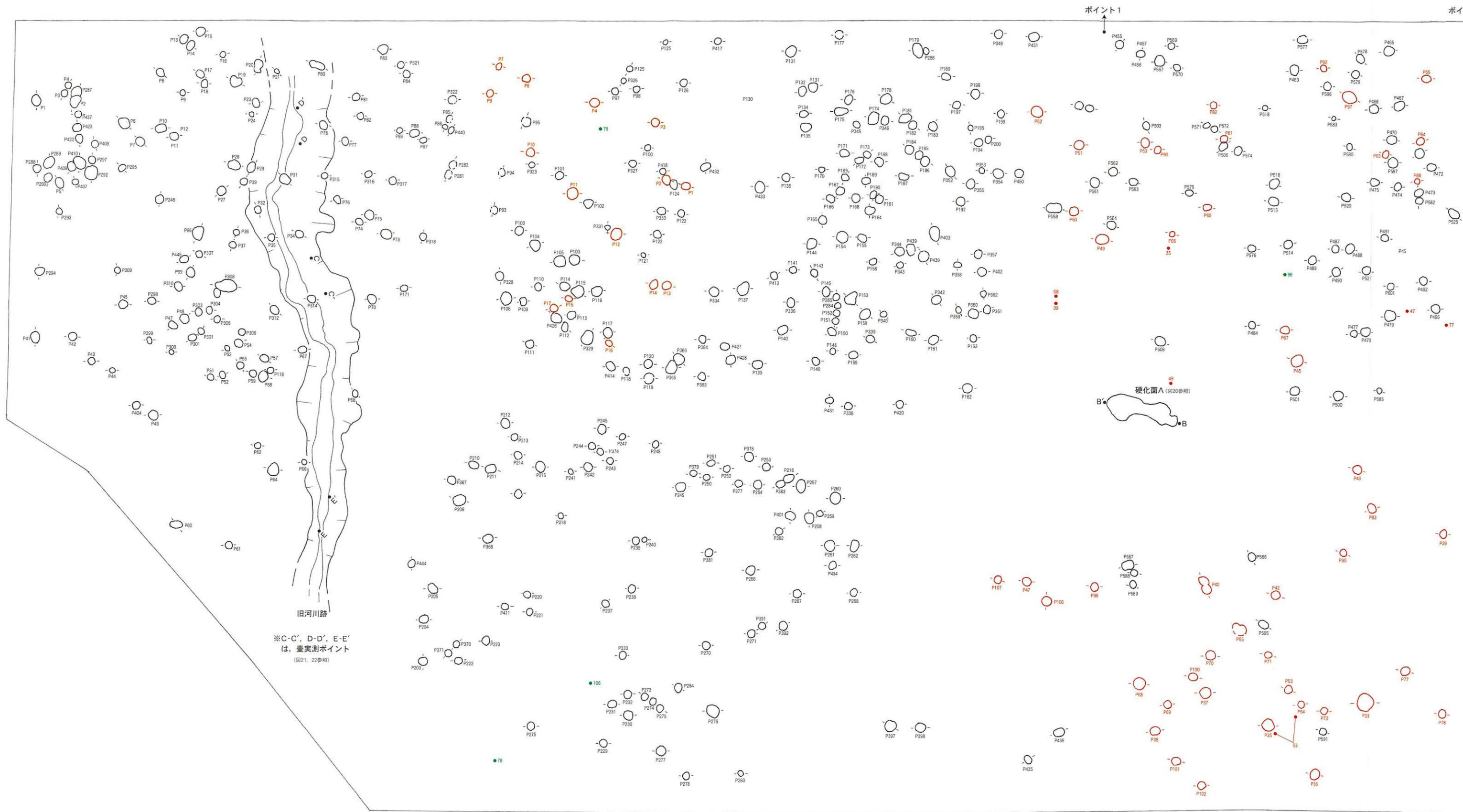


図11. 8層を埋土とするピット平・断面図(S=1/40)



※C-C', D-D', E-E'
は、垂直測ポイント
(図21, 22参照)

19年度調査区

●と●は遺物出土位置を示す。
 赤色で表現したものは、9層cを埋土とするpit
 黒色で表現したもののうち、P4、P6、P7は8層
 その他は、9層aを埋土とするpit

図12. 8・9層 遺構配置図② (S=1/100)

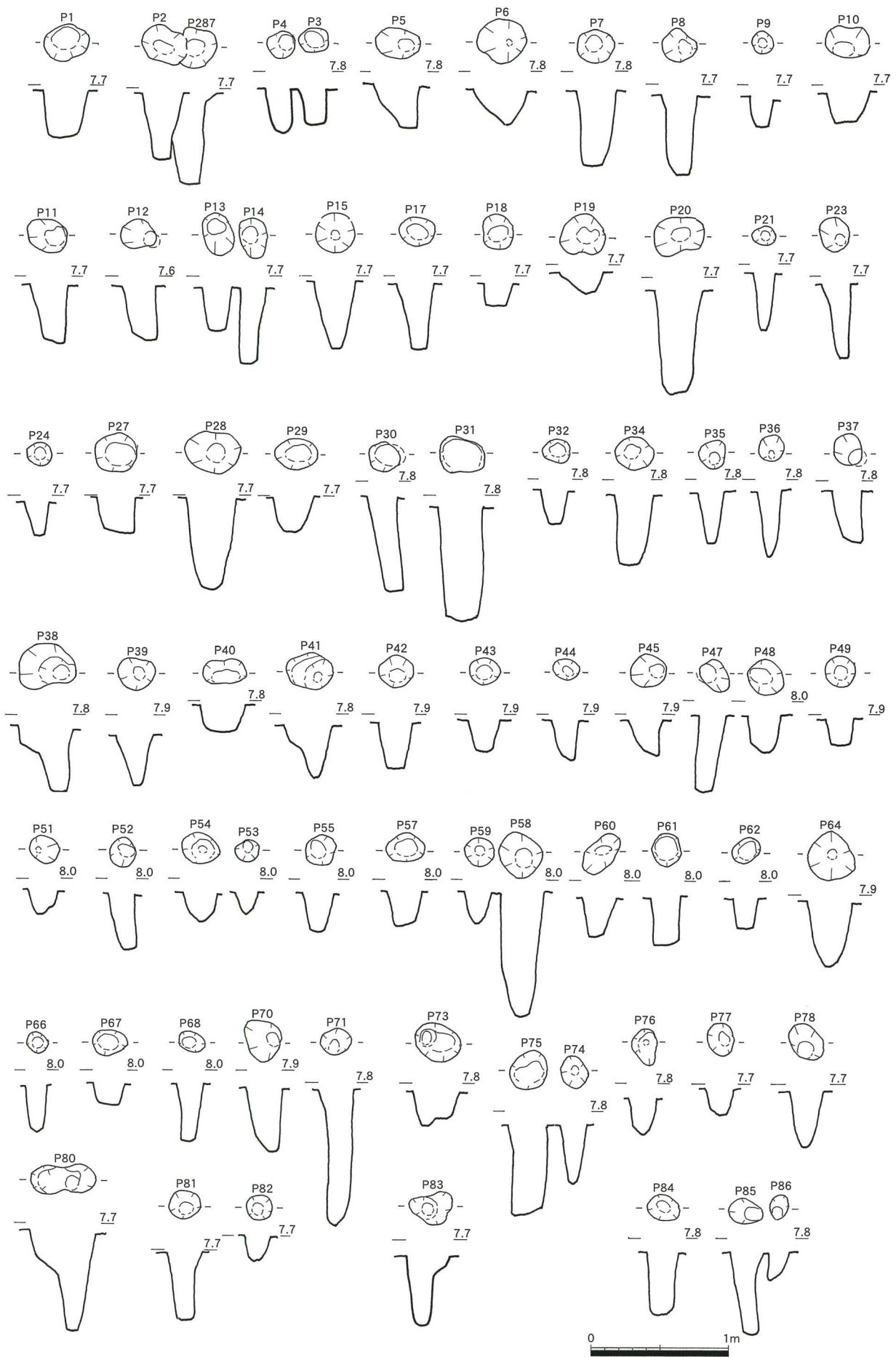


図13. 9層aを埋土とするPit 平・断面図① (S=1/40)

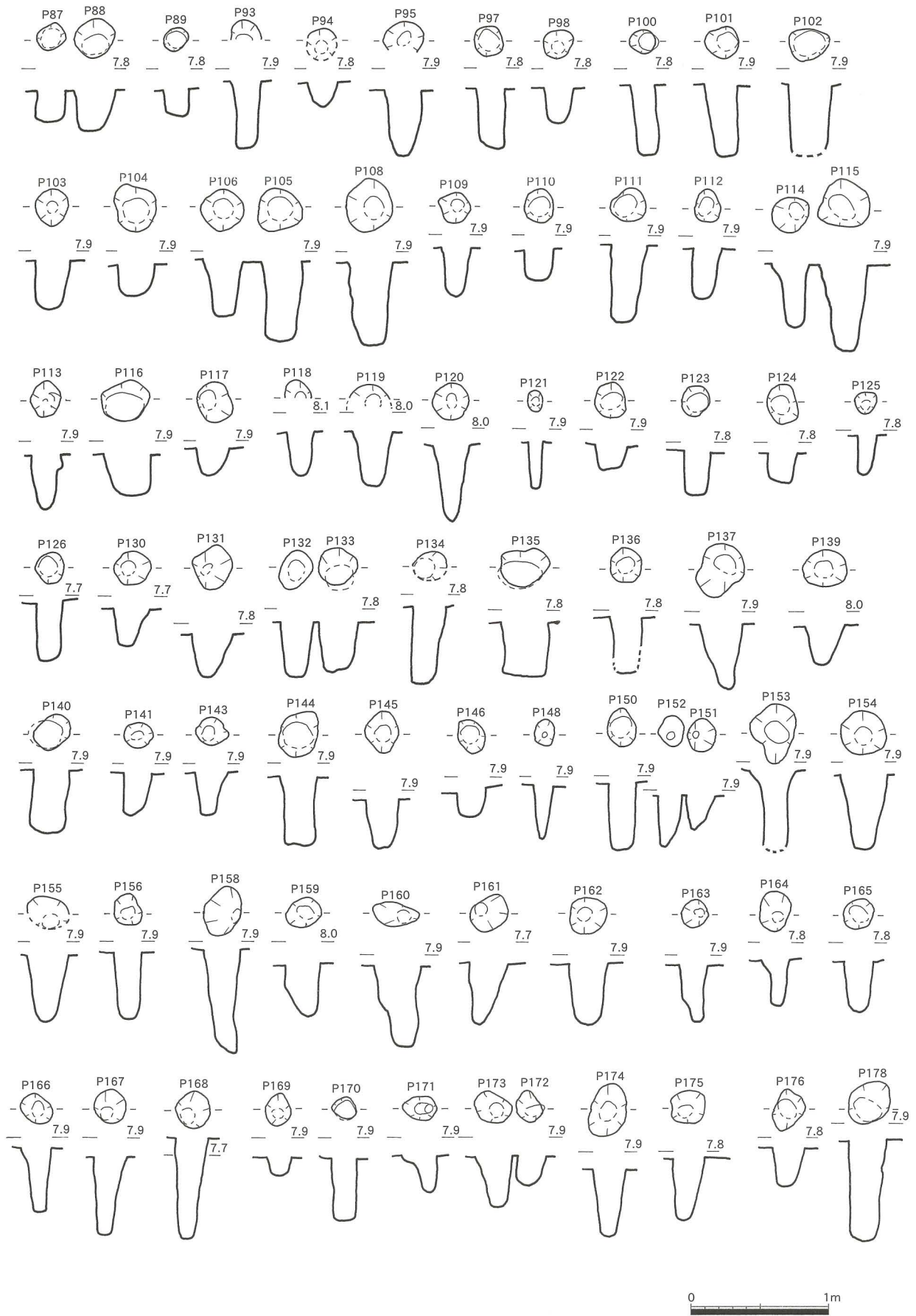


図14. 9層aを埋土とするPit 平・断面図② (S=1/40)

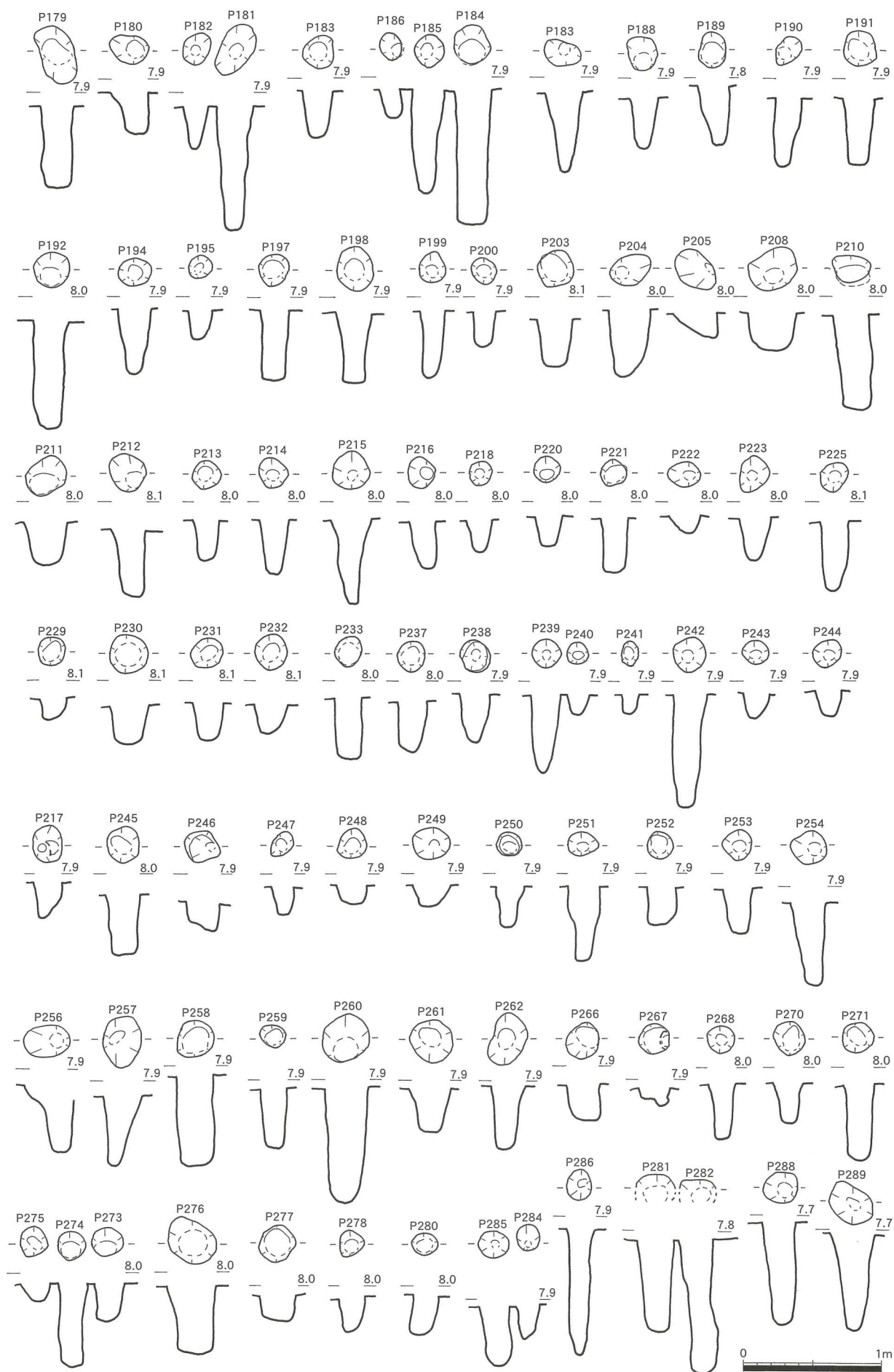


図15. 9層aを埋土とするPit 平・断面図③ (S=1/40)

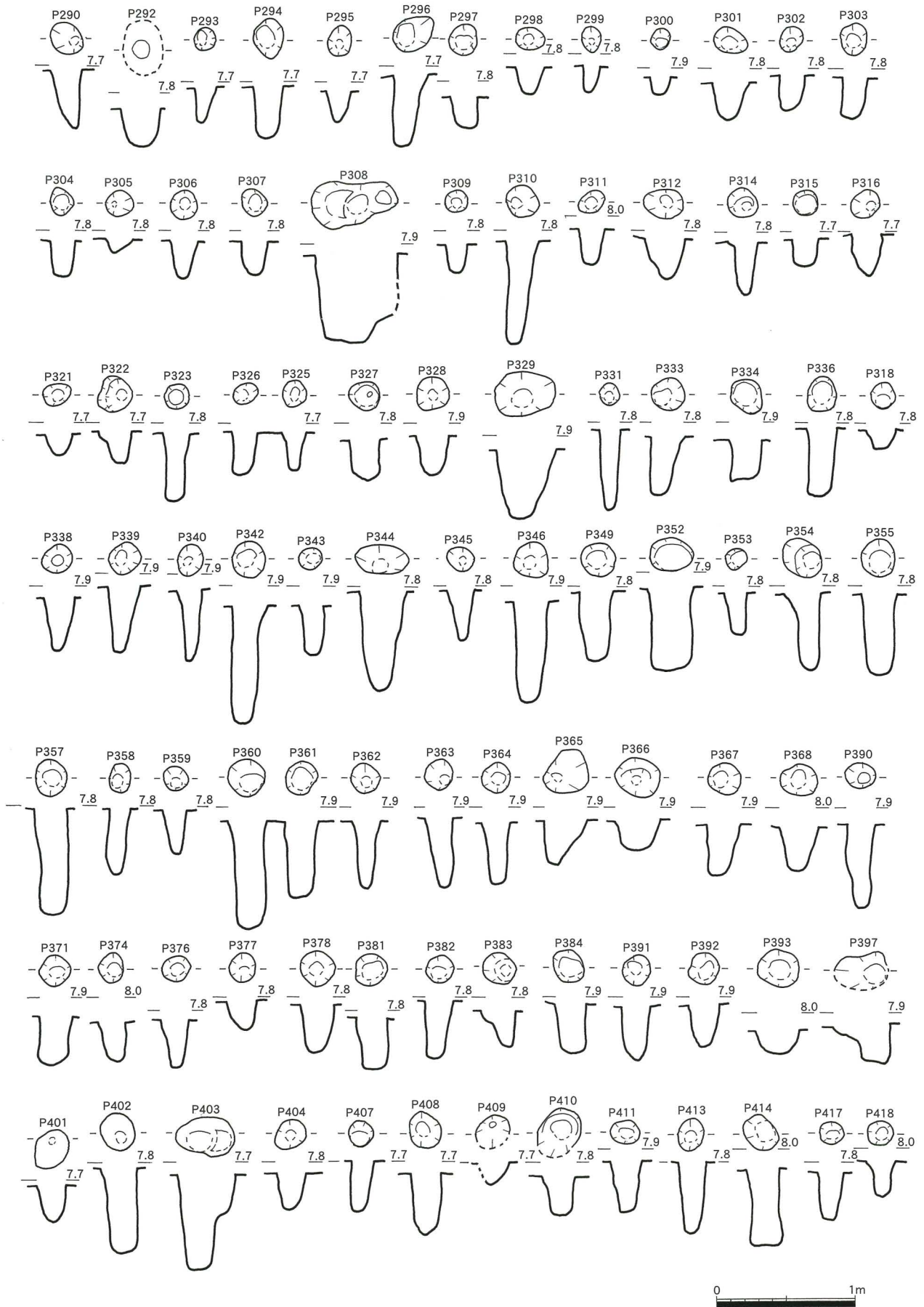


図16. 9層aを埋土とするPit 平・断面図④ (S=1/40)

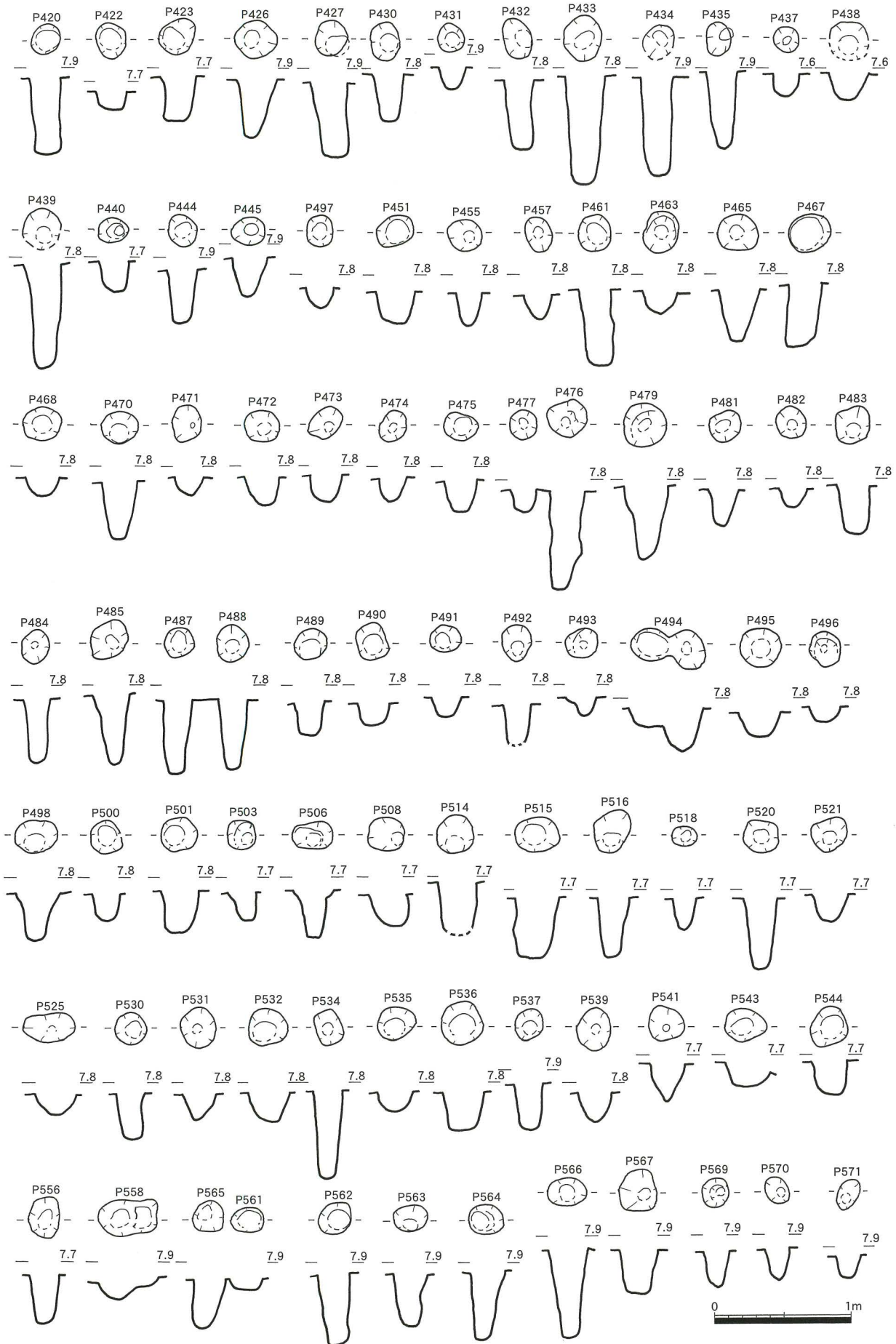


図17. 9層aを埋土とするPit 平・断面図⑤ (S=1/40)

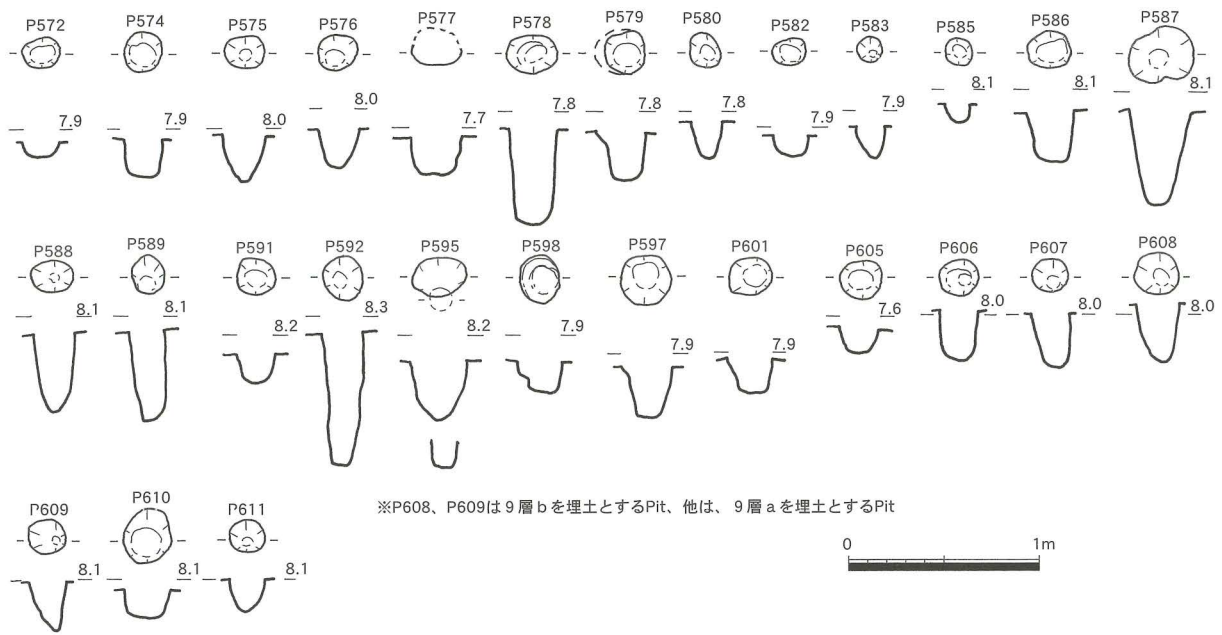


図18. 9層を埋土とするPit 平・断面図 (S=1/40)

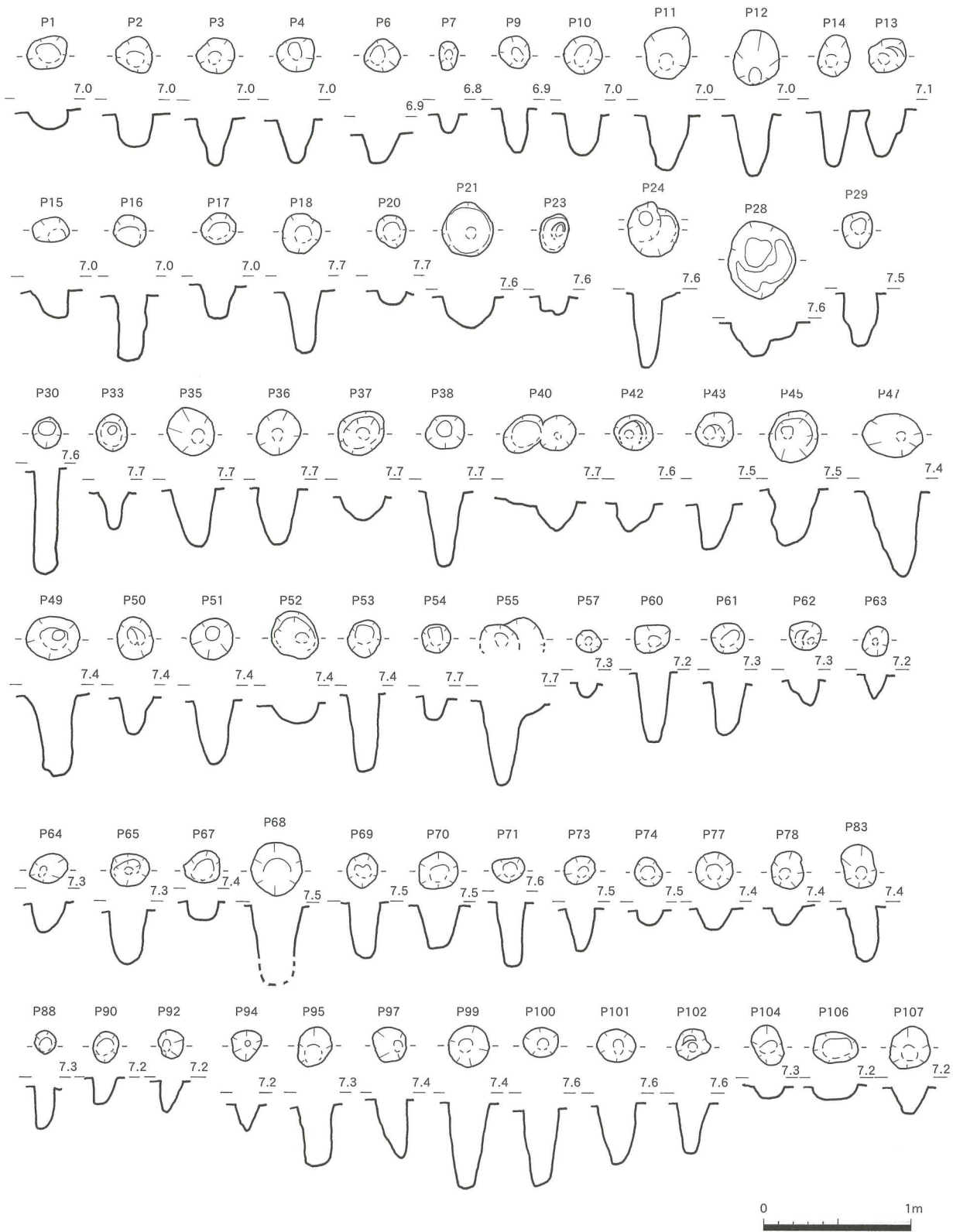


図19. 9層cを埋土とするPit 平・断面図⑤ (S=1/40)

2. 道跡

硬化面 A

硬化面 A は 19 年度調査区のほぼ中央、第 9 層 a 中で確認された。南北に約 2 m のびる。最大幅は約 75 cm を測る。先行トレンチを設け断面を確認したところ、硬化面の厚は 1 cm 程度であった。経験的には、道跡の硬化面に類するものと考えられたため、山中式土壌硬度計を用いて土壌硬度試験を実施した。測定方法は、硬化面と硬化面以外の部分があるように最大幅の部分で 10 × 120 cm のグリッドを設定し、10 cm メッシュ中 3 点を計測、硬化面と認識した部分と硬化していないと認識した部分についてそれぞれ平均値を出し支持強度 P 値に換算した。その結果、硬化面では 19.17 kg/cm² 値を、周辺部分では 9.08 kg/cm² の値を得た。

道跡 A

19 年度調査区の南側の第 9 層 c 上面で南北にのびる道跡 A を確認した。最大幅は約 35 cm、長さ 1.5 m。東西にはしる流路を挟んでその北側にも硬化面を確認したことから道跡と考えられる。30 × 80 cm のグリッドを設け、硬化面 A 同様に土壌硬度試験を実施した。その結果、硬化面では 17.66 kg/cm² 値を、周辺部分では 6.85 kg/cm² の値を得た。

道跡 B

20 年度調査区の東側、第 9 層 c 上面で、南北に蛇行しながら伸びる道跡 B を確認した。幅は約 30 cm、長さ約 15 m を測る。橋牟礼川遺跡では、土器捨て場に隣接して道跡が検出されている。道跡 C も後述する土器捨て場方向に伸びておりその関連が推定される。

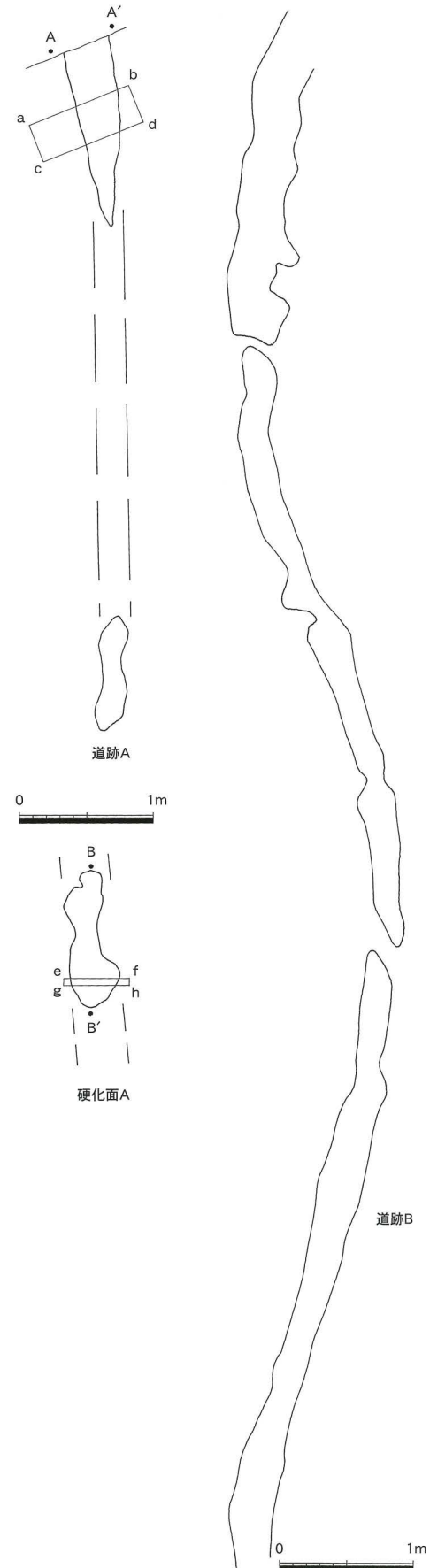


図20. 道跡平面図 (S = 1/50)

3. 旧河川出土の壺

19年度調査区の北側で第9層aの時期の小河川が検出され、河床付近から計5点の壺形土器が出土した。出土地点は図11に記す。

壺1、2は完形品で2個体並ぶように出土、その下位から壺3が出土した。壺1、2は完形品であることから、その場に置かれた可能性もある。壺3は口縁部が欠損していた。壺4は、1/2が欠損しており、壺5も口縁部が欠損していた。壺3、5については、欠損している部分もあり、その場に置かれたものか、流れ込んできたものか判然としない。壺4については内面の風化が激しく流れ込みの可能性が高い。

なお、壺1～3、及び壺5の中には砂礫が詰まっていた。微細な動植物等の痕跡の有無を確認するため、サンプルを採取し現在分析中である。

壺1は、高さ約44cm、胴部最大径32cmを測る長頸壺である。そろばん玉状の胴部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。頸部はラッパ状に開き、口縁部はわずかに外反する。頸部の付け根にも一条の突帯が廻る。底部は尖底で、外面はミガキによって仕上げられている。並んで出土した壺2は、高さ約27cm、胴部最大径19.5cmを測る小壺である。頸部は短く口縁部は外反する。丸底を呈し外面にはハケ目の痕跡が残る。壺3は、高さ約30+a cm、胴部最大径約23.5cmを測る。肩部に近いところに刻み目を施した一条の突帯が巡り、突帯に接するように2個の浮文が付けられている。丸底を呈し外面にはハケ目の痕跡が残る。壺4は、高さ約31cm、胴部最大径21cmを測る。頸部は短く口縁部はやや外反する。肩部はなだらかで胴部も張らない。内面は風化が激しい。壺5は、高さ約19+a cm、胴部最大径約17.5cmを測る。肩部が大きく張り出し頸部に向けて窄まる。

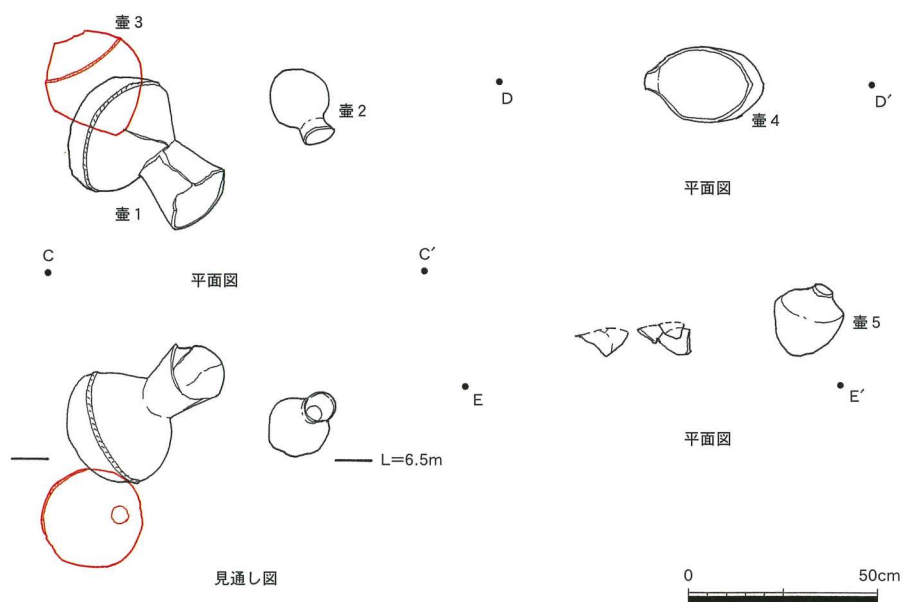
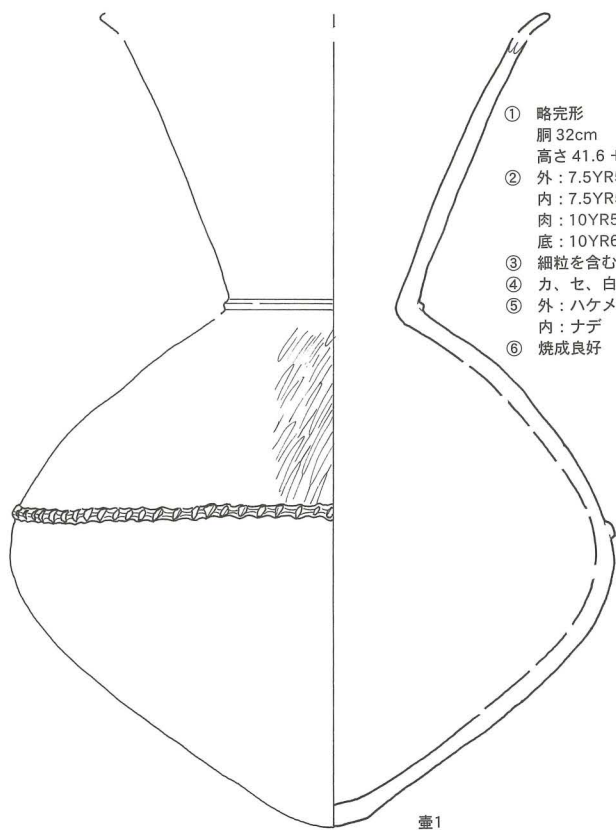
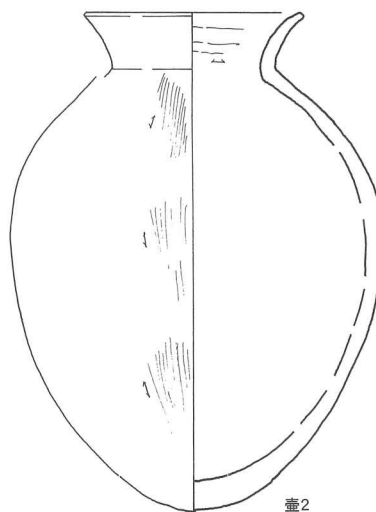


図21. 旧河川遺物出土状況図 (S=1/20)



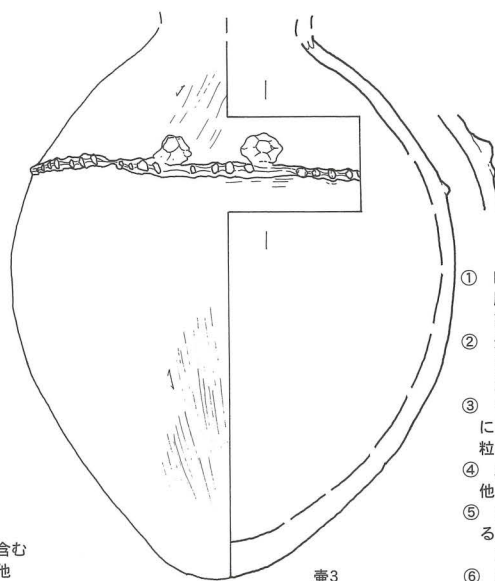
- ① 略完形
胴 32cm
高さ 41.6 + α cm
- ② 外 : 7.5YR5/9
内 : 7.5YR5/2
肉 : 10YR5/3
底 : 10YR6/2
- ③ 細粒を含む・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 外 : ハケメ
内 : ナデ
- ⑥ 焼成良好

壺1



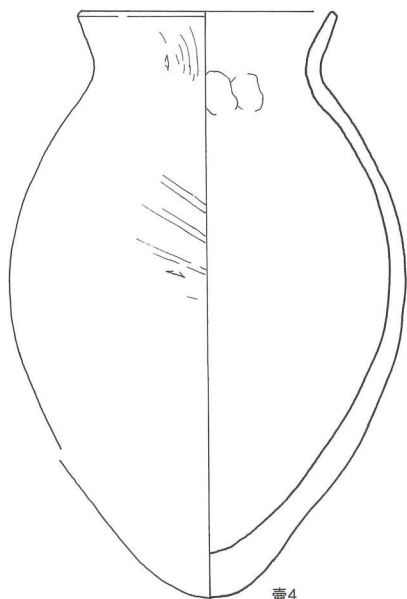
- ① 略完形
口 11.6cm
胴 19.5cm
高さ 26.4cm
- ② 外 : 2.5YR5/4
内 : 10YR5/2
底 : 7.5YR5/3
- ③ 砂粒をわずかに含む・細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 外 : 工具によるナデのちナデ
内 : 同上
- ⑥ 焼成良好

壺2



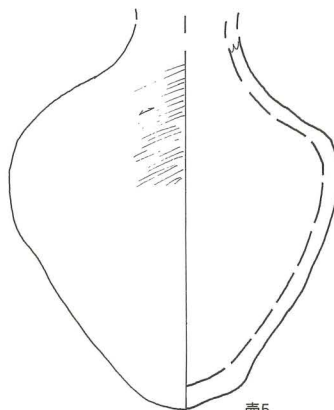
- ① 略完形
胴 23.5cm
高さ 28.8cm + α
- ② 外 : 5 YR6/4
内 : 5 YR4/1
底 : 10YR6/3
- ③ 砂粒をわずかに含む・細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 外 : 工具によるナデのちナデ
内 : ナデ
- ⑥ 焼成良好

壺3



- ① 1/2 残存
口 13.8cm
高さ 31.1cm
- ② 外 : 7.5YR6/4
内 : 7.5YR6/3
肉 : 10YR5/2
底 : 5 YR6/4
- ③ 細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 外 : 工具によるナデのちナデ
内 : ナデ、ユビオサエ
- ⑥ 焼成良好

壺4



- ① 略完形
胴 17.5cm
高さ 19.9cm + α
- ② 外 : 5 YR6/9
内 : 10YR5/2
底 : 10YR5/2
- ③ 砂粒をわずかに含む・細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 外 : 工具によるナデのちナデ
内 : ナデ
- ⑥ 焼成良好

壺5



図22. 旧河川出土遺物実測図 (S=1/4)

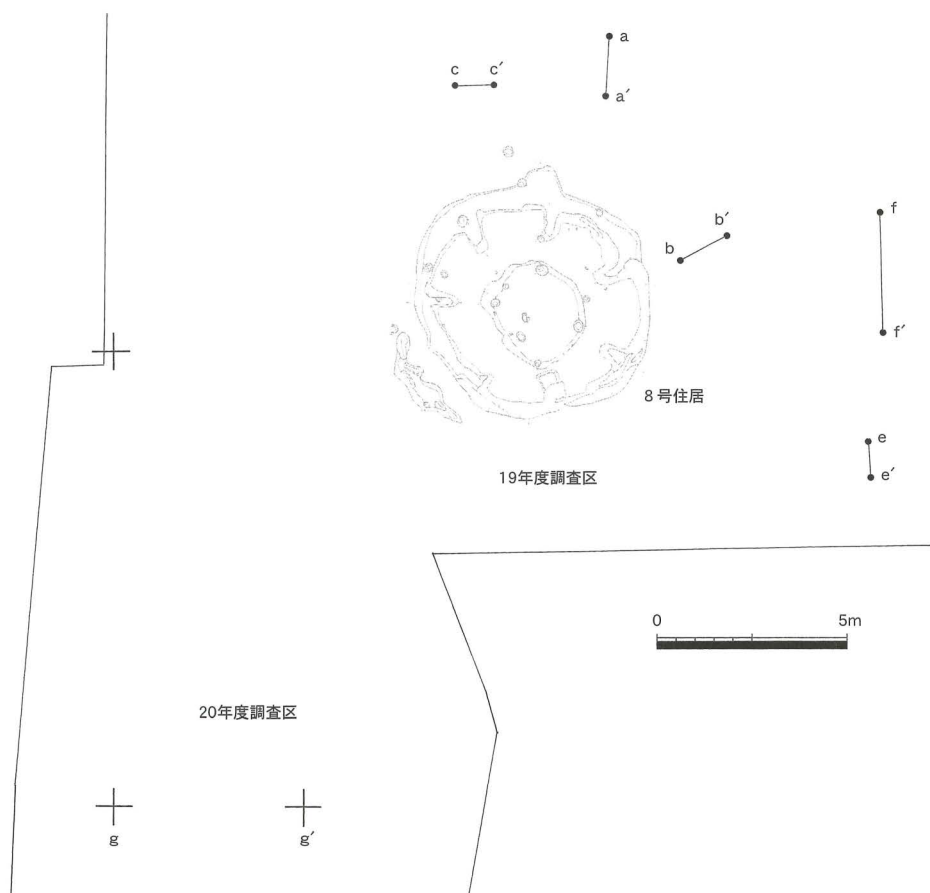


図23. 土器捨て場・一括出土遺物実測ポイント図 (S=1/200)

4. 一括出土遺物

グループA

グループAは、第9層b中で検出した18点の土器片のまとまりである。A-1、2は口縁部が緩やかに外反する甕形土器の破片である。外面にハケ目の痕跡が残る。A-3、4は脚台見込みが深い上げ底で断面が台形をなす甕形土器の底部～胴部の破片である。72は胴部から底部へ窄まるミニチュア土器の破片である。図37に掲載してある。なお、接合はしないが、土器の色調、焼成の状況、器壁の厚さなどが類似することからA-1は、取上げNo83、88、91、93とA-2は、取上げNo84、86、89、92と同一個体の可能性がある。

グループB

グループBは、第9層c中で出土した甕形土器である。グレー色着けした破片は接合し、ほぼ1個体となった。図54の5の遺物である。取上げNo807と810は別個体であった。

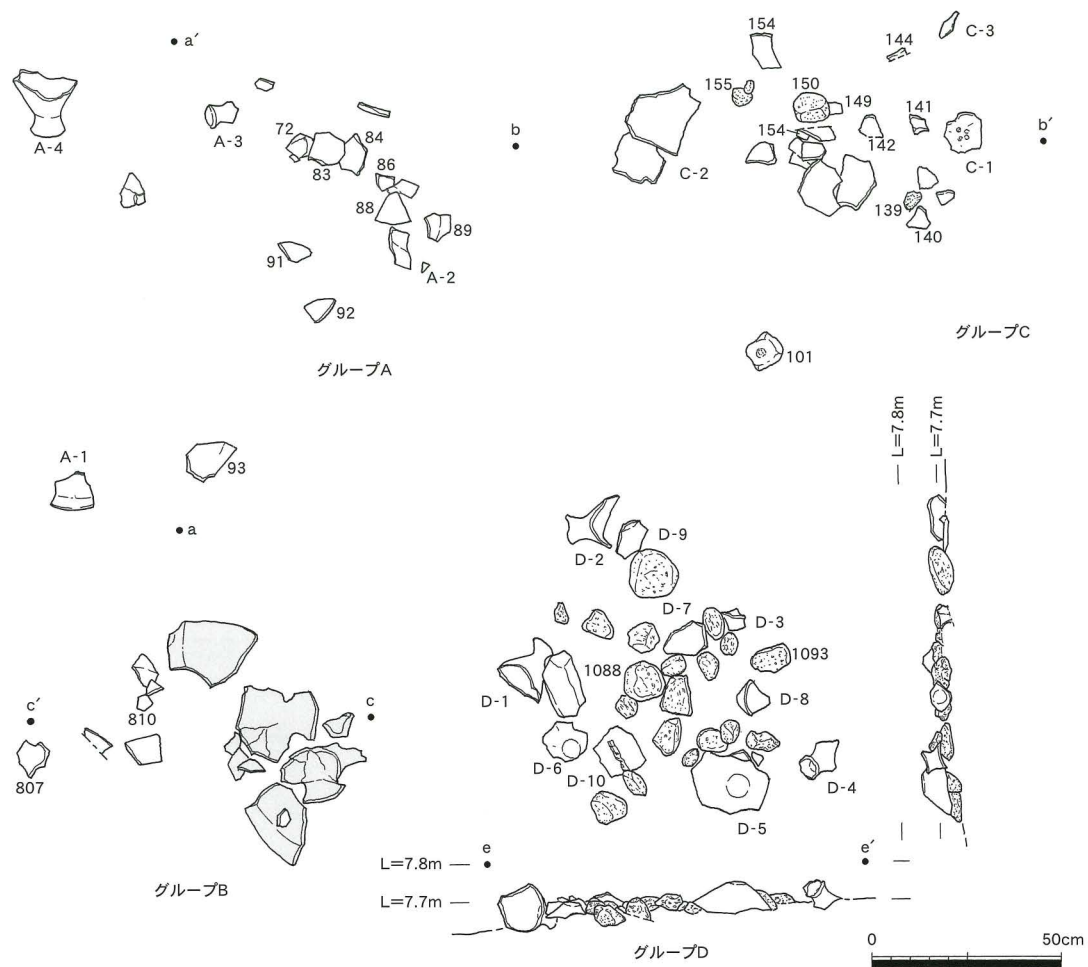


図24. 一括遺物出土状況図 (S=1/20)

グループC

グループCは、第9層c中で出土した25点の遺物のまとめりである。C-1は、高坏の脚部である。透かしを意識して4つの穿孔が施文されているがどれも貫通していない。C-2は壺形土器の胴部の破片である。刻み目を施した一条の突帯が巡る。接合はしないが、土器の色調、焼成の状況、器壁の厚さなどが類似することから取上げNo.140、142、144、149、151、154、159とC-2は同一個体であろう。C-3は、粘板岩製の石鏃模造品と思われる。101は安山岩製の凹石である。図40に掲載した。取上げNo.150、155の軽石は磨面をもつ。139の軽石、141の礫については石器か否か判然としない。

グループD

グループDは、軽石19点、台石1点、鉢形土器底部4点、壺形土器底部4点、肩部1点、突帯部1点の計30点の遺物のまとめりである。鉢形土器の脚台見込み部は上げ底で断面がかまぼこ状をなす。壺形土器の底部には平底のものと丸底とがある。接合はしないが、土器の色調、焼成の状況、器壁の厚さなどが類似することからD-9、10は同一個体であろう。軽石は拳大前後の不定形なもので磨面をもつ。取上げNo.1088には赤色塗彩の痕跡があり、取上げNo.1093は被熱を受け黒っぽく変色している。

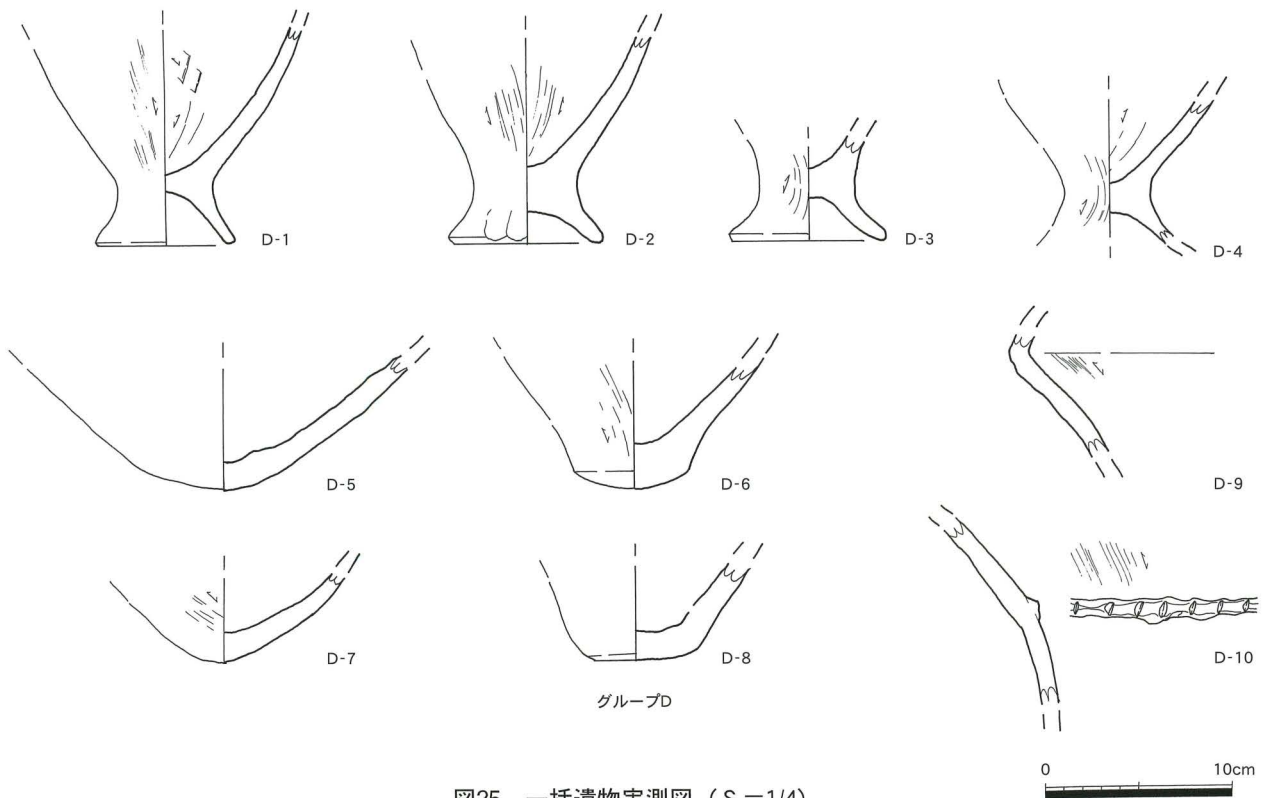
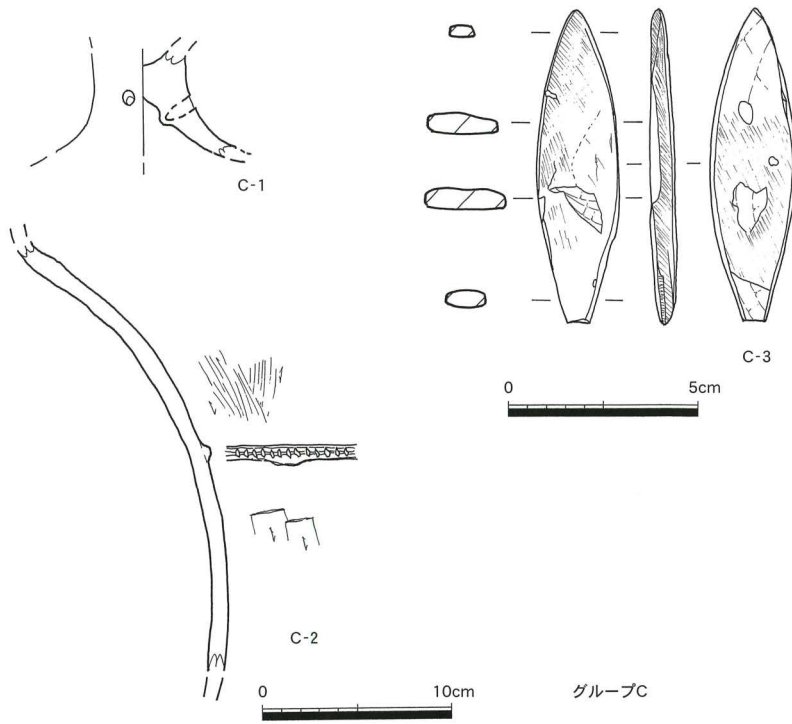
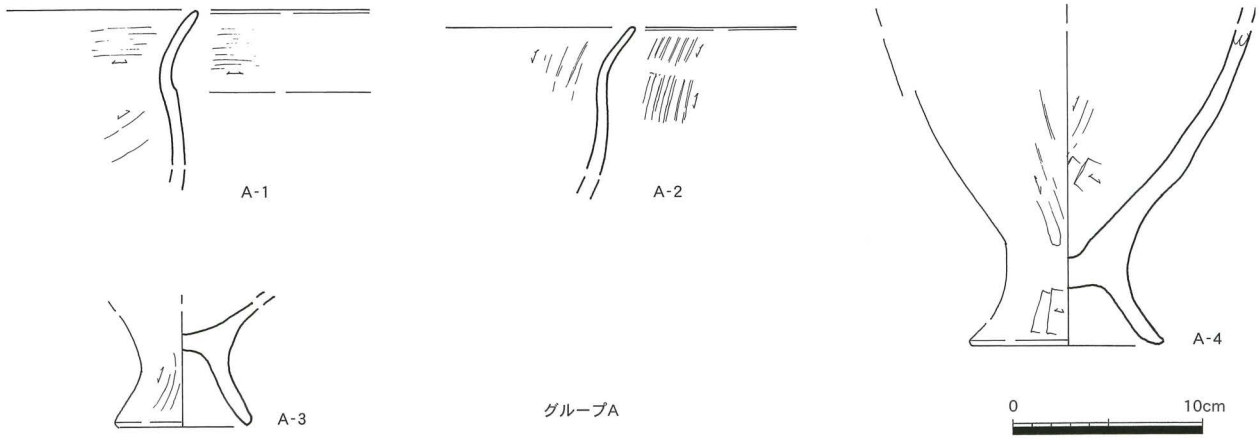


図25. 一括遺物実測図 (S=1/4)

5. 土器捨て場

19年度調査区の南側から20年度調査区の北側で土器捨て場1（下図及び別図A・B参照）を19年度調査区の南東側に土器捨て場2（図27参照）を検出した。廃棄は、第9層cの上位から始まり第9層aの下位まで続く。



図26. 土器捨て場1 平面図 (S = 1/80)



図27. 土器捨て場2 (S=1/25)

土器捨て場1は、南北の幅が約12mに及ぶ。北側と東側は、遺物の分布が疎になる傾向がみられることから、調査区近辺で収束すると思われるが、西側は調査区外に広がると推定される。土器捨て場1の北辺と南辺はほぼ平行する。特に南辺は遺物分布の限界ラインが明瞭である。遺物の大半が複数に割れた状態で出土しているが、なかには完形品もある。実測した遺物の接合関係を別図2に示した。完形に近い形に復元できた遺物は比較的まとまった範囲から出土しているが56のように大きく離れた地点で接合するものもある。廃棄後の移動によるものか、意図的にバラバラに廃棄したものか判断が難しい。ナンバーリングして取上げた土器のうち、甕、壺、鉢、高坏の底部とミニチュア土器の個数をあたり割合を出したところ、甕が約54.25%、壺が約26.45%、鉢が約9.04%、高坏が約5.39%、ミニチュアが4.85%を占めた。ただし、この数値は遺構全体を検出していないことや一般遺物として取上げたものがあるため、推定の範囲を越えるものではない。以下に、9層中出土遺物も含め、完形率の高かった遺物及び石器を掲載し報告する。特にことわりのない遺物の出土位置は、別図Aを参照されたい。なお遺物No左の()内は出土層位を示す。

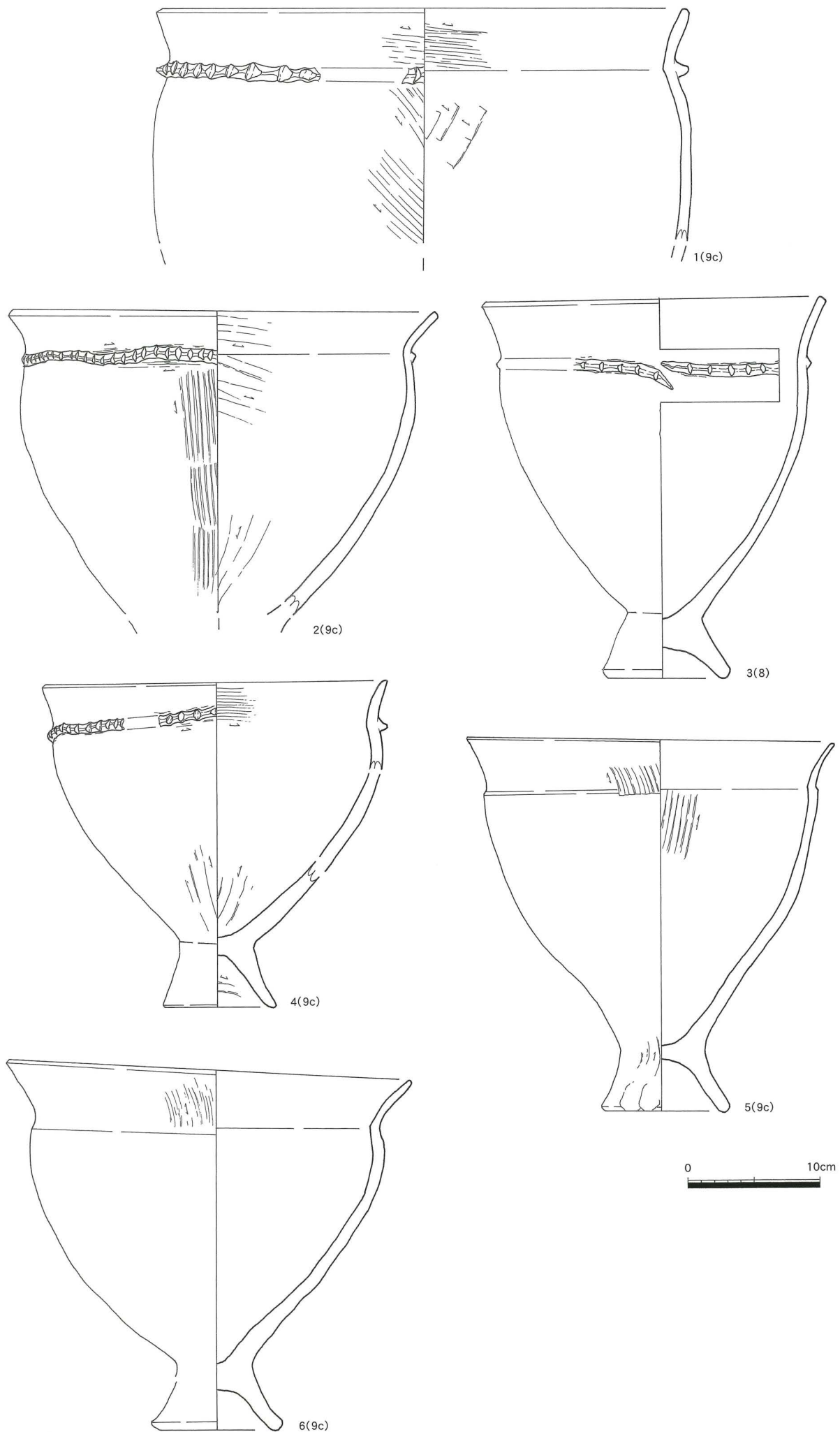


図28. 土器捨て場出土遺物① (S=1/4)

甕形土器・蓋形土器

甕形土器は、口縁部が外反し屈曲した内外面に稜をもつもの。内面あるいは外面のいずれかに稜をもつもの。内外面ともに稜をもたないもの。頸部屈曲部に刻み目を施した一条の突帯が巡るものなどがある。

1は大型の甕形土器の口縁部～突帯部の破片である。復元口径は40.8cmを測る。口縁部は外反する。頸部屈曲部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。

2は、甕形土器の口縁部～胴突帯部の破片である。復元口径は32.7cmを測る。口縁部は外反し、内面に稜をもつ。頸部屈曲部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。

3は、甕形土器の略完形品である。口径26.1cm、高さ28.8cmを測る。口縁部は外反し、頸部屈曲部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。突帯の端部は重ならない。底部は上底で、脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。

4は、甕形土器の略完形品である。口径26.3cm、高さ24.8cmを測る。口縁部はやや外反し、頸部屈曲部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。底部は深い上底で、脚台見込み部の断面は台形状になる。

5は、甕形土器の略完形品である。口径28.1cm、高さ28.1cmを測る。口縁部はやや外反し、頸部屈曲部の内外面に稜をもつ。底部は深い上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。

6は、甕形土器の略完形品である。口径31cm、高さ27.4cmを測る。口縁部は外反し、頸部屈曲部の内外面に稜をもつ。胴部はやや張り、底部は上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。

7は、甕形土器の略完形品である。復元口径30cm、高さ28.7cmを測る。口縁部は外反し、頸部屈曲部の内面に稜をもつ。底部は上底で、脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。

8は、甕形土器の略完形品である。口径28.4cm、高さ27.6cmを測る。口縁部は外反する。底部は上底で、脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。

9は、甕形土器の略完形品である。口径27.5cm、高さ $27.3 + a$ cmを測る。口縁部は外反し、頸部屈曲部の内面に稜をもつ。底部は上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。

10は、甕形土器の口縁部～底部付近の破片である。口径は28cm、高さ $25.5 + a$ cmを測る。口縁部は外反し外面に稜をもつ。

11は、甕形土器の口縁部～底部付近の破片である。口径は30.2cm、高さ $25 + a$ cmを測る。口縁部は外反し外面に稜をもつ。胴部がやや張る。

12は、甕形土器の口縁部～底部付近の破片である。口径は24.4cm、高さ $21.6 + a$ cmを測る。口縁部は外反し内外面に稜をもつが、外面の稜はにぶい。

13は、甕形土器の略完形品である。口径は18cm、高さ22.7cmを測る。口縁部は外反し内外面に稜をもつが、内面の稜はにぶい。底部は上底で、脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。

14は、甕形土器の略完形品である。口径は18.8cm、高さ28.1cmを測る。口縁部は外反し内外面に稜をもつが、内面の稜はにぶい。底部は上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。

15は、甕形土器の略完形品である。口径は23cm、高さ33cmを測る。口縁部は外反し内外面に稜をもつ。底部は上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。

16は、甕形土器の口縁部～底部付近の破片である。口径は20.6cm、高さ $25.5 + a$ cmを測る。口縁部は外反し内外面に稜をもつ。

17は、蓋形土器の略完形品である。口径は26.4cm、高さ12.4cmを測る。内面にリング状に煤が付着する。つまみ部分の見込み部は台形を呈す。

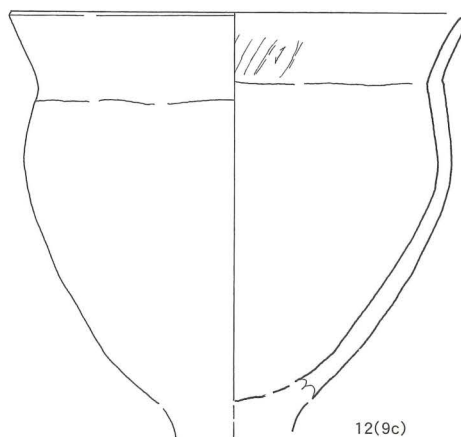
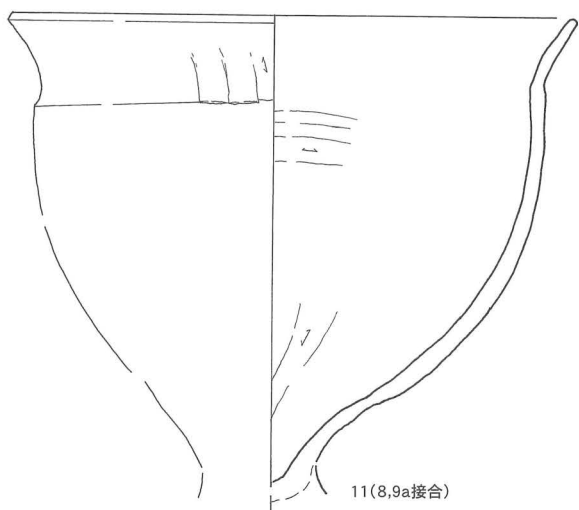
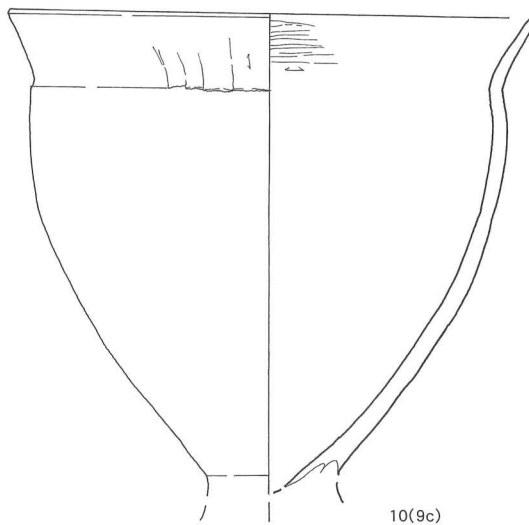
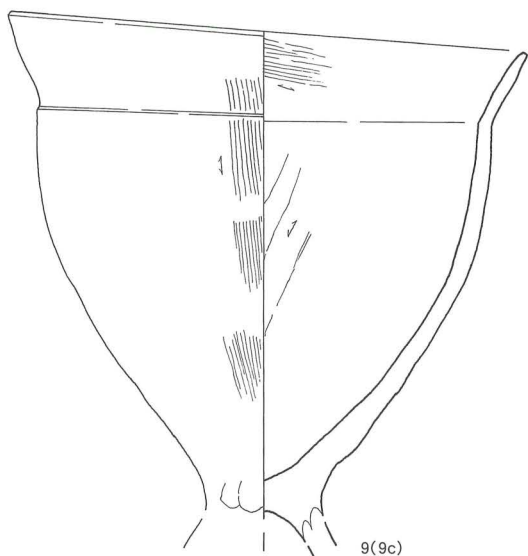
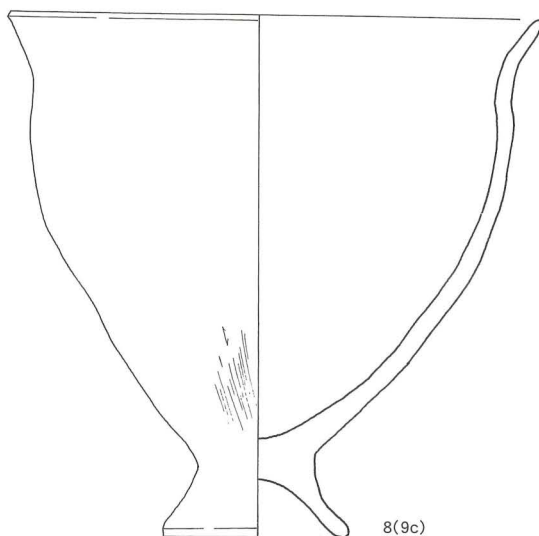
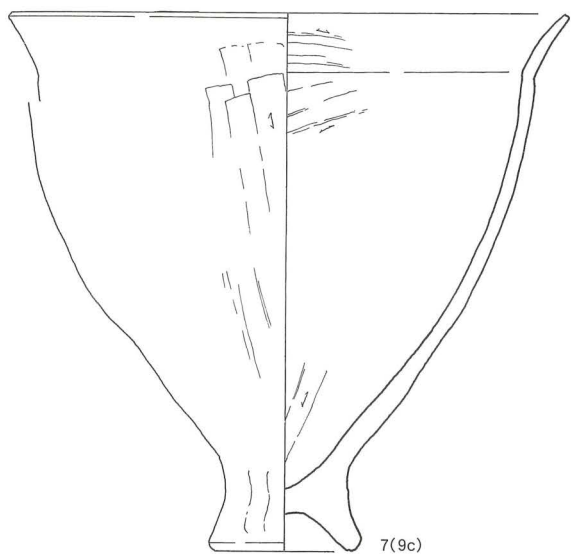


図29. 土器捨て場出土遺物② (S=1/4)

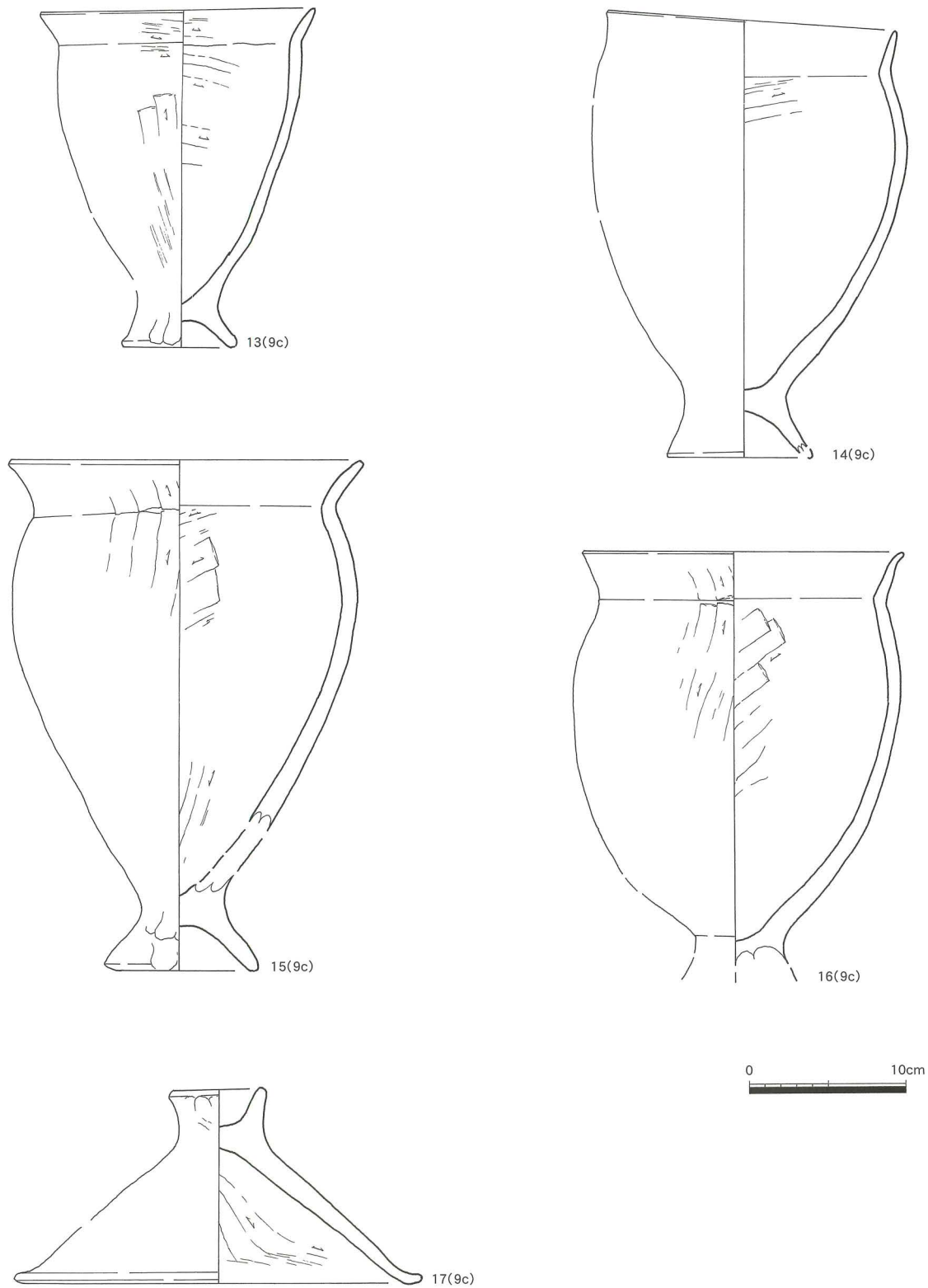
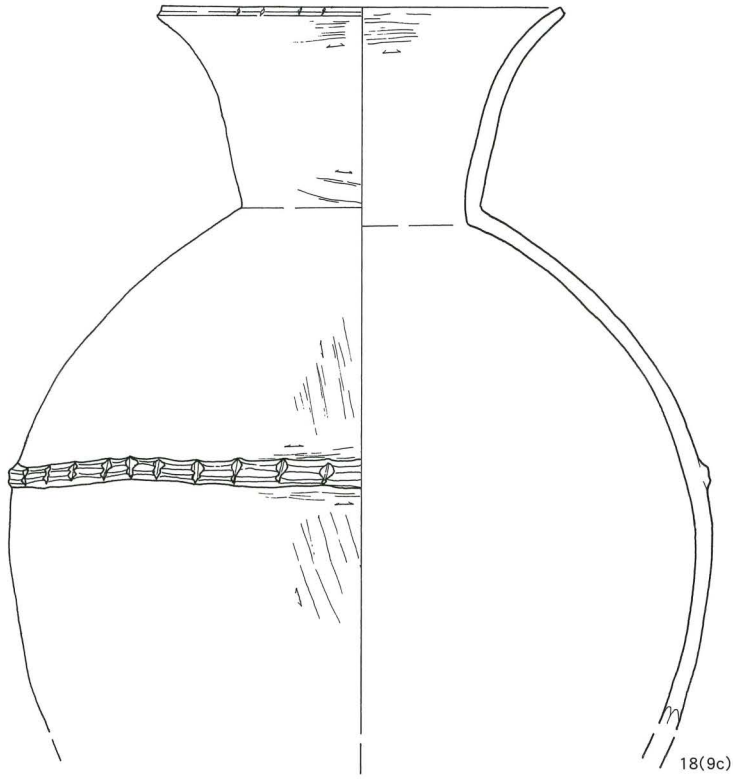
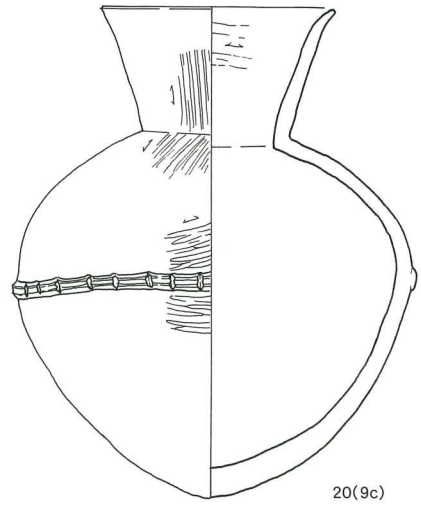


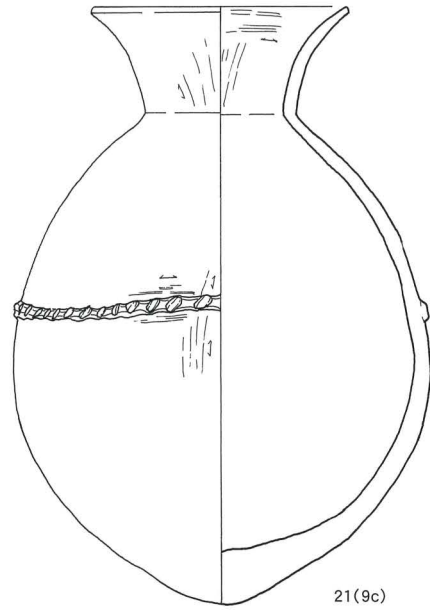
図30. 土器捨て場出土遺物③ (S=1/4)



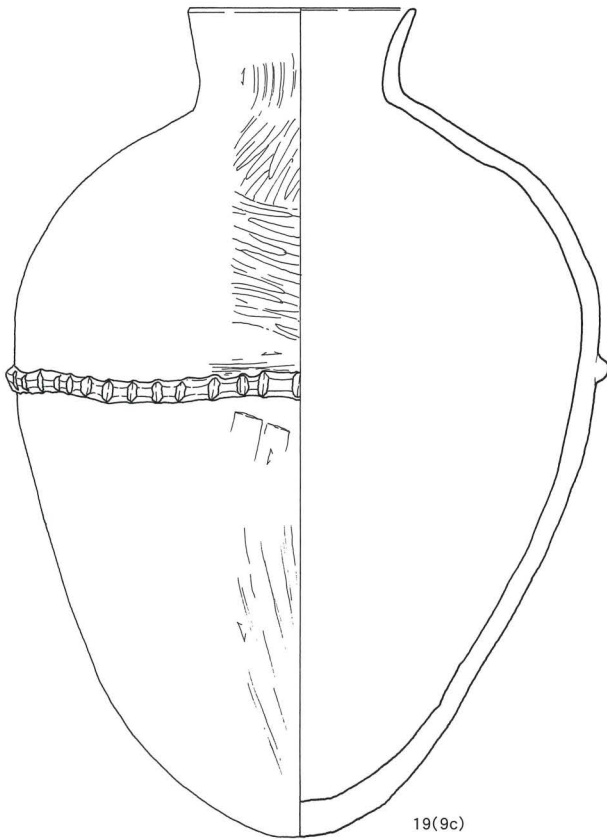
18(9c)



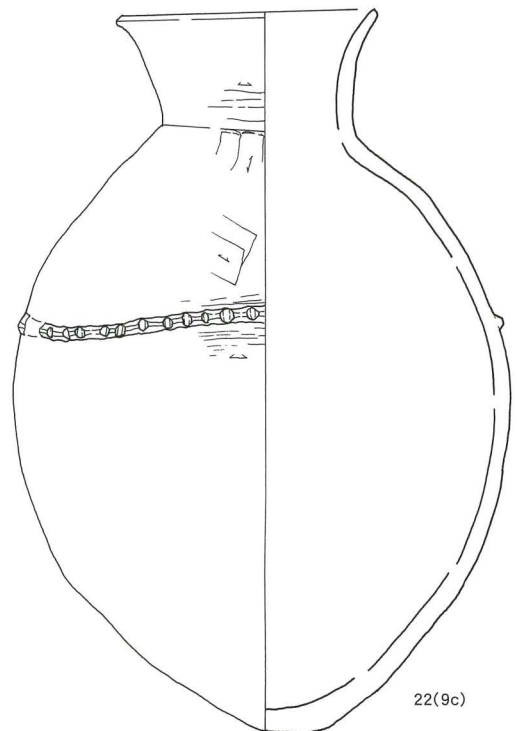
20(9c)



21(9c)



19(9c)



22(9c)



図31. 土器捨て場出土遺物④ (S=1/4)

壺形土器

壺形土器には、大別して刻み目をもつ突帯が巡るものと無文のものとのとがある。無文のものはやや小ぶりで頸部が短いものが多い。

18は壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口径は21.5cm、胴部最大径は37.4cmを測る。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。口唇端部はわずかに窪み刻み目が施される。胴部に巡る一条の突帯は端部が窪み、刻み目が施される。

19は、壺形土器の略完形品である。口径は12.2cm、胴部最大径32cm、高さ44cmを測る。口縁部は外反する。胴部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。底部は丸底である。

20は、壺形土器の略完形品である。口径は12.5cm、胴部最大径21.4cm、高さ26cmを測る。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。胴部は丸く膨らみ刻み目を施した一条の突帯が巡る。底部は丸底である。

21は、壺形土器の略完形品である。復元口径は13.8cm、胴部最大径22cm、高さ31.7cmを測る。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。下膨れぎみの胴部に刻み目を施した一条の突帯が巡る。底部は丸底である。

22は、壺形土器の略完形品である。口径は14cm、胴部最大径26.5cm、高さ38.1cmを測る。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。胴部の上位に刻み目を施した一条の突帯が巡る。底部は丸底である。

23は、壺形土器の口縁部～底部の破片である。復元口径は15cm、胴部最大径25.1cm、高さ36.4cmを測る。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。肩部の下位に一条の突帯が巡る。底部は丸底である。

24は、壺形土器の肩部～底部付近の破片である。胴部最大径25.8cmを測る。胴部に2条の突帯が巡る。

25は、壺形土器の口縁部～胴部の破片である。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。口径は13.8cm、胴部最大径26.4cmを測る。胴部に1条の突帯が巡る。突帯端部は重ならない。

26は、壺形土器の頸部～底部の破片である。胴部は下膨れ状になり胴部最大径21.4cmを測る。底部は丸底である。

27は、小型の壺形土器の略完形品である。口径は9.4cm、胴部最大径17.2cm、高さ26.5cmを測る。口縁部は外反する。底部は丸底である。

28は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は、ほぼ直行する。口径は8.5cm、胴部最大径19cmを測る。

29は、長頸壺の略完形品である。ゆがみが激しい。頸部はラッパ状に開き口縁部は外反する。復元口径は15cm、高さ37.1cmを測る。底部は丸底である。

30は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は外反する。復元口径は12.8cm、胴部最大径23cmを測る。

31は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は外反する。復元口径は9cmを測る。

32は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。肩部はなだらかで口縁部は外反する。復元口径は8.7cmを測る。

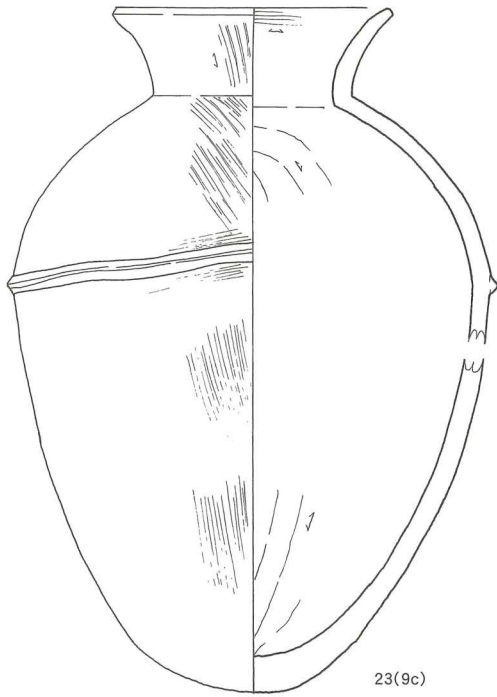
33は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は外反する。復元口径は10.4cmを測る。

34は、大型の壺形土器の肩部～底部の破片と思われる。復元胴部最大径は38cmを測る。底部は厚く平底ぎみになる。

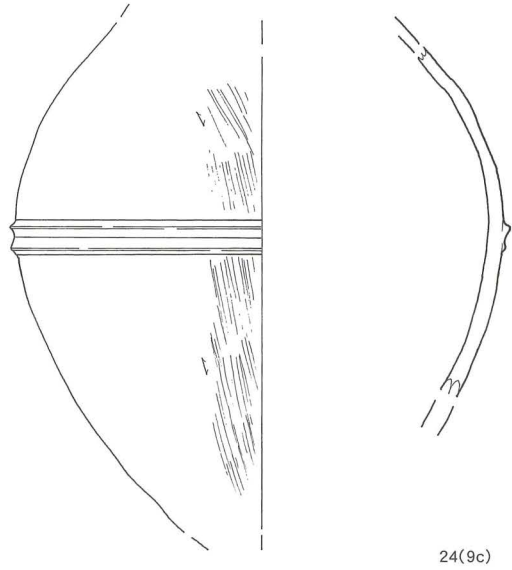
35は、小型の壺形土器の略完形品である。胴部最大径は13.3cmを測る。

36は、小型の壺形土器の口縁部～底部の破片である。外反する口縁部は口径が大きい。復元口径は9.8cmを測る。復元胴部最大径は11cm、高さは12.8cmを測る。肩部内外面に稜をもつ。

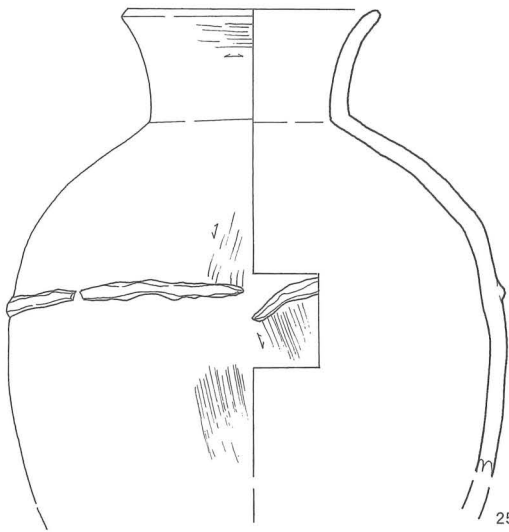
37、38は、壺形土器の底部～胴部の破片である。37の底径は7cmを測り平底となる。38は丸底である。



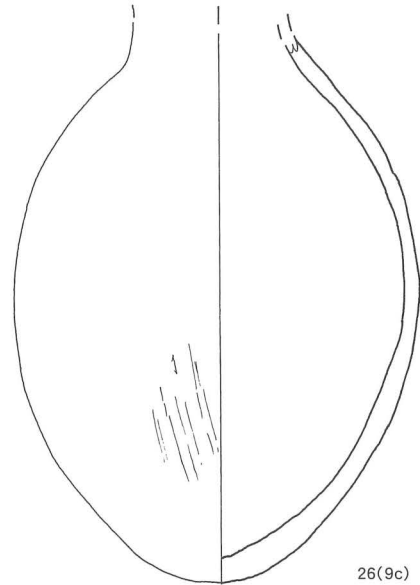
23(9c)



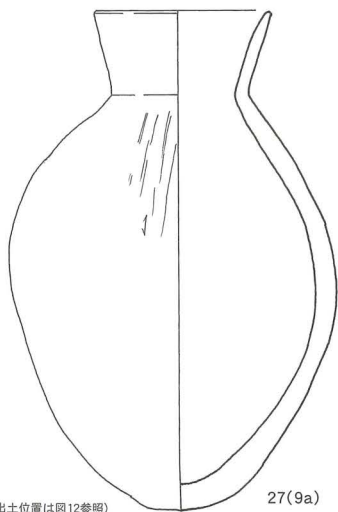
24(9c)



25(9c)

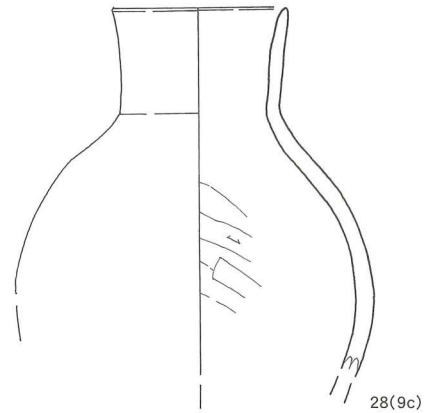


26(9c)



27(9a)

(出土位置は図12参照)



28(9c)



図32. 第9層及び土器捨て場出土遺物⑤ (S=1/4)

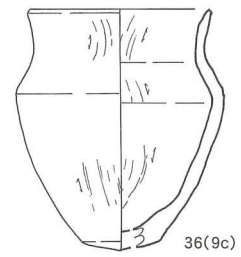
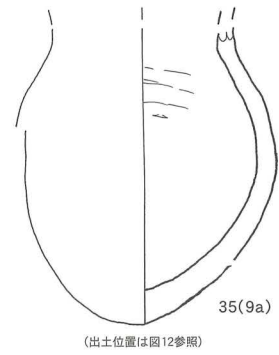
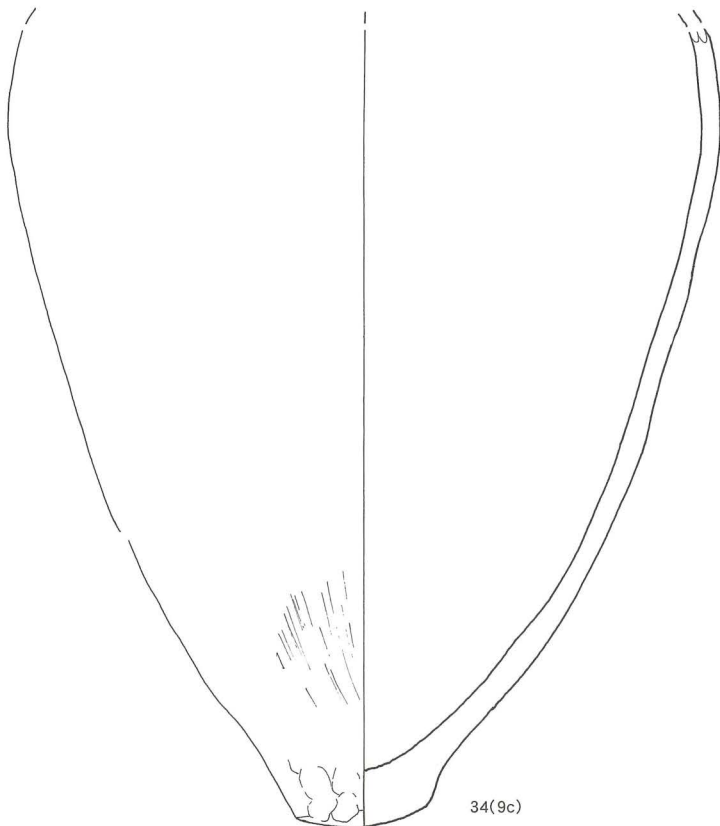
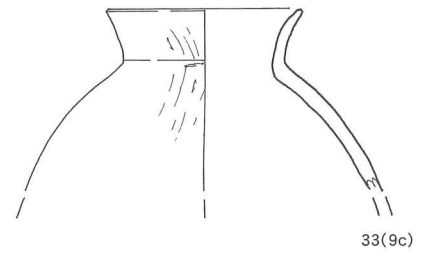
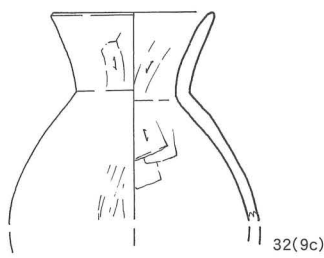
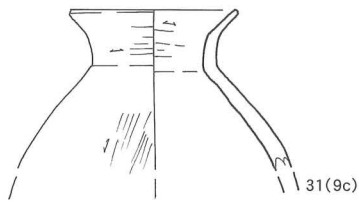
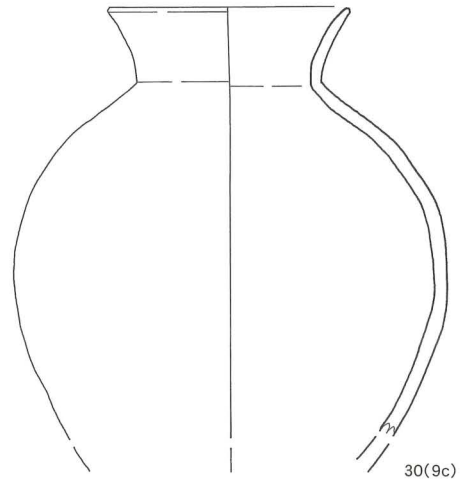
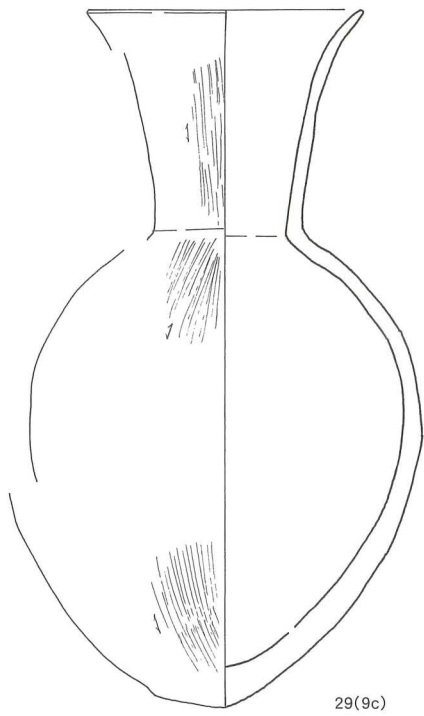
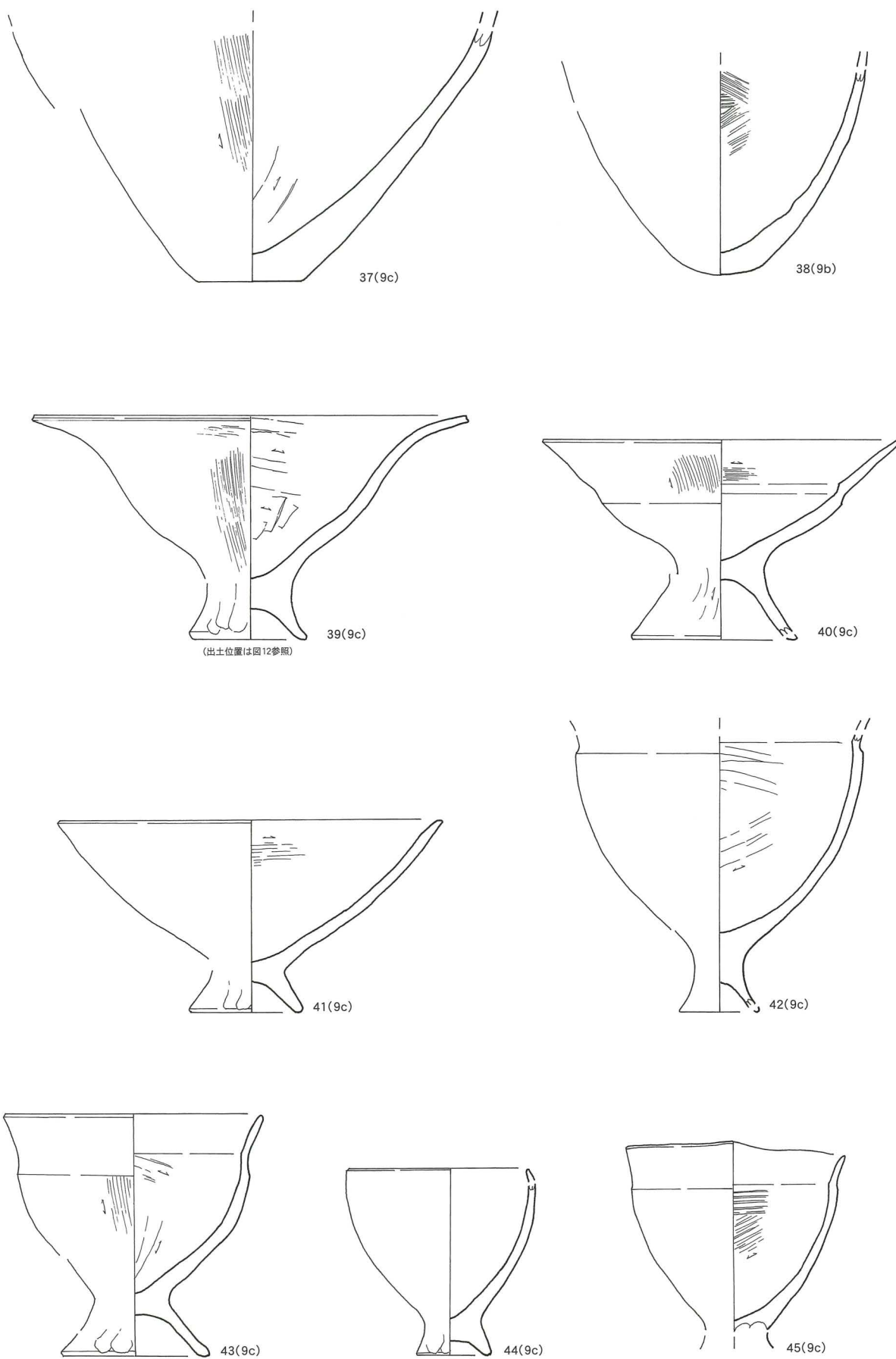


図33. 第9層及び土器捨て場出土遺物⑥ (S=1/4)



0 10cm

図34. 第9層及び土器捨て場出土遺物⑦ (S=1/4)

鉢形土器

鉢形土器には、皿状の坏部をもつもの、小型の甕形土器の形態をなすもの、ボール状のもの、丸底の底部から口縁部にかけてラップ状に開くものなどがある。

39は鉢形土器の口縁部～底部の破片である。口縁部～胴部は高坏の坏部のような形態で皿状となる。底部は上底で脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。復元口径30.6cm、高さ15.7cmを測る。

40は鉢形土器の口縁部～底部の破片である。39と同様に口縁部～胴部は高坏の坏部のような形態で皿状となり、坏部中ほどでわずかに屈曲が見られ、内外面に稜をもつ。底部は深い上底で脚台見込み部の断面はドーム状になる。復元口径25cm、高さ14cmを測る。

41は、鉢形土器の口縁部～底部の破片である。39、40と同様に口縁部～胴部は高坏の坏部のような形態で皿状となる。底部は上底で脚台見込み部の断面はドーム状になる。復元口径27cm、高さ13.5cmを測る。

42は、鉢形土器の頸部～底部の破片である。頸部屈曲部には内外面に稜がみられる。胴部は丸みを帯び、底部は上底で脚台見込み部の断面はドーム状になる。胴部最大径20cm、高さ19.5 + a cmを測る。

43は、鉢形土器の口縁部～底部の破片である。頸部屈曲部には内外面に稜がみられ、口縁部は外反する。底部はやや裾が広がり上底で、脚台見込み部の断面はドーム状になる。復元口径18.2cm、高さ16.8cmを測る。

44は、小ぶりな鉢形土器の略完形品である。口縁部はほぼ直行する。底部は上底で脚台見込み部の断面はかまぼこ状になる。口径12.7cm、高さ13cmを測る。

45は、鉢形土器の口縁部～底部付近の破片である。頸部屈曲部には内外面に稜がみられ、口縁部は外反する。口径15.3cmを測る。

46は、小ぶりな鉢形土器の完形品である。口縁部はほぼ直行する。底部は上底で脚台見込み部の断面はドーム状になる。口径10.3cm、高さ9.8cmを測る。

47は、小ぶりな鉢形土器の底部である。底部は深い上底で脚台見込み部の断面は釣鐘状になる。

48は、小ぶりな鉢形土器の口縁部～底部付近の破片である。脚台はもたず平底となる。口径12.6cm、高さ9.2cmを測る。

49も、小ぶりな鉢形土器の口縁部～底部付近の破片である。脚台はもたず平底となる。復元口径10.7cm、高さ8.5cmを測る。

50は、鉢形土器の口縁部～底部の破片である。丸底の底部から口縁部へとラップ状に開く。復元口径16.4cm、高さ12cmを測る。

51は、丸底の底部から口縁部へとラップ状に開く鉢形土器の略完形品である。復元口径8.6cm、高さ7.3cmを測る。

52は、ボール状を呈する鉢形土器の略完形品である。口縁部はやや内湾し、底部は平底となる。復元口径18.8cm、高さ16.2cmを測る。

53は、砲弾状を呈する鉢形土器の略完形品である。口縁部はやや内湾し、底部は丸底となる。口径9.6cm、高さ14.8cmを測る。

皿形土器

54は、皿形土器の略完形品である。坏部中ほどでわずかに屈曲が見られ、内外面に稜をもつ。内面にリング状に煤が付着した部分もみられ、蓋として使われた可能性もある。口径37cm、高さ9.8cmを測る。

55は、皿形土器の略完形品である。坏部中ほどの内面に稜をもつ。内面にリング状に煤が付着した部分もみられ、蓋として使われた可能性もある。口径33cm、高さ7.9.8cmを測る。

高坏

56は、高坏の略完形品である。皿状に開いた坏部では、口縁部付近で屈曲が見られ、内外面に稜をもつ。脚部には4箇所の透かしが施される。復元口径36.8cm、高さ23.3cmを測る。

57は、高坏の脚部破片である。形態、大きさともに56と類似する。脚部には4箇所の透かしが施される。

58は、高坏の脚部破片である。裾が大きく開く脚部には4箇所の透かしが施される。

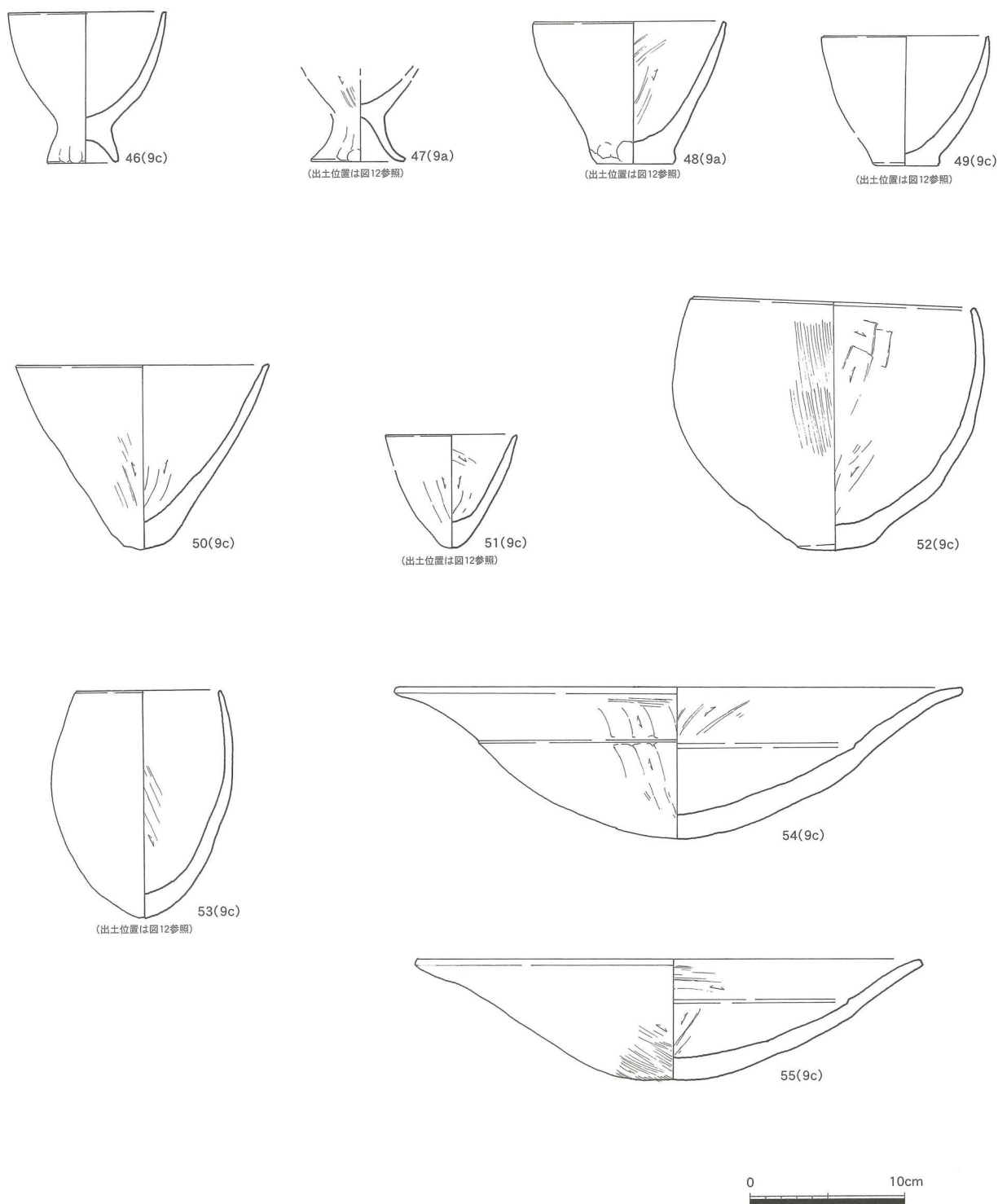


図35. 第9層及び土器捨て場出土遺物⑧ (S=1/4)

59は、高坏の脚部の破片である。脚部には4箇所の透かしが施される。

60は、高坏の脚部の破片である。器壁が薄くミガキによって仕上げられている。透かしは無い。

61は、高坏の坏部の破片である。皿状に開いた坏部では、中ほどで屈曲が見られ、内外面に稜をもつ。復元口径は34cmを測る。

62、高坏の坏部の破片である。皿状に開いた坏部では、中ほどで屈曲が見られ、内面に稜をもつ。外面には1条の粘土紐が貼り付けられている。赤色塗彩の痕跡が残る。復元口径は25.5cmを測る。

63は、高坏の坏部の破片である。皿状に開いた坏部では、中ほどで屈曲が見られ、内面に稜をもつ。復元口径は31.3cmを測る。

64、高坏の坏部の破片である。皿状に開いた坏部では、中ほどで屈曲が見られ、内面に稜をもつ。復元口径は30cmを測る。

ミニチュア土器

65は、筒状を呈するミニチュア土器で底部が上底となる。66はボール状を、67は壺を模したものと思われる。68～72はラッパ状に開く鉢形を呈する。73～77は、脚台をもち鉢もしくは甕を模したものと思われる。

石器 (図38～図43)

第9層及び土器捨て場から出土した石器は303点で、組成は下表のとおりである。その大多数は礫、礫片、分割礫等の礫等193点で63.7%を占める。礫石器類は計89点で29.4%を占める。剥片石器類は21点で6.9%を占める。利用石材は安山岩194点で64%と半数以上を占め、次に多いのが砂岩69点で22.7%、頁岩23点で7.6%である。その他は、変成岩5点で1.7%、黒曜石と粘板岩が各2点で0.7%、凝灰岩・シルトが各1点等である。土器捨て場以外の第9層出土石器は、78・79・83・96である。

①使用痕のある剥片 (図38. 78・79)

78・79は、黒曜石製の使用痕のある剥片である。直線的な縁辺に微細な使用痕が認められる。

②石包丁 (図38. 80～82)

80は、頁岩製の石包丁であり、a面左側部の刃部とa面右側部が欠損している。両面とも研磨されており、刃部には稜が認められる。中央部左寄りに、穴が2個穿穴されており、使用により一部の稜が潰れている。

81は、砂岩製の石包丁である。穴は穿穴されていないが、石包丁上部に三ヶ所の浅い溝状の痕跡が認められる。使用による痕跡と考えられる。a面左右端部が欠損し、両面ともb面側からの加撃によって欠損している。

82は、穿穴が1穴確認のできる研磨面をもつ石包丁片である。大きく欠損し、本来の大きさや形態は不明。

③石錘 (図38. 83・84)

83は、楕円形を呈する石錘である。やや粒子の粗い砂岩を素材としている。縦方向と横方向の溝状を切込みが入っており、石器中央部で交差し十字を呈している。溝状の切り込みの切り合いによると、横方向→縦方向の順で切込みが入っている。84は、扁平な楕円礫を素材としており、上下両端にa・b面側からの加撃による剥離

器種名	剥片石器											礫石器							礫等					総計			
	磨製石鏃	磨製石器	石鏃	石剣形石器	打製石斧	使用痕剥片	二次加工剥片	剥片	石核	石包丁	石包丁片	合計	敲石	砥石	台石	台石	磨石	凹石	石錘	合計	礫片	分割礫	板状礫		板状礫片	合計	
																											1
点数	1	1	1	1	1	2	5	5	1	2	1	21	20	24	15	1	3	24	2	89	118	25	26	11	13	193	303
%	0.33	0.33	0.33	0.33	0.33	0.66	1.65	1.65	0.33	0.66	0.33	6.93	6.6	7.92	4.95	0.33	0.99	7.92	0.66	29.4	38.9	8.25	8.58	3.63	4.29	63.7	100

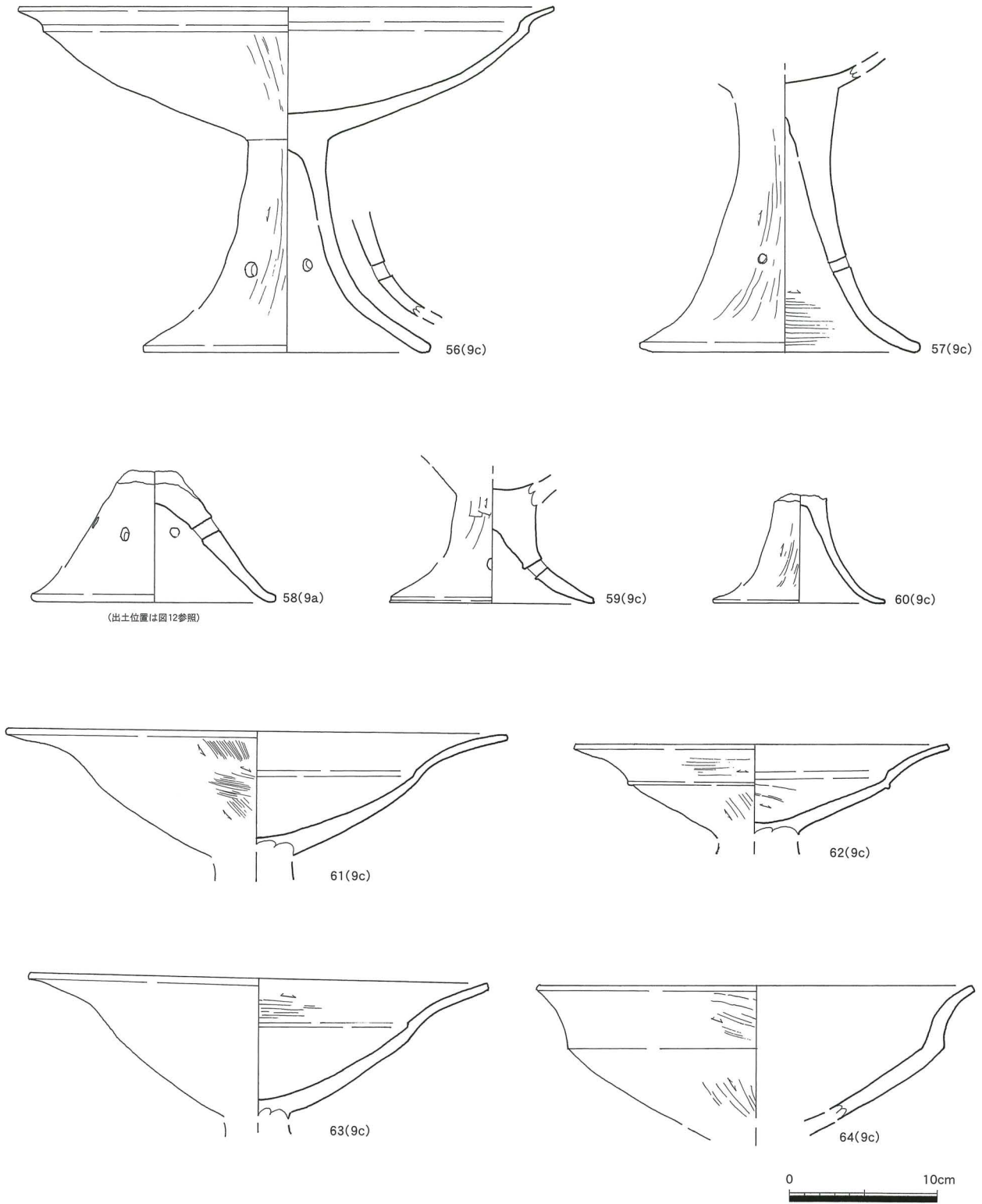


図36. 第9層及び土器捨て場出土土遺物⑨ (S=1/4)

が認められる。剥離面の状態やa面右側に窪み状を呈した磨面が認められることから石錘とした。

④打製石斧 (図38. 85)

85は、打製石斧の基部である。刃部側の欠損面 (f 面) は、a 面側からの加撃によるものである。横長剥片を素材とし、粗い調整により整形されている。基部の a 面左側部はやや抉入状を呈し、右側面は直線的である。基部中央部は、使用による装着のものか稜が潰れている。基部端部にも同様なつぶれが認められる。

⑤石剣形石器 (図38. 86)

鋭利な先端部を意識した作られた石器である。大まかな剥離によって整形された後、両面とも研磨されているが、全面には及んでいない。断面形状からも判断できるように、全体的な形状は不整形である。基部側には節理面があり、ほとんど整形されていない。石鎌的な機能も有すると考えられる。

⑥砥石 (図39. 87~93)

砥石は24点出土しており、形態別で代表的のものを7点掲載する。砥石の素材は砂岩22点、安山岩1点、頁岩1点である。砂岩は細粒のものとやや粗粒のものがある。素材形態は、板状素材、亜角礫、円礫が用いられている。砥面は、一面、表裏の二面、多面のものがある。砥面は平坦、断面円弧を呈するものがある。

87は、扁平な砂岩を素材としており、平面形状は台形状を呈している。a面上部は欠損している。残存部分は、1829と3994接合している。a面全体は磨面であるが、網がかかっている下端部は特に顕著である。下端部の剥離痕は、研磨によって切られている。b面は素材礫のままの状態、一条の溝が削られている。

88は、板状礫を素材とした砥石である。節理面が残されているa面下端部以外の面はすべて欠損面である。よって、本来の形状・大きさは不明である。磨面はa面に顕著に認められ、線条痕が残されている。

89は、a面全体が磨面で、特に網で示しているa面右側面が顕著であり、断面観察によるとやや窪んでいる。

90は、a面・d面に砥面が認められる。砥石としての主要な砥面は、a面中央部から右側面である。断面観察によるとやや窪んでいる。また、d面側からの観察によると、a面全体が窪んでいることが判断できる。

91は、90とほぼ同質の砂岩を素材とした砥石である。a面上部とd面に砥面が認められる。砥面の主体となるa面は、90と同様に砥面がやや窪んでいる。また、砥石の底面を平らに設置した場合、砥面が斜めとなる。

92は、板状の砂岩を素材とし、a面全体が砥面とされている。端部は欠損または剥離面が残されている。

93は、a面全体が砥面で、ほぼ平坦である。裏面(b面)の一部にも砥面が認められ、縦断面図に砥面の範囲を示している。裏面は、素材剥片の主要剥離面であり、剥離面の凸面に砥面があり、凹面には認められない。

⑦敲石 (図40. 94~97)

敲石は20点出土している。楕円形を呈した礫を素材としたものが多い。敲石の使用面は、上下両端のものが多く、敲打痕または剥離痕が認められる。その他に、敲打痕が全縁を巡るもの、上下端と裏面のものがある。

94は、頁岩製の棒状礫を素材としたものである。a面上部とb面は欠損している。a面上部は敲打により剥落したと思われる。b面全体の剥離面に、取上げ番号7465が接合する。その接合状態から、7465が使用による剥落後もa面下端部を使用面としている。なお、a面上端部は、大きく欠損したため使用されていない。

95は、a面下端部の面全体に敲打痕が認められる。敲打面の断面は凸面を呈し、a面上端部の稜は潰れている。

96は、a面下端部に敲打痕が、その接する部分に磨面も認められる。作業の中での多種の用途が推測される。

97は、a面の上下両端に敲打痕が認められ、a面裏面の平坦面には磨面が認められる。

98は、大型の円礫を素材としたものだが、使用によりその大部分が欠損している。

⑧凹石 (図40. 99~102)

凹石は24点出土している。その大部分は安山岩製の角礫を素材としている。凹面は、表面の一面のみ、表裏の二面もつもの、全面にもつもの、表裏面の二面と縁辺に敲打痕が認められるものがある。

99は、a面のみ凹面が認められる。その周辺には敲打痕が認められる。

100は、平坦な礫の表裏面に凹面と砥面が認められる。a面上端部は欠損している。

101は、安山岩製のサイコロ状に近い角礫を素材としている。六面の全面に凹面が認められる。

102は、安山岩製の亜円礫を素材としたもので、表裏面に凹面が、ほぼ全周に敲打痕が認められる。

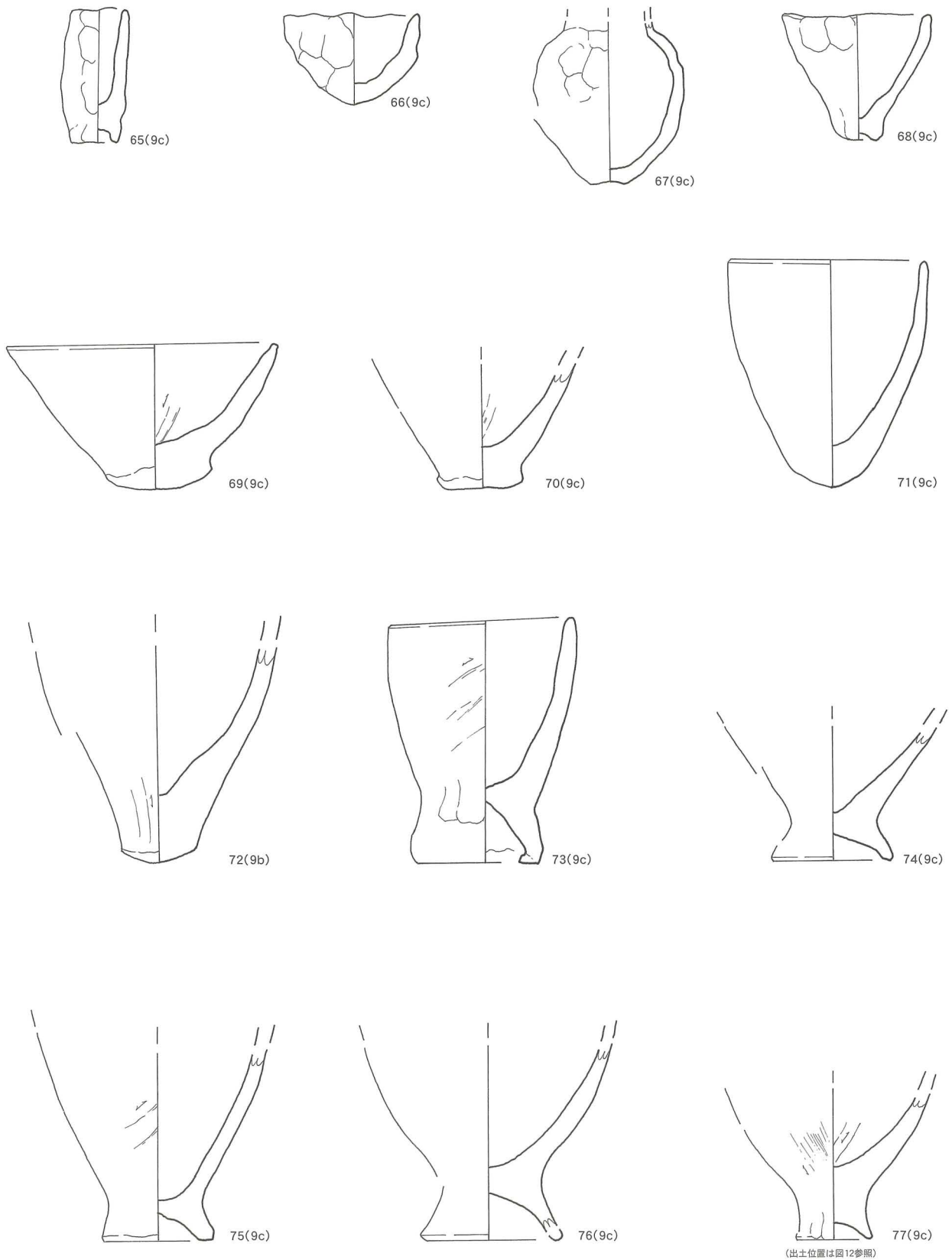


図37. 第9層及び土器捨て場出土遺物⑩ (S=1/4)

⑨台石 (図40. 103・104・図43. 120・121)

台石は、15点出土している。砂岩製4点、安山岩製11点であり、板状または厚みのある礫を素材としている。

103は、a面に敲打痕が顕著に認められ、平坦面には擦られた面も認められる。

104は、砂岩製の板状礫を素材としたものである。a面の平坦面中央部に敲打痕が認められる。

120は、約20kgを測る板状を素材としたもので、a面中央部に敲打痕が認められる。

121は、約37kgと出土遺物の中で最重量を測る安山岩製のものである。a面中央部に敲打痕が認められる。

軽石

第9層及び土器捨て場から出土した軽石は206点を数える。その組成は下表のとおりである。

①舟形軽石加工品 (図41. 105~108)

舟形軽石加工品は、平面形状が楕円形(105)、隅丸方形(107)、一端が先細りするもの(106・108)がある。105と106は深く舟体を作り出しているが、107と108は掘り込みが浅い。全点とも素材の軽石を削り整形し、特に108の内面には鋭利な刃物による削痕が認められる。削り取られた面は、幅広く面的に広い。かつ、工具の先端部が鋭利に尖っているもので削り取

器種名	舟形軽石加工品	軽石加工品	磨面をもつ軽石	砥石	軽石	軽石片	合計
点数	4	53	37	1	108	3	206
%	1.94	25.7	18	0.48	52.4	1.46	100

られたと考えられる。現在のところ、県内の当該時期の出土例に当たっておらず、推測の域を出ないが、刀子のような工具を想定しておきたい。土器捨て場の範囲外から出土した第9層出土軽石は106のみである。

②軽石加工品 (図41. 109~図42. 119)

109は、直径約1.2cmの半円形の溝(凹線)が認められるものである。

110は、長楕円形の扁平な軽石を素材とし、a面上段部に鋭利な刃物による沈線が認められる。下端部は欠損。

111と112は、横位の沈線が数条認められるものである。111と112ともa面上端部に切込みがあり、男性性器を具象化した可能性がある。

113は、a面・b面に直径4mmほどの窪みが認められるものである。

114は、a面中央部に凹面と敲打痕が認められる。またa面上端部に工具による沈線が認められる。

115は、不正形な扁平の軽石を素材としており、a面中央部に縦位の幅1.3cmほどの半円形の沈線(凹線)が認められる。その形状は109と類似する。さらに、中央部に113で認められるような窪みが認められる。

116は、111・112と同様に横位の沈線が数条認められるものである。全体的な形状がそれと異なるため別記した。a面上下両端にも、数条の沈線が認められる。

117は、a面中央部に直径8mmの凹部が3ヶ所認められるものである。その形状と深さから同じ工具によるものと考えられる。裏面には削痕が認められ、全体的に整形されている。

118と119は穿孔が認められるものである。118は、隅丸長形に整形されたものに、直径1.5cmの円形の穿孔が2穴ある。a面下端部と右側面が欠損しているため、穿孔が2ヶ所以上開けられた可能性もある。

119は、不整形な扁平の軽石を素材としたもので、a面上部に直径1.5cmの円形の穿孔が1穴認められる。その穿孔は118とほぼ同じ大きさであり、同じ工具によるものと考えられる。

舟形軽石加工品と軽石加工品は、何らかの工具による削面が認められ面的に整形されている。特に、108のように鋭利な刃物で削り取られた痕跡が認められるものもあり、当該時期の工具としては黒曜石や安山岩製の剥片などあるものの、削面の幅やその広さなどから刀子的なものが想定されよう。

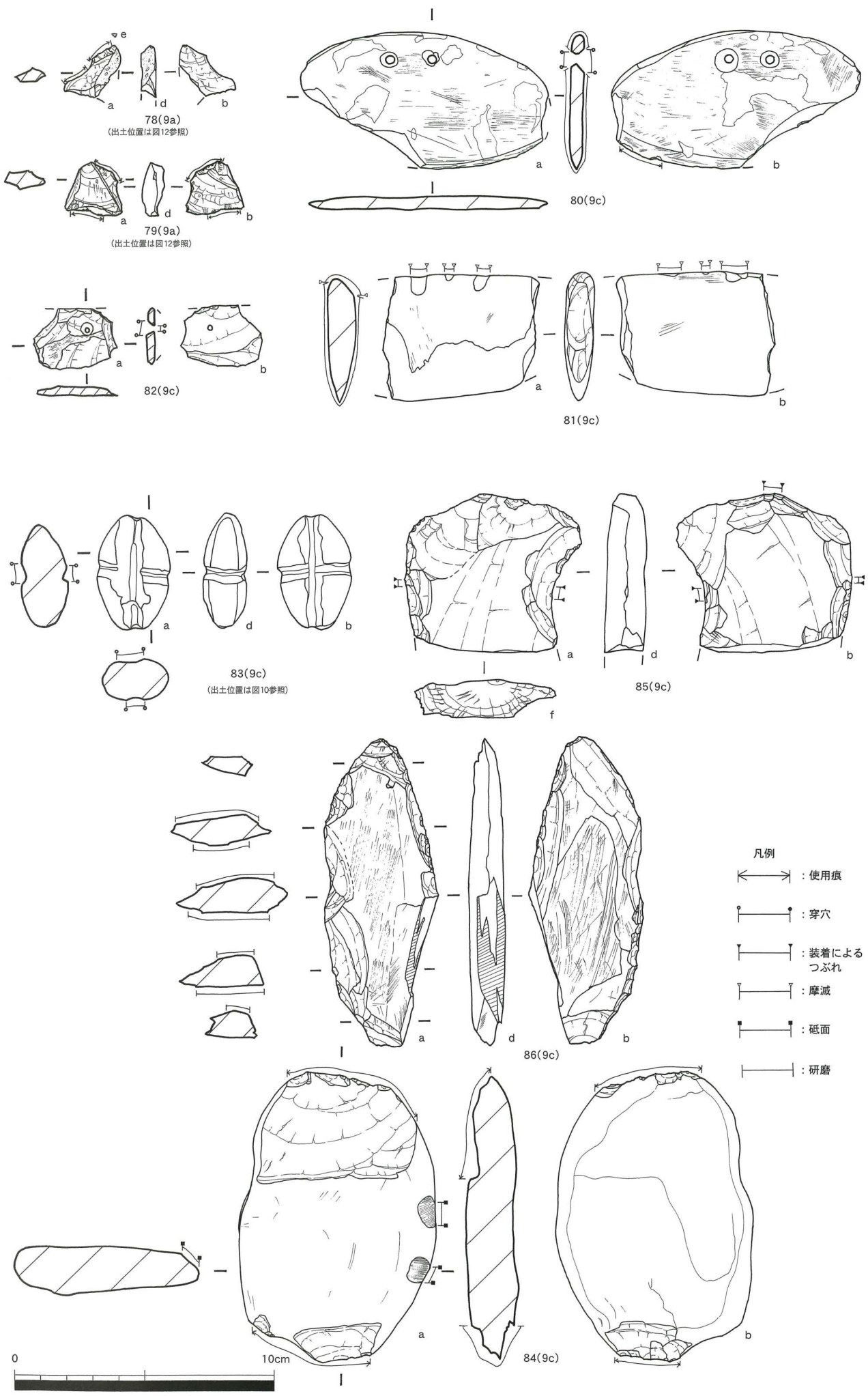


図38. 第9層及び土器捨て場出土遺物実測図⑪

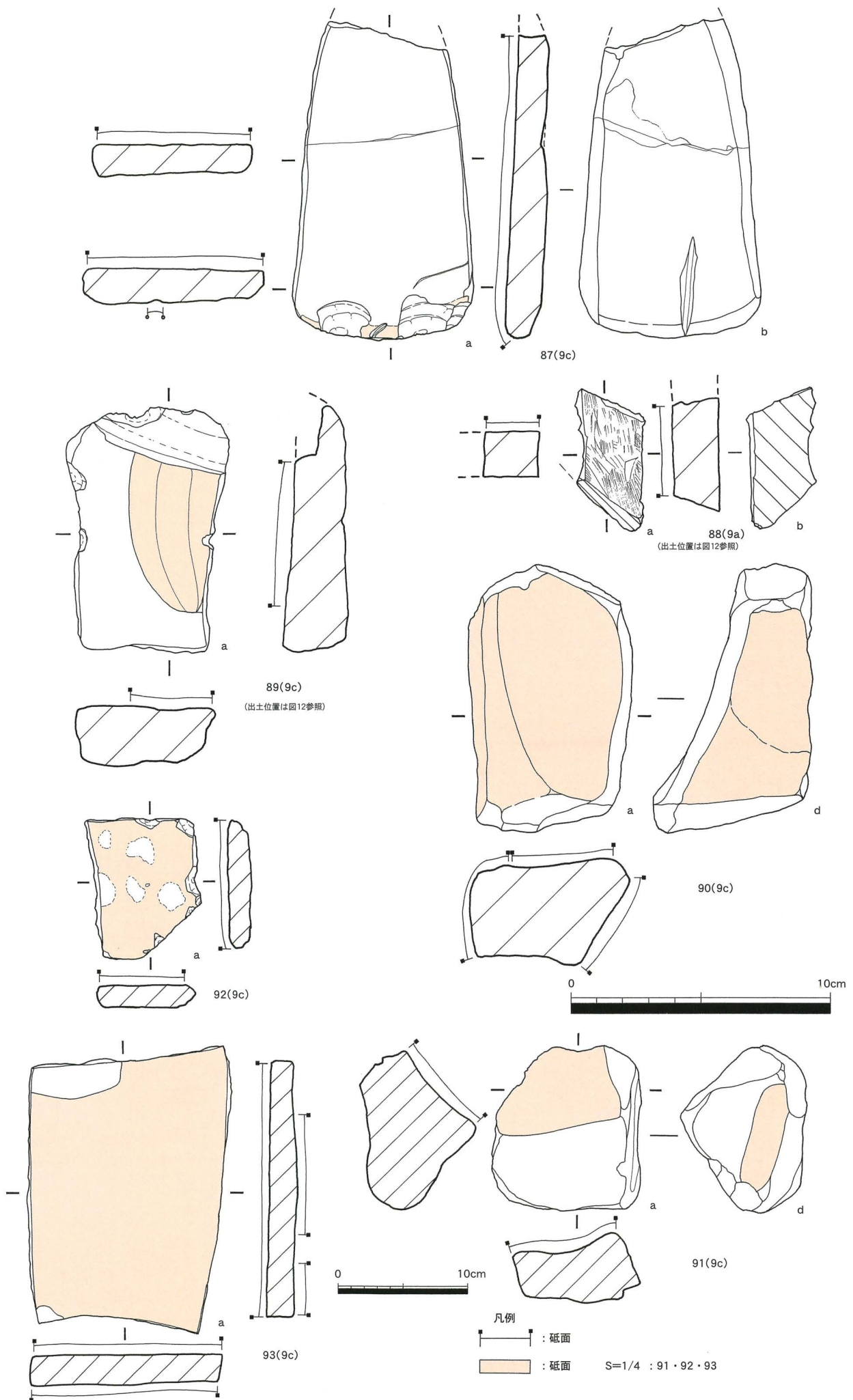


図39. 第9層及び土器捨て場出土遺物実測図⑫

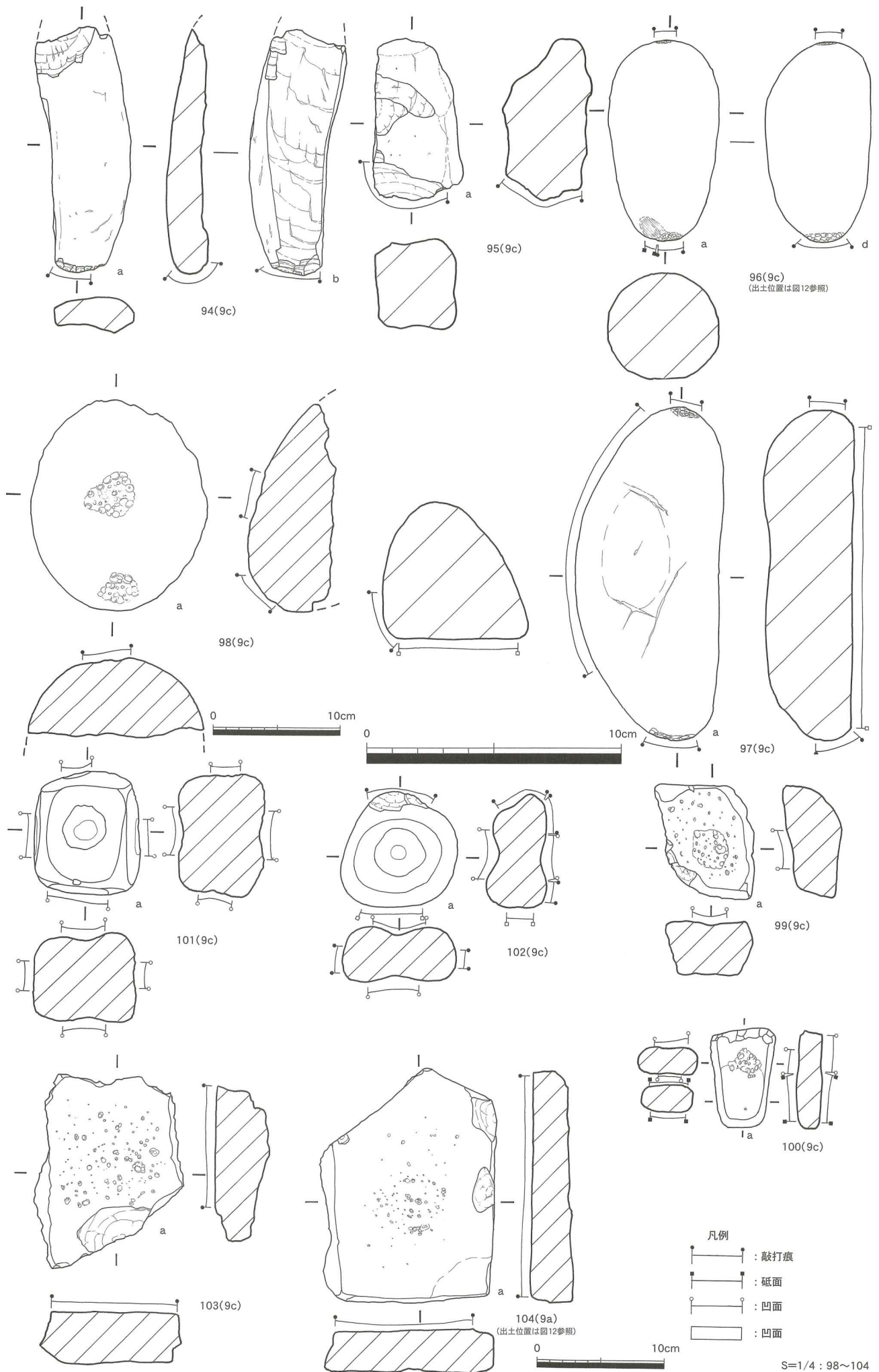


図40. 第9層及び土器捨て場出土遺物実測図⑬

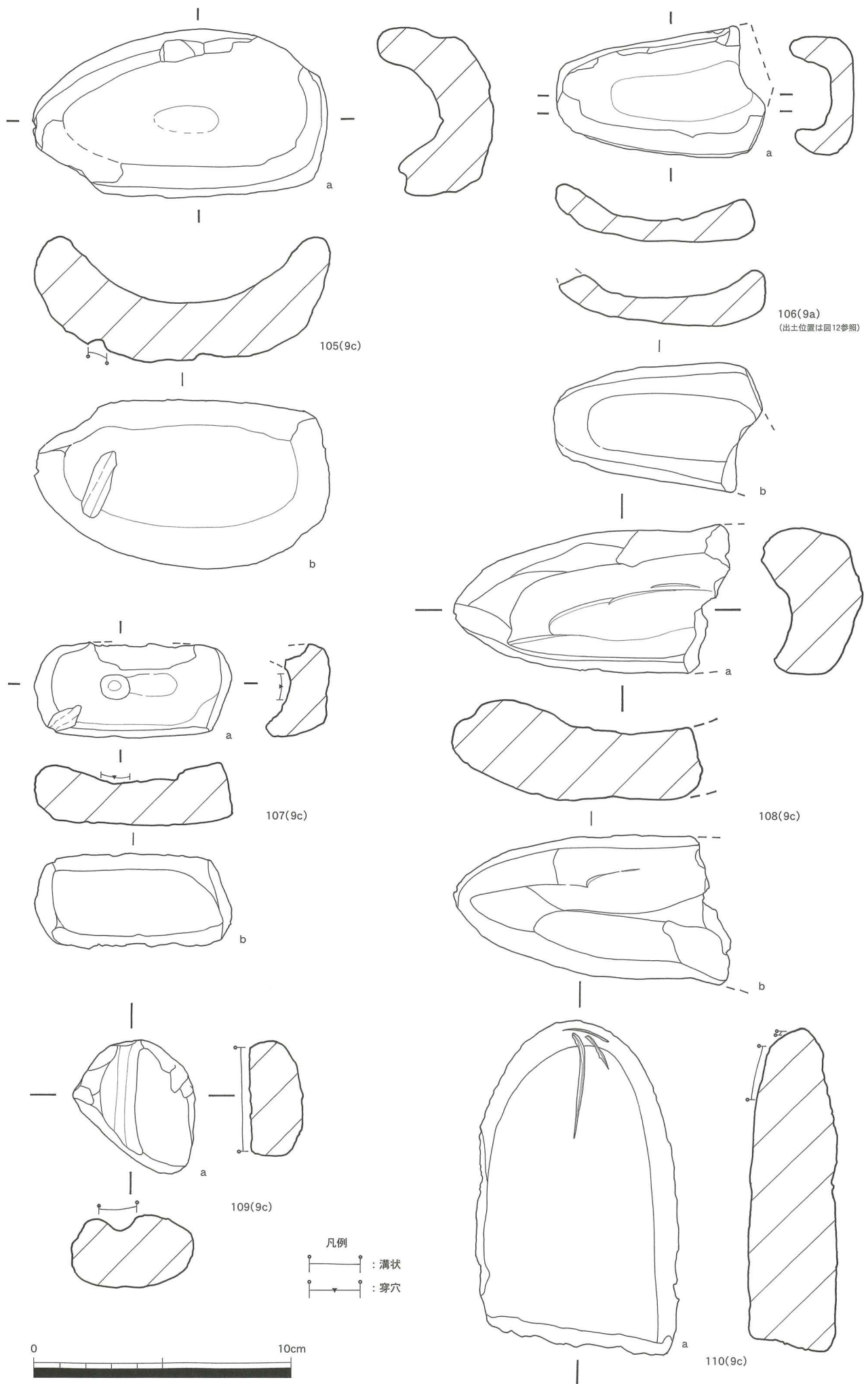
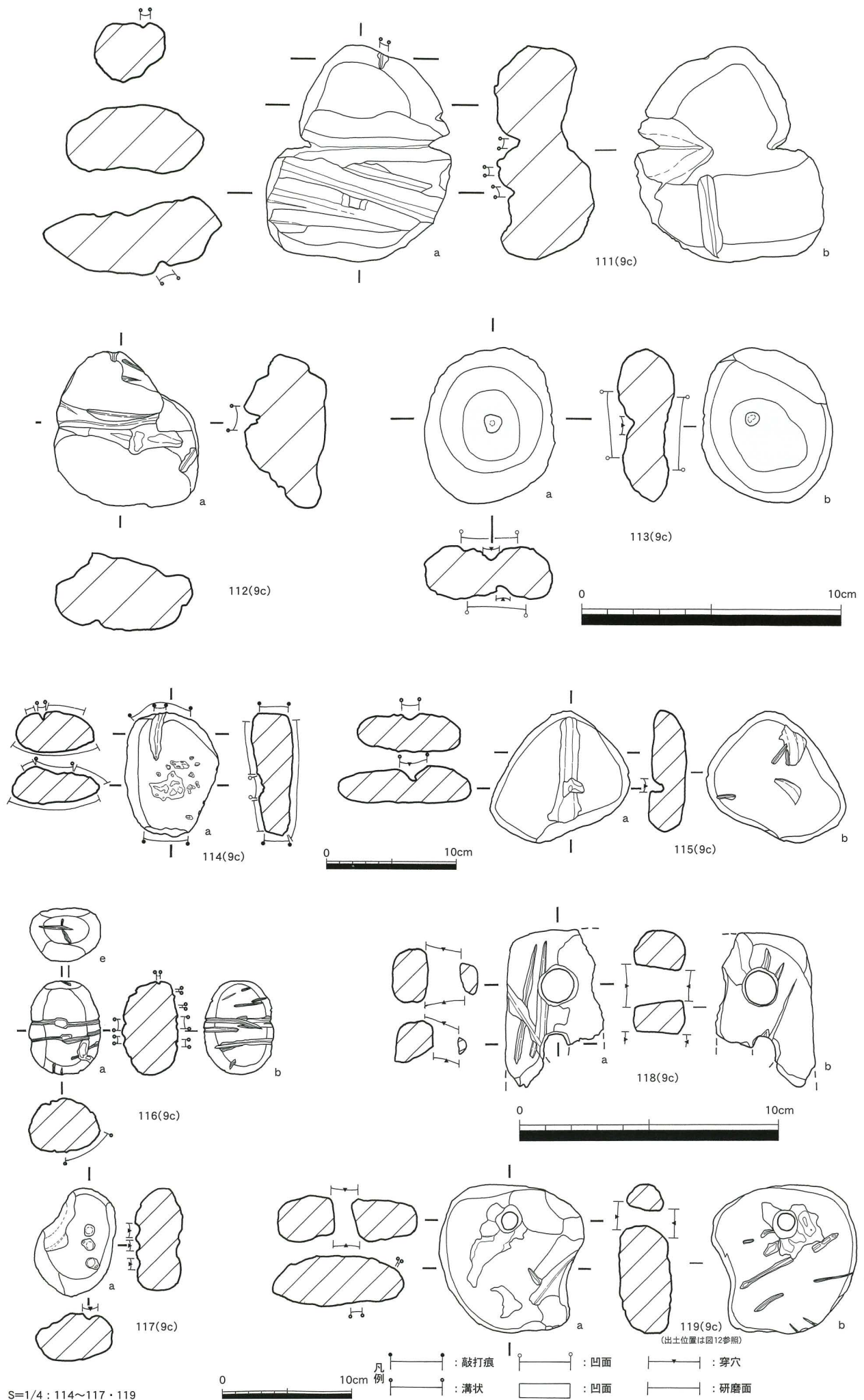


図41. 第9層及び土器捨て場出土遺物実測図⑭



S=1/4 : 114~117・119

図42. 第9層及び土器捨て場出土遺物実測図⑮

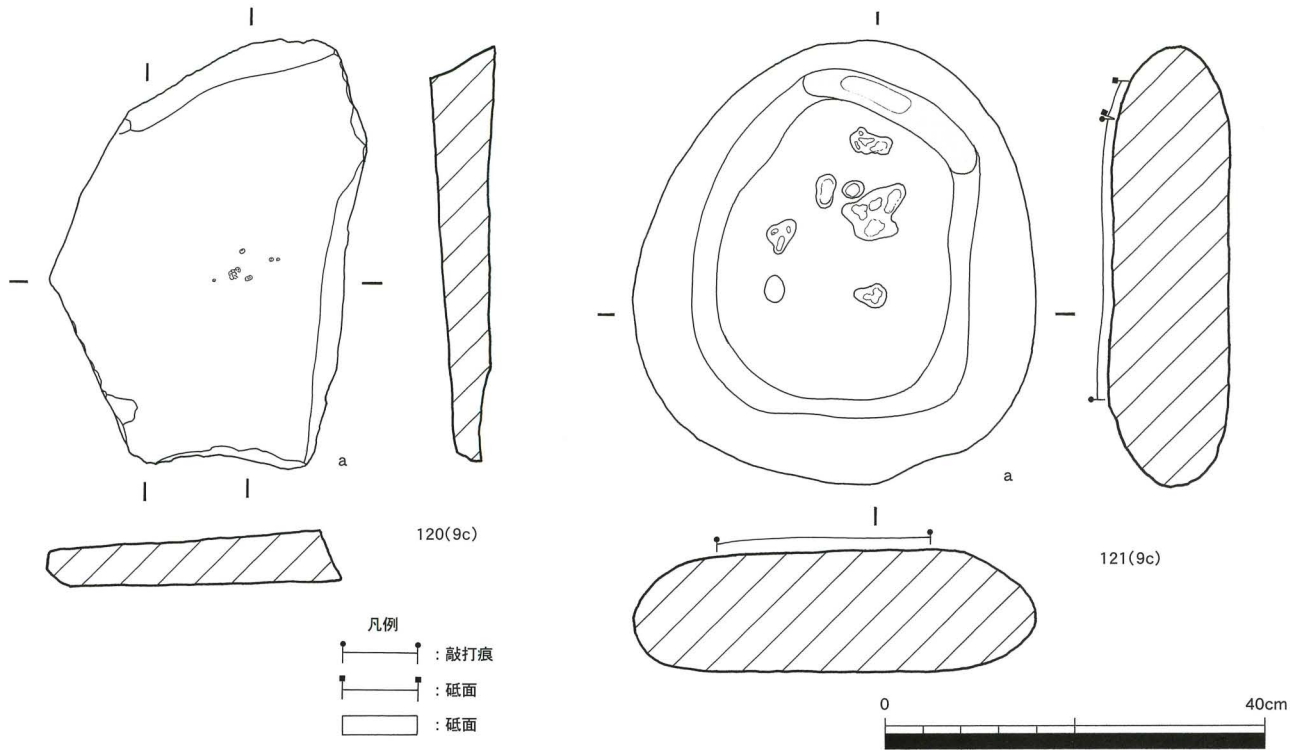


図43. 土器捨て場出土遺物実測図⑩

図No	取上げ No	層位	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
1	2886	9c	甕	復元口40.8	口~胴1/3 残存	5YR6/4 7.5YR 6/2 10YR6/3	5YR6/4	10YR5/2		砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ・ハケメのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ヨコナデ 突：ヨコナデのち棒状具によるキザミ	接合： 2801、2891、4391、 4427 良好
2	257	9c	甕	口32.7 胴29.8	略完形	5YR6/2	7.5YR 6/2	7.5YR 6/2 5YR5/2		細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ハケメ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナデ 突：ヨコナデのちキザミ	接合： 255、291、260、264、 300、434、430、289、 429、288 良好
3	108	8	甕	口26.1 胴23.3 高28.8 底9.7	略完形	2.5YR 6/2	2.5YR 5/2 7.5YR 5/1	7.5YR 5/2	脚内5 YR5/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：マメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナデ 突：ヨコナデのち工具によるキザミ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
4	5092	9c	甕	口26.3 底8.6 高24.8	略完形 脚1/1 口~胴1/2 残	5YR5/4	7.5YR 5/3	5YR5/3 7.5YR 5/2	脚内5 7.5YR 5/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナデ 突：ヨコナデのち工具によるキザミ 底：ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：工具によるナデのちナデ	良好
5	813	9c	甕	口28.1 胴25.4 高28.1 底9.8	略完形	7.5YR 7/3 10YR6/3	7.5YR 6/3	10YR6/2	脚内10 YR6/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ 底：ユビオサエのちナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：工具によるナデのちナデ	良好
6	4853	9c	甕	口31 高27.4 復元底	口~底	5YR6/3	7.5YR 5/3	10YR5/2	脚内10 YR5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナデ 底：ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好

図No	取上げ No	層位	器種	残存分量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
7	3604	9c	甕	復元口30 高28.7 底8	略完形	5YR5/3	7.5YR 5/2	2.5Y5/1	脚内10 YR5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：ユビオサエ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	
8	5007	9c	甕	口28.4 高27.6 底9.9	略完形	2.5YR 5/4	2.5YR 5/4	5YR5/2	脚内 7.5YR 5/2	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ マメツ 外：工具によるナデのちナデ マメツ ハケメのちマメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デマメツ 底：ヨコナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
9	5444	9c	甕	口27.5 胴24 高27.3+ α	略完形	5YR6/3	5YR5/2	5YR4/1	脚内10 YR5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：ハケメのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ 底：ユビオサエのちナデ 脚内：無調整	良好
10	8308	9c	甕	口28 胴25.5 高25.5+ α	略完形	7.5YR 6/2	7.5YR 6/2 5YR6/1	10YR4/1	脚内 7.5YR 5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ マメツ 外：工具によるナデのちナデ マメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：欠損	良好
11	131	8 9a	甕	口30.2 胴27 高25+ α	略完形	7.5YR 6/2	5YR6/2	5YR5/2	脚内5 YR5/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：欠損	接合：5 良好
12	5093	9c	甕	口24.4 胴22.7 高21.6+ α	略完形	7.5YR 6/3 5YR6/3	7.5YR 6/1	7.5YR 5/1		砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：マメツ・ユビオサエのち ナデ 外：マメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：マメツ 底：欠損	接合：5083 良好
13	7334	9c	甕	口18 高22.7 底7.5	略完形	2.5YR 5/3 2.5YR 4/1	7.5YR 4/1	2.5Y5/1	脚内 7.5YR 4/0	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナ デ・ややマメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：ユビオサエ 脚端：ナデ 脚内：ナデ	接合： 7324, 7323, 7328, 7331, 7333 良好
14	5020	9c	甕	口18.8 高28.1 底9.4	略完形	2.5YR 5/3	5YR5/3	2.5YR 5/2	脚内 7.5YR 4/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：ナデのちややマメツ・マ メツ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデのちややマメツ 底：マメツ 脚端：推定欠損 脚内：ナデ	良好
15	7667	9c	甕	口23 胴22.1 高23 底10.2	略完形	2.5YR 6/2	2.5YR 5/2	5YR5/2	脚内 7.5YR 5/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナ デ・ややマメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：ユビオサエのちナデ 脚内：無調整	良好 イブスキピンク
16	5436	9c	甕	口20.6 胴21 高25.5+ α	略完形	2.5YR 6/2	2.5YR 6/2	10YR5/1	脚内5 YR4/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・白・黒・ 他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 底：欠損	良好
17	8333	9c	蓋	口26.4 高12.4	略完形	7.5YR 6/2	2.5YR 6/3	5YR5/2	ツマミ 内10R 4/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ユビオサエ・ナデ ツマミ端部：ヨコナデ ツマミ見込み部：ナデ フタ端：ヨコナデ	良好

図No	取上げ No.	層位	器種	残存分量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他	
18	4790	9c	壺	口21.5 胴37.4	口～胴破片	7.5YR 5/3	5YR5/3	5YR5/3		底 10YR 6/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ マメツ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデのちキザミ 口縁：工具によるナデのちナ デ 突：ヨコナデのちキザミ	接合： 4762、4775、4776、 4777、4778、4779、 4780、4781、4782、 4783、4784、4788、 4789、4791、4793、 4794、4798、4799 良好
19	7618	9c	壺	口12.2 胴32 高44	略完形4/5 残存	5YR6/3	7.5YR 5/2	10YR5/2		底 10YR 6/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：マメツ 外：ミガキ・工具によるナデ のちナデ 口唇：ヨコナデのちキザミ 口縁：ハケメのちナデ 突：ヨコナデのちキザミ	接合： 7587、7589、7591、 7593、7594、7595、 7597 良好
20	7683	9c	壺	口12.5 胴21.4 高26	略完形	10YR6/3	5YR5/3	5YR5/3		底 10YR 6/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・白・黒・ 他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：ハケメ・ミガキ・ナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ハケメ 突：ヨコナデのちキザミ 底：ハケメ・ミガキ・ナデ	接合：5457 良好
21	5004	9c	壺	復元口13.8 復元胴22 高31.7	3/4残存 口～底破片	10YR6/1	10R4/1	10YR6/1		底 10 YR6/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ 突：ヨコナデのちキザミ・マ メツ 底：工具によるナデのちナデ	良好
22	6440	9c	壺	口14 胴26.5 高38.1	略完形	5YR6/2	10YR5/1	10YR5/2		底 10YR 7/2	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	外：工具によるナデのちナ デ・ナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ・工具によるナ デのちナデ 突：ヨコナデのちキザミ 底：無調整	良好
23	6352	9c	壺		口～底2/3 残存	10YR7/3	7.5YR 5/3	7.5YR 6/3		底 10YR 7/3	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ハケメ・ハケメのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ハケメ 突：ヨコナデ 底：無調整	接合： 6294、9715、6307 良好
24	1330	9c	壺	胴26.6	胴部破片	5YR6/4	10YR5/1	10YR5/1			砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ハケメのちナデ 突：ヨコナデ	接合： 1327、1328 良好
25	442	9c	壺	口13.8 胴26.4	口～胴1/2 残存	7.5YR 6/2	5YR5/2	7.5YR 6/2			砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ハケメのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ・工具によるナ デのちナデ 突：ヨコナデ・マメツ	接合： 214、219、220、 221、222、224、 240、242、243、 244、250、252、 254、440、444 良好
26	7636	9c	壺	胴21.4	略完形	5YR6/2	5YR5/2	10YR4/1		底 7.5YR 5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 底：無調整	良好
27	42	9a	壺	口9.4 胴17.2 高26.5	略完形	7.5YR 6/2	10YR5/1	10R5/1		底 7.5YR 5/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・白・黒・ 他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ 底：無調整調整	良好
28	5075	9c	壺	口8.5 胴19	口～胴破片	5YR7/2 7.5YR 6/2	7.5YR 6/1	7.5YR 6/2 10YR6/2			細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：ナデのちマメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ	接合： 5066、5074、5067、 5068 良好
29	5457	9c	壺	復元口15 高37.1	口～底	10YR6/2	7.5YR 5/2	7.5YR 5/2		底 7.5YR 6/3	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：マメツ 外：ハケメのちナデ・工具 によるナデのちナデ ハケメ 口唇：ヨコナデ 口縁：ハケメ 底：ナデ	接合： 5450、5449、5447、 5448、5451、5452、 5453 良好
30	4289	9c	壺	復元口12.8	口～胴1/2 残存	2.5YR 5/4	5YR6/4	10YR5/2			細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：マメツ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ	接合：4313 良好

図No	取上げ No	層位	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
31	3406	9c	壺	復元口9	口～肩1/2 残存	5YR6/4	7.5YR 6/3	10YR5/2		細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：無調整・工具によるナ デのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ	良好
32	7249	9c	壺	2/3残存 口8.7	口～肩破片	5YR6/4	7.5YR 6/3	10YR6/2		細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ユビオサエのちナデ	接合：7250 良好
33	3573	9c	壺	復元口10.4	口～肩1/3 残存	5YR5/4 7.5YR 6/4	2.5YR 5/4	10YR6/2		細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ	良好
34	400	9c	壺	口～ 胴38 高42.4+ α	肩～底1/2 残存	5YR5/2	5YR6/2	7.5YR 4/1	底 5YR 6/2	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 底：ユビオサエ・ナデ	接合： 379、380、382、385、 386、391、393、394、 396、397、404、405、 406、407、408、409、 412、413、414、416、 417、418、419、420 良好
35	67	9a	壺		略完形 口～底破片	10YR6/2 7.5YR 6/3	7.5YR 4/1	5YR5/2	底 10YR 6/2	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：ナデ	良好
36	2888	9c	壺	復元口9.8 高12.8	1/2残存口 ～底	10YR6/3	5YR6/4	10YR6/2	底 10YR 6/3	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ	良好
37	7668	9c	壺	底7.2	底破片	10YR6/3	7.5YR 5/3	5YR5/3	底 10YR 4/1	砂粒を若干含 む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ハケメのちナデ 底：ナデ	良好
38	1135	9b	壺	-	胴～底破片	10YR6/3	7.5YR 6/3	10YR5/2	底 10YR 6/3	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ハケメ・ナデ 外：ナデ 底：無調整	良好
39	71	9c	鉢	口30.6 高15.7 底8.3	1/2残存	5YR5/3 7.5YR 6/2	7.5YR 6/1	7.5YR 5/2	脚内 10YR 5/1	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ハケメのちナデ 口唇：ナデ 底：工具によるナデのちナ デ・ユビオサエナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
40	6148	9c	(高坏) 鉢	復元口25 高14 復元底11.5	口～脚破片 口～胴1/4 残存 脚3/4残存	5YR6/2	5YR5/2	7.5YR 6/2	脚内 5YR 5/2	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：工具によるナデのちナ デ 脚内：ナデ	良好
41	5061	9c	鉢	復元口27 高13.5	1/4残存	10YR6/2	7.5YR 5/2	7.5YR 6/2	脚内 10YR 4/1	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 底：ユビオサエ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
42	8233	9c	鉢	胴20 高19.5+ α 底5.7	1/2残存	7.5R6/2	10R6/2	10YR5/1	脚内 10R 5/1	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナ デ・ナデ 底：ナデ 脚内：ナデ	良好
43	7024	9c	鉢	復元口18.2 高16.8 復元底10.5	1/2残存	7.5YR 5/3	7.5YR 5/3	7.5YR 6/2	脚内 5YR 5/2	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ 底：ユビオサエ・ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好

図No	取上げ No	層位	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
44	5089	9c	鉢	口12.7 胴12.9 高13 底5.3	略完形	2.5YR 5/4	2.5YR 4/2	2.5YR 4/2	脚内 7.5YR 4/1	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナ デ・ややマメツ 底：ユビオサエのちナデ・ ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
45	1133	9a	甕	口15.3 胴14.1 高13.4+ α	略完形 底欠損	2.5YR 5/3 5YR5/2	5YR4/1	7.5YR 5/2		細・微砂粒を 含む	カ・白・黒・ 他	内：ナデ・ハケメ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 口縁：工具によるナデのちナ デ	良好
46	344	9c	鉢	口10.3 高9.8 底4.6	完形	5YR6/4	5YR5/3	10YR4/1	脚内 7.5YR 4/1	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 底：ユビオサエのちナデ・ ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
47	57	9a	鉢	底6.2	胴～脚	7.5YR 6/3	7.5YR 5/2	2.5Y5/1	脚内 7.5YR 5/3	砂粒を若干含 む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ・工具によるナデの ちナデ 底：ユビオサエのちナデ・ 工具によるナデのちナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
48	1120	9a	鉢	口12.6 胴12 高9.2 底5.0	略完形	5YR4/6	7.5YR 5/2	10YR5/2	底 7.5YR 5/2	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 多く含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 底：ユビオサエ・無調整	良好
49	74	9c	鉢	復元口10.7 高8.5	1/2残存	5YR5/2	2.5YR 4/1	5YR5/2	底 10YR 5/1	細・微砂粒を 若干含む	カ・セ・黒・ 赤・他	内：ナデ 外：ナデ 口唇：ナデ 底：無調整	良好
50	4611	9c	鉢	復元口16.4 高12	1/2残存	5YR6/4	5YR6/4	2.5Y5/1	底 10YR 5/2	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：無調整	良好
51	896	9c	鉢	復元口8.6 高7.3	略完形	5YR6/4	5YR5/3	10YR5/1	底 7.5YR 6/3	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：無調整	良好
52	1321	9c	鉢	口18.8 高16.2	略完形	10YR6/2	5YR5/2	2.5Y4/1	底 5YR 6/3	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・白・黒・ 他	内：工具によるナデのちナデ 外：ハケメのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：無調整	良好
53	961	9c	鉢	口9.6 胴11.8 高14.8	略完形	2.5YR 5/6	10R4/2	7.5YR 5/3	底 2.5YR 4/1	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナ デ・ややマメツ 口唇：ヨコナデ 底：無調整	接合：964 良好
54	5677	9c	皿	口37 高9.8	略完形	5YR6/4	7.5YR 5/3 10YR6/3	7.5YR 5/2	底 7.5YR 6/3	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナ デ・ナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：ナデ	良好
55	7080	9c	皿	口33 高7.8	略完形	10YR6/3	2.5Y7/2 10YR6/2	N3/10	底 7.5YR 6/3	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ マメツ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：工具によるナデのちナデ	良好
56	8009	9c	高坏	復元口36.8 高23.3 底19.4	略完形	7.5YR 7/3	7.5YR 7/4 5YR6/4	10YR7/3	脚内 10YR 6/2	細・微砂粒を 若干含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：マメツ 外：工具によるナデのちナデ マメツ 口唇：ヨコナデ 口縁：ナデ 底：ミガキのちマメツ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	接合： 1134、6597、8307 良好

図No.	取上げ No.	層位	器種	残存分量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
57	1331	9c	高坏	底18.8	脚3/4残存	10YR7/3	N4/0	10YR5/2	脚内 2.5Y 5/1	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ 底：ミガキのちマメツ 脚端：ヨコナデ 脚内：工具によるナデのちナ デ	接合： 1339、1344、1345、 1341、1343 良好
58	70	9a	高坏	復元底16.5	脚破片3/4 残存	5YR6/2	7.5YR 5/2	10YR5/1	脚内 7.5YR 5/2	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	底：マメツ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好 穿孔
59	4351	9c	高坏	復元底14	脚破片3/4 残存	7.5YR 5/3	2.5YR 5/4	7.5YR 5/2	脚内 7.5YR 5/2	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 底：工具によるナデのちナ デ・ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好 穿孔
60	7058	9c	高坏	復元底11.7	脚破片3/4 残存	7.5YR 7/4	-	7.5YR 5/2	脚内 5YR 5/3	微砂粒を含む	カ・白・黒・ 赤・他	底：ミガキのちマメツ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
61	7054	9c	高坏	口34	坏4/5残存	10YR6/3	7.5YR 6/3	10YR6/2		砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ハケメのちナデ・マメツ 口唇：ヨコナデ	良好
62	4758	9c	高坏	口25.5	坏1/1残存	7.5YR 6/4	5YR6/4	7.5YR 5/2		砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 突：ヨコナデ	接合：4756 良好
63	5179	9c	高坏	口31.3	坏4/5残存	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2		細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・工具によるナデの ちナデ・ナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ	接合： 5175、5176、5177、 5184、5221、5178、 5184 良好
64	1531	9c	高坏	復元口30	坏1/2残存	5YR6/4	2.5YR 5/4	10YR6/2		砂粒を含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ・赤色塗彩 外：工具によるナデのちナ デ・赤色塗彩 口唇：ヨコナデ	接合： 1536、1535、1537 良好
65	1429	9c	ミチュア	口2 高4.6 底1.7	完形	7.5YR 6/4	計測不可	10YR4/1	脚内 2.5Y 4/1	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：無調整 外：無調整 口唇：無調整 底：無調整 脚内：無調整	良好
66	6029	9c	ミチュア	口4.8 高3.2	略完形	7.5YR 5/2	10YR5/1	2.5YR 4/2	底 7.5YR 5/2	細・微砂粒を 含む	白・黒・他	内：無調整 外：無調整 口唇：無調整 底：無調整	良好
67	6281	9c	ミチュア	胴5.7	1/2残存	2.5Y5/1	N3/0	N4/0	底 2.5Y 5/1	細・微砂粒を 若干含む	カ・白・黒・ 赤・他	内：無調整 外：無調整 底：無調整	接合：6283 良好
68	5539	9c	ミチュア	口5.4 高4.5	完形	7.5YR 6/3	10YR4/1	2.5Y4/1	底 10YR 4/1	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ユビオサエ 口唇：無調整 底：無調整	良好
69	7056	9c	ミチュア	口9.4 高5	完形	10R6/2	10R5/2	10R4/1	底 N4/0	細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 底：ナデ	良好
70	1976	9c	ミチュア		胴～底破片	7.5YR 6/3	7.5YR 5/2	2.5Y5/1	底 N4/0	砂粒をわずか に含む 細・微砂粒を 含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ 底：ナデ	良好

図No	取上げ No	層位	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
71	7025	9c	ミナチュア	復元口7 高7.9	略完形	7.5YR 5/2・10Y R5/1	5YR5/2	5YR5/2	底 10YR 4/1	砂粒をわずかに含む 細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：ナデ 外：ナデ 口唇：ヨコナデ 底：無調整	良好
72	82	9b	ミナチュア		胴～底破片	2.5YR 5/3	10Y5/2	5YR6/2	底 7.5YR 6/2	細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 底：ナデ	良好
73	1173	9c	ミナチュア	口6.6 高8.4	略完形	7.5YR 6/2	10YR4/1	N4/0	脚内 10YR 4/1	細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・赤・他	内：ナデ 外：工具によるナデのちナデ 口唇：ヨコナデ 底：ユビオサエ 脚端：無調整 脚内：無調整	良好
74	831	9c	ミナチュア		胴～底破片 1/1残存	7.5YR 5/3	10YR5/2	10YR6/2	脚内 7.5YR 4/1	細・微砂粒を含む	カ・白・黒・ 他	内：ナデ 外：ナデ 底：ナデ 脚端：ヨコナデ 脚内：ナデ	良好
75	6796	9c	ミナチュア		底3/4残存	10YR6/2	2.5YR 5/2	7.5YR 5/2	脚内 10YR 5/1	細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：マメツ 外：工具によるナデのちナデ 底：工具によるナデのちナデ 脚端：ナデ 脚内：ナデ	良好
76	6099	9c	ミナチュア		胴～脚破片 1/1残存	7.5YR 6/3	7.5YR 5/2	10YR5/2	脚内 10YR 4/1	細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：ナデ 外：ナデ 底：ナデ 脚内：ナデ	良好
77	162	9c	ミナチュア	復元底2.8	胴～脚破片	10YR6/2	7.5YR 5/2	10YR5/1	脚内 2.5Y 5/1	細・微砂粒を含む	カ・セ・白・ 黒・他	内：工具によるナデのちナデ 外：工具によるナデのちナデ 底：ユビオサエ 脚内：ナデ	良好

図No	取上げ No	層	器種名	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
78	20	9a	剥片	黒曜石	2.0	2.2	0.70	1.0	
79	25	9a	切断剥片	黒曜石	2.0	2.2	0.90	3.0	
80	6808	9c	石包丁	頁岩	5.3	9.4	0.52	38.0	
81	4220	9c	石包丁	砂岩	4.9	6.1	1.20	56.0	
82	335	9	磨製石器	頁岩	2.4	3.2	0.40	3.0	
83	一般	9c	石錘	砂岩	4.5	2.9	2.7	23.00	
84	3831	9c	石錘	頁岩	11.2	8.4	2.00	230.0	
85	4632	9c	石斧	頁岩	6.2	6.9	1.50	90.0	
86	4577	9c	石剣	頁岩	11.9	4.4	1.40	79.0	
87	1829	9c	砥石	砂岩	12.4	7.1	1.60	112.0	接合3994
88	1124	9a	砥石	砂岩	5.6	2.7	1.80	38.0	
89	168	9	砥石	砂岩	9.4	6.4	2.50	163.0	
90	5009	9c	砥石	砂岩	10.5	6.4	4.20	412.0	
91	4200	9c	砥石	砂岩	12.8	11.6	8.40	1,607.0	
92	2185	9c	台石	砂岩	11.0	9.0	1.80	215.0	板状
93	5408	9c	台石	砂岩	22.3	15.9	2.20	1,189.0	
94	8011	9c	敲石	頁岩	9.6	3.1	1.30	60.0	
95	3352	9c	敲石	安山岩	6.4	3.5	3.60	112.0	
96	160	9	敲石	砂岩	7.8	4.3	4.10	200.0	
97	2272	9c	敲石・磨石	砂岩	13.2	5.8	5.40	515.0	
98	3788	9c	敲石	安山岩	16.6	13.9	6.70	1,764.0	
99	6907	9c	凹石	安山岩	9.1	8.0	4.20	460.0	
100	2235	9c	凹石	砂岩	7.9	5.1	2.00	119.0	
101	158	9	凹石	安山岩	9.8	8.4	7.03	912.0	
102	2517	9c	凹石	安山岩	9.2	9.5	4.70	594.0	
103	3030	9c	台石	安山岩	15.4	11.8	4.40	1,030.0	被熱
104	1104	9a	台石	砂岩	18.6	13.7	3.40	1,175.0	
105	3562	9c	軽石加工品	軽石	11.6	6.5	3.8	69.00	
106	22	8b	軽石加工品	軽石	8.1	5.1	2.3	11.00	
107	1838	9c	軽石加工品	軽石	7.7	3.6	2.4	19.00	
108	7598	9c	船型加工品	軽石	10.8	6.9	3.3	50.00	
109	6619	9c	軽石加工品	軽石	5.2	4.8	2.8	9.00	
110	4226	9c	軽石加工品	軽石	13.0	7.9	3.4	152.00	
111	6328	9c	軽石加工品	軽石	8.4	7.2	3.3	58.00	
112	4922	9c	軽石加工品	軽石	6.1	5.5	3.1	16.00	
113	6736	9c	軽石加工品	軽石	6.0	5.0	2.2	15.00	
114	6663	9c	軽石加工品	軽石	9.6	7.3	3.2	63.00	
115	4175	9c	軽石加工品	軽石	10.2	10.8	2.7	7.10	
116	1839	9c	軽石加工品	軽石	7.3	5.4	4.3	50.00	
117	3653	9c	軽石加工品	軽石	8.4	6.1	3.6	49.00	
118	7327	9c	軽石加工品	軽石	6.1	3.9	2.0	8.00	
119	172	9	軽石加工品	軽石	11.5	11.2	5.0	111.00	
120	6168	9c	台石	安山岩	45.3	33.5	6.9	12,600	
121	979	9c	台石	安山岩	47.0	42.9	13.10	37,000	

6. 竪穴式住居群

調査区内で14基の竪穴式住居を検出、東壁面でも3基の竪穴式住居とみられる断面を確認した(図6・7参照)。

19年度の調査では、廃土置き場を確保するため、まず、調査区北半分を掘り下げ南側に廃土を仮置きし、北半分の調査が終了した時点で、同範囲を埋め戻し南側半分を掘り下げる方法をとった。調査区北半分では、検出したピットを半裁する作業の際、遺物の出土が見られなかったことから、重機を用いて第12層 a 上面まで掘削したところ、1～5号住居の存在を確認するに至った。埋土の状況から、住居は、第9層 c 中から掘り込まれたものと考えられ、1～6、9号住居については、上位を掘りすぎてしまった。

南側半分の調査では、遺構を損なわぬよう手作業で掘り下げを進め、第11層(暗紫コラ)の上面で住居の輪郭を検出した。

20年度の調査では、19年度の結果を踏まえ掘削にあたり、第11層(暗紫コラ)の上面で10～13号住居の輪郭を検出、その後、13号住居と切り合う14号住居を検出した。

今回検出した竪穴式住居は、いずれも第9層 c から掘り込まれたもので、1、3、4号の花弁型に見える住居も本来は、6、8号住居のような円形プランをなすものと推定される。1～10号は、いずれも軸がほぼ真北を向いて揃っていることから、近接した時期のものであろう。

いずれの住居も出土遺物は少なく、埋土中のものは、土器片については、ほとんどが器種や部位の特定できない破片で、床直資料も数えるほどしかなかった。

以下、1号住居から順に遺構と出土遺物について報告する。

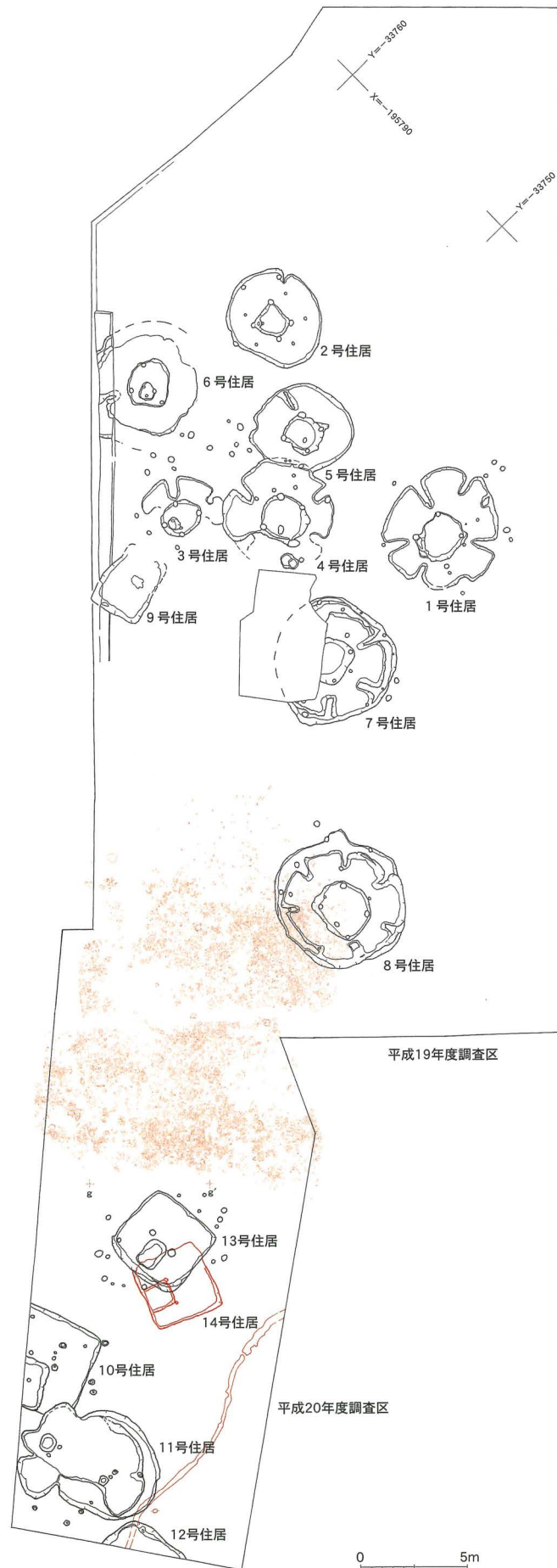


図44. 竪穴式住居検出状況図 (S=1/300)

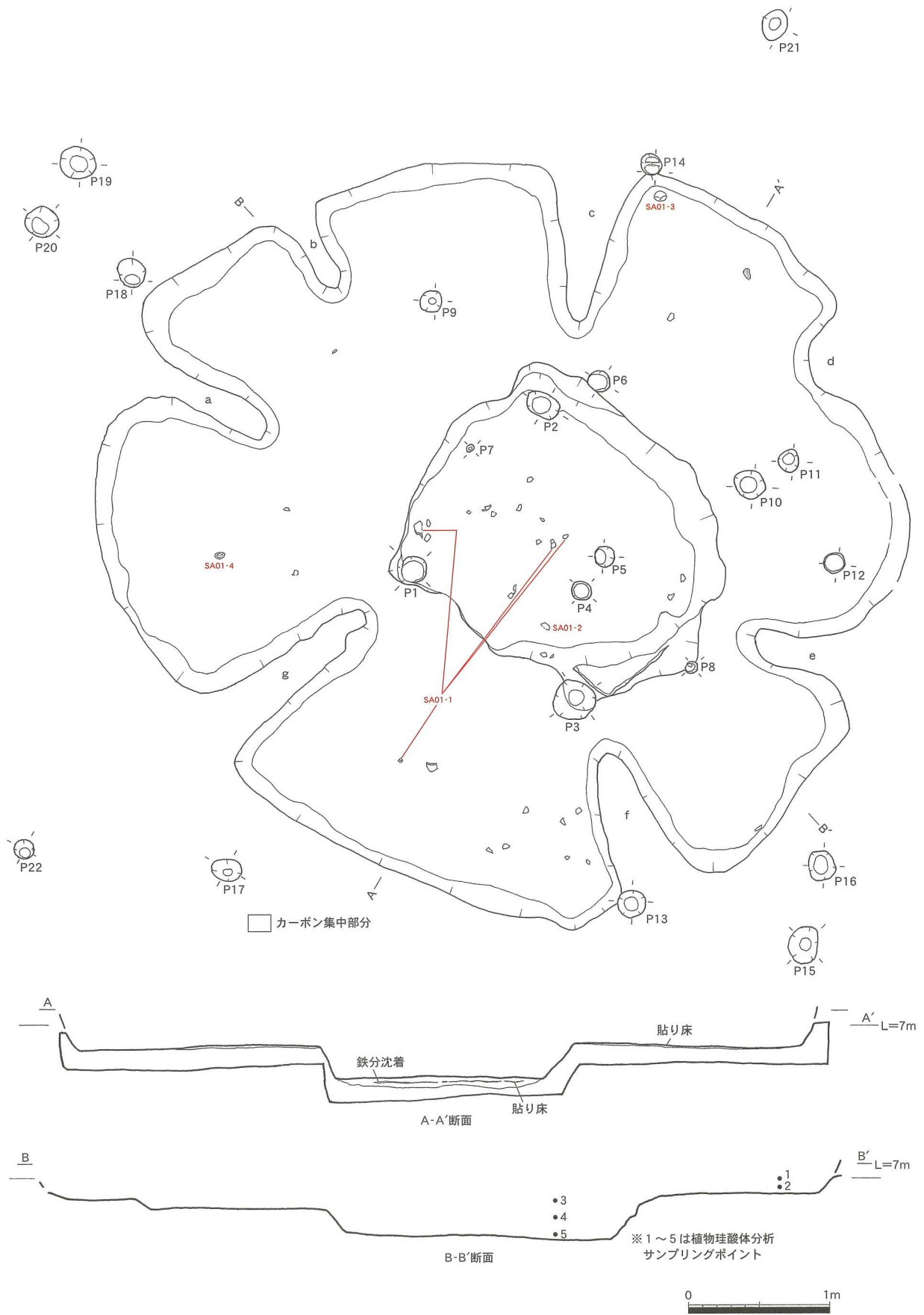


図45. 1号住居平・断面図 (S=1/40)

1号住居

平面は花卉型を呈し、直径約5.5mの円に収まるサイズである。検出面から床面までの深さは、約10cmを測る。住居の内部は、7つの間仕切りによって6つのスペースに区分されている。区分された各スペースの広さは均等でない。

住居のほぼ中央には、約2×2mの隅丸方形の落ち込みがあり、南西辺はステップ状に落ち込む。落ち込みの深さは、床面から約20cmを測る。落ち込みの中央にはカーボンが散見され地床炉とみられる。

落ち込みの3つのコーナーにあるP1～P3、及びP4が主柱穴と考えられる。落ち込みの内部中央付近にP

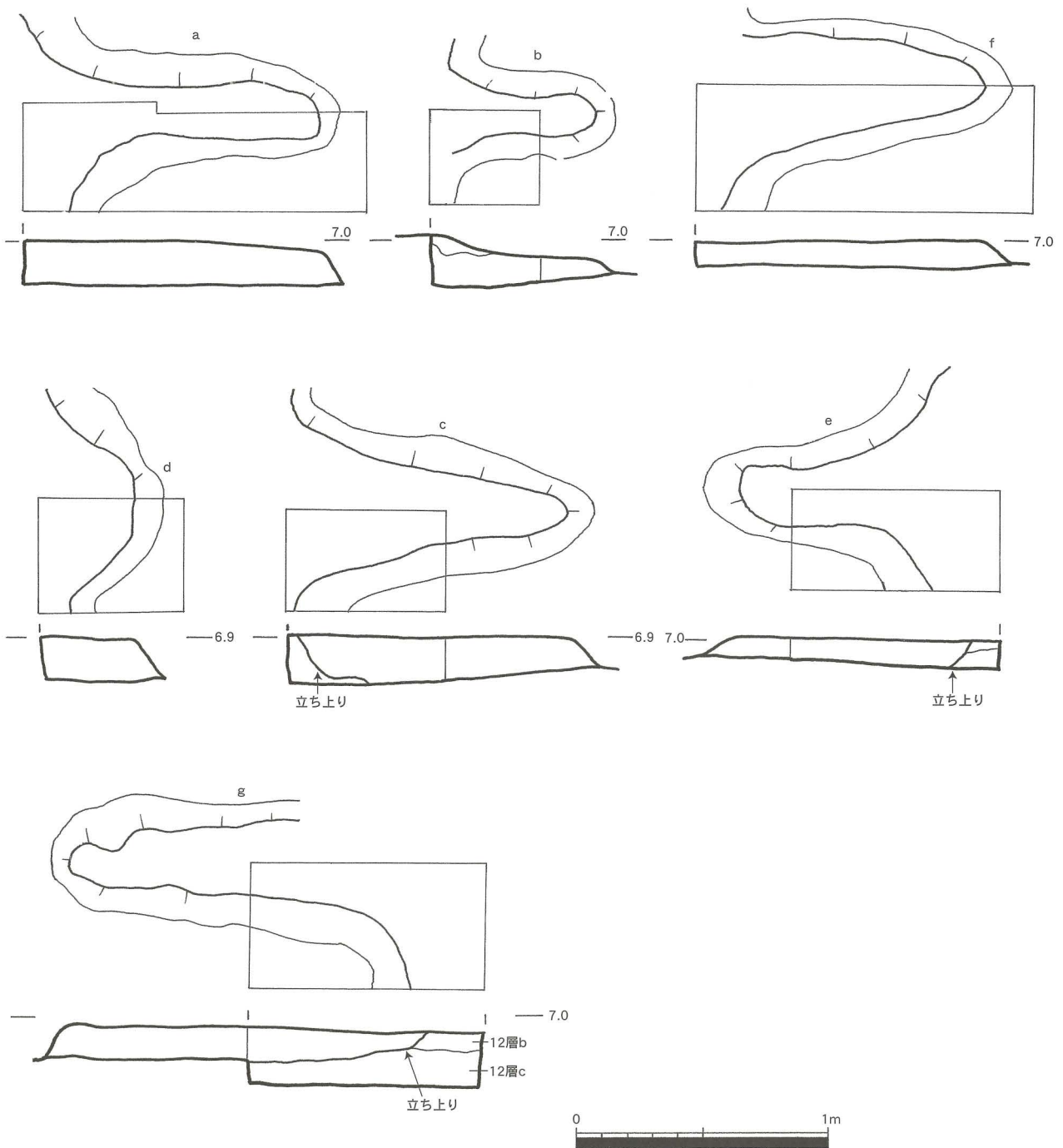


図46. 1号住居間仕切り部分平・断面図 (S=1/25)

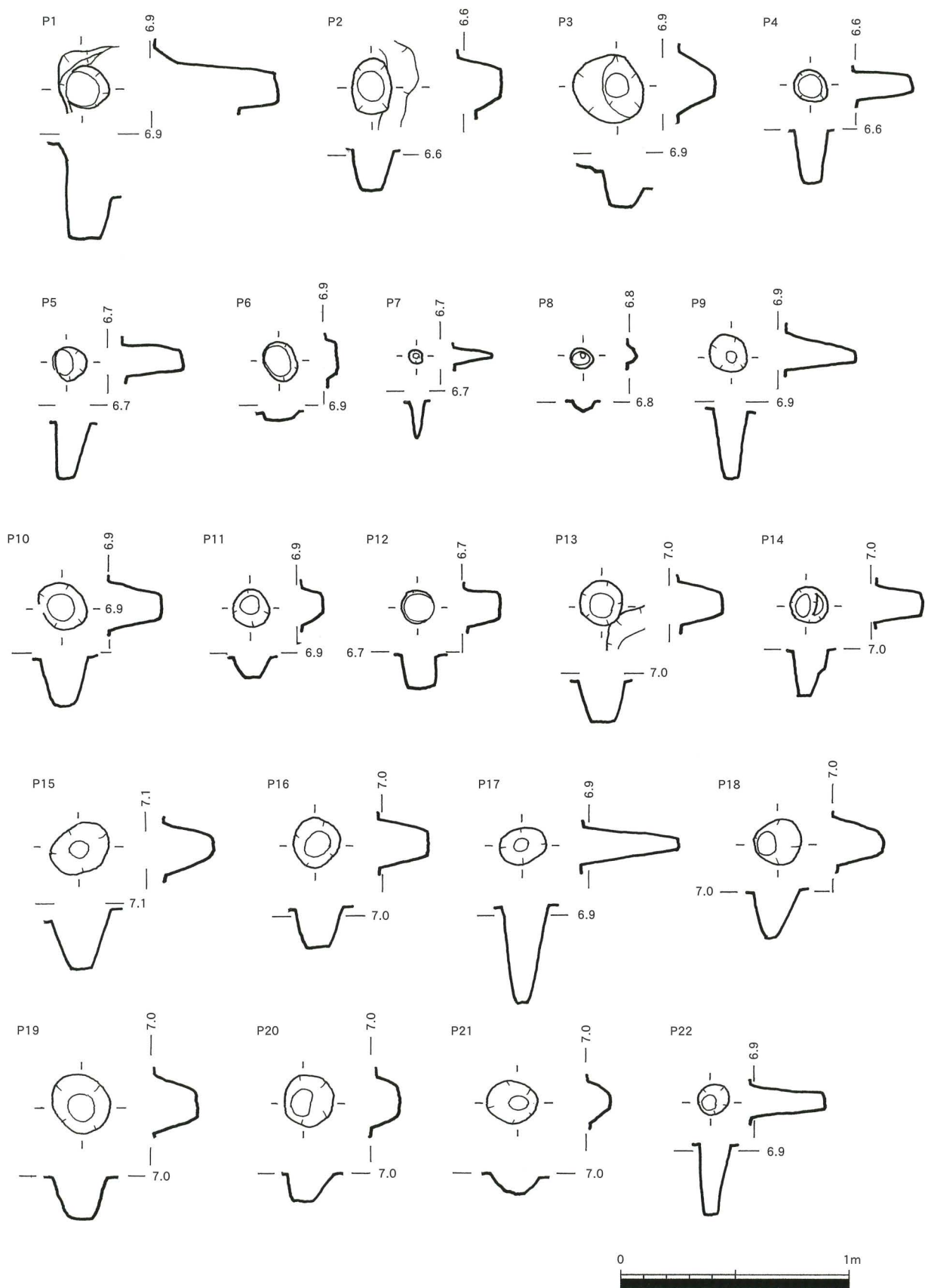


图47. 1号住居柱穴平·断面图 (S=1/25)

4とP5の2基の柱穴を落ち込み北辺中央と南辺中央にP7とP8の小さな柱穴を検出した。その他住居の内部にP6、P9～P12の5基の柱穴を竪穴の周囲からP13～P22の10基の柱穴を検出した。

平面を検出した段階で周囲の12層bとは異なる色調の間仕切りがあったため、試掘トレンチを設定し、間仕切りの断面を確認したところ、間仕切りa、b、f、dは、地山（12層b～c）を掘り残して造られたものであるが、間仕切りc、e、gは、12層b、または12層cより黒色を帯び、断面に層の境界線がみられたため、竪穴掘

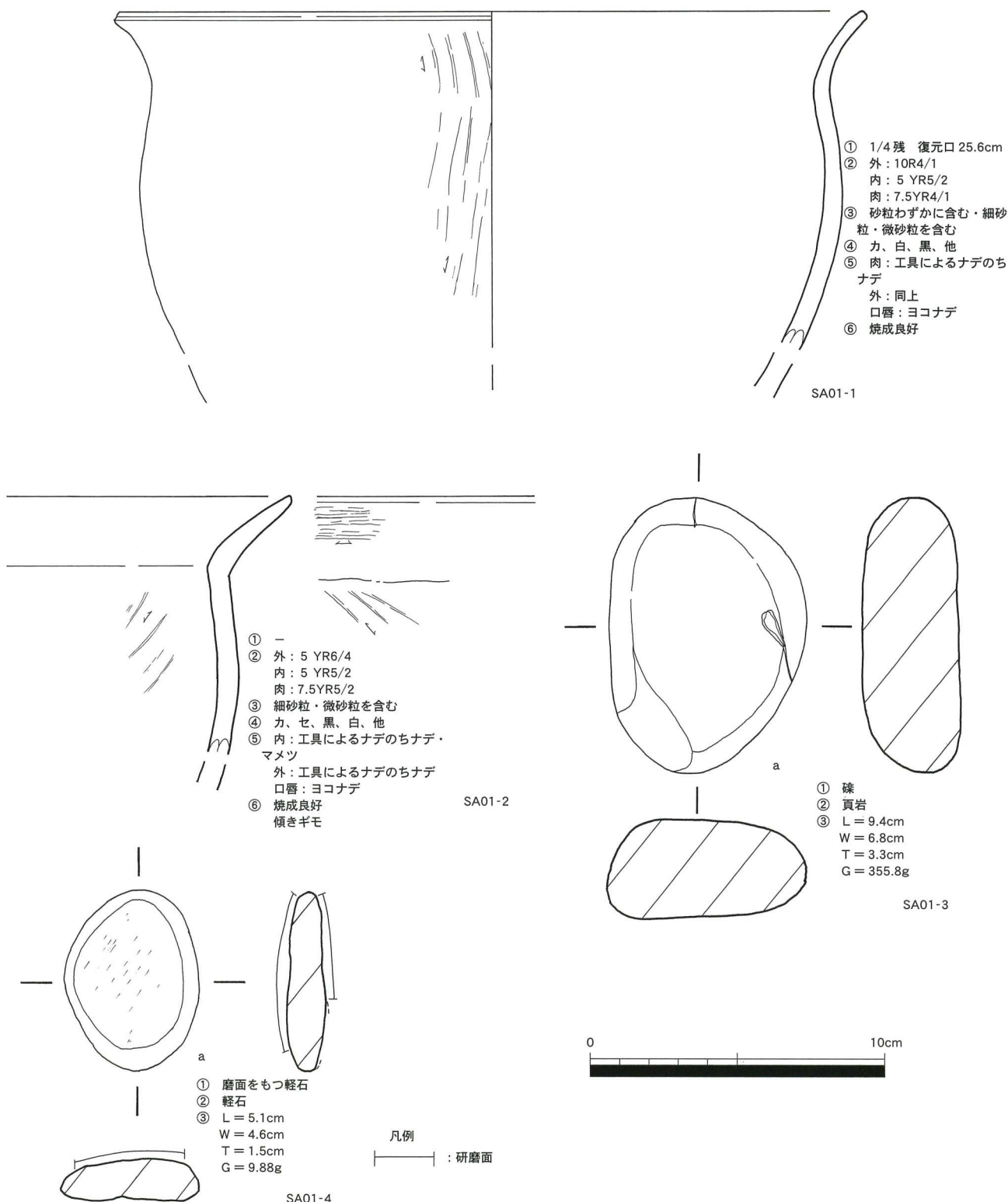


図48. 1号住居出土遺物実測図 (S=1/2)

削後、後から造り付けられたものであることがわかった。(図46、写真37～44参照)。ただ、間仕切り c、e、g が竪穴掘削後直ちに設けられたものか、いくらか時間が経過した後に付け加えられたものかはわからない。間仕切りの上面や両脇にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

床面には貼床がされており、1段目の床で1～2 cm程度、2段目の落ち込みの床で5 cm程度を測る。

なお、1号住居は、先述のとおり、もともと円形住居でその内部に間仕切りをもつ住居と推定される。

1号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	19	18	42	P 8	11	9	6
P 2	24	16	20	P 9	16	15	33
P 3	31	30	18	P 10	20	19	23
P 4	15	14	24	P 11	17	15	12
P 5	15	14	26	P 12	14	14	16
P 6	17	14	5	P 13	19	18	20
P 7	7	6	17	P 14	17	16	20

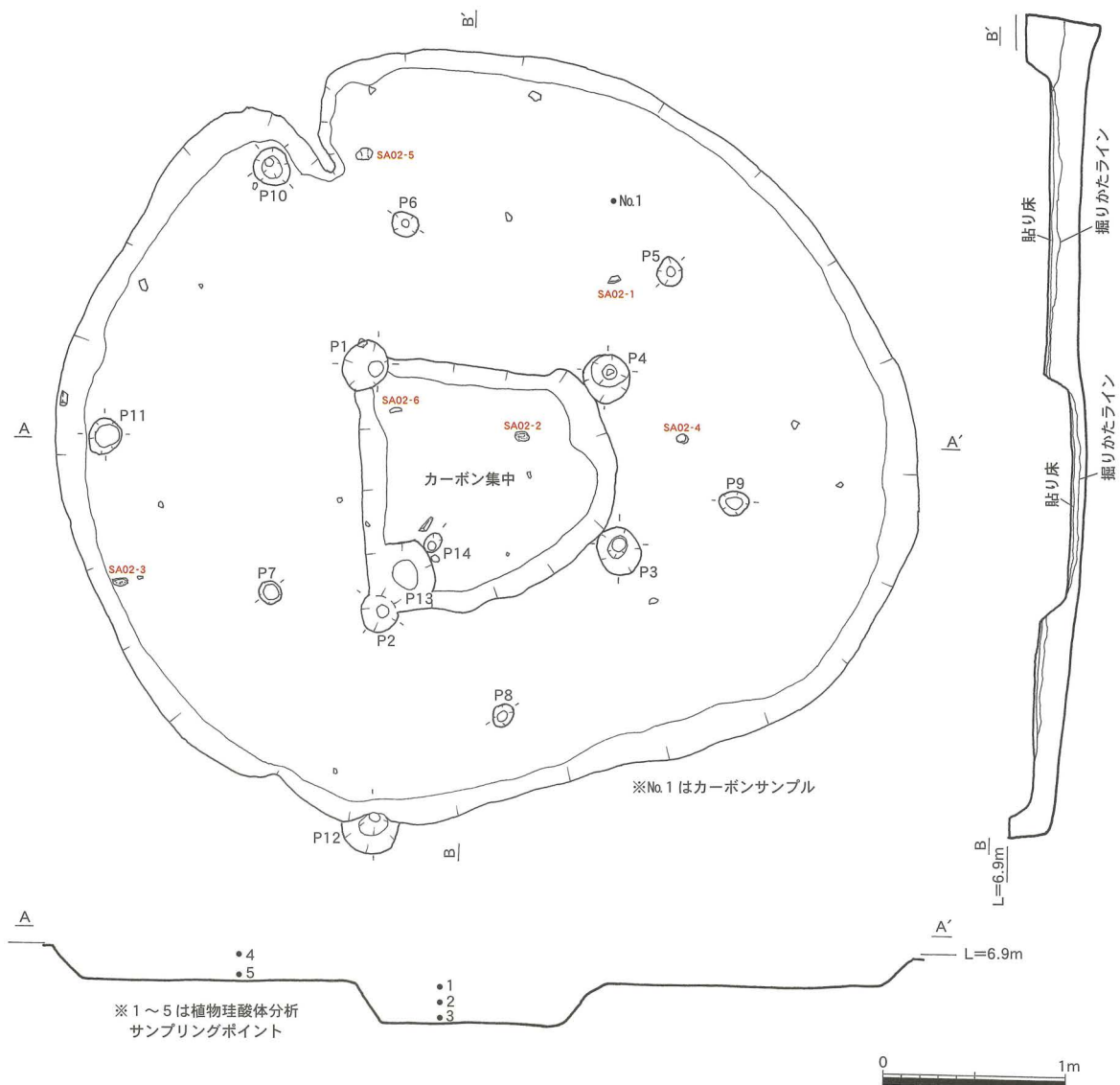
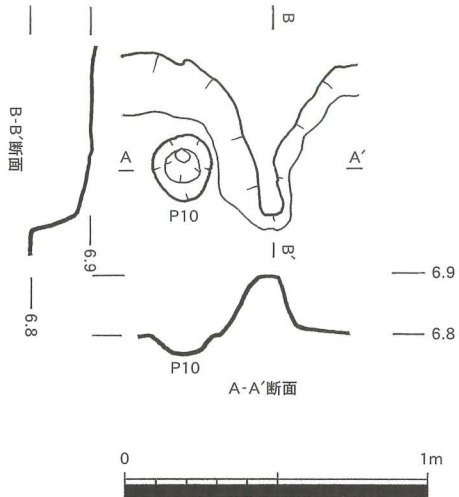


図49. 2号住居平・断面図 (S=1/40)

1号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 15	25	20	25	P 19	26	25	20
P 16	22	20	20	P 20	21	20	14
P 17	20	16	44	P 21	21	19	12
P 18	20	20	21	P 22	14	14	33



1号住居出土遺物

1号住居では、埋土中に遺物は少なく破片が散見される程度であった。

SA01-1、2は甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は外反する。2は屈曲部内外面に稜をもつ。いずれも床直資料である。

SA01-3は磨石の可能性ある石器である。SA01-4は楕円形を呈する磨面をもつ軽石である。a面・b面ともに研磨による磨面が認められる。裏面下部は、欠損している。

図50. 2号住居間仕切り部分平・断面図(S=1/25)

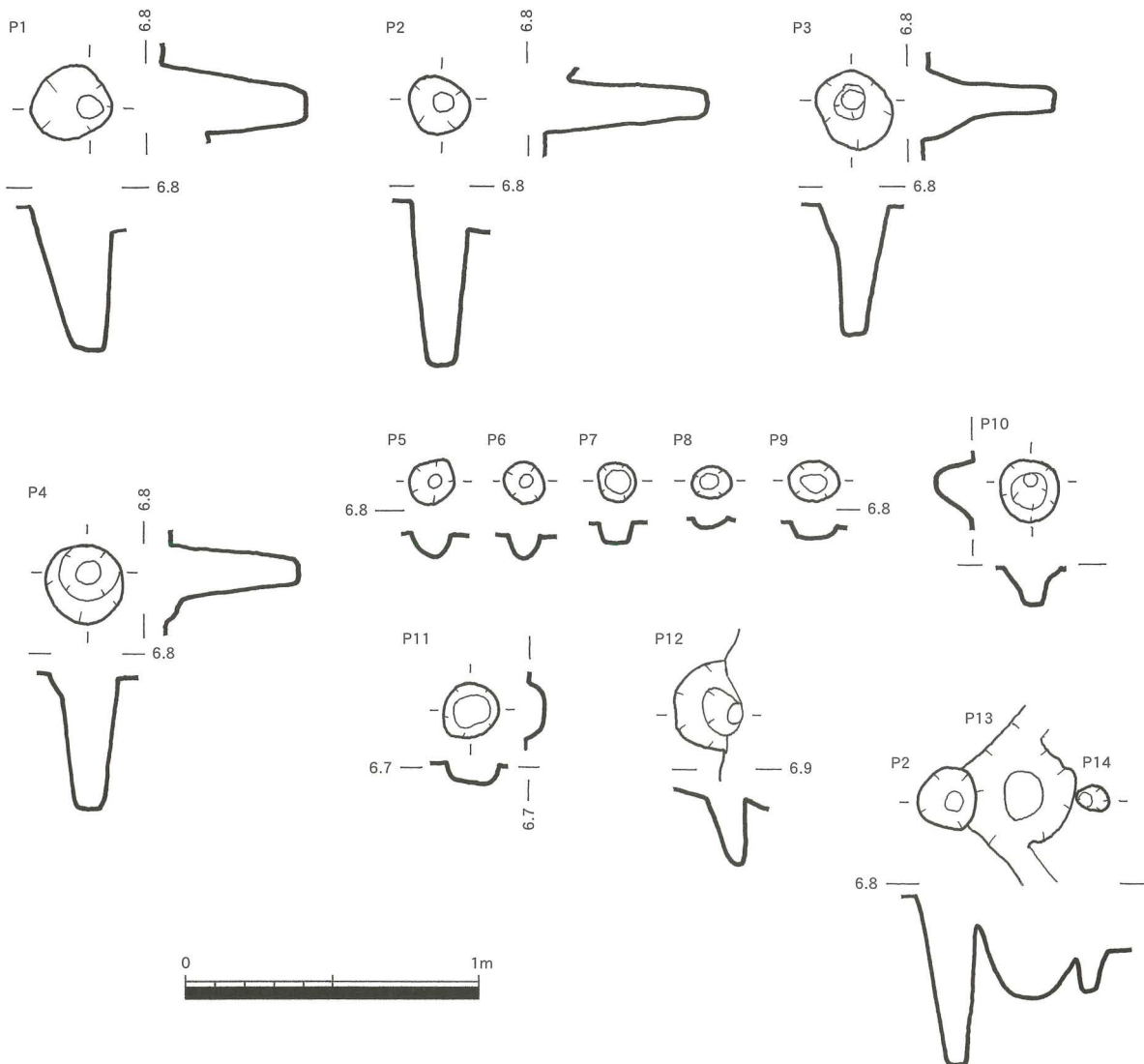


図51. 2号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)

2号住居

1号住居の北西8mのところに2号住居を検出した。長径約4.75m、短径約4.2mを測るほぼ円形の住居で、北西部分に中央に向かってのびる短い間仕切りをもつ。間仕切りは、地山(12層b)を掘り残して造られている。間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

中央には1.5×1.5m程度の隅丸形状の落ち込みをもつ。落ち込みの深さは、床面から約25cmを測る。落ち込みの北西コーナーはほぼ直角で北辺と西辺は直線をなすが、北東、南東のコーナーは丸みを帯びる。落ち込みの中央付近にはカーボンが集中し、床面も赤色に変色しているところが見られたため、地床炉として使われた場所と考えられる。

落ち込みの4つのコーナーにあるP1～P4、及びP13が支柱穴考えられる。P13すぐ脇に小さなP14を検出した。また、床面でP5～P10の5基の柱穴を検出、住居の西側掘り込み近辺でP11～P13の3基の柱穴を検出した。P5～P10の5基は、ほぼ等間隔で落ち込みの周囲を巡る。P11とP12、P12とP13の間隔もほぼ等しい。

床面のほぼ全面に貼床が残存していた。貼床は、床面で3cm程度、落ち込みの底面で5cm程度を測る。遺物は埋土中に散見される程度で、床直資料も少なかった。

2号住居柱穴法量表

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	28	25	50	P 8	14	12	4
P 2	21	20	57	P 9	16	14	5
P 3	26	25	48	P 10	21	20	14
P 4	27	27	50	P 11	19	19	7
P 5	15	15	10	P 12	30	24	24
P 6	15	14	9	P 13	34	34	25
P 7	13	14	7	P 14	12	9	14

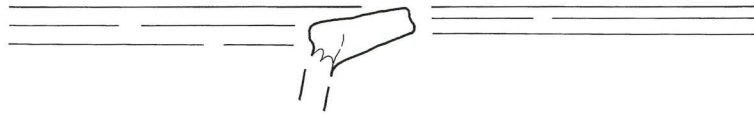
2号住居出土遺物

SA02-1は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部を肥厚させ端部はわずかに窪む。山ノ口式土器の口縁部に類似する。床上約5cmのところから出土した。その他数点の土器片が出土したが、いずれも器種や部位を特定できない細片であった。SA02-2は、石包丁形軽石加工品で、刃部を含む両面とも丁寧に整形・研磨されている。橋牟礼川遺跡でも古墳時代に帰属する類似品が出土している。SA02-3は、磨面をもつ軽石加工品である。SA02-4は、a面中央・上・下部と裏面に敲打痕が認められる凹石である。SA02-5は、a面下部に磨面が認められる磨石である。SA02-6は、不整形礫である。敲打痕などは認められない。

3号住居

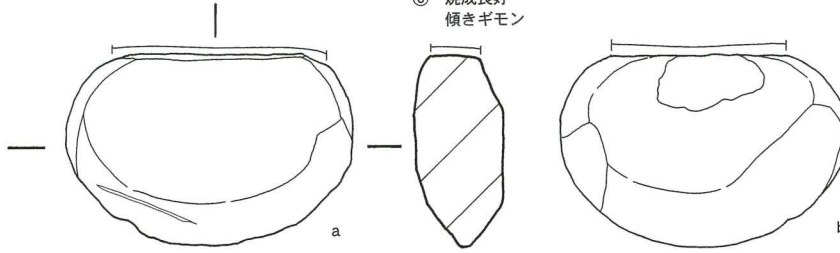
1号住居の西、調査区壁際付近で3号住居を検出した。住居の上面を掘りすぎてしまい、全体の形状は不明である。検出した平面はコウモリのようなものであるが、もともとは、1号住居に類似する花卉型の間仕切りをもつものと考えられ、平面規模は、直径約4～5mの円に収まるサイズと推定される。

住居の中央とみられる部分に長径約2m、短径約1.6mの楕円形の落ち込みをもつ。落ち込みの深さは、1段目の床面から約15cmを測る。落ち込みの南側には、長径約60cm、短径約50cmの楕円形の浅い窪みを有し2基の柱



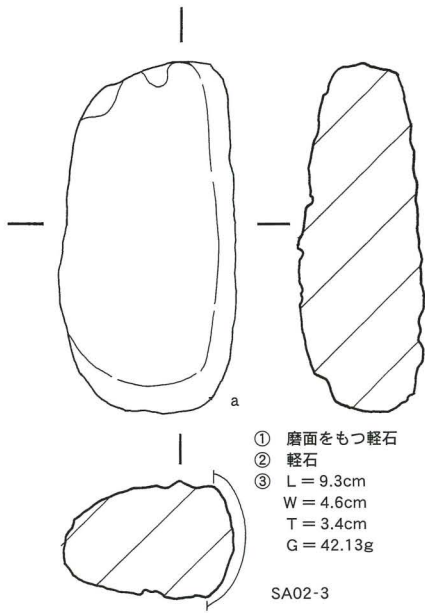
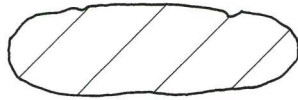
- ① -
- ② 外：5 YR5/2
内：5 YR5/2
肉：7.5YR5/2
- ③ 砂粒わずかに含む・細砂粒・
微砂粒を含む
- ④ カ、セ、黒、白、金ウンモ
- ⑤ 内：ナデ
外：ナデ
口唇：ヨコナデ
- ⑥ 焼成良好
傾きギモン

SA02-1



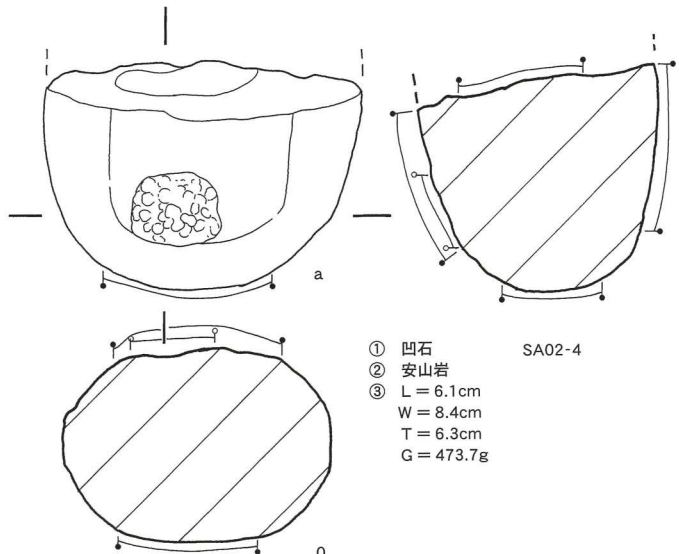
- ① 石包丁形軽石加工品
- ② 軽石
- ③ L = 5.1cm
W = 7.7cm
T = 2.3cm
G = 24.75g

SA02-2



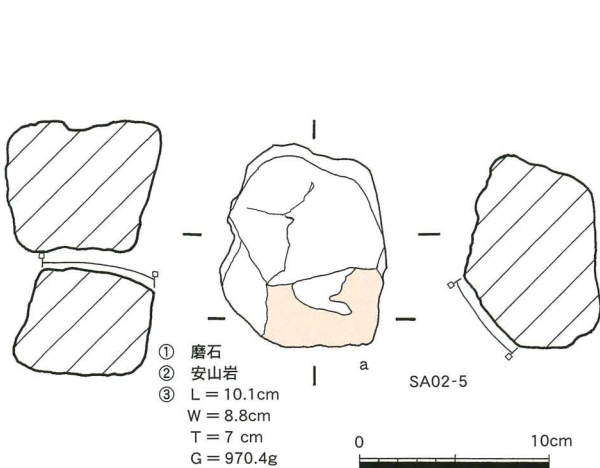
- ① 磨面をもつ軽石
- ② 軽石
- ③ L = 9.3cm
W = 4.6cm
T = 3.4cm
G = 42.13g

SA02-3



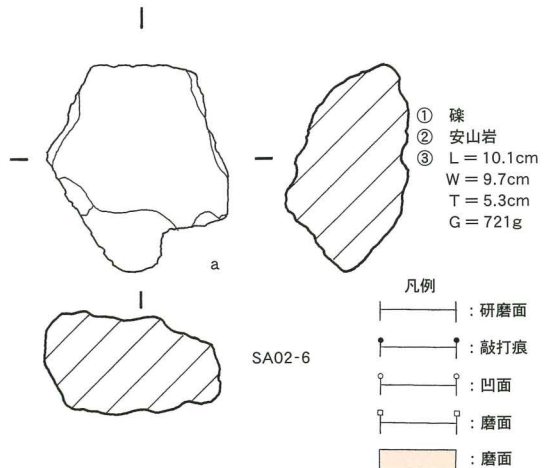
- ① 凹石
- ② 安山岩
- ③ L = 6.1cm
W = 8.4cm
T = 6.3cm
G = 473.7g

SA02-4



- ① 磨石
- ② 安山岩
- ③ L = 10.1cm
W = 8.8cm
T = 7 cm
G = 970.4g

SA02-5



- ① 礫
- ② 安山岩
- ③ L = 10.1cm
W = 9.7cm
T = 5.3cm
G = 721g

SA02-6

- 凡例
- : 研磨面
 - : 敲打痕
 - : 凹面
 - : 磨面
 - : 磨面

図52. 2号住居出土遺物実測図

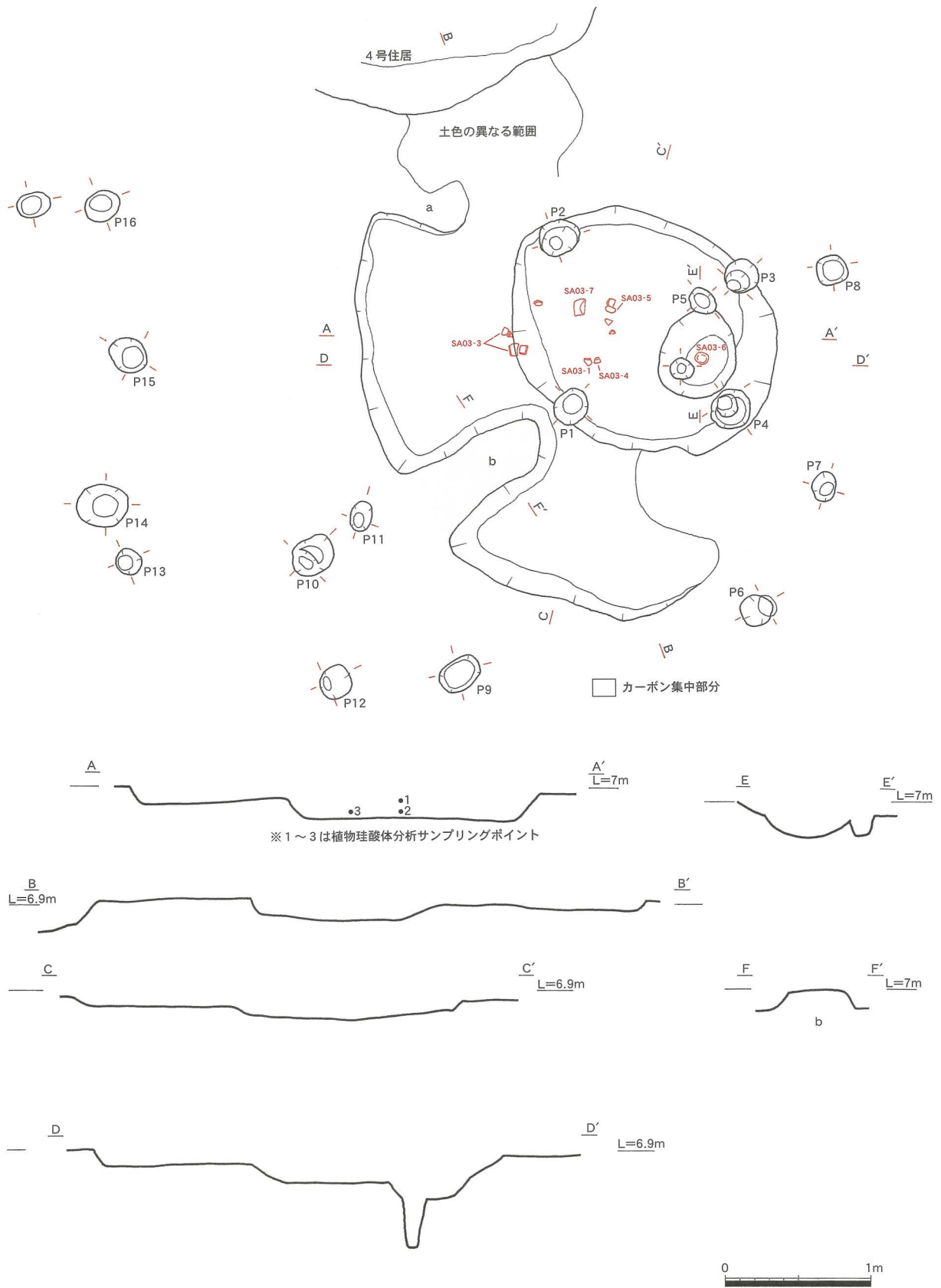


図53. 3号住居平・断面図 (S=1/40)

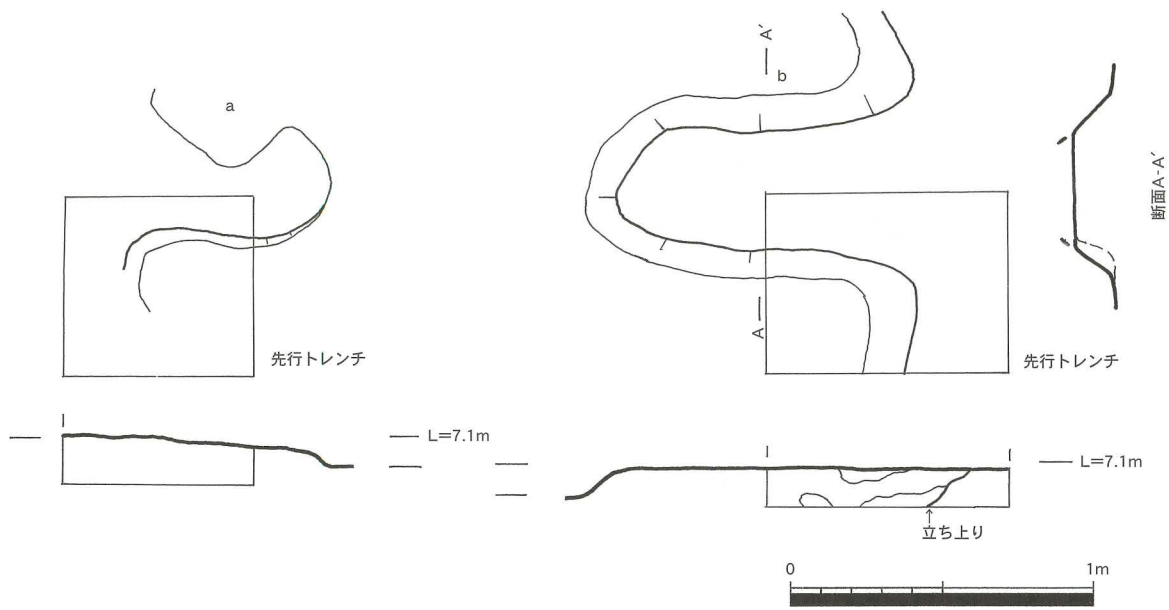


図54. 3号住居間仕切り部分平・断面図 (S=1/25)

穴がある。窪みの南側にはカーボンが集中する箇所があり地床炉とみられる (写真54参照)。

落ち込みの際にあるP 1～P 4が住居の支柱穴考えられる。3号住居を囲むようにP 6～P 10の柱穴があり住居に伴う可能性があるものの断定はできない。

中央の落ち込みにのびる2箇所の間仕切りを検出した。1号住居同様、間仕切りの造られた方を確認するために試掘トレンチを設け、断面を確認したところ、間仕切りaはもともと地山(12層b～c)を掘り残して造られていたが、間仕切りbについては、12層b、または12層cより黒色を帯び、断面に層の境界線がみられたため、後から造り付けられたものであることが分かった(図54)。間仕切りの上面や両脇にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

住居の床面には一部貼床が残存していた。落ち込みの底面は全面に貼床が残る。なお、3号住居は、東側の4号住居に切られている。

3号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	26	25	74	P 7	20	16	24
P 2	30	24	45	P 8	22	22	18
P 3	25	22	47	P 9	31	22	8
P 4	30	25	60	P 10	33	25	22
P 5	20	15	15	P 11	21	14	12
P 6	21	20	21	P 12	23	18	29

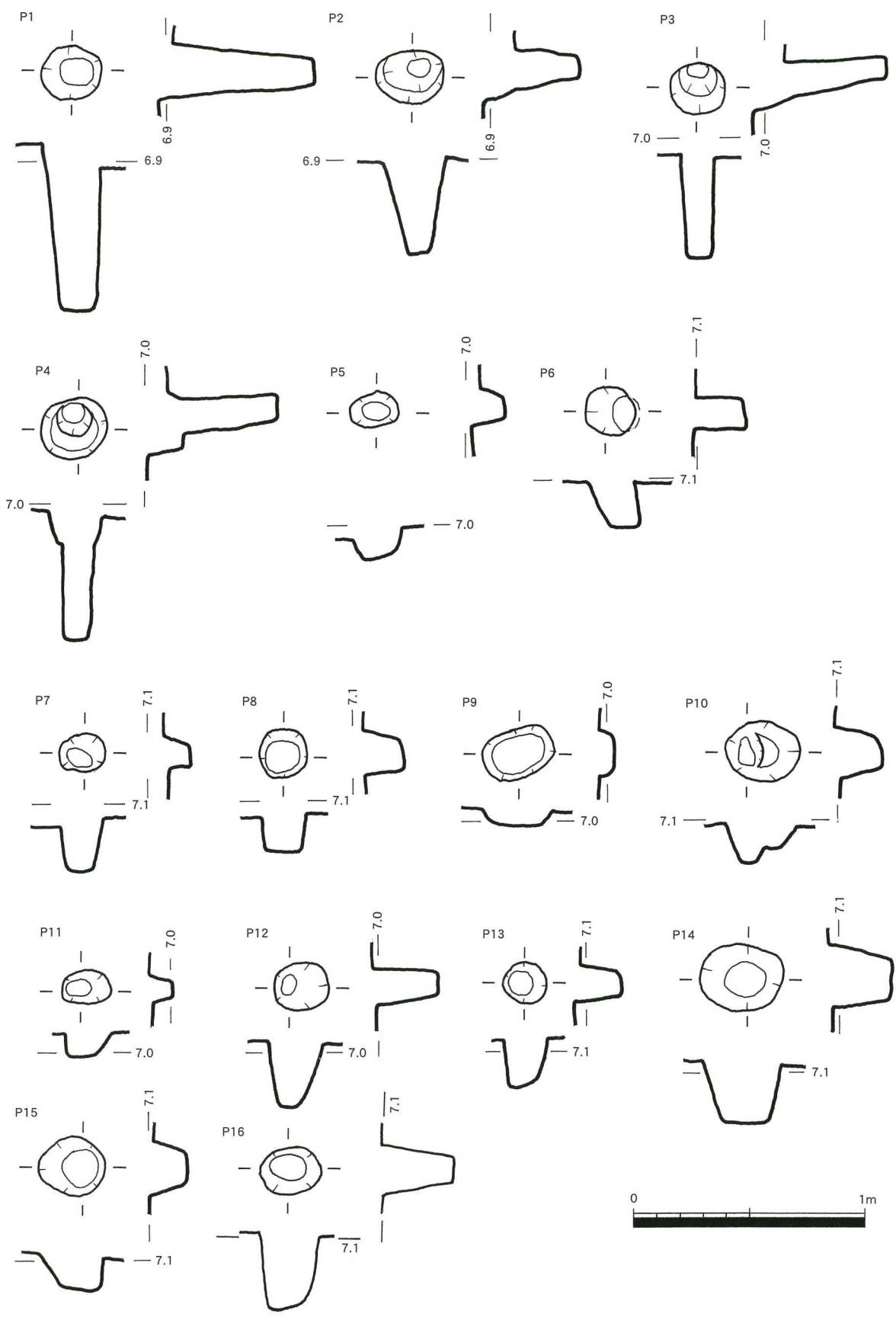


图55. 3号住居柱穴平·断面图 (S=1/25)

3号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 13	19	17	21	P 15	29	26	16
P 14	36	29	28	P 16	25	18	32

3号住居出土遺物

SA03-1は、3号住居の東側から出土した甕形土器の口縁部の破片である。確実に住居伴うと断定はしえないが、出土位置からその可能性があるものとしてここで取上げる。口縁部は外反するが、屈曲部内外面に稜はもたない。

SA03-2は、甕形土器の脚台の破片である。端部がわずかに窪む。

SA03-3は、2段目の落ち込みの際から出土した壺形土器の頸部～胴部の破片である。胴部には刻み目を施した一条の突帯が巡る。床直資料である。

SA03-4は、甕形土器の底部の破片である。平底を呈する。

SA03-5は、扁平で楕円形を呈する軽石加工品である。a面に磨面をもつ。床直資料である。

SA03-6は、安山岩製の台石である。a面中央部に使用面が確認できる。若干の磨面と敲打痕も認められる。さらに、a面右側面下部には敲打痕が認められる。床直資料である。

SA03-7は、磨面をもつ軽石加工品である。断面図で示している部分に研磨された面が認められる。また、a面中央部から下端部にかけて、鋭利な刃物による長さ約5cm、深さ6mm前後の円弧状を呈した溝状の切込みが認められる。

4号住居

3号住居を切って4号住居が造られている。南側は掘りすぎているため全体の形状は不明であるが、検出した平面は花卉型を呈し、直径5.2m前後の円に収まるサイズと推定される。

中央とみられる部分に長径約2.4m、短径約2.1mの楕円形の落ち込みをもつ。落ち込みの深さは、床面から20～25cmを測る。落ち込みの南側には、長径約45cm、短径約40cmの楕円形の浅い窪みがある。落ち込みの内部にはカーボンが点在するが、他の住居と異なり集中する範囲が不明確なため地床炉の場所の特定は難しい。

落ち込みの際にあるP1～P4が住居の主柱穴と考えられ、床面にP5～P10の6基の柱穴を確認した。

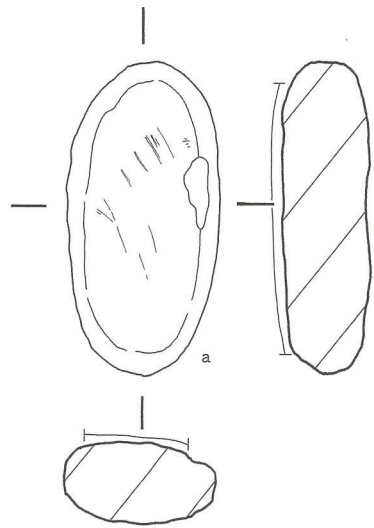
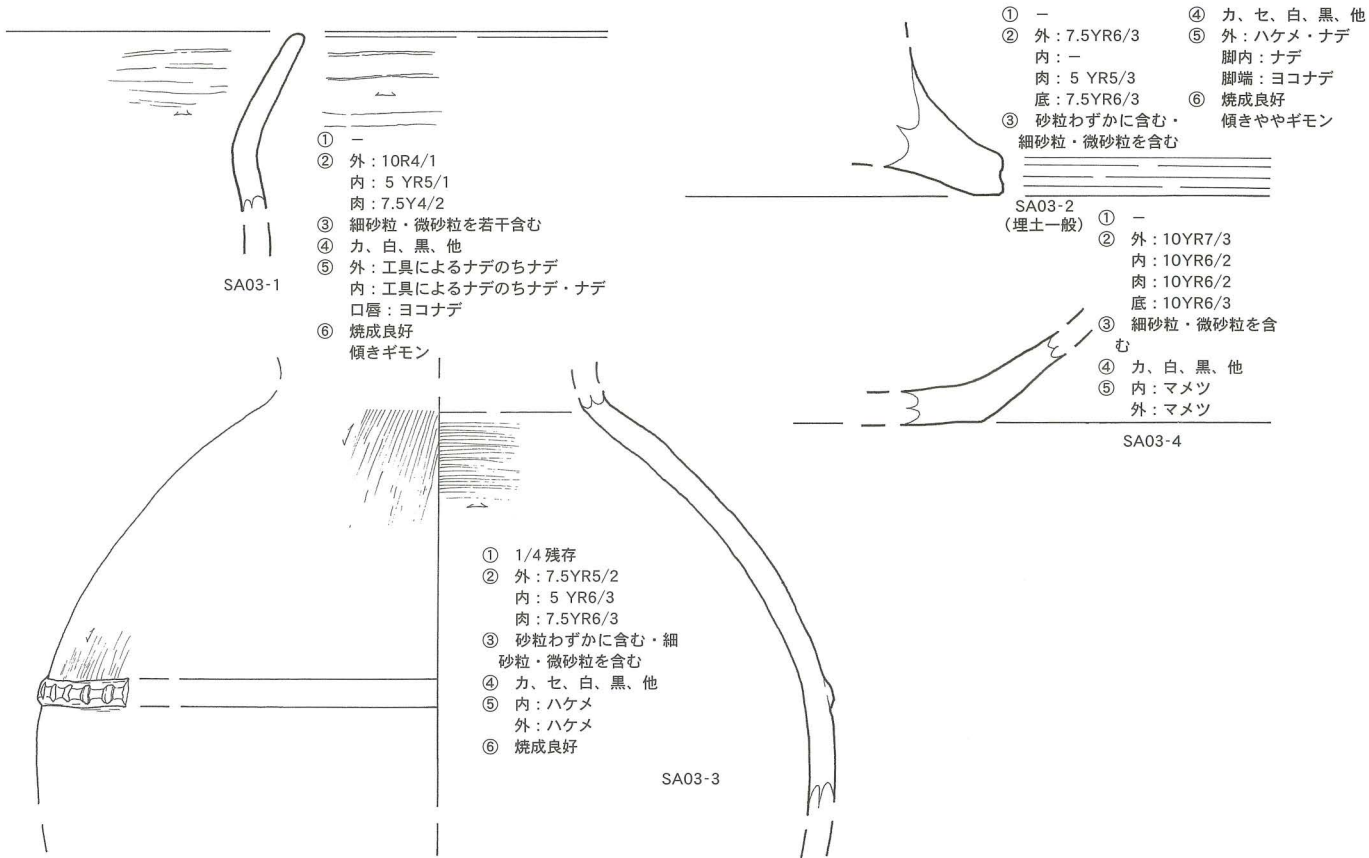
住居の南側には、長径約85cm、短径約70cmの楕円形の土坑があり付帯遺構と思われる。また、土坑に隣接してP11が検出された。

住居の南側については、土壌の色調の差異から床面と間仕切りの痕跡と思われる範囲を推定した。

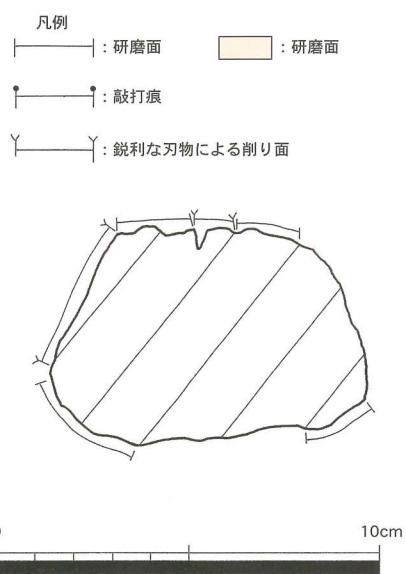
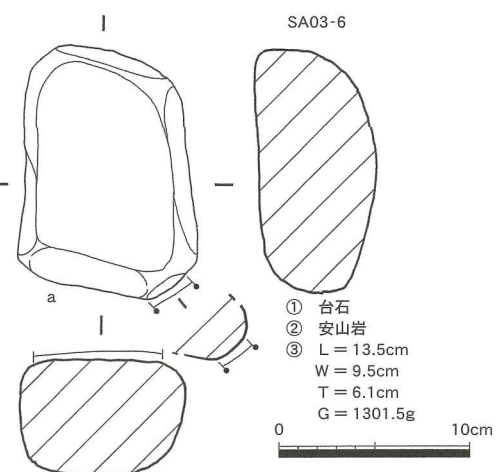
間仕切りの造られた方を確認するために試掘トレンチを設け、断面を確認したところ、間仕切りa、bともに、12層b、または12層cより若干黒色を帯び、断面に層の境界線がみられたため、後で造り付けられたものであることがわかった(図58、写真59～61参照)。住居内部は、間仕切りによって少なくとも4つのスペースに区分されている。西側と東側のスペースの広さはほぼ同じであるが、北側については約2倍の広さがある。

間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

床面、及び落ち込みの底面には、厚さ1～3cm前後を測る貼床が明瞭に残存していた。



- ① 磨面をもつ軽石
- ② 軽石
- ③ L = 8.3cm
W = 4.0cm
T = 2.3cm
G = 28.62g



- ① 軽石加工品
- ② 軽石
- ③ L = 11.3cm
W = 8.7cm
T = 5.8cm
G = 181.8g

凡例

— : 研磨面 ◻ : 研磨面

↑ : 敲打痕

∧ : 鋭利な刃物による削り面

図56. 3号住居出土遺物実測図

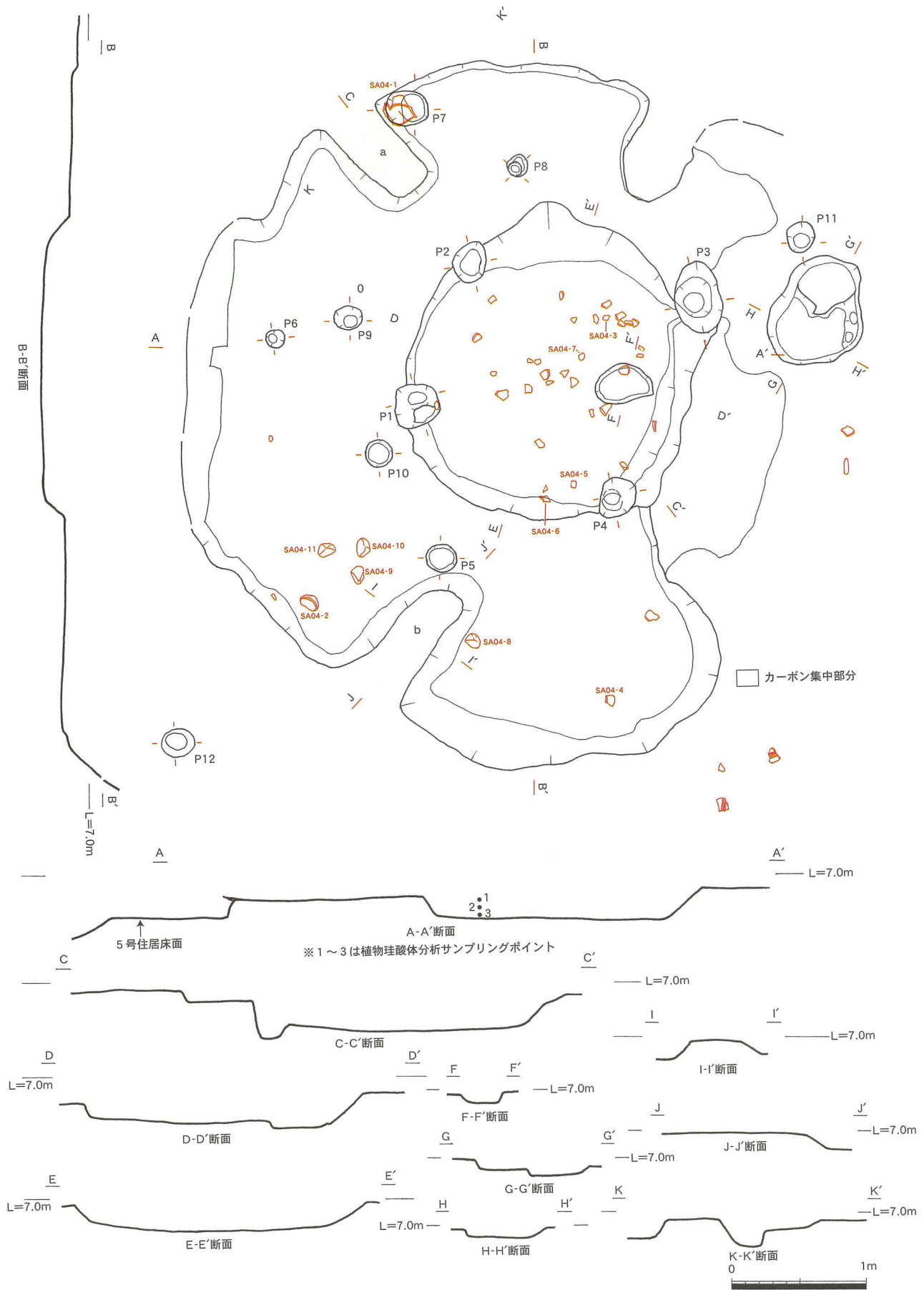


図57. 4号住居平・断面図 (S=1/40)

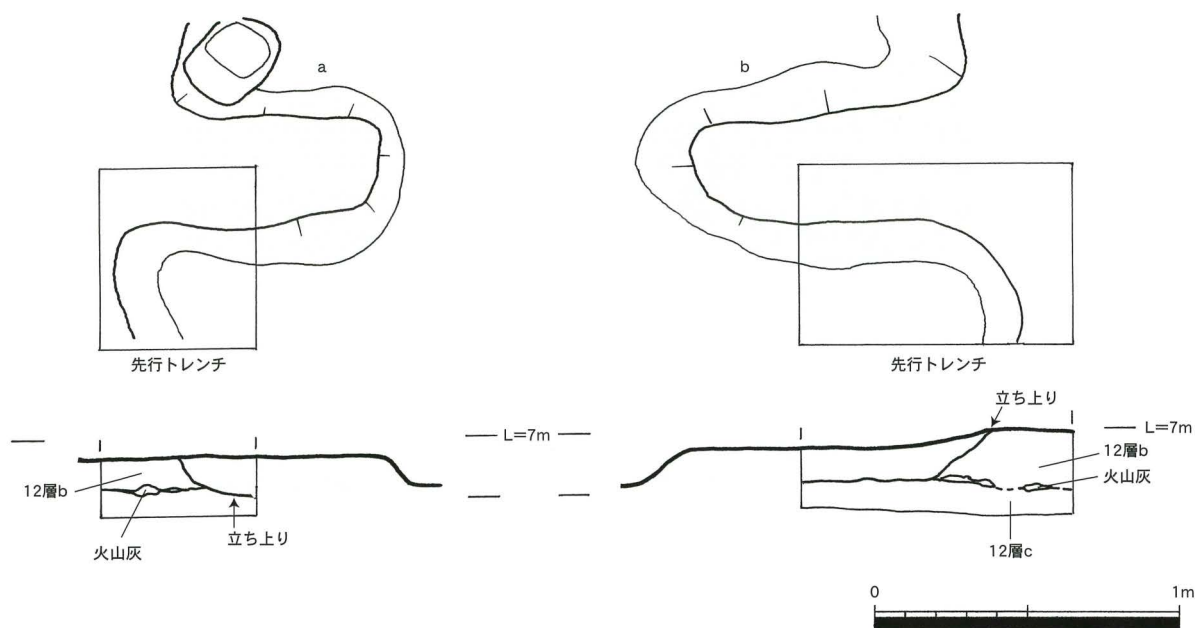


図58. 4号住居間仕切り部分平・断面図 (S=1/25)

4号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	33	32	32	P 7	34	24	20
P 2	29	25	25	P 8	17	15	26
P 3	54	35	28	P 9	22	20	19
P 4	28	28	75	P 10	19	18	5
P 5	23	20	8	P 11	20	19	10
P 6	15	13	8	P 12	25	20	33

4号住居出土遺物

SA04-1は、P 7の底面から出土した甕形土器の胴部～底部の破片である。床直資料である。底部は脚台をもたずわずかに上底となる。

SA04-2は、鉢形土器の完形品である。ボール状を呈し、口縁部は内湾する。丸みを帯びた胴部から底部へと移行し、底部には高台のような短い脚台がつく。脚台内部はわずかに上底である。

SA04-3は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反し、口唇端部がわずかに窪む。

SA04-4は、壺形土器の頸部屈曲部の破片である。

SA04-5は、甕形土器の脚台部の破片である。脚台見込み部は深い上底を呈する。

SA04-6は、頁岩製の有茎磨製石鏃である。先端部がわずかに欠損している。研磨は丁寧に施され、整形段階の剥離面は認められない。a面中央部には稜があるものの、ほぼ断面はレンズ状を呈している。

SA04-7は、黒曜石製の2次加工のある剥片である。打面部はa面右側面下部に認められるb面側からの2次加工によって除去されている。a面の二次加工部分は摩滅している。

SA04-8~11は、床直資料の安山岩製の礫である。SA04-8は、断面台形を呈する礫である。使用による敲打痕や剥離痕、つぶれは認められない。SA04-9は、顕著な敲打痕や使用痕などは認められない。SA04-10は、使用痕などは認められない。SA04-11は、下端部方向からの加撃によりa面右側部剥落している。a面右側面にはヒビが2条認められ、やや赤く変色していることから被熱礫の可能性がある。敲打痕などは認められない。

5号住居

5号住居は、長径約5m、短径約4.2mを測る楕円形のプランを呈する住居である。4号住居の床面が5号住居の上にかぶることから、4号住居の築造以前に造られた住居であることがわかった。住居の西側の一部が若干内側に入り込む。

北西側には、住居中央に向かう間仕切りをもつ。間仕切りは、住居の掘り込み面より12cm程度低い位置から設

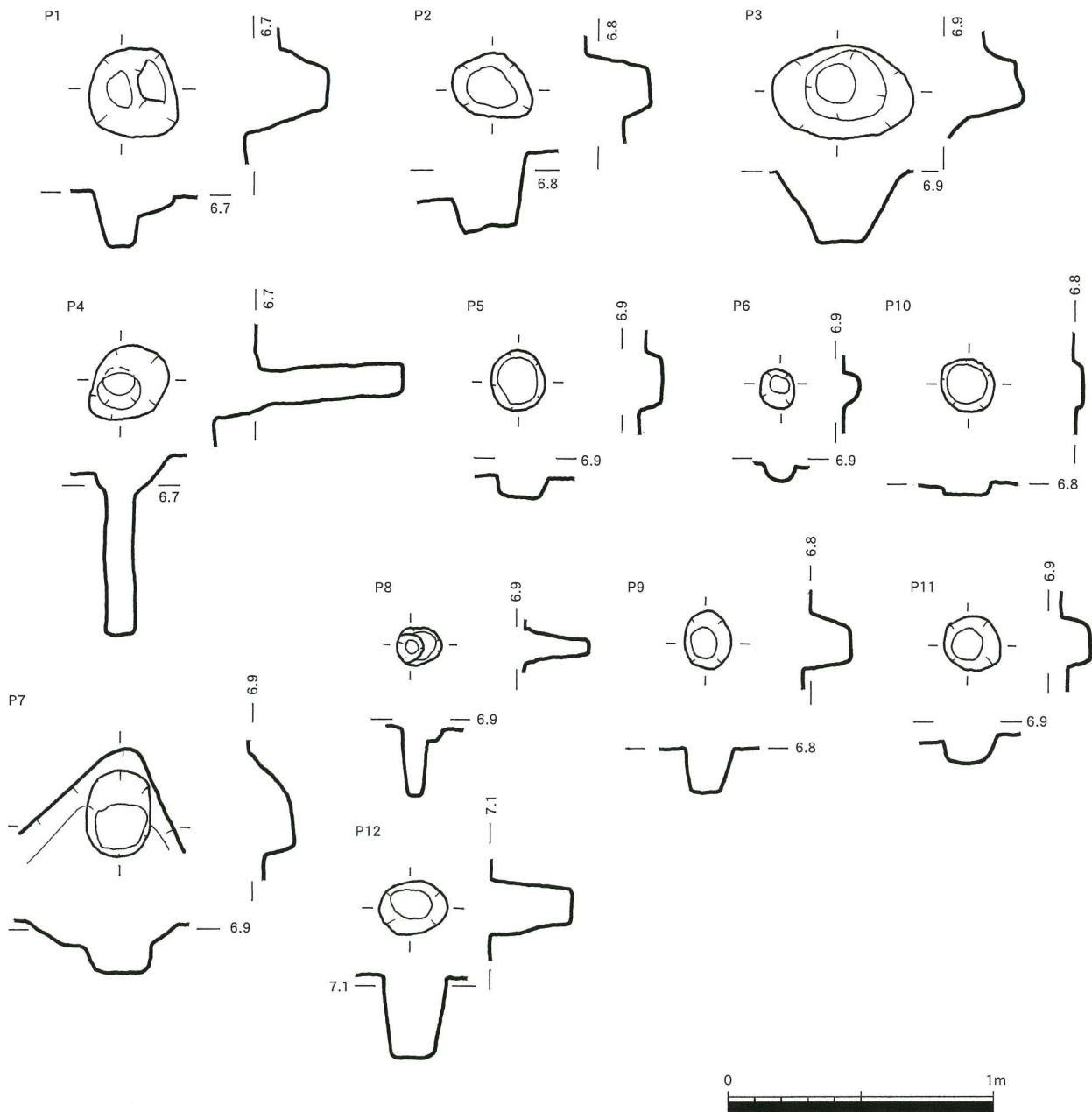
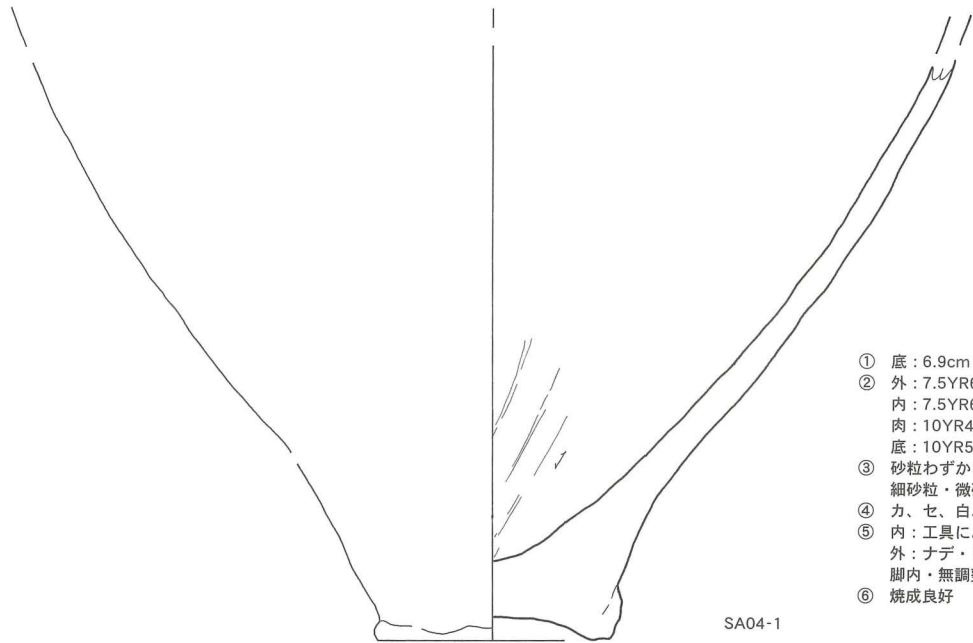
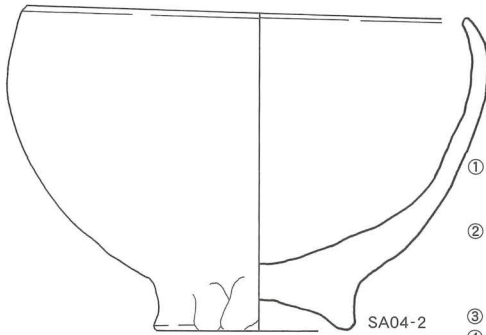


図59. 4号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)



- ① 底：6.9cm
- ② 外：7.5YR6/4
内：7.5YR6/3
肉：10YR4/1
底：10YR5/2
- ③ 砂粒わずかに含む
細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、赤、他
- ⑤ 内：工具によるナデのちナデ
外：ナデ・ヨコナデ
脚内：無調整
- ⑥ 焼成良好

SA04-1

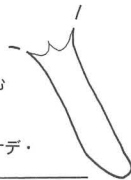


- ① 口：12.6cm
高：9 cm
底：5.7cm
- ② 外：10YR6/3
内：7.5YR4/1
肉：7.5YR5/3
脚内：10YR5/2
- ③ 細砂粒・微砂粒を多く含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 内：ナデ
外：ナデ・ユビオサエ
口唇：ヨコナデ
脚内：無調整
- ⑥ 焼成良好

SA04-2

SA04-5

- ① -
- ② 外：5YR5/1
内：-
肉：2.5YR5/2
脚内：10R4/2
- ③ 細砂粒・微砂粒を若干含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 内：フト・ナデ
外：工具によるナデのちナデ・ヨコナデ
- ⑥ 焼成良好
傾きギモン

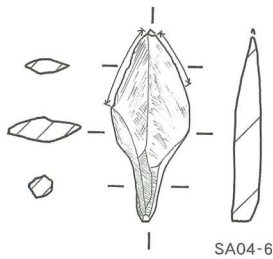


SA04-3

- ① -
- ② 外：7.5YR5/1
内：7.5YR5/2・10R4/1
肉：2.5Y5/1
- ③ 細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、白、黒、他
- ⑤ 内：ナデ
外：ナデ
口唇：ヨコナデ
- ⑥ 焼成良好
傾きギモン

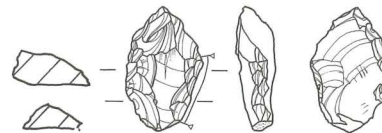
SA04-4

- ① -
- ② 外：N4/0
内：7.5YR4/1
肉：10R4/1
- ③ 細砂粒・微砂粒を若干含む
- ④ カ、白、黒、他
- ⑤ 内：工具によるナデのちナデ
外：工具によるナデのちナデ
- ⑥ 焼成良好
傾きギモン



SA04-6

- ① 磨製石鏃
- ② 頁岩
- ③ L：5.3cm
W：2.2cm
T：0.7cm
G：7.26g



SA04-7

- ① 二次加工のある剥片
- ② 黒曜石
- ③ L：3.5cm
W：2.2cm
T：1.0cm
G：7.0g

← →：使用痕

↑ ↓：磨滅



図60. 4号住居出土遺物実測図①

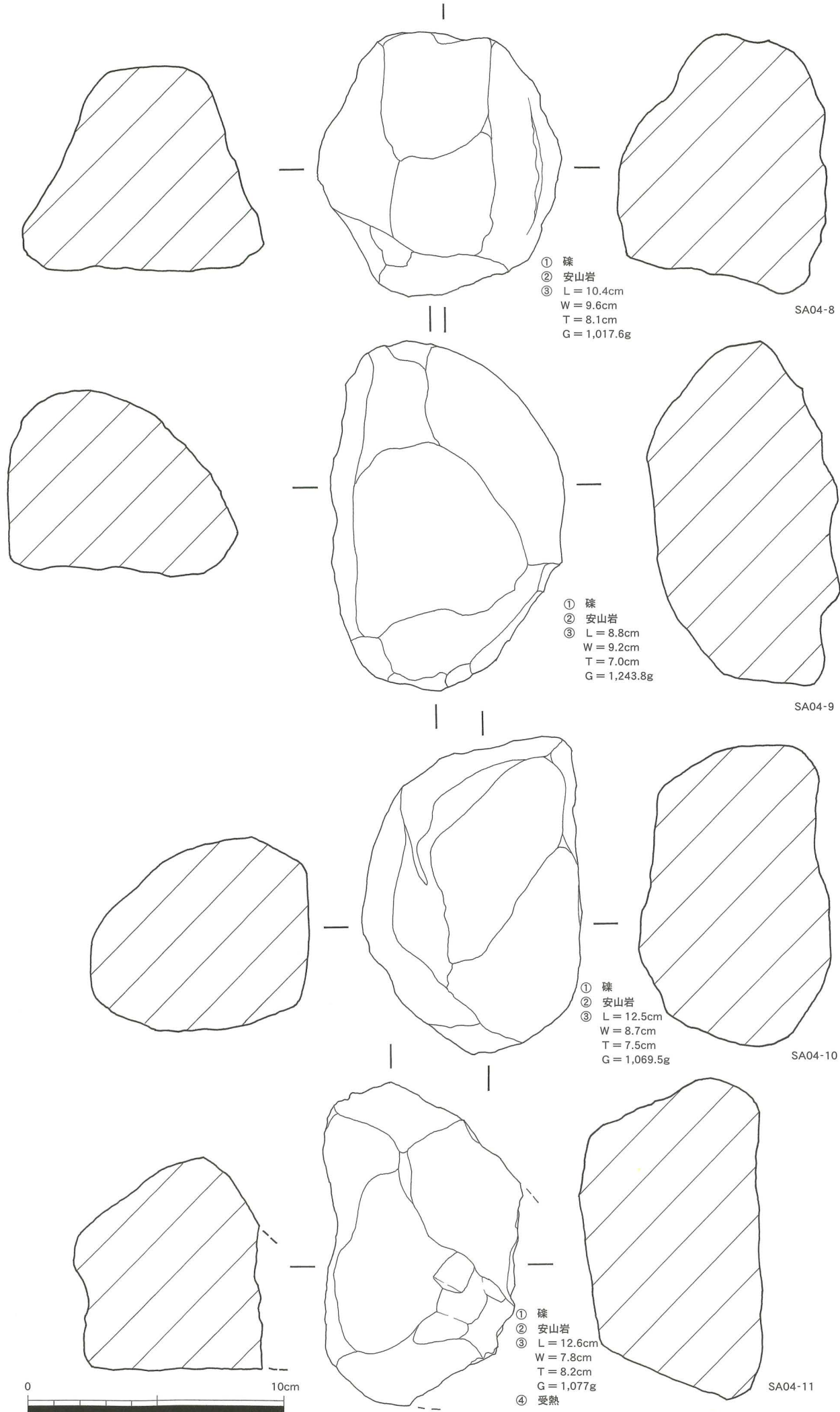


图61. 4号住居出土遺物実測图②

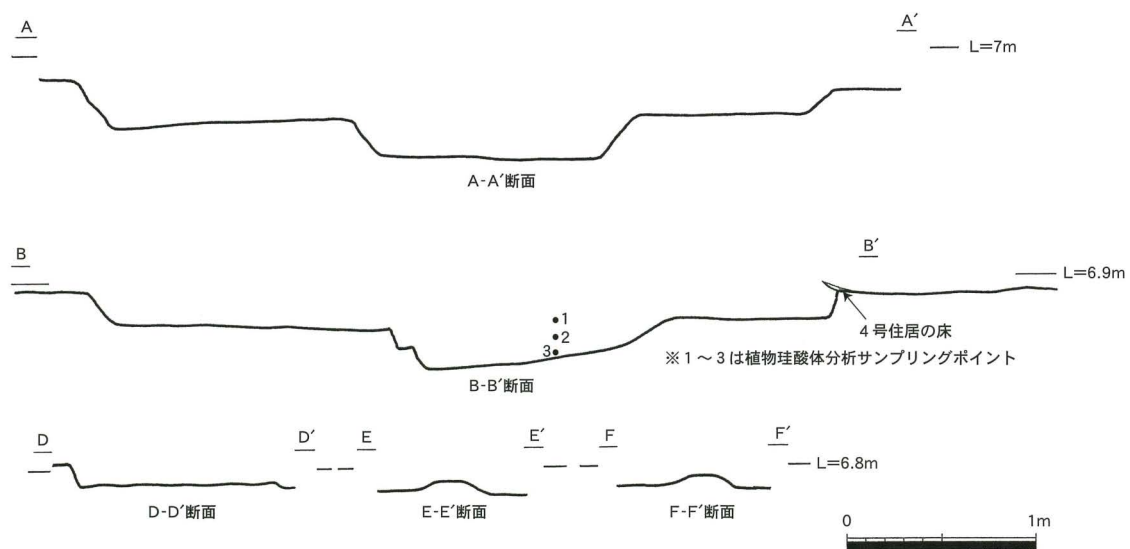
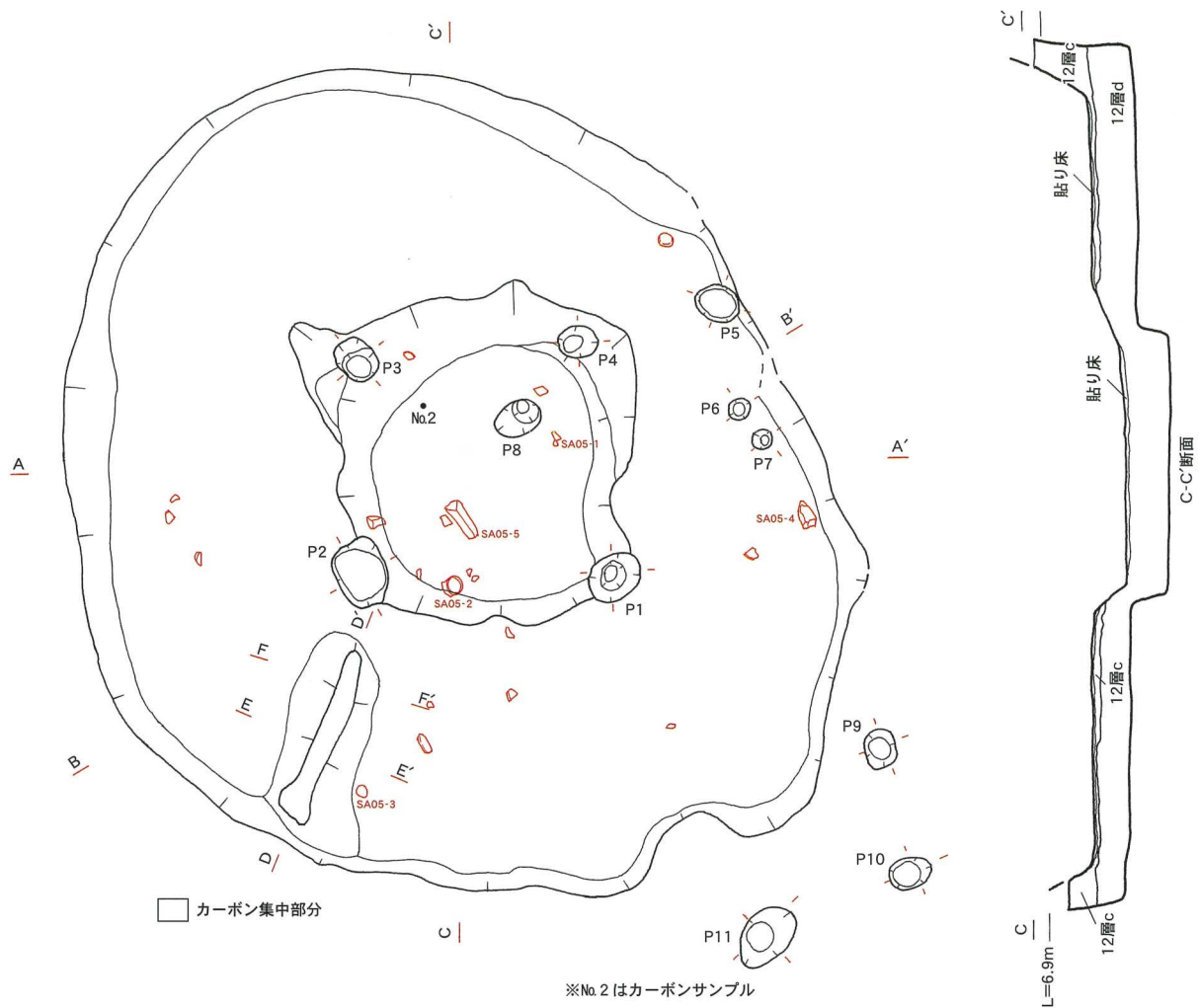


図62. 5号住居平・断面図 (S=1/40)

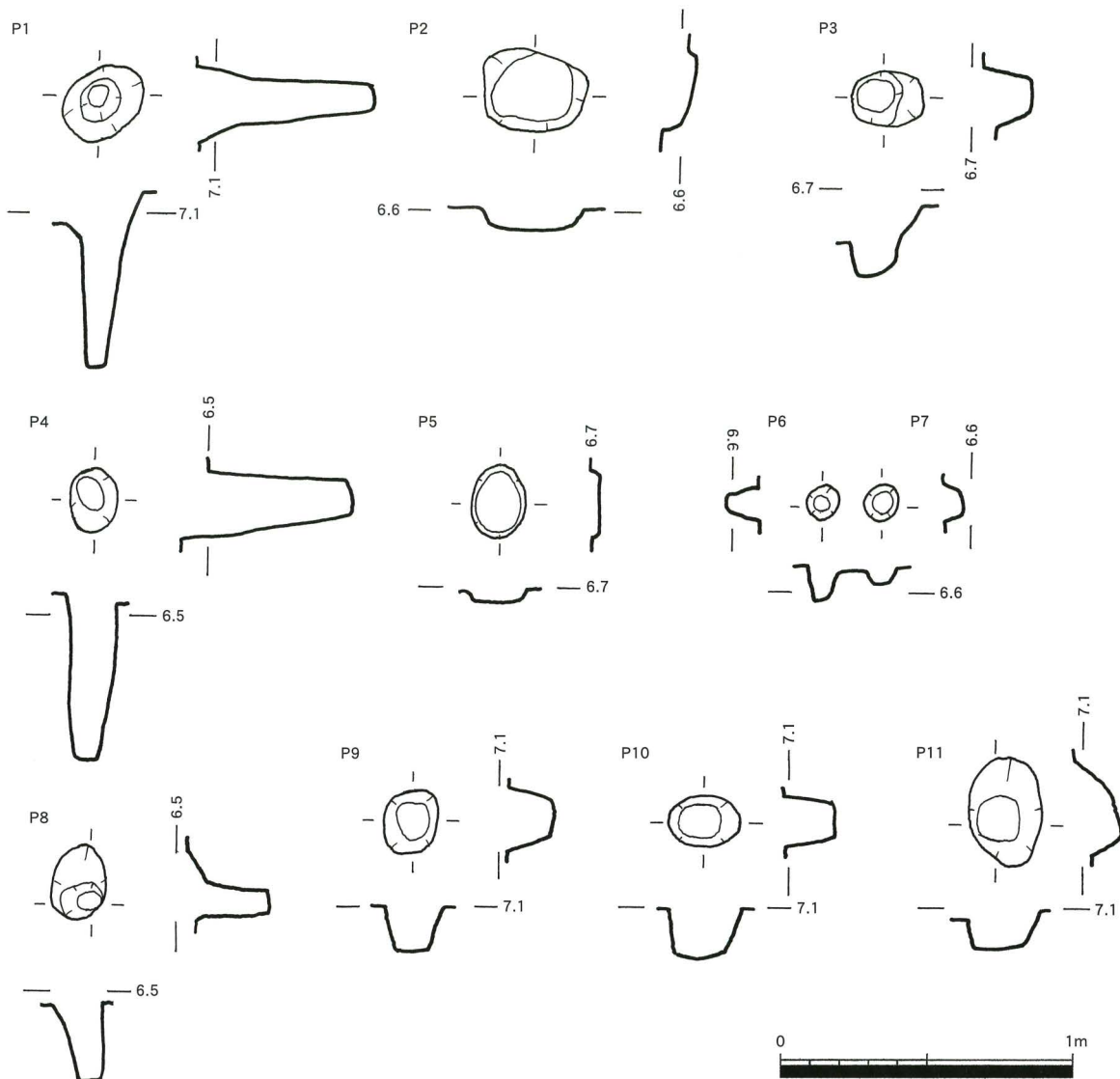
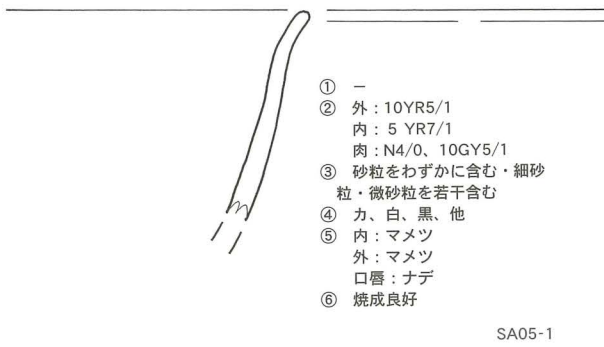


図63. 5号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)

けられている。間仕切りの断面は畝頭状になる。住居壁際の土色・土質と同様であることから間仕切りは地山(12層b)を掘り残して造られていると考えられる。間仕切りは、他の住居のそれと比べて硬く引き締まっている特徴がある。間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

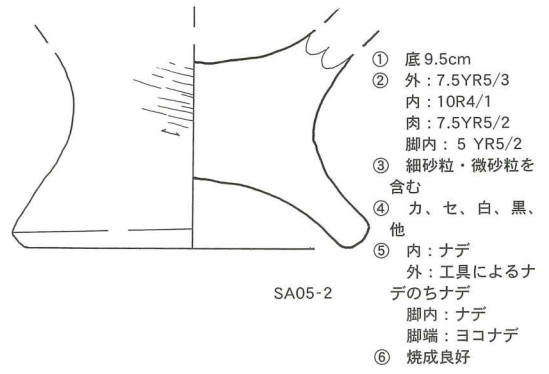
中央には1.5×1.5m程度の隅丸形状の落ち込みをもつ。落ち込みの深さは、床面から約20cmを測る。落ち込みの中央付近にはカーボンが集中し、床面も赤色に変色しているところが見られたため、地床炉として使われたと考えられる。

落ち込みの4つのコーナーにあるP1～P4、及びP10が主柱穴と思われる。落ち込みの底面やや東よりのところでもP5を検出した。また、床面でP7～P9の3基の柱穴を検出したが、4号住居との境にあるため、どちらに帰属する柱穴か判断が難しい。4号住居に付随する柱穴の可能性もある。竪穴周辺ではP9～P11の3基の柱穴を検出した。うち、P9は、住居の際から30cm程度の距離にあり、住居に伴う可能性があるが、P10、P11は60cm程度離れており、付随する柱穴かどうか判然としない。



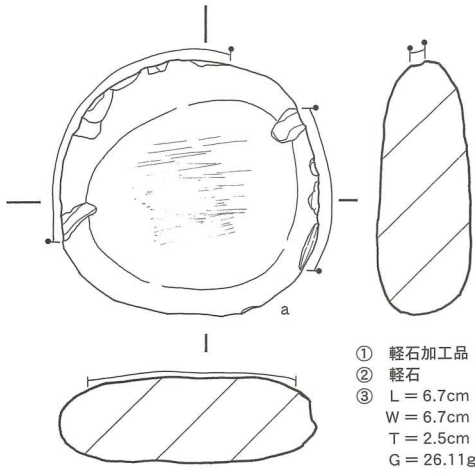
- ① -
- ② 外：10YR5/1
内：5 YR7/1
肉：N4/0、10GY5/1
- ③ 砂粒をわずかに含む・細砂粒・微砂粒を若干含む
- ④ カ、白、黒、他
- ⑤ 内：マメツ
外：マメツ
口唇：ナデ
- ⑥ 焼成良好

SA05-1



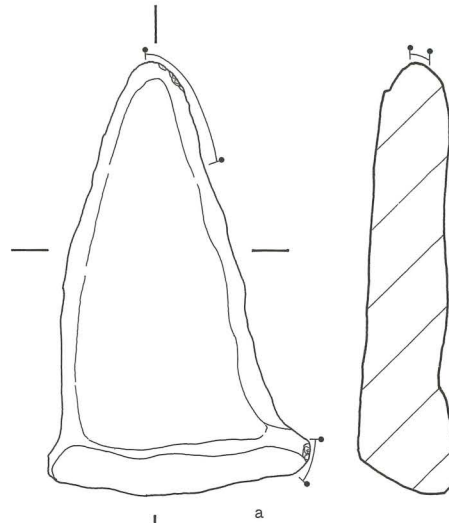
- ① 底 9.5cm
- ② 外：7.5YR5/3
内：10R4/1
肉：7.5YR5/2
脚内：5 YR5/2
- ③ 細砂粒・微砂粒を含む
- ④ カ、セ、白、黒、他
- ⑤ 内：ナデ
外：工具によるナデのちナデ
脚内：ナデ
脚端：ヨコナデ
- ⑥ 焼成良好

SA05-2



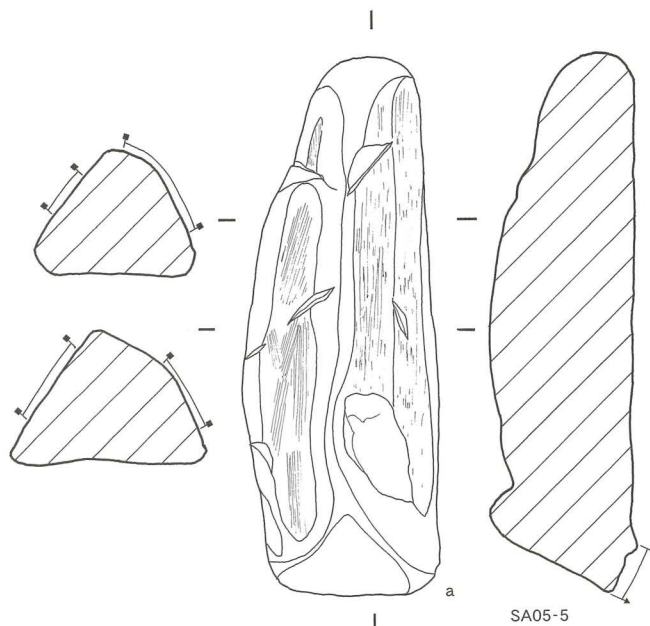
- ① 軽石加工品
- ② 軽石
- ③ L = 6.7cm
W = 6.7cm
T = 2.5cm
G = 26.11g
S = 1/1

SA05-3



- ① 敲石
- ② 安山岩
- ③ L = 11.5cm
W = 6.9cm
T = 2.4cm
G = 250.9g

SA05-4



- ① 砥石
- ② 砂岩
- ③ L = 28.6cm
W = 10.5cm
T = 7.2cm
G = 3,725g

凡例

- : 研磨面
- : 敲打痕
- : 砥面
- : 剥離面



图64. 5号住居出土遺物実測図

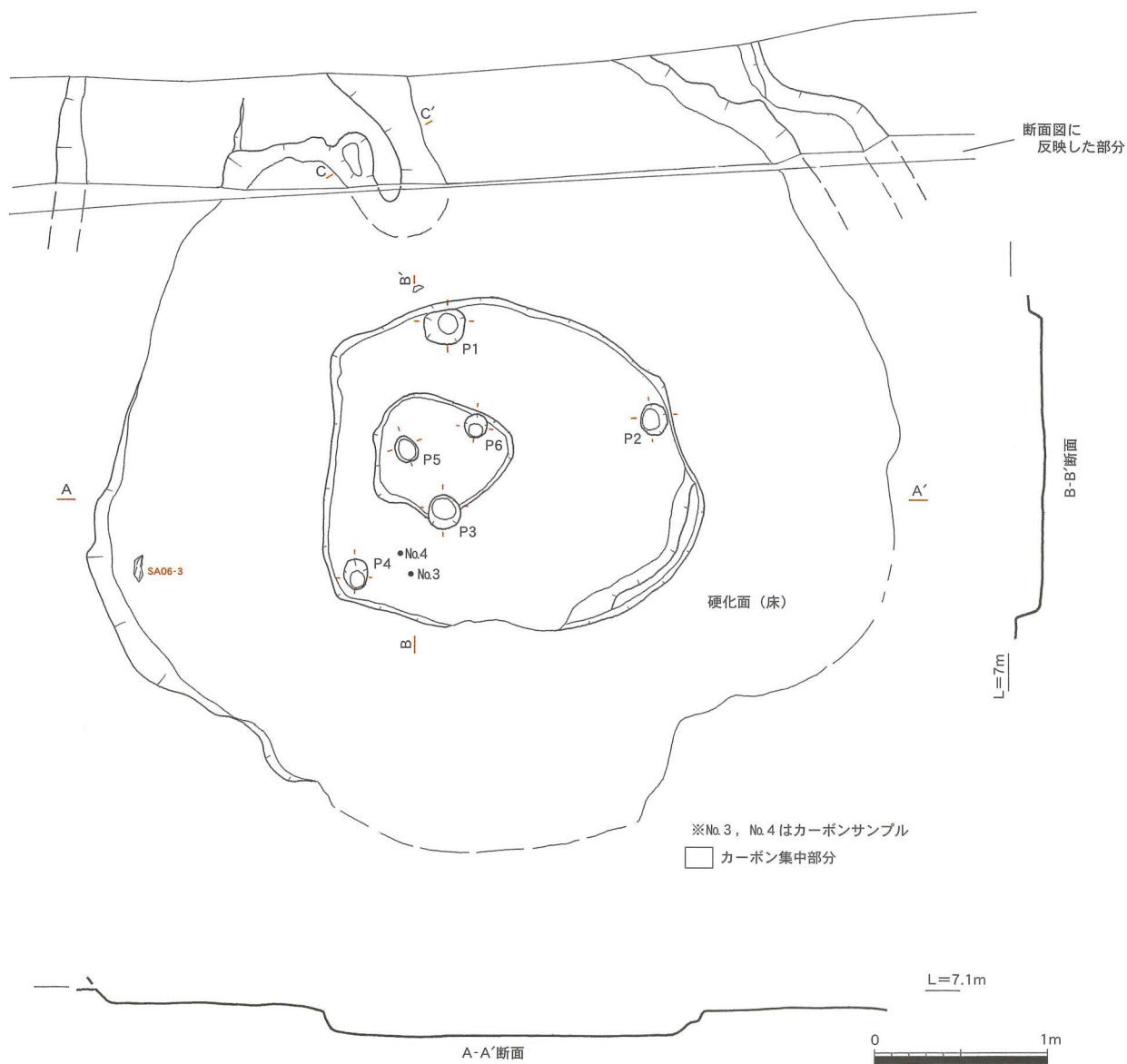
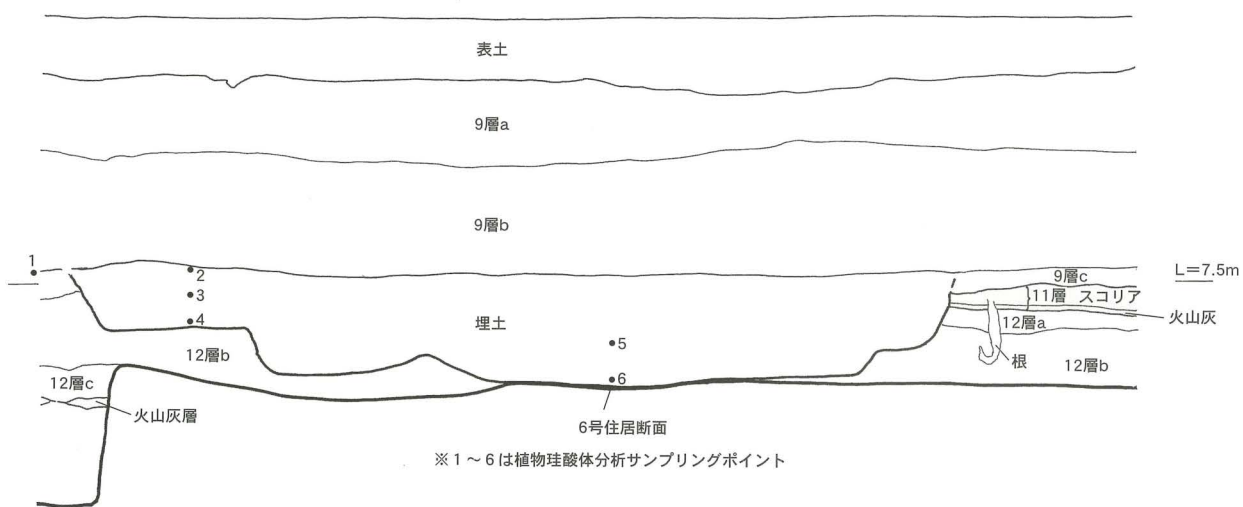


図65. 6号住居平・断面図 (S=1/40)

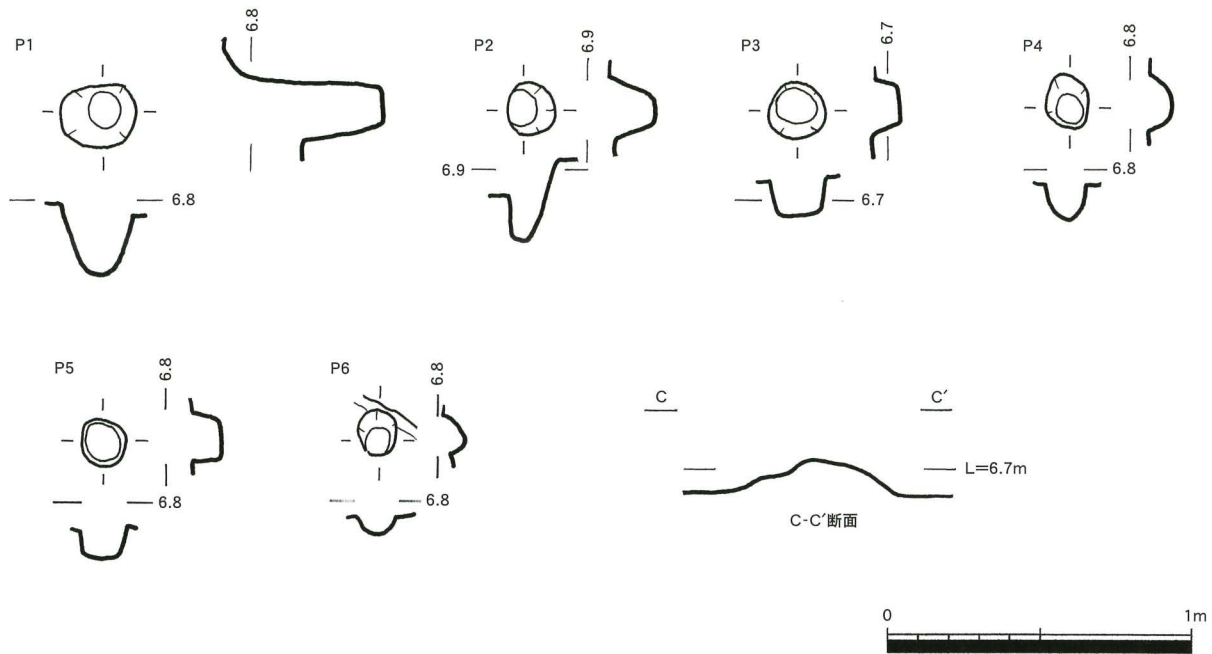


図66. 6号住居柱穴平・断面図、間仕切り部分断面図 (S=1/25)

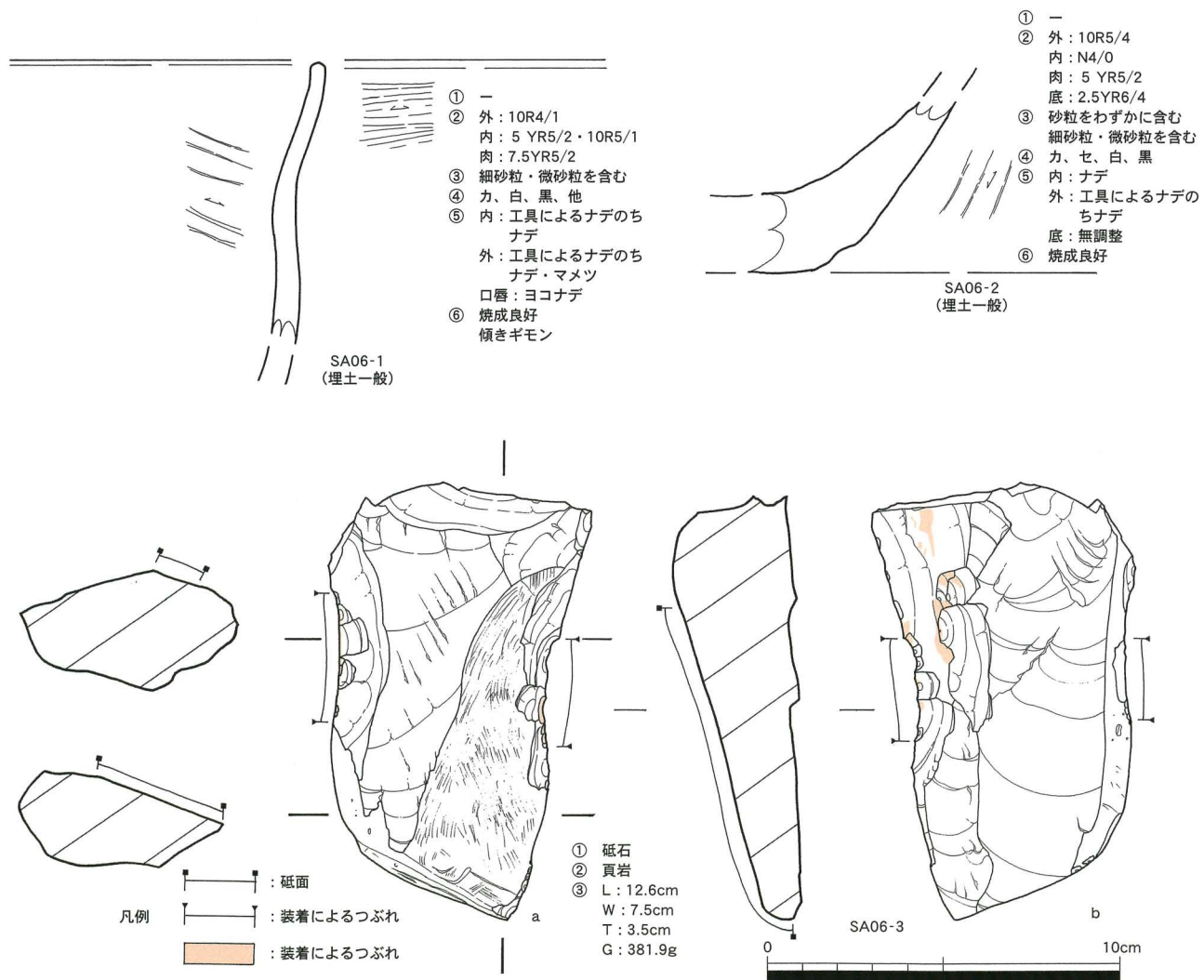


図67. 6号住居出土遺物実測図

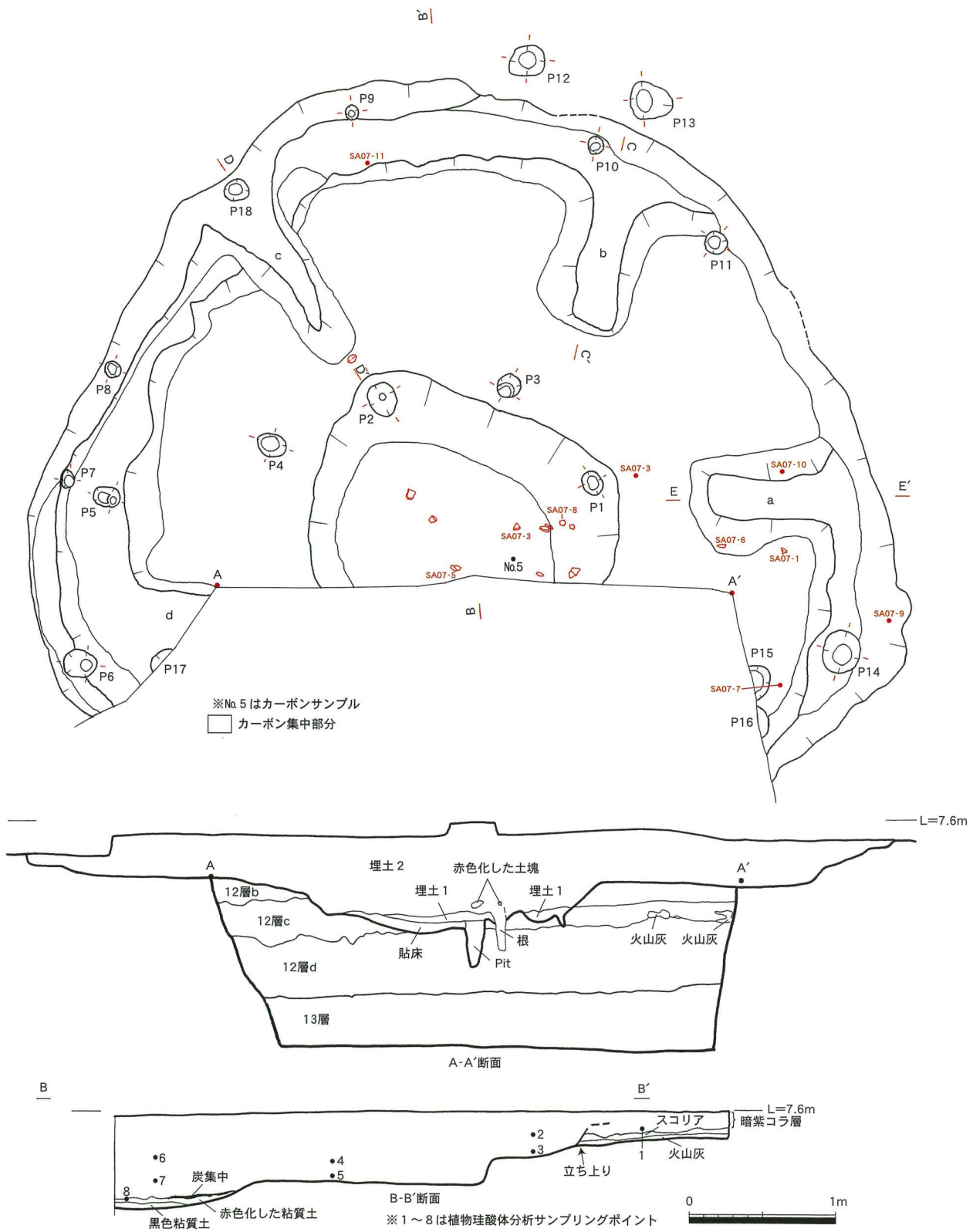


図68. 7号住居平・断面図 (S=1/40)

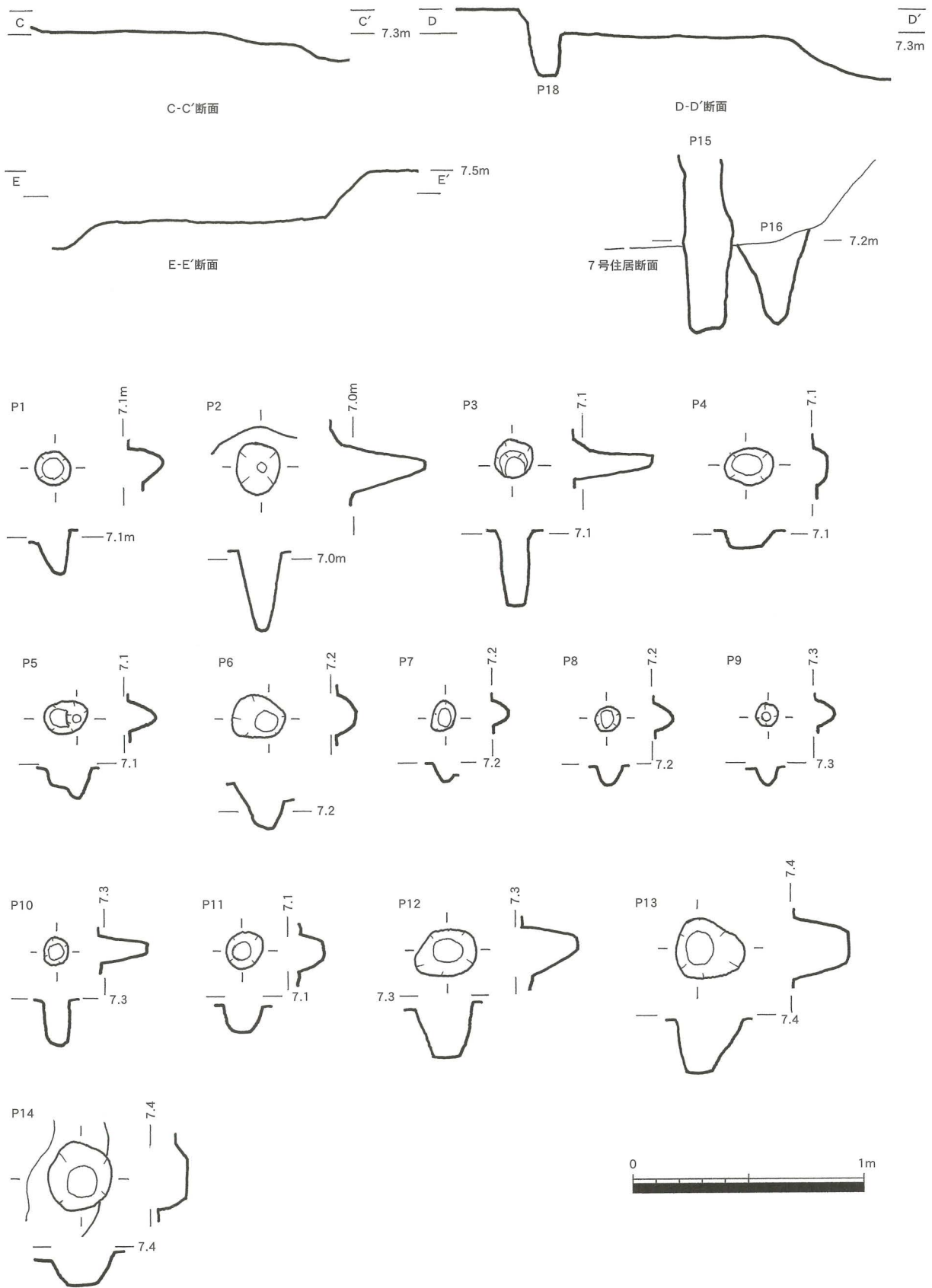


图69. 7号住居柱穴平·断面图 (S=1/25)

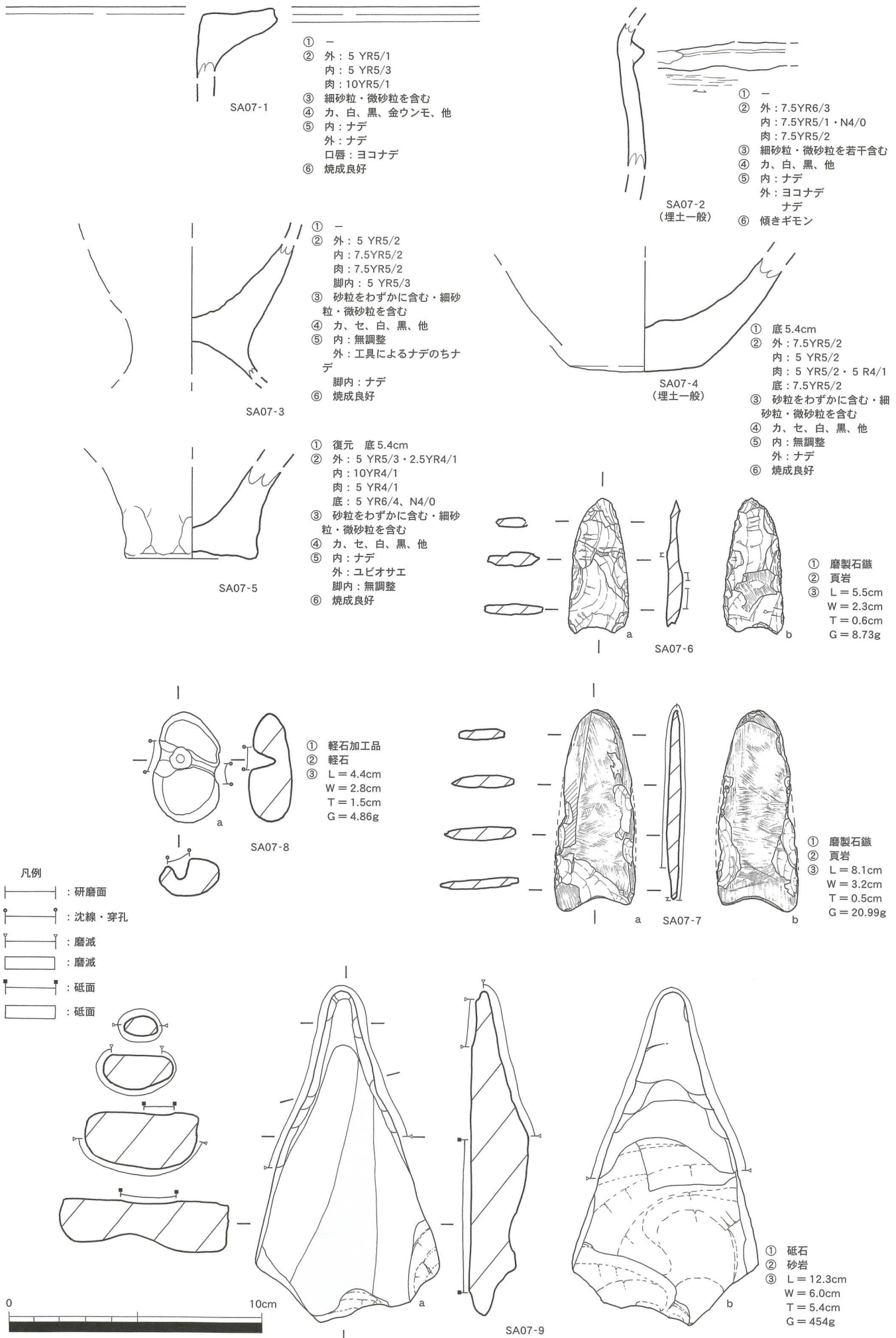


図70. 7号住居出土遺物実測図①

なお、住居の床面、及び落ち込みの底面には、厚さ1～3cm前後を測る貼床が明瞭に残存していた。

5号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	27	25	54	P 7	14	13	6
P 2	34	26	8	P 8	25	16	27
P 3	24	18	17	P 9	18	21	17
P 4	21	16	60	P 10	24	17	17
P 5	24	18	4	P 11	34	25	14
P 6	12	11	12.				

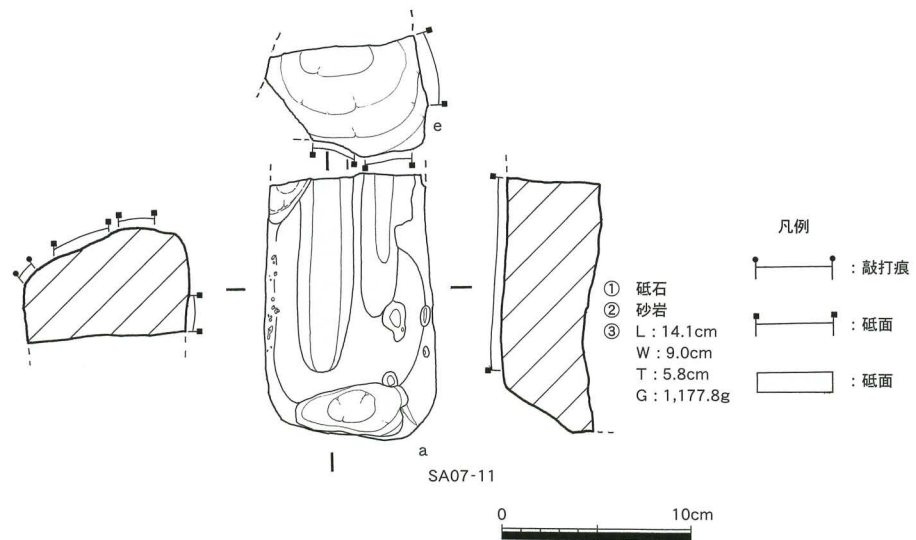
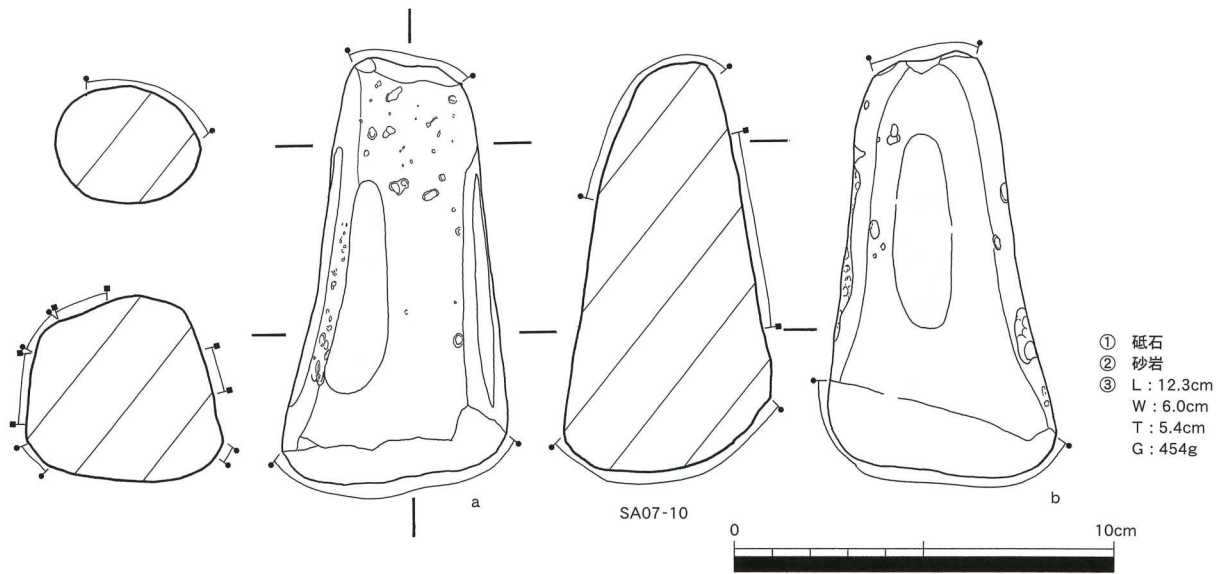


図71. 7号住居出土遺物実測図②

5号住居出土遺物

SA05-1は、鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部はわずかに外反し、口唇端部は丸みを帯びる。2段目の落ち込み部分の埋土から出土した。

SA05-2は、甕形土器の底部の破片である。脚台見込み部は上底となり、断面はかまぼこ状を呈する。

2段目の落ち込みから出土した床直資料である。

SA05-3は、平面形状がほぼ円形をなす扁平な軽石加工品である。側面に敲打による剥離が、また、a面中央部に削痕が認められる。間仕切りのすぐ脇から出土した床直資料である。

SA05-4は、平面が三角形をなす扁平な敲石である。a面上端部と右側面下部の凸部に敲打痕が認められる。a面上端部の敲打痕は、b面との稜部分に認められる。床直資料である。

SA05-5は、断面が三角形をなす砥石である。a面左右面に砥面が認められる。裏面下端部は、砥石の整形に伴う剥離痕が認められる。ベンガラであろうか、わずかにではあるが、a面左側面上部と裏面下端部の割れ目に朱色の部分が残されている。2段目の落ち込みのほぼ中央から出土した床直資料である。

6号住居

6号住居は、19年度調査区の西際で検出された。重機によって上面を削平してしまい全体の形状は不明であるが、調査区西側の犬走り部分に残る遺構の状況から、少なくとも1箇所の間仕切りをもつ円形プランの住居と思われる、直径は6m前後と推定される。

犬走り部分北側は、3段に落ちて、途中、幅の狭いテラス状の平坦面を造りだしながら床面に至る。西側の地層断面の観察から、掘り込みは、第9層c中からはじまり、第11層（暗紫コラ）を掘りぬいている状況が看守される（図62、写真73）

間仕切りは断面が畝頭状になるもので、地山（第12層b）を掘り残して造られ、住居の中央と見られるの落ち込みにむけてのびている。残存する間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

落ち込みは、長径約2m、短径約1.9mを測る。落ち込みの南東、南西側はコーナーを有するが北側は楕円形をなし、階段状に落ちる。落ち込みの深さは、床面から約10cmを測る。

落ち込みの際でP1、P2、P3の3基の支柱穴と考えられる柱穴が検出された。なお、この落ち込みの周辺にドーナツ状に硬化面の広がりが見られたことから、そこを床の範囲と想定した。

落ち込みの内部、やや南よりに長径約80cm、短径約70cm、深さ約10cmの相似形の落ち込みがある。

その際からP3、P5、P6の3基の浅い柱穴が検出された。特にP5の周辺には、カーボンが集中しており、炉として使用されていた場所と考えられる。

埋土中の出土遺物は少なく、細片が散見される程度であった。

6号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	25	20	25	P 4	17	14	13
P 2	18	15	26	P 5	15	15	12
P 3	18	18	13	P 6	15	11	6

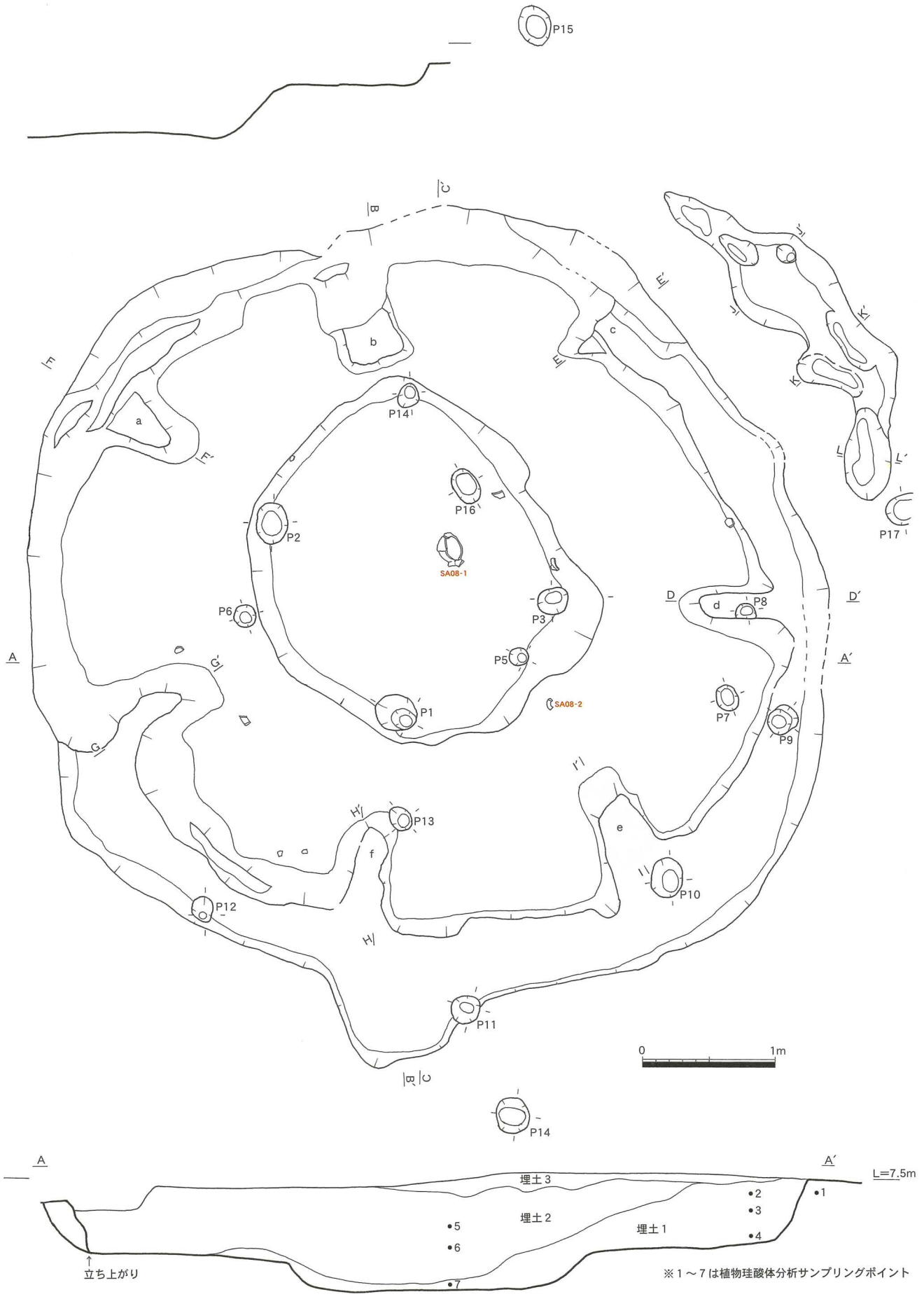


図72. 8号住居平・断面図 (S=1/40)

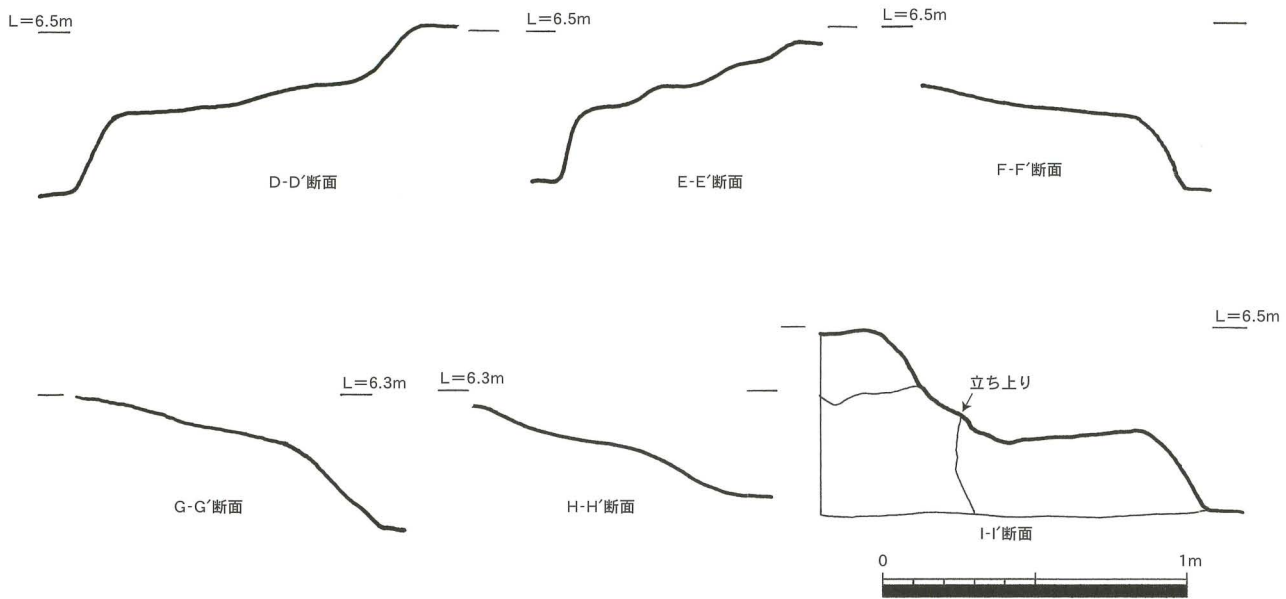


図73. 8号住居間仕切り部分断面 (S=1/25)

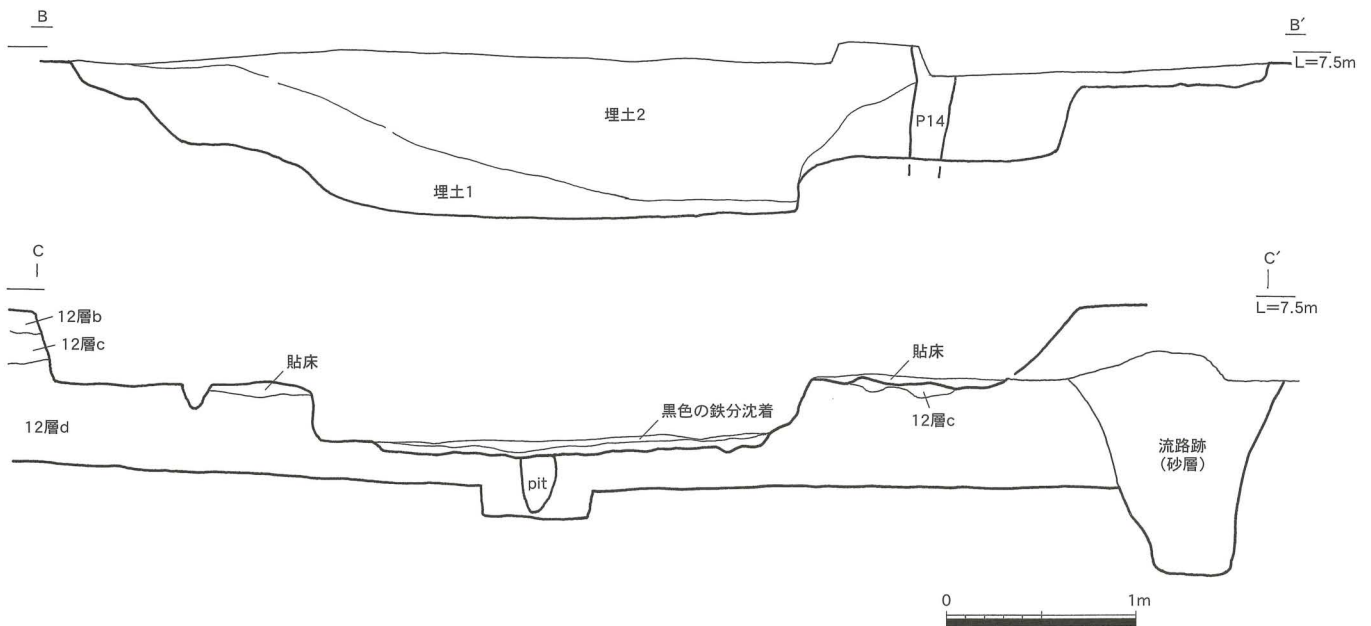


図74. 8号住居断面図 (S=1/40)

6号住居出土遺物

SA06-1は、甕形土器の口縁の部破片である。口縁部はわずかに外反し、口唇端部は丸みを帯びる。

SA06-2は、平底を呈する壺形土器の底部の破片である。SA06-1、2ともに埋土中の一般遺物として取上げたものである。

SA06-3は、床直資料の砥石である。砥石(の破損品?)を再整形し、a・b面の両側縁に剥離痕が認められる。装着によるものかその剥離痕の稜及びb面左側面上部につぶれが認められる。

7号住居

7号住居は、19年度調査区のほぼ中央で検出された。調査区北側半分で検出されたピット半裁作業時にほとんど遺物が出土しなかったことから、下層の状況を確認するためこの場所に試掘トレンチを設け重機で掘削し、結

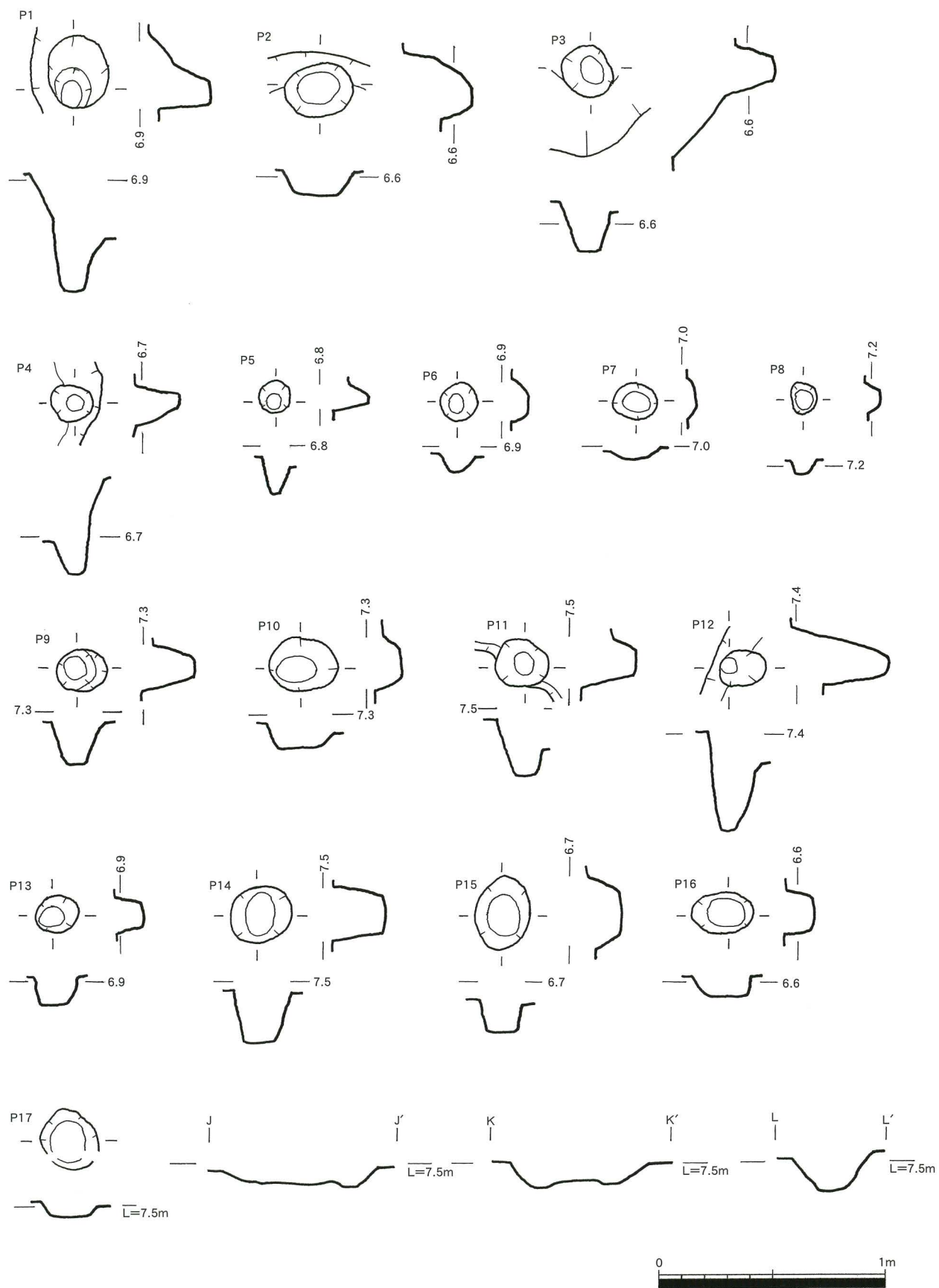


图75. 8号住居柱穴平·断面图、沟状遗构断面图 (S=1/25)

果、遺構の約1/2を破壊してしまった。試掘トレンチの断面に住居の断面を確認したことから、先述のとおり調査区南側半分については、手作業で掘り下げを行い、第11層（暗紫コラ）上面で円形に暗紫コラが抜ける範囲を確認し住居を検出した。

7号住居は、直径約6mの円形プランの中に間仕切りをもつタイプの住居である。住居の北側では階段状に落ち床面へと至る。中央には長径2.2m、短径推定1.6m前後の隅丸方形の落ち込みがある。落ち込みの深さは、床面から約25cmを測る。

住居東半分のスペースをほぼ等分するように、4つの間仕切りがこの落ち込みに向かってのびる。間仕切りの造られた方を確認するために間仕切りa～dに試掘トレンチを設け、断面を確認したところ、いずれも、12層bと同色、同質の土壌で、断面に層の境界線もみられなかったため、地山（12層b）を掘り残して造られているものと考えられる。間仕切りdについては、試掘トレンチ断面で同様の状況を看取できた。間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、間仕切りbの上に位置するP10を除いて、そうした痕跡は確認できなかった。

落ち込みのコーナーにP1とP2を検出した。他の住居同様に落ち込みのコーナーに支柱穴があるものと推定される。落ち込みの外側、住居の床面からP4、P5の2基の柱穴を検出した。また、住居の内側の際や階段状に落ちる部分にP6～P13、P17、P18の15基の柱穴を検出した。このうち、P7～P13、P17は住居の際にそって円形に並ぶ。P14については、試掘トレンチ断面で埋土中に柱穴のラインを確認した。住居の埋没過程では柱が残っていたものと推定される。

落ち込みの底面には、多量のカーボンや赤色化した粘土塊がみられ、地床炉があったものと考えられる。試掘トレンチ断面でも床面の貼床を確認することはできなかったが、落ち込みの底面については、5～10cm前後の厚さで明瞭に貼床が残る部分がある。

7号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	16	15	19	P 9	9	9	9
P 2	20	17	38	P 10	12	10	20
P 3	16	16	34	P 11	15	15	15
P 4	20	15	9	P 12	25	20	24
P 5	18	14	15	P 13	30	25	24
P 6	21	15	21	P 14	30	26	13
P 7	13	10	8	P 15	15	7 + a	75
P 8	11	10	10	P 16	12	5 + b	35

7号住居出土遺物

SA07-1は、甕形土器の突帯部の破片である。口縁部へと続く頸部屈曲部に1条の突帯が巡る。

SA07-2は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部を肥厚させるもので口唇端部はわずかに窪む。床面にめり込んで出土した。

SA07-3は、鉢形土器の胴部～底部の破片である。脚台見込み部は上底となり、断面はドーム状を呈す。

SA07-4は、壺形土器の底部の破片である。平底を呈する。

SA07-5は、鉢形土器の底部の破片である。脚台はもたず、かすかに上底になる。

SA07-6は、頁岩製の磨製石鏃である。調整は粗く、基部は意図的に作り出されていない。研磨はa面・b面全体には及ばず、凸部の高い部分のみに研磨痕が残されている。全体的な形態はSA07-7と類似する。

SA07-7は、頁岩製の磨製石鏃で、研磨は両面のほぼ全体に及んでいる。両側縁の剥離痕は、研磨面を切ることから、完成後、磨製石鏃を装着するための調整と考えられる。先端部は鋭利さを欠き、やや丸みを帯び、研磨面の状態から、使用による先端部欠損による再整形か、元々丸みをもつ別の用途のため作製されたか不明である。

SA07-8は、軽石加工品で、楕円形の軽石に浅い溝が掘り込まれ、中央付近に貫通しない穿孔が施される。

SA07-9は、砂岩製の砥石兼穿孔具である。a面中央部に帯状の砥面がある。先端部の研磨痕とその稜から、先端部は何らかの穴を穿孔するためのものと考えられる。例えば、軽石製品の穿孔のための工具とも考えられる。

SA07-10は、砂岩製の砥石である。a面・b面を含む四面に砥面が認められる。砥面の形状は、断面円弧状を呈している。上下両端と各稜の部分に敲打痕が認められる。

SA07-11は、砂岩製の砥石である。砥面は、a面に約2.7cm幅の断面円弧状のものが2条と両側面に認められる。裏面とe面は大きな剥離面で構成されており、一部が欠損している。

8号住居

8号住居は、第11層（暗紫コラ）上面で検出した直径約6mの円形プランの住居である。北側に台形状に張り出す部分があり、出入り口の可能性もある。

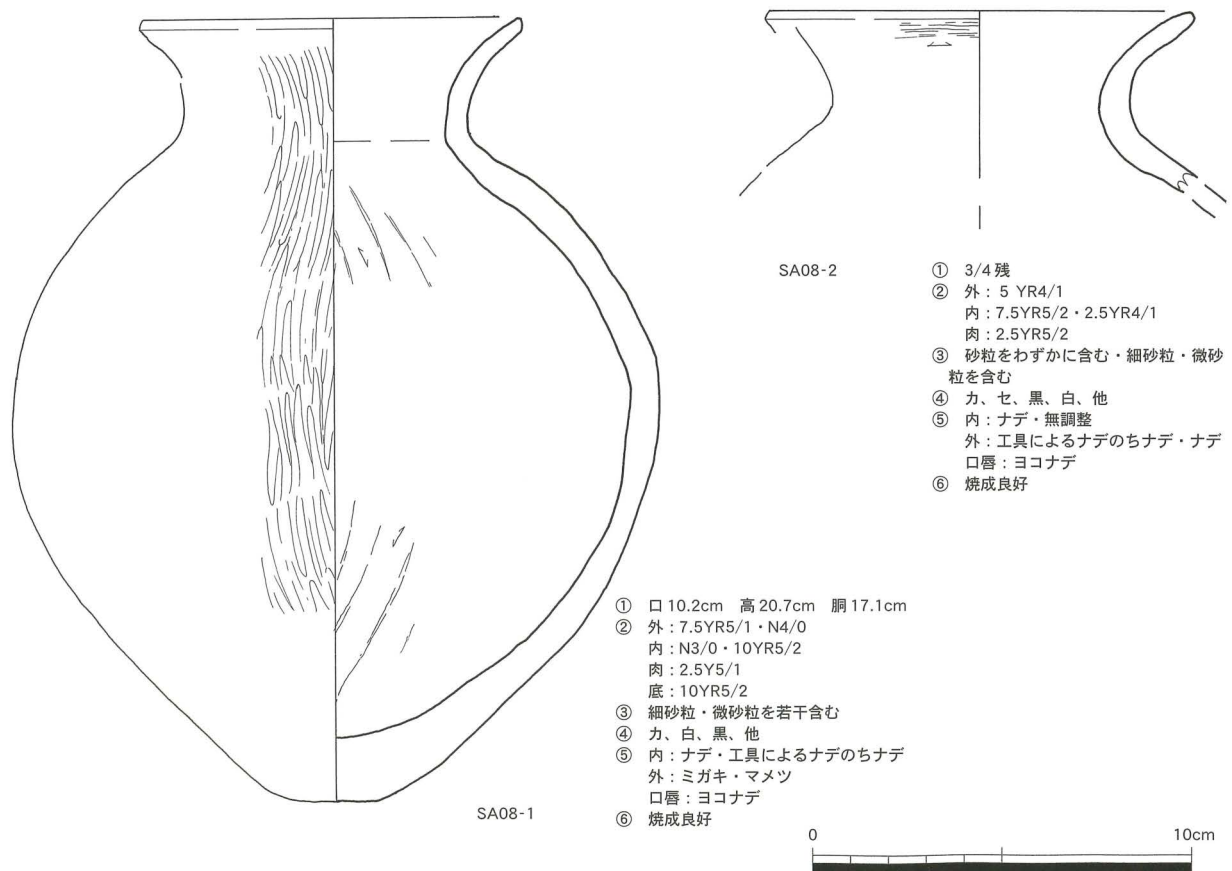


図76. 8号住居出土遺物実測図



図77. 9号住居平・断面図 (S=1/25)

住居の東側を除く2/3程の範囲は、7号住居に一部みられたように、最初の掘り込みから階段状に落ち、幅30～50cm程度のテラス状のエリアがある。テラス状の部分と同じ高さから、住居内のスペースをほぼ等分する形で7つの間仕切りが住居の中央に向かってのびる。間仕切りの造られた方を確認するために間仕切りD～Iに試掘トレンチを設け、断面を確認したところ、間仕切りA、B、D～Gは、12層bと同色、同質の土壌で、断面に層の境界線もみられなかったため、地山

(12層b)を掘り残して造られているものと考えられる。間仕切りCは、12層b、または12層cより若干黒色を帯び、断面に層の境界線がみられたため、後で造り付けられたものであることがわかった。間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、間仕切りAの上に位置するP8を除いて、そうした痕跡は確認できなかった。

住居の中央には、長径約2.6m、短径約2.4mの隅丸方形の落ち込みがある。落ち込みの深さは、床面から約25cmを測る。落ち込みの中央付近にはカーボンが集中してみられ、地床炉があったものと思われる。また、中央付近からは、略完形品の壺形土器が横になって埋納された状態で出土した。上を向いた胴部の約1/2は欠損していた。

落ち込みの4コーナーからは、主柱穴とみられるP1～P4が検出された。また、P3とP4の間にP16を検出した。床面からはP6、P7、P13の3基の柱穴を、住居の落ち際やテラス状の部分から、P9～12の4基の柱穴を検出した。なお、8号住居の埋土の断面で、まっすぐに立ち上がるP1の柱の痕跡を確認した。住居の埋没過程では柱が残っていたものと推定される。

住居の南西側には、円形住居のカーブに沿うような形で、約2.5mの長さの浅い溝が検出された。雨落ち溝等の付帯遺構の可能性はある。

8号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	32	26	25	P 4	18	15	20
P 2	30	24	12	P 5	14	13	17
P 3	23	21	18	P 6	17	17	9

8号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 7	20	16	5	P 12	20	15	45
P 8	14	12	8	P 13	17	16	14
P 9	22	16	19	P 14	27	25	24
P 10	30	23	13	P 15	32	23	16
P 11	23	19	25	P 16	28	18	14

8号住居出土遺物

SA08-1は、壺形土器の略完形品である。胴部の約1/2が欠損している。落ち込みのほぼ中央の浅い掘り込みの中から横になった状態で出土した。埋納されていたものと思われる。

口径10.2cm、胴部最大径20.7cm、高さ17.1cmを測る。口縁部は外反し、胴部中央付近が膨らむ。底部は、底面が狭い平底を呈す。

外面、及び口縁部内面は黒色を呈し、黒色磨研土器のような外観を呈す。外面はミガキによって仕上げられている。なお、土坑底面に接していた壺の胴部には、鉄分の付着がみられる。

SA08-2は、壺形土器の口縁部～頸部屈曲部の破片である。口径は、約10.6cmを測る。口径や口縁部～頸部の形態から、全体の形もSA08-1に類似するものと推測される。

この他、埋土中から土器片が数点出土したが、いずれも器種や部位を特定できない細片がほとんどであった。

9号住居

9号住居は、6号住居の南、調査区の西際から検出された方形プランの竪穴住居である。東西の短辺約2.5m、南北の長辺約3mを測り、他の住居より規模が小さい。

住居の南側、中心よりやや東にずれたところに浅いピットを検出した。住居の北東部分は、重機によって上面を削平してしまい失われていたが、12層cの上面で、より黒色を帯びる土壌の範囲を検出した。住居の東辺に対

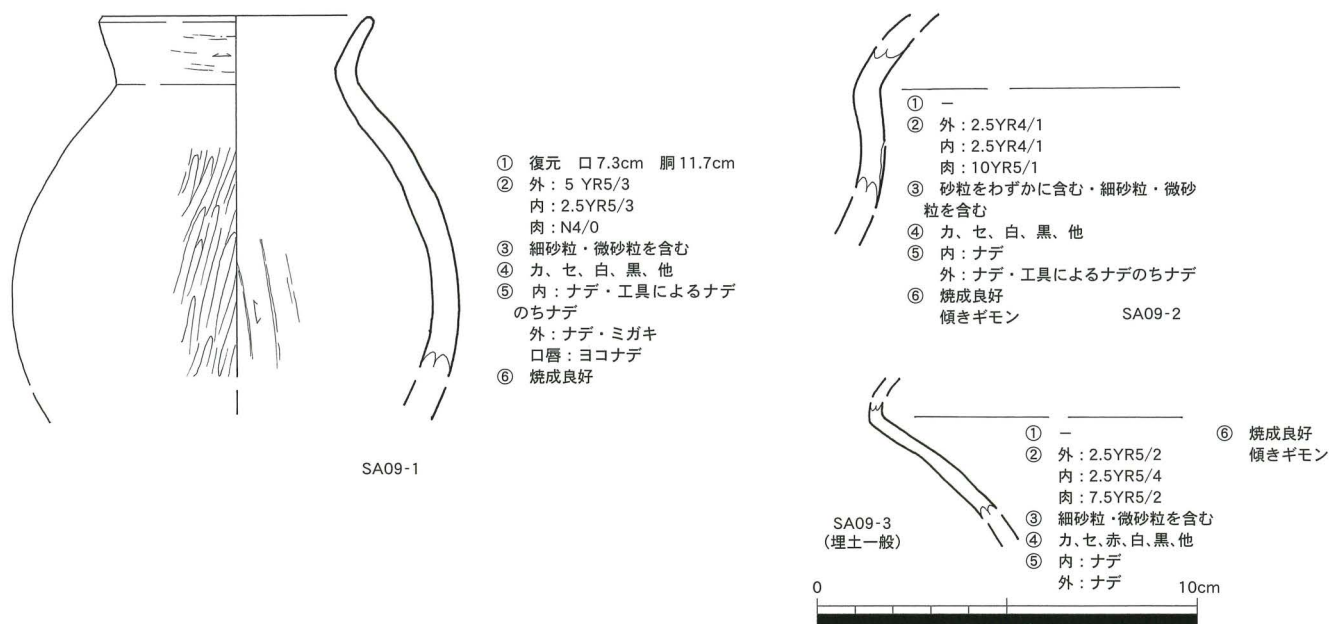


図78. 9号住居出土遺物実測図

応することから、竪穴掘削時の掘り方の範囲と推定した。

住居の中央部分、やや北よりのところに地床炉とみられる焼土とカーボンの集中する範囲を確認した。

住居の内部、及び周辺を精査したが、柱穴は確認されなかった。

9号住居出土遺物

SA09-1は、小型の壺形土器の口縁部～胴部の破片である。口径7.3cm、胴部最大径11.7cmを測る。口縁部は

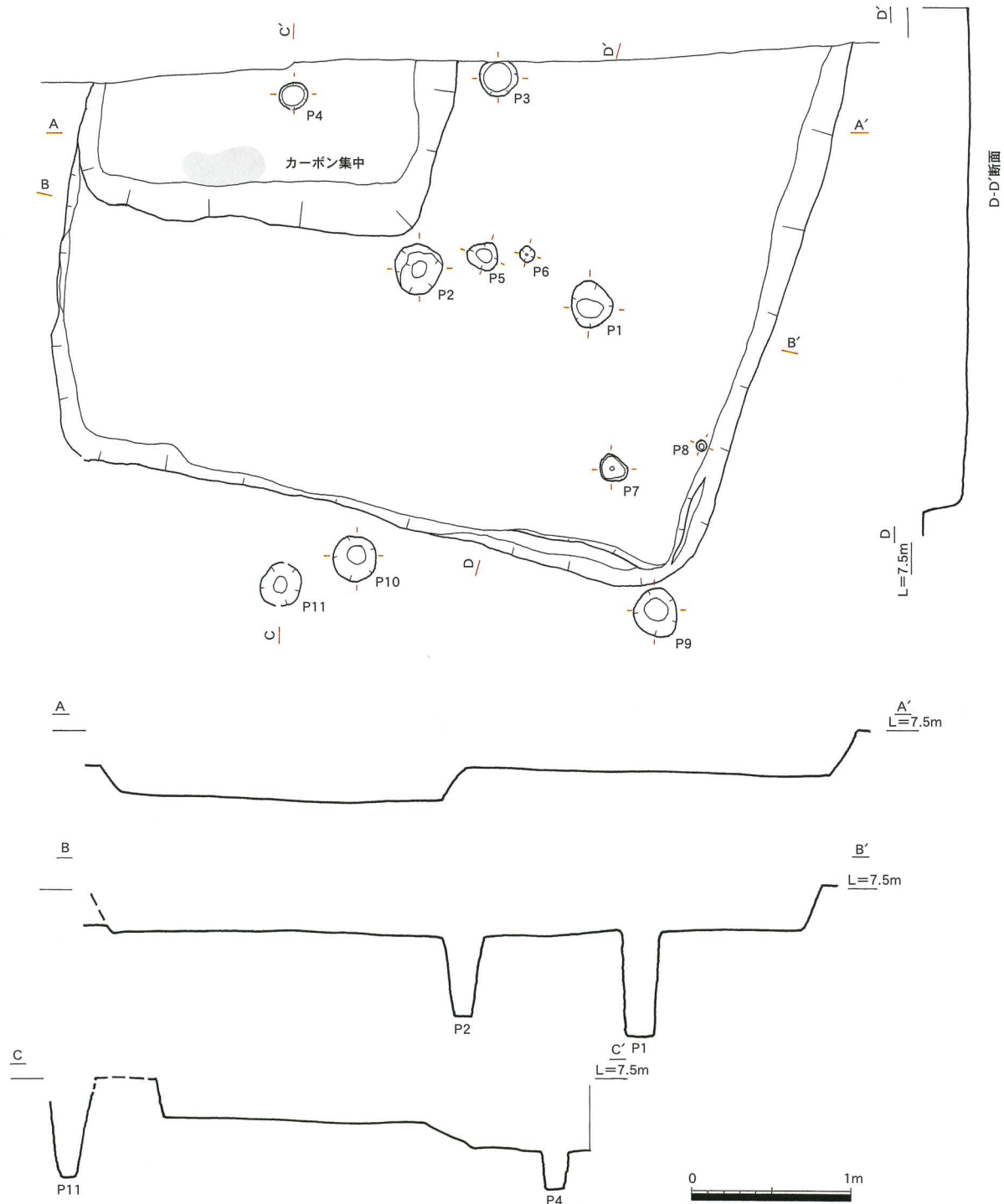


図79. 10号住居平・断面図 (S=1/40)

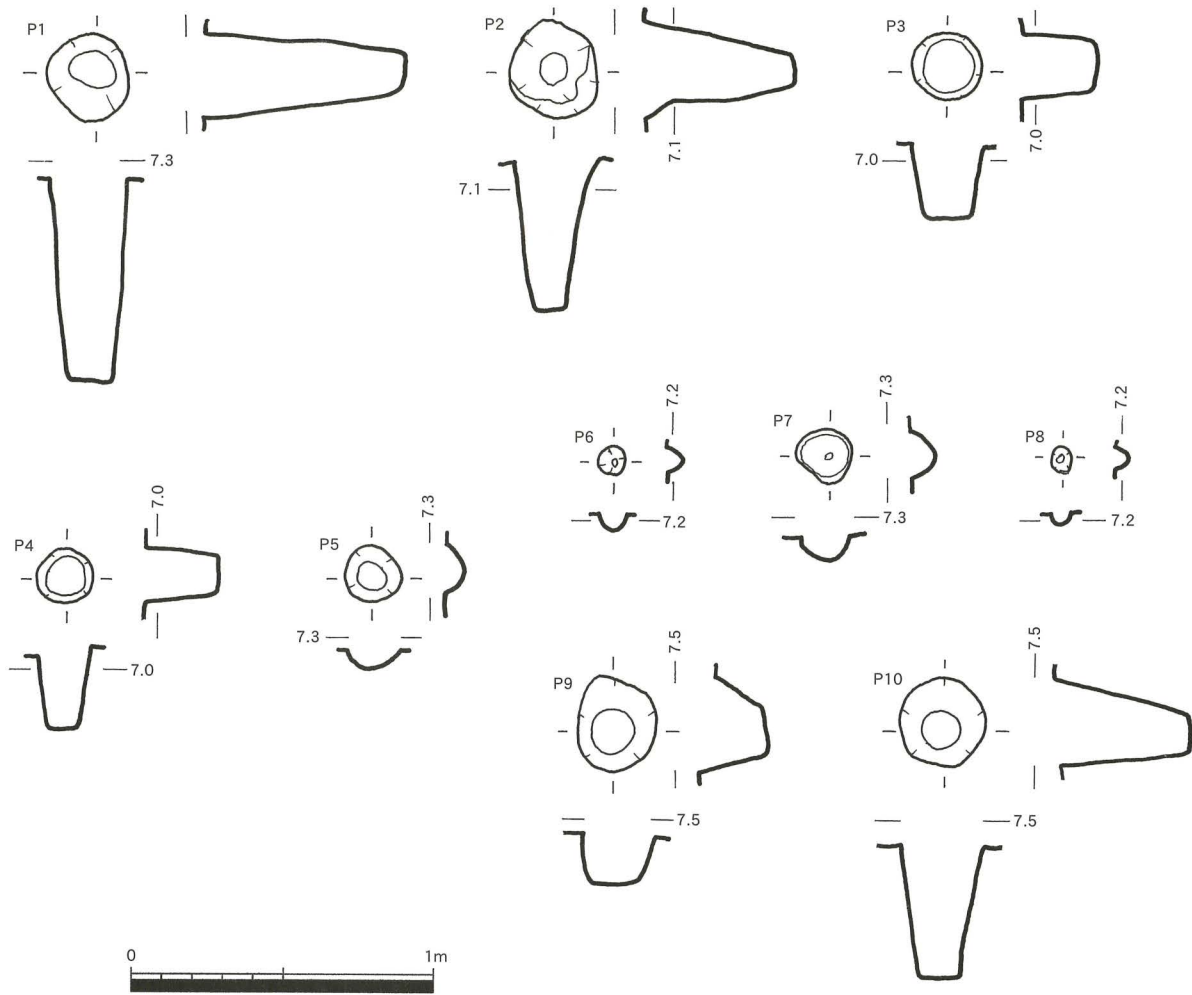


図80. 10号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)

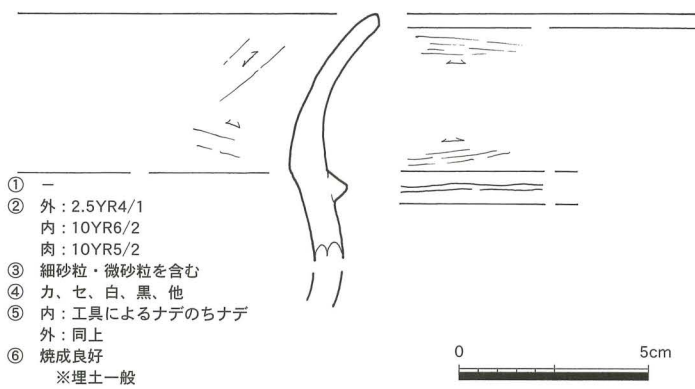


図81. 10号住居出土遺物実測図

「く」の字に外反する。外面はミガキによって仕上げられている。

SA09-2は、完形品の頸部屈曲部の破片である。外反する口縁部へと続き、屈曲部外面に稜をもつ。

SA09-3は、小型の壺形土器の頸部屈曲部～肩部の破片である。屈曲部外面に稜をもつ。

この他、埋土中から土器片が数点出土したが、いずれも器種や部位を特定できない細片がほとんどであった。

10号住居

10住居は、20年度調査区の西際から検出された方形プランの竪穴住居である。約1/2を検出した。東辺約4m、確認した北辺約3.6mを測る。

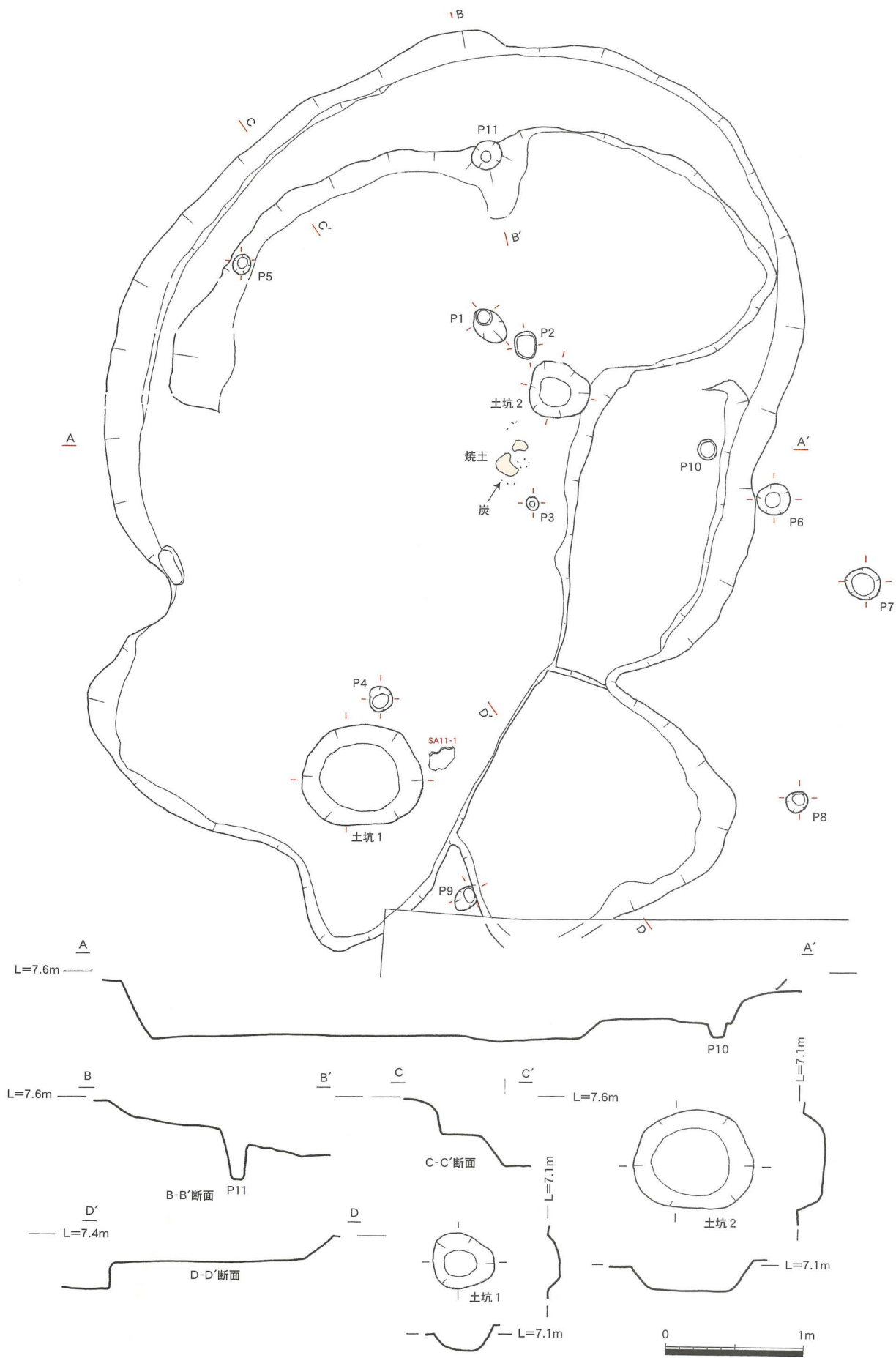


图82. 11号住居平·断面图 (S=1/40)

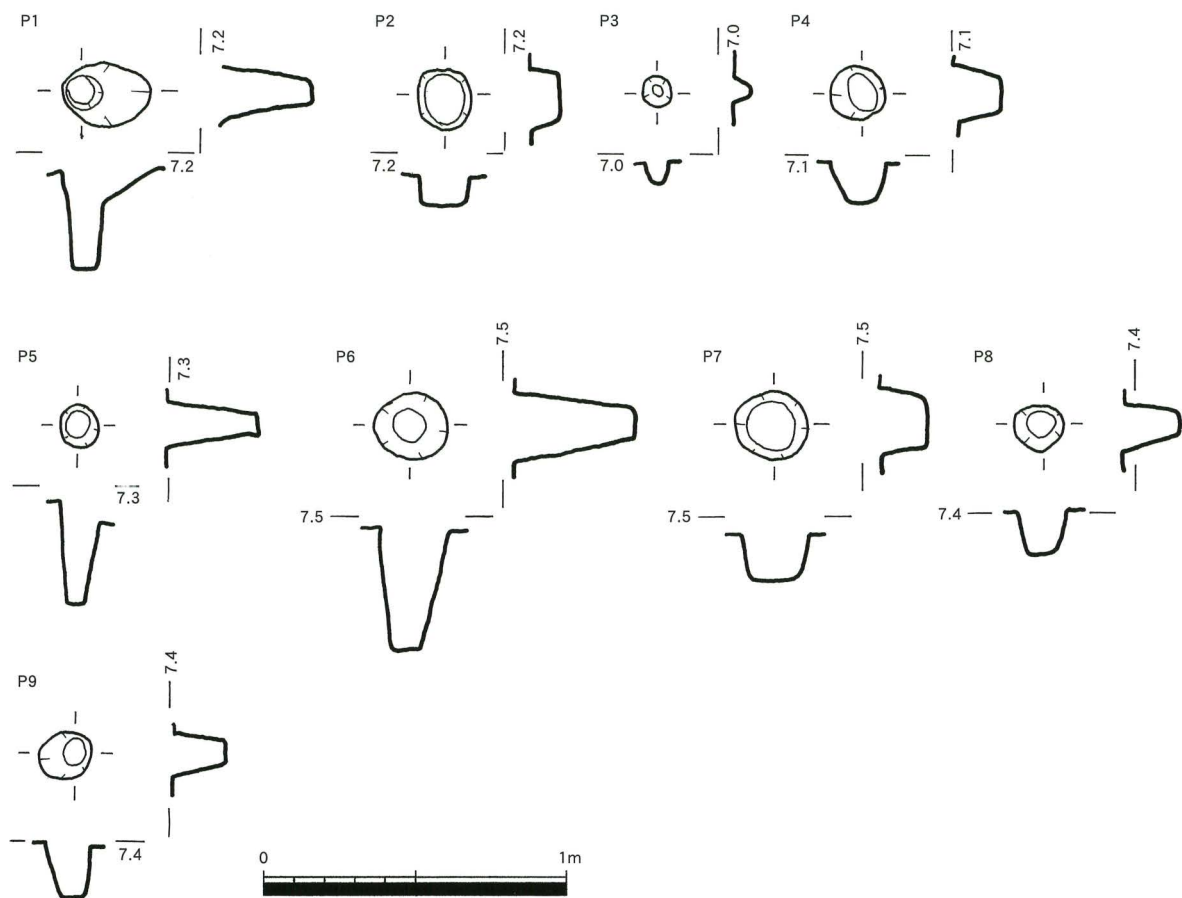


図83. 11号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)

住居の南側には、東辺約2m、深さ約20cmの方形とみられる落ち込みが南辺に接するように設けられている。落ち込みの底面東側に地床炉とみられるカーボンの集中する範囲が確認できた。

床面にあるP1、P2、P3は支柱穴とみられる。その他、P4～8の浅い柱穴を住居内で確認、竪穴の東側でもP9～11の3基の柱穴を確認した。なお、住居の南東コーナーは、11号住居に切られている。

10号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P1	29	27	59	P7	18	18	9
P2	32	30	50	P8	9	7	6
P3	24	22	26	P9	30	25	19
P4	18	18	28	P10	28	27	46
P5	19	18	8	P11	29	26	65
P6	8	8	7				

10号住居出土遺物

SA10-1は、甕形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部は外反し、頸部屈曲部に1条の突帯が巡る。屈曲部内面には稜をもつ。

この他、埋土中から土器片が数点出土したが、いずれも器種や部位を特定できない細片がほとんどであった。

11号住居

11号住居は、20年度調査区南側から検出された。円形プランに2つの方形の張り出し部分をもつ住居で、平面は、おもちゃの金魚の貯金箱のような形状となる。

円形部分の東側は、7、8号住居と同様に階段状に掘り込まれ、幅20～60cmのテラス状の平坦部分をもつ。

円形部分のセンターライン付近には短い間仕切りがある。間仕切りは、地山（12層b）を残して造り出されている。間仕切りの上面にピットや板材等を設置した痕跡がないかどうか精査したが、そうした痕跡は確認できなかった。

住居の南側には、幅約1m、長さ約2mのベッド状遺構があり、その西側に数cm落ちて方形の張り出し部1が造られている。張り出し部1の床面にはカーボンが見られた。

張り出し部2の床面は、円形部分の床面と同じレベルで、張り出し部1よりのところに長径約90cm、短径約60cmの楕円形の土坑1が設けられている。

ベッド状遺構の下場に接して検出された土坑2付近にはカーボンが分布し、土坑2とP5の間には焼土がみられたことから、この付近が地床炉と考えられる。

住居の内部からP1～P7の柱穴を検出した。他の住居に見られるような規則性は見出せない。P3、P7はテラス状平坦部の落ち際に確認された。P2、P6は浅いが、P1、P3は30cm程度の深さを測るため、キーホストの可能性はある。

11号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	30	15	35	P 7	24	24	16
P 2	20	17	11	P 8	17	15	20
P 3	10	10	9	P 9	17	16	20
P 4	18	17	17	P 10	14	12	11
P 5	14	13	36	P 11	21	20	36
P 6	24	20	40	P 12			

11号住居出土遺物

SA11-1は、床上5cmのところから出土した壺形土器の底部～胴部の破片である。底部は平底を呈するものと推測される。

埋土中から土器片が数点出土したが、いずれも器種や部位が特定できない細片であった。

12号住居

12号住居は、20年度調査区南側で検出された。コーナーの一部が調査区内で検出されたが、残りの部分は調査区外ににげている。方形プランをなすものと推定される。

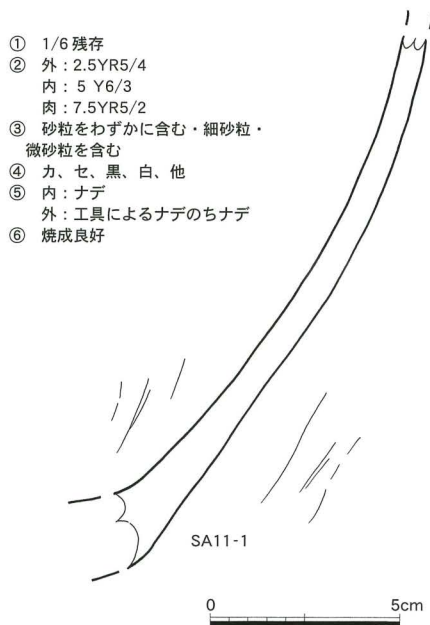


図84. 11号住居出土遺物実測図

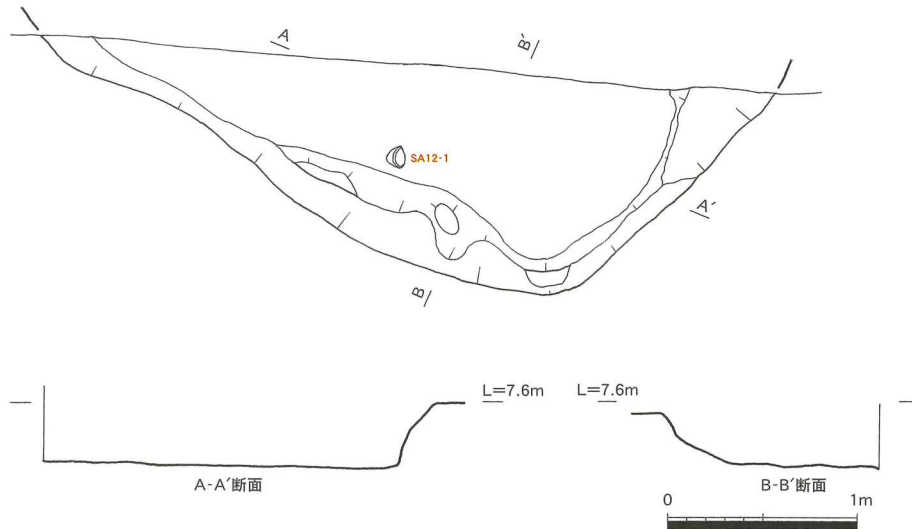


図85. 12号住居平・断面図 (S=1/25)

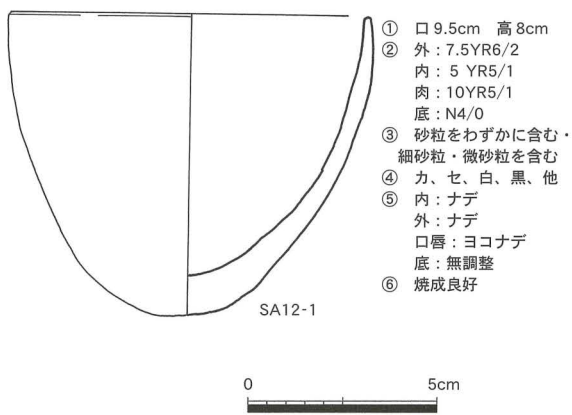


図86. 12号住居出土遺物実測図

12号住居は、第9層cから第12層bに掘り込まれており、掘り込み面から床面までの深さは、30~40cm前後を測る。南壁地層断面で住居西側の立ち上がり部分に柱穴を確認した。

床面には数cmの貼床が施されている。住居の周辺から柱穴は確認されなかった。

12号住居出土遺物

SA12-1は、住居床面から出土した鉢形土器の完形品である。口径9.5cm、高さ8cmを測る。底部は丸底で胴部から口縁部にかけて緩やかに開く。口縁部は直行し、口唇端部は丸みを帯びる。

埋土中から土器片数点が出土したが、いずれも器種や部位が特定できない細片であった。

13号住居

13号住居は、20年度調査区の北側から検出された方形プランの住居である。13号住居が検出された近辺は、第11層(暗紫コラ)が明瞭に残っておらず、テフラが遺構検出の手がかりにはならなかった。そこで、土色の異なる範囲があるかどうかを確認するために試掘トレンチを設定し上面を10cm程度掘り下げたところ、12層b中に方形のプランを検出するに至った。

13号住居の平面の規模は約3.8×3.8mで、検出面から30cm程度掘り込まれている。住居の南側に長径約1.4m、短径約1m、深さ約10cmの隅丸方形の落ち込みをもつ。

南東コーナー付近の床面から台石が、落ち込みの内部から砥石が出土した。また、落ち込み内部の砥石の下からは、壺形土器の底部~胴部の破片と小さな砥石が出土した。

落ち込みの北東・北西のコーナー付近に主柱穴とみられるP1、P2を検出、また、南東コーナーと北辺壁際からP3、P4を検出した。竪穴の周辺でもP5~P19の14基の柱穴を検出した。このうち、P12、P14、P17

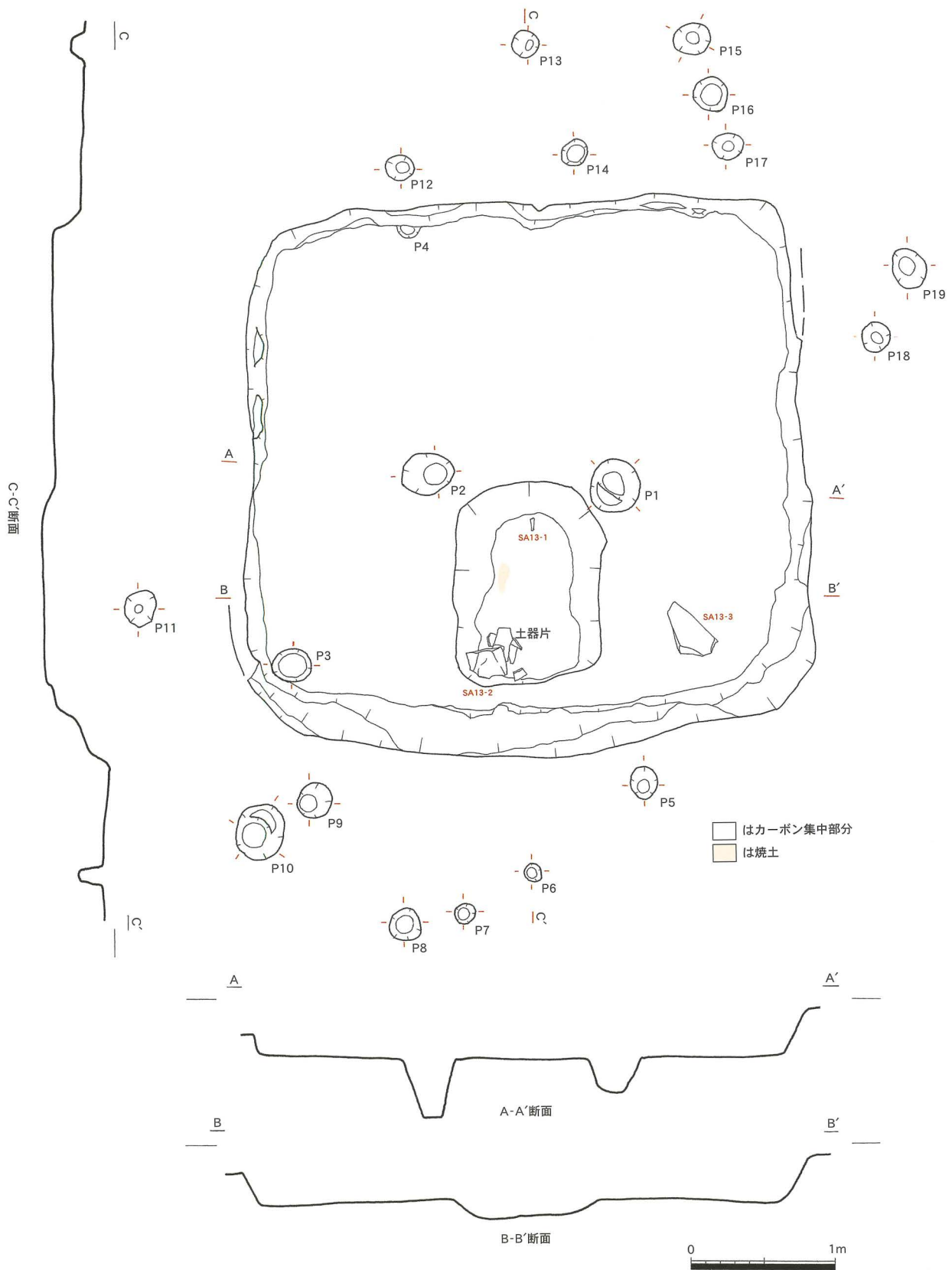


図87. 13号住居平・断面図 (S=1/40)

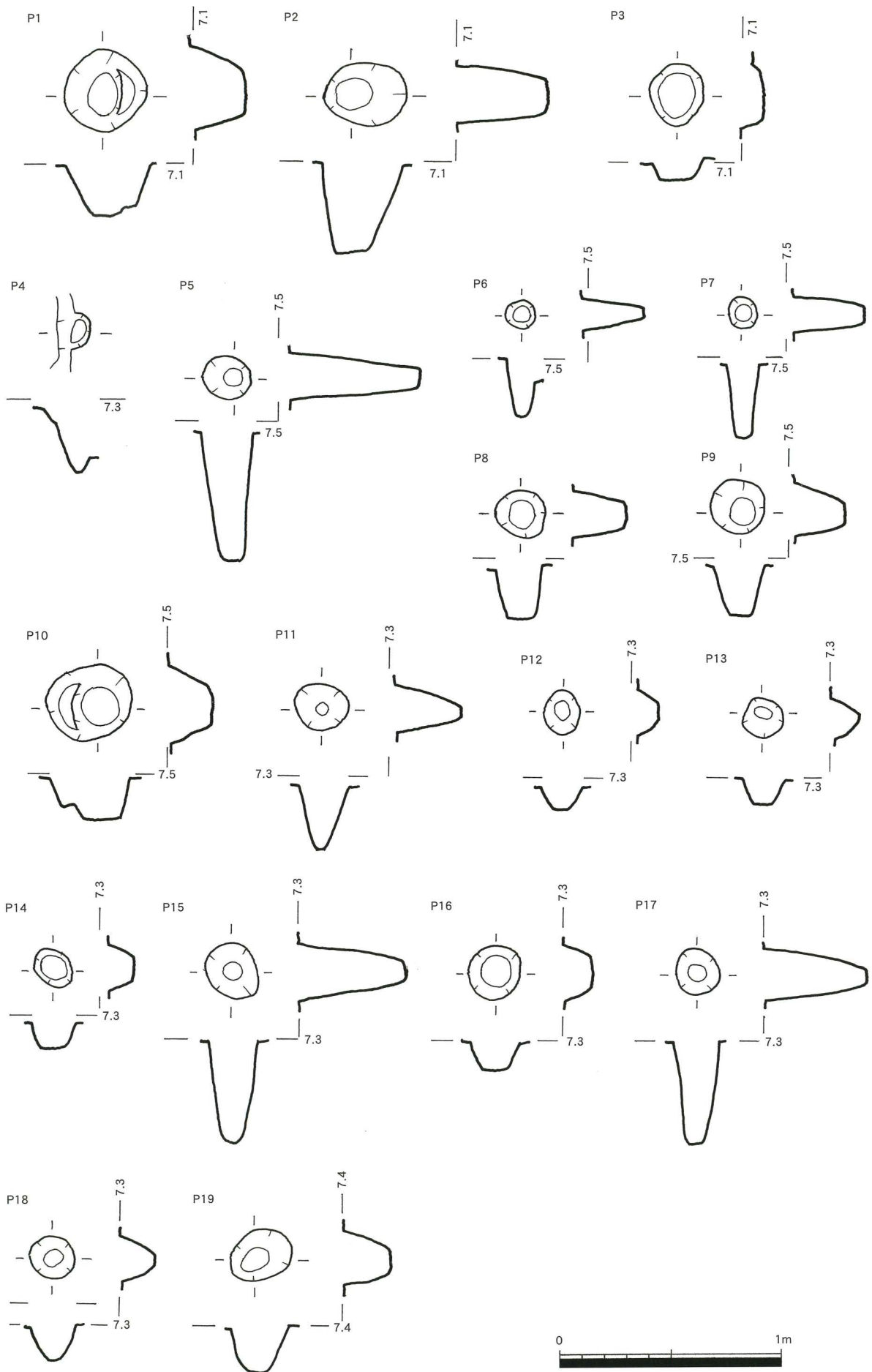


图88. 13号住居柱穴平·断面图 (S=1/25)

は、住居北辺に平行してほぼ等間隔に直線上に並ぶ。

落ち込みの内部の北側付近とP 1、P 2の間あたりにカーボンが集中してみられた。おそらく落ち込み内部の北側が地床炉として使われた場所であろう。床面には厚さ1～2cm程度の貼床が確認できた。

13号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	39	36	27	P 11	25	21	31
P 2	38	26	44	P 12	20	16	12
P 3	28	26	12	P 13	17	17	15
P 4	15	15	10	P 14	17	16	13
P 5	21	19	60	P 15	25	22	50
P 6	14	14	30	P 16	24	23	14
P 7	15	13	34	P 17	20	20	48
P 8	23	20	24	P 18	20	19	17
P 9	24	24	24	P 19	26	23	21
P 10	36	34	21				

13号住居出土遺物

SA13-1は、砂岩製の厚さ1cm程度の板状を素材としており、そのa面に砥面が認められる。全ての面は切断面で構成されており、欠損品の可能性もある。

SA13-2は、砂岩製の砥石である。a面と裏面に断面円弧状の砥面が認められる。特に、a面が顕著であり、a面右側面側の砥面は幅3.5～4cmを測り、磨製石斧などの研磨に使われていた可能性がある。

SA13-3は、安山岩製の厚さ7.5～9cmの板状を素材とした台石である。a面中央部に敲打痕が認められる。凹状になっているが、素材の表面の窪みをそのまま利用したものと考えられる。

14号住居

13号住居の南東コーナーに重なる方形プランの14号住居を検出した。14号住居は13号住居に切られている。14号住居の平面の規模は約3.4×3.4mで、検出面から20cm程度掘り込まれている。

住居の南東側に、13住居同様、長径約1.3m、短径約1.21m、深さ約10cmの隅丸方形の落ち込みをもつ。

この落ち込みの北東・北西のコーナー付近に主柱穴とみられるP 1、P 2を検出した。

13号住居より規模はやや小さいが平面形態の造りは同じである。13号住居に切られているため、貼床は約2/3が失われていた。

床面には厚さ1～2cm程度の貼床が確認できた。なお、14号住居から遺物の出土はみられなかった。

14号住居柱穴法量 (cm)

No.	長	短	深	No.	長	短	深
P 1	18	15	5	P 2	18	15	13

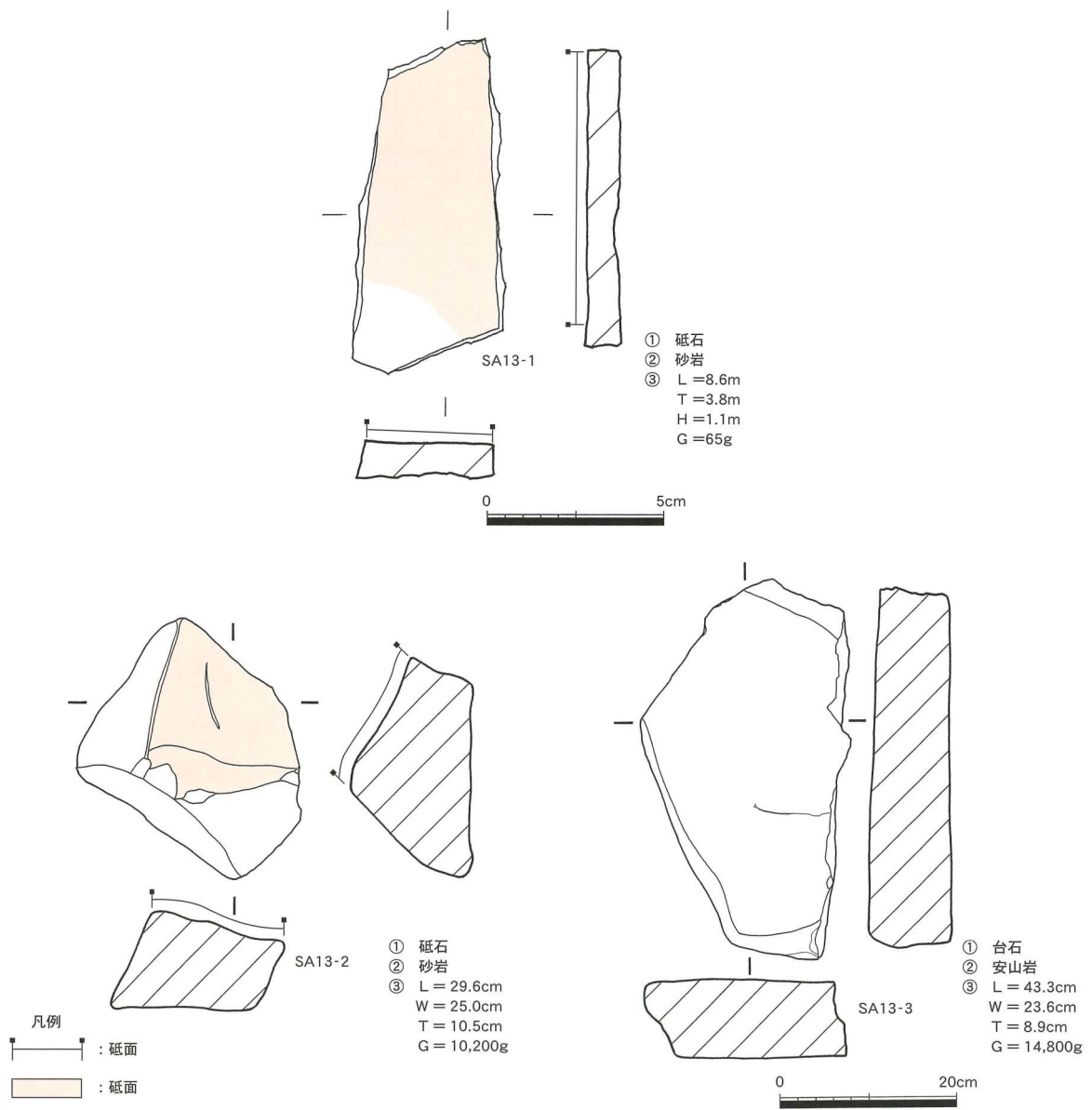


图89. 13号住居出土遺物実測図

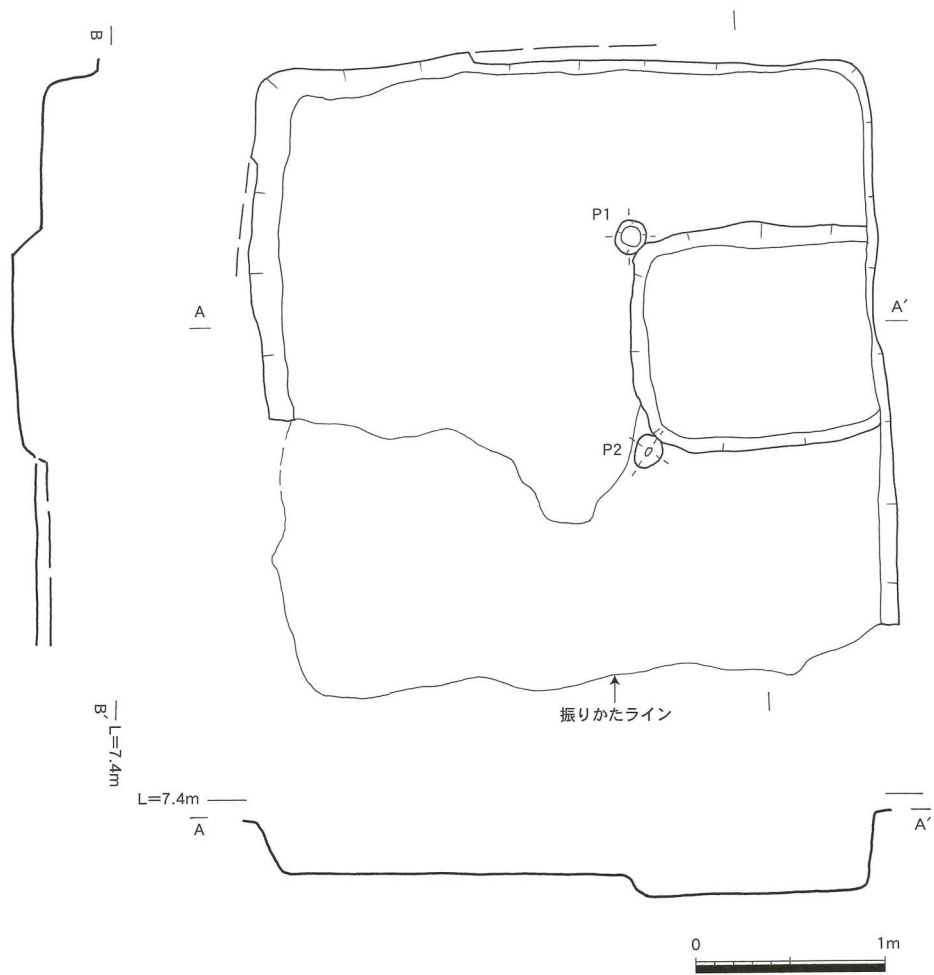


図90. 14号住居平・断面図 (S=1/40)

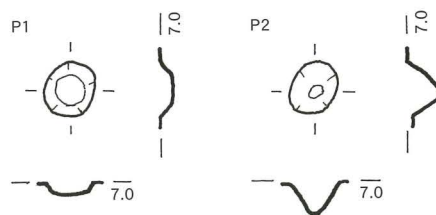


図91. 14号住居柱穴平・断面図 (S=1/25)

第2節 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の ^{14}C 濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前 処 理	測定法
No.1	SA02床面直上	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	SA05埋土上位	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	SA06床上 3 cm	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	SA06床面直上	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	SA07床面直上	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.6	土器内底部附着物	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

試料名	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦 年 代	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	10001	-28.94 \pm 0.13	2005 \pm 25	BC40 - AD20 (68.2%)	BC50 - AD60 (95.4%)
No.2	10002	-31.27 \pm 0.14	1940 \pm 25	AD25 - 85 (64.7%) AD105 - 115 (3.5%)	AD1 - 130 (95.4%)
No.3	10003	-29.68 \pm 0.26	2025 \pm 25	BC50 - AD20 (68.2%)	BC100 - AD60 (95.4%)
No.4	10004	-27.66 \pm 0.15	2050 \pm 25	BC95 - 35 (52.5%) BC30 - AD1 (15.7%)	BC170 - 130 (8.2%) BC120 - AD20 (87.2%)
No.5	10005	-28.61 \pm 0.14	1980 \pm 25	BC20 - 10 (4.3%) AD1 - 60 (63.9%)	BC40 - AD70 (95.4%)
No.6	10006	-28.09 \pm 0.16	2130 \pm 25	BC205 - 110 (68.2%)	BC350 - 310 (9.1%) BC210 - 50 (86.3%)

B P：Before Physics (Present)、B C：紀元前、A D：紀元後



No.6は、取上No.974、第12層b出土の土器底部出土位置は図95参照。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサングのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した (較正曲線データはIntCal04、較正プログラムはOxCal3.1)。

暦年代は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で示し、OxCal3.1の確率法により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定の結果、No 1 では 2005 ± 25 年 BP (2σ の暦年代で BC 50 ~ AD 60 年)、No 2 では 1940 ± 25 年 BP (AD 1 ~ AD 130 年)、No 3 では 2025 ± 25 年 BP (BC 100 ~ AD 60 年)、No 4 では 2050 ± 25 年 BP (BC 170 ~ 130、BC 120 ~ AD 20 年)、No 5 では 1980 ± 25 年 BP (BC 40 ~ AD 70 年)、No 6 では 2130 ± 25 年 BP (BC 350 ~ 310、BC 210 ~ 50 年) の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, p.1029-1058.

尾寄大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築 -, p.14-15.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.

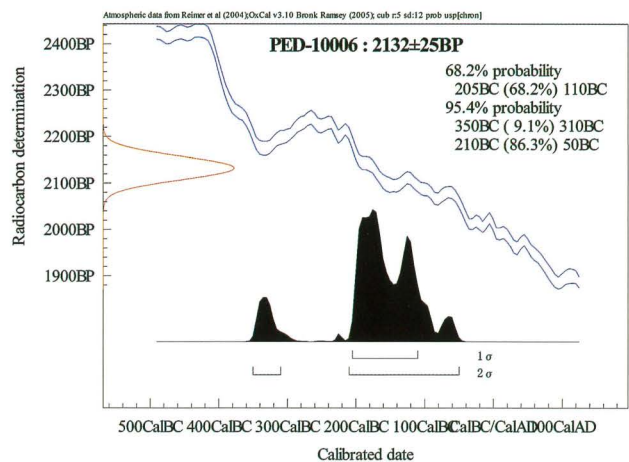
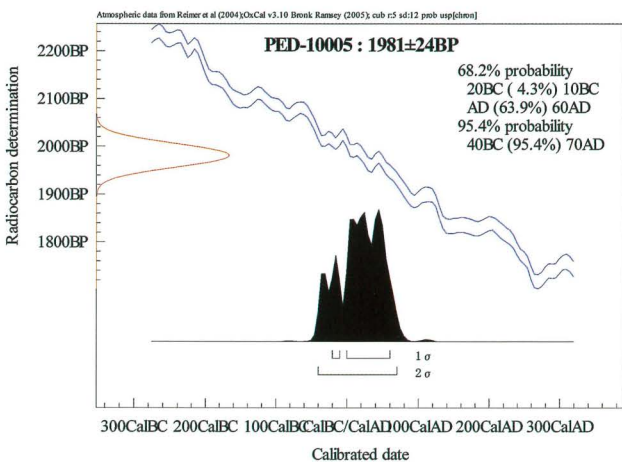
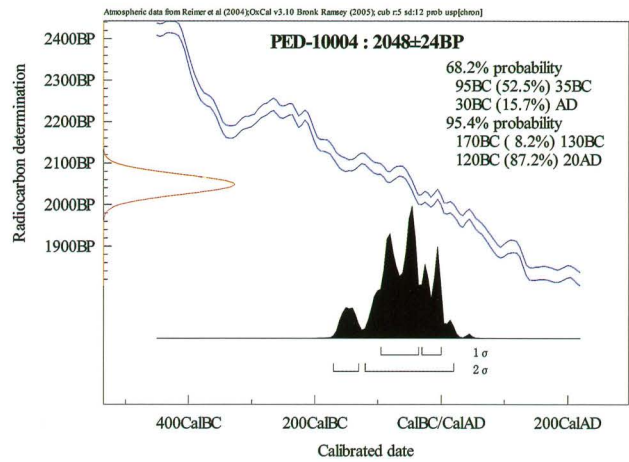
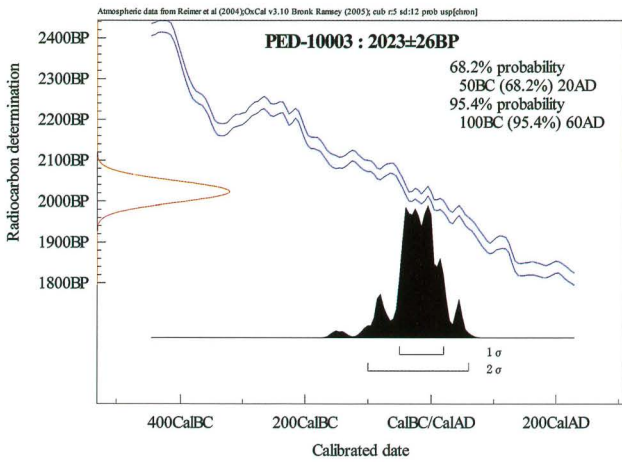
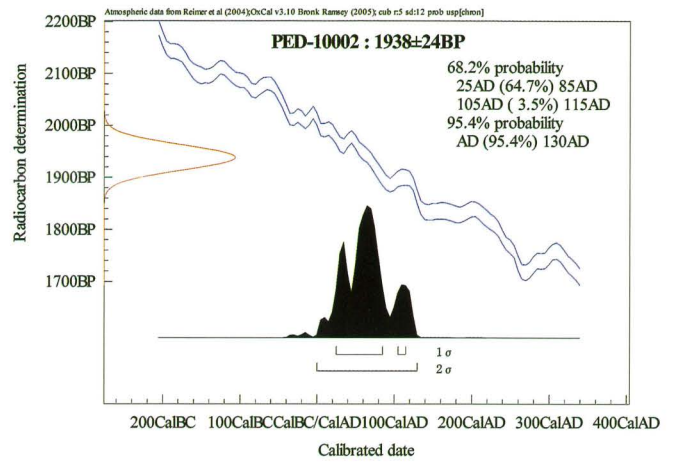
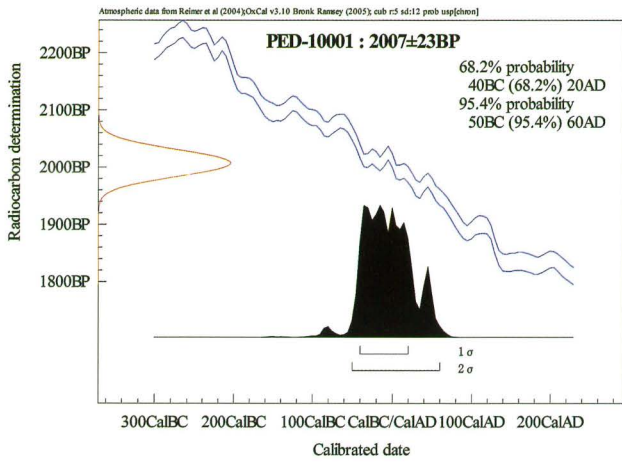


图92. 曆年較正結果

2. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、調査区東壁の 8 a 層から 12 c 層までの層準から採取された 13 点、および住居跡 (SA01~SA09) の埋土や床面直上などから採取された 45 点の計 58 点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

(1) 土壌試料

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスビーズを約 0.02 g 添加 (電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・ 6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W ・ 42KHz ・ 10 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 93、図 94 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ (穎の表皮細胞由来)、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)、ウシクサ族 B (大型)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チ

マキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等
〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、莖部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、樹木Aタイプ、その他

② 植物珪酸体の検出状況

1) 調査区東壁（図93）

下位の12c層（試料11～13）では、樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科なども認められた。イネ科では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。12b層（試料9、10）では、ススキ属型がやや増加し、12a層（試料8）にかけてはマンサク科（イスノキ属）などの樹木が減少している。暗紫コラ層準の11層（試料7）では、植物珪酸体あまり検出されなかった。9-10層（試料5、6）では、樹木のマンサク科（イスノキ属）が比較的多く検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科なども認められた。イネ科では、ススキ属型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。また、試料6ではイネおよびイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体検出された。イネの密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。8c層（試料4）では、樹木についてはおおむね同様の結果であるが、イネ科はほとんど検出されなかった。8b層（試料2、3）ではメダケ節型やネザサ節型、8a層（試料1）ではススキ属型が出現し、8a層ではマンサク科（イスノキ属）などの樹木が減少している。

2) 住居跡（図94）

住居跡（SA01～SA09）の埋土や床面直上などから採取された試料では、ススキ属型が比較的多く検出され、メダケ節型、ネザサ節型なども認められた。また、多くの試料からイネおよびイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体検出され、部分的にキビ族型、ヨシ属なども認められた。樹木では、マンサク科（イスノキ属）が比較的多く検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科なども認められた。

イネは、SA01～SA09のすべての遺構から検出された。このうち、SA09の試料1（埋土上位）と試料2（埋土中位）では、密度が8,000個/gおよび6,400個/gと高い値であり、その他の試料では3,000個/g未満と比較的低い値である。イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体は、SA01とSA04を除く各遺構から検出されたが、いずれも少量である。

ススキ属型は、分析を行ったすべての試料から検出された。このうち、SA02の試料3（床面直上）、SA03の試料2（床面直上）、SA05の試料2（埋土下位）では、密度が10,000個/g以上と高い値であり、調査区東壁（基本土層）におけるススキ属型の最大値である12b層（試料9）の6,200個/gを上回っている。

ヨシ属は、SA01とSA04を除く各遺構の床面直上などから検出された。密度は600～2,000個/gと比較的低い値であるが、調査区東壁（基本土層）ではヨシ属は検出されていない。

その他の分類群については、調査区東壁（基本土層）の9-10層および12a層～12c層とおおむね同様の結果であり、とくに明瞭な特徴は認められなかった。

5. 考察

(1) 調査区東壁

弥生時代中期とされる12c層から12a層にかけては、ススキ属やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属、カシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。

弥生時代後期～古墳時代とされる9-10層でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、メダケ属（メダケ節やネザサ節）はあまり見られなくなったと推定される。同層下部ではイネおよびイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が検出された。密度は低い値であるが、上位層準では検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

古墳時代とされる8c層の堆積当時は、おもにシイ属、クスノキ科、イスノキ属、カシ類などの照葉樹林が分布しており、イネ科の草本類はほとんど見られなかったと考えられる。その後、青コラ（7世紀後半）直下の8a層にかけては、ススキ属やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが見られるようになり、シイ属やイスノキ属などの照葉樹林は減少したと推定される。

(2) 住居跡

住居跡（SA01～SA09）の埋土の堆積当時は、ススキ属やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属、カシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。

SA09の埋土では、イネが多量に検出され、その他の遺構でも埋土や床面からイネが検出された。また、イネの籾殻に由来する植物珪酸体も、多くの遺構から検出された。このことから、当時は遺跡周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で住居跡内に稲藁や籾殻が持ち込まれたと推定される。稲藁の利用としては、屋根材や敷物、藁製品など多様な用途が想定される。

SA02やSA03の床面直上、SA05の埋土下部などではススキ属が比較的多量に検出され、SA02、SA03、SA05、SA07の床面直上などでは少量ながらヨシ属が検出された。これらの植物についても、屋根材など何らかの形で住居跡内に持ち込まれた可能性が考えられる。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告、31、p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)、p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社、p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、9、p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学、17、p.73-85.

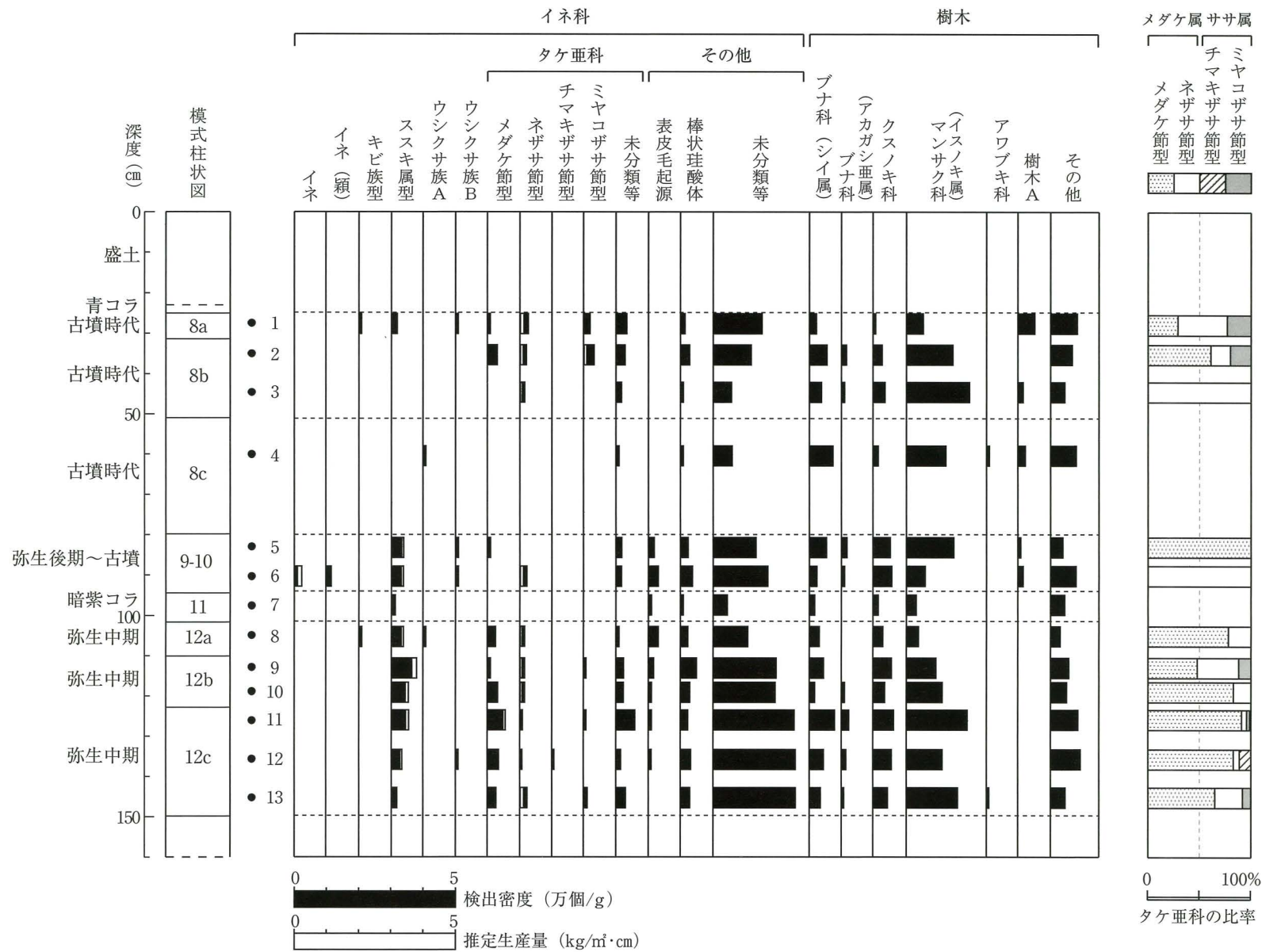


図93. 南丹波遺跡、調査区東壁における植物珪酸体分析結果

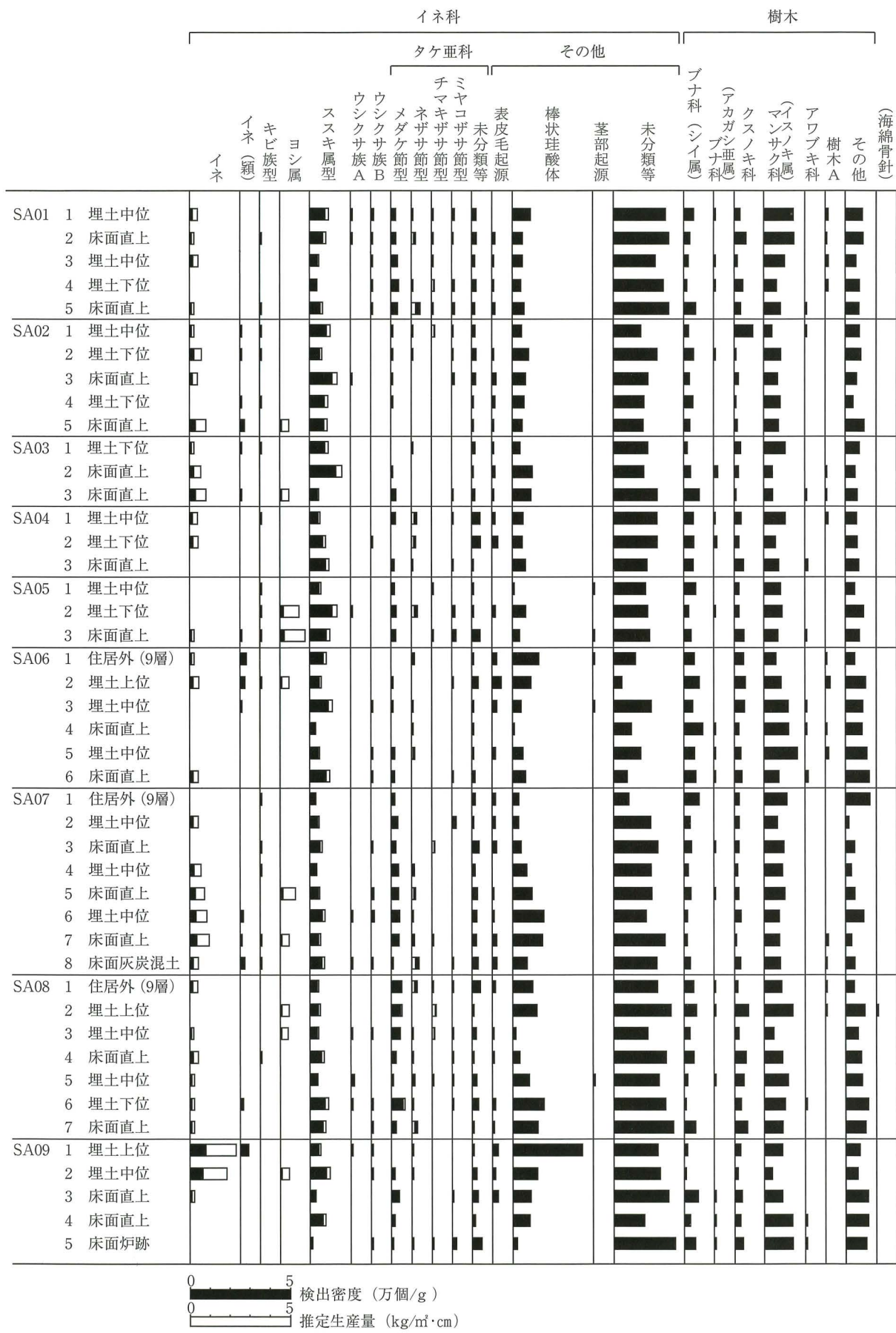
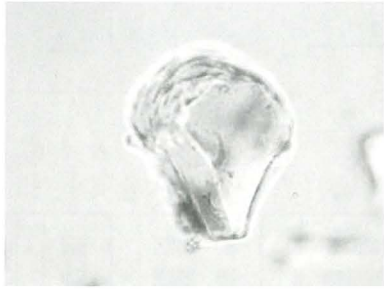
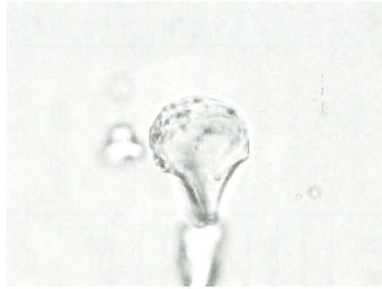


図94. 南丹波遺跡、住居跡関係試料の植物珪酸体分析結果

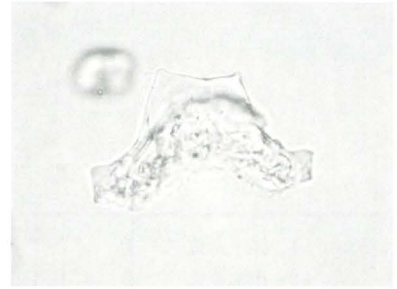
南丹波遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



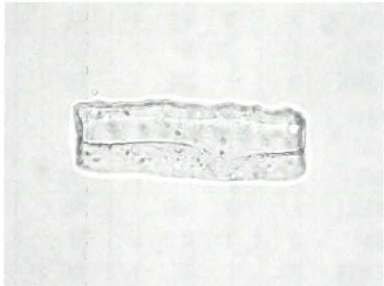
イネ
S A02 5



イネ
S A06 2



イネの籾殻 (穎の表皮細胞)
S A03 1



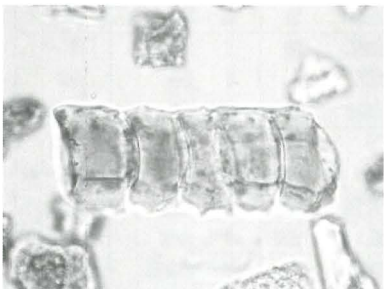
キビ族型
S A07 7



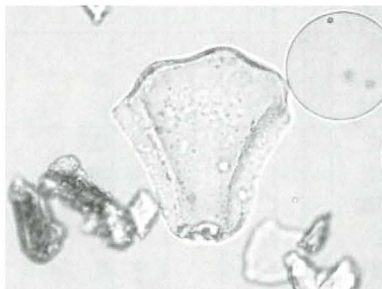
ヨシ属
S A03 3



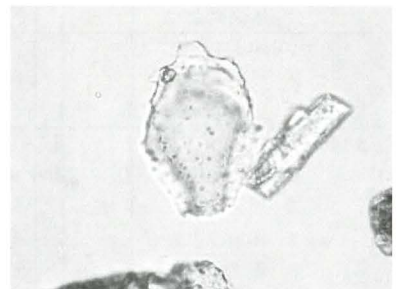
ススキ属型
S A06 3



ススキ属型
S A03 2



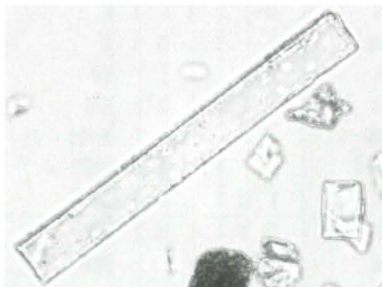
ウシクサ族B
S A06 3



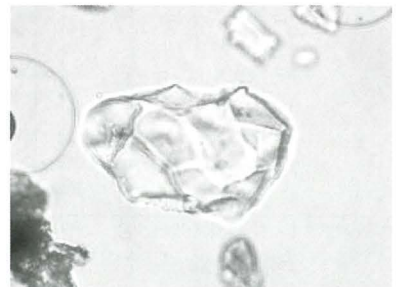
メダケ節型
S A05 2



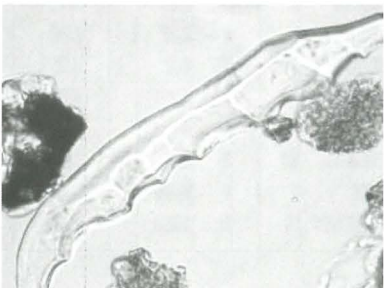
ネザサ節型
調査区東壁 1



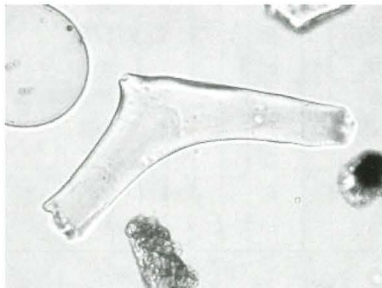
棒状珪酸体
S A01 1



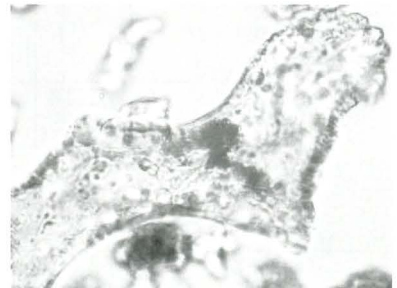
ブナ科 (シイ属)
調査区東壁 2



クスノキ科
調査区東壁 5



マンサク科 (イスノキ属)
S A05 2



樹木A
S A01 4

50μm

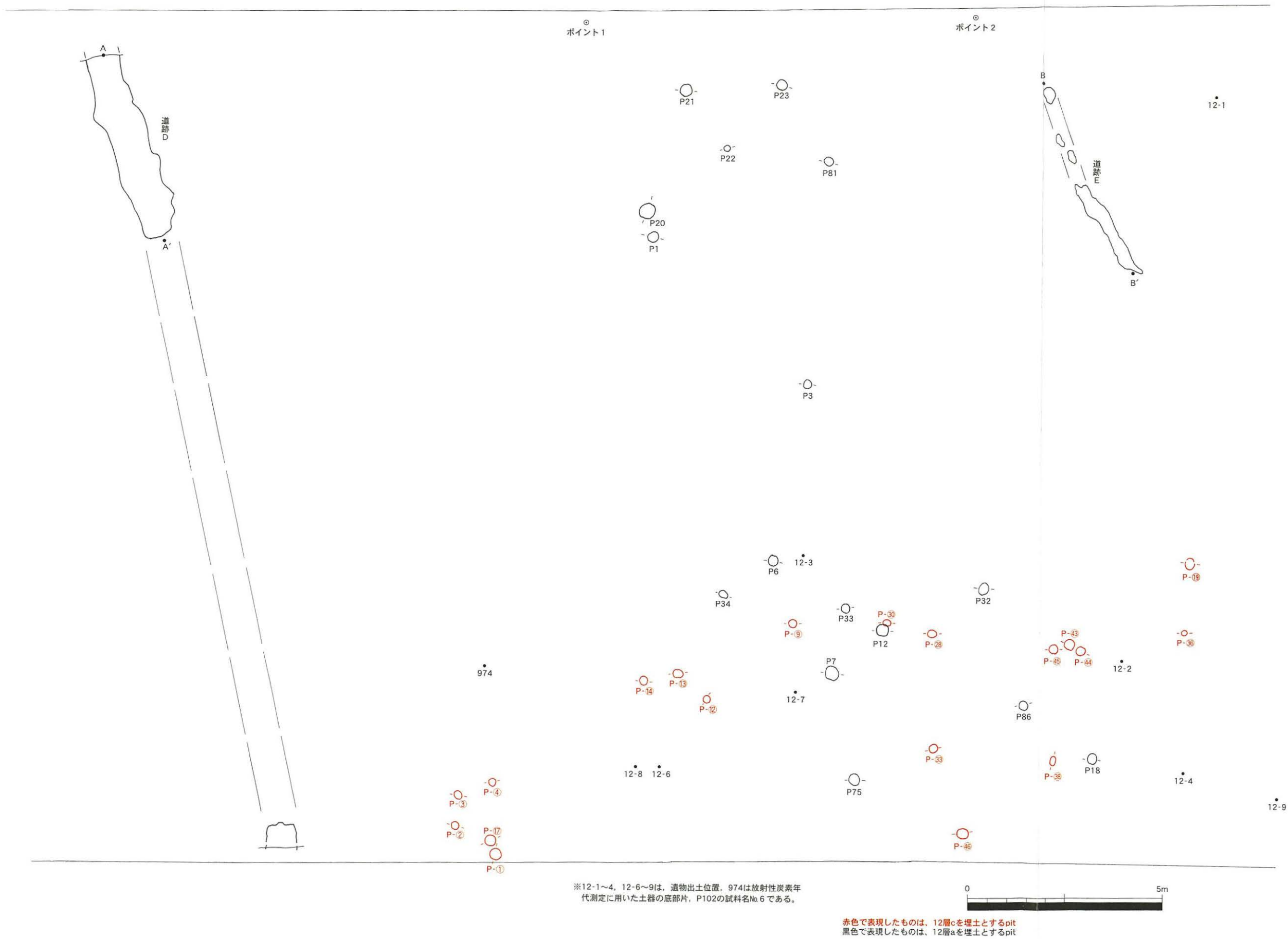


図95. 弥生時代柱穴 道跡検出状況図 (S=1/100)

第3節 弥生時代中期

1. 道跡

道跡A

道跡Aは19年度調査区のほぼ中央、第12層 a の上面で検出した。

東西方向に南北に5 mのび、最大幅は約1.2mを測る。

調査区東壁際でも第12層 a の上面で、ほぼ同じ幅の硬化面を検出しており、連続する道跡と考えられる。

山中式土壌硬度計を用いて土壌硬度試験を実施した。測定方法は、硬化面と硬化面以外の部分があるように最大幅の部分で20×190cmのグリッドを設定し、10cmメッシュ中3点を計測、硬化面と認識した部分と硬化していないと認識した部分についてそれぞれ平均値を出し支持強度P値に換算した。

その結果、硬化面では約42.17kg/cm²値を、周辺部分では約11.007kg/cm²の値を得、路面部分が周辺に比べて約4倍硬いことがわかった。

道跡B

19年度調査区の南側の第12層 b 上面で南北にのびる道跡Bを確認した。

最大幅は約40cm、長さは、約3 mを測る。なお、北側にもブロック状の硬化面が点在することから、これらは一連の道跡と考えられる。

試掘トレンチを設定し、断面を確認したところ、厚さ約2 cmの硬化土壌を確認した。

道跡A同様に土壌硬度試験を実施した。その結果、硬化面では約17.66kg/cm²値を、周辺部分では約6.85kg/cm²の値を得、路面部分が周辺に比べて約2倍硬いことがわかった。

2. ピット群

12層 b の上面で、12層 a を埋土とするピット15基と、12層 d の上面で、12層 c を埋土とするピット19基を検出した (図95参照)。

ピットの分布に規則性は見出せず、検出状況からは建物等のプランをなすものかどうか判断し得なかった。

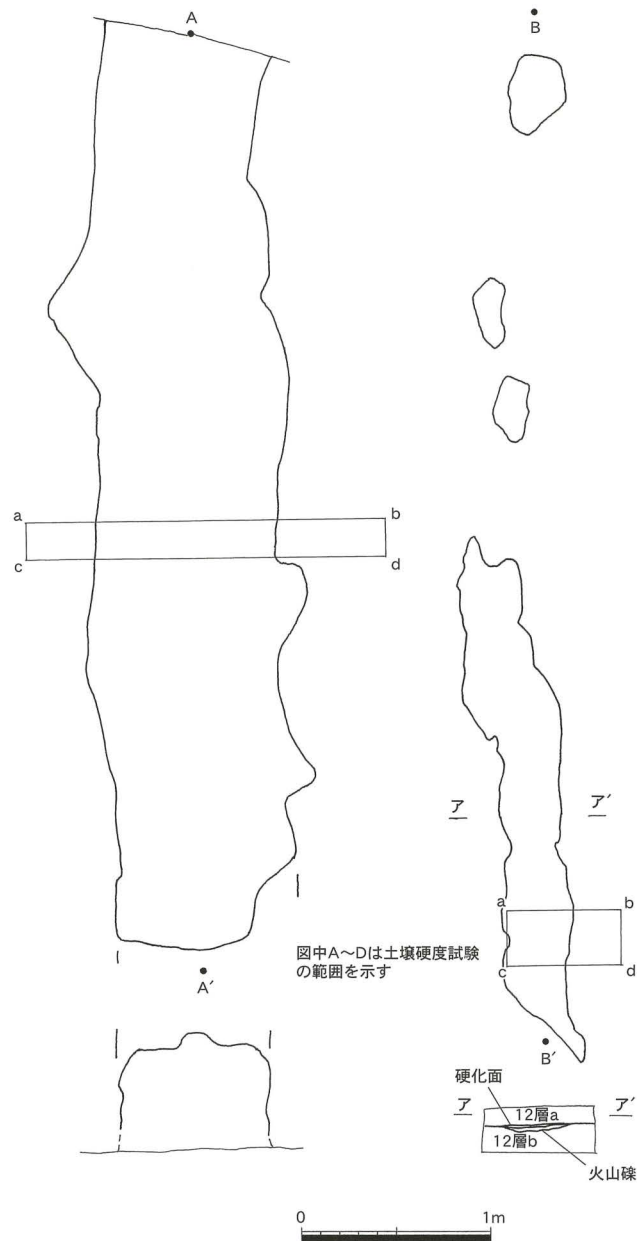
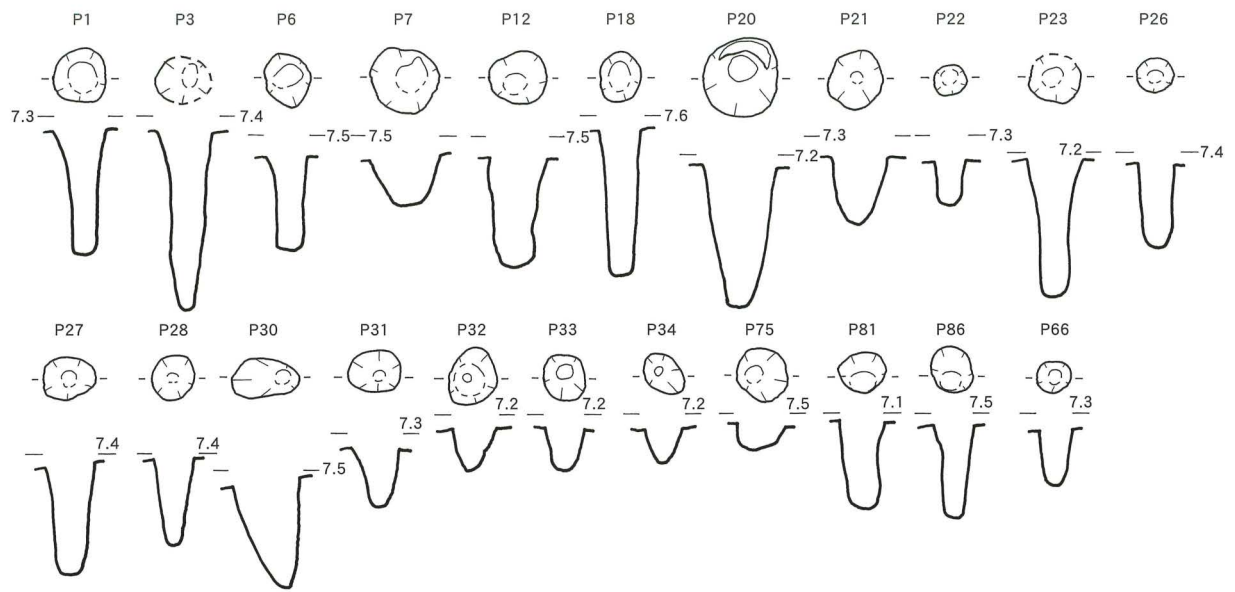
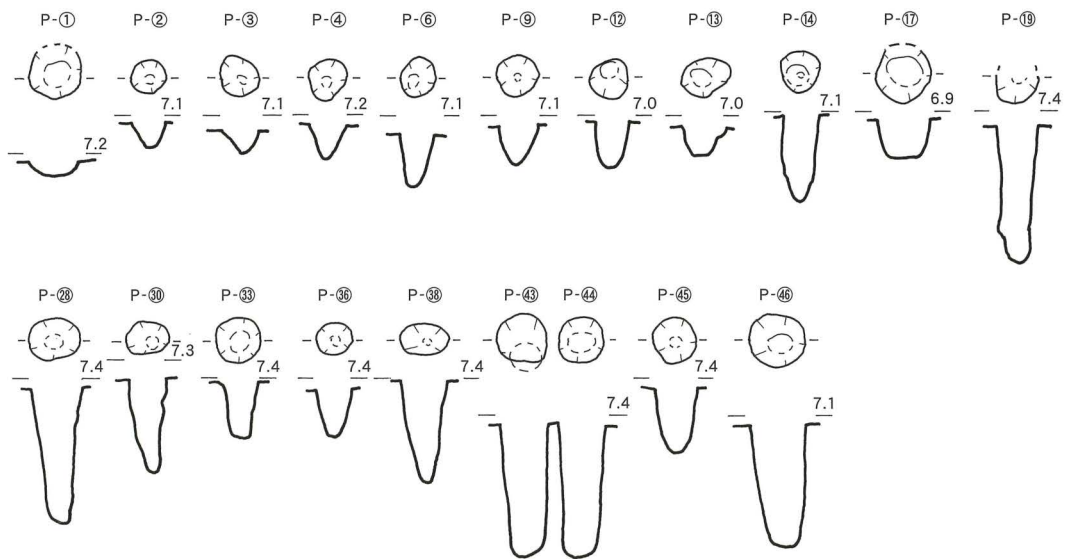


図96. 弥生時代の道跡平面図 (S=1/40)



12層aを埋土とするPit



12層cを埋土とするPit



図97. 12層を埋土とする柱穴平・断面図 (S=1/40)

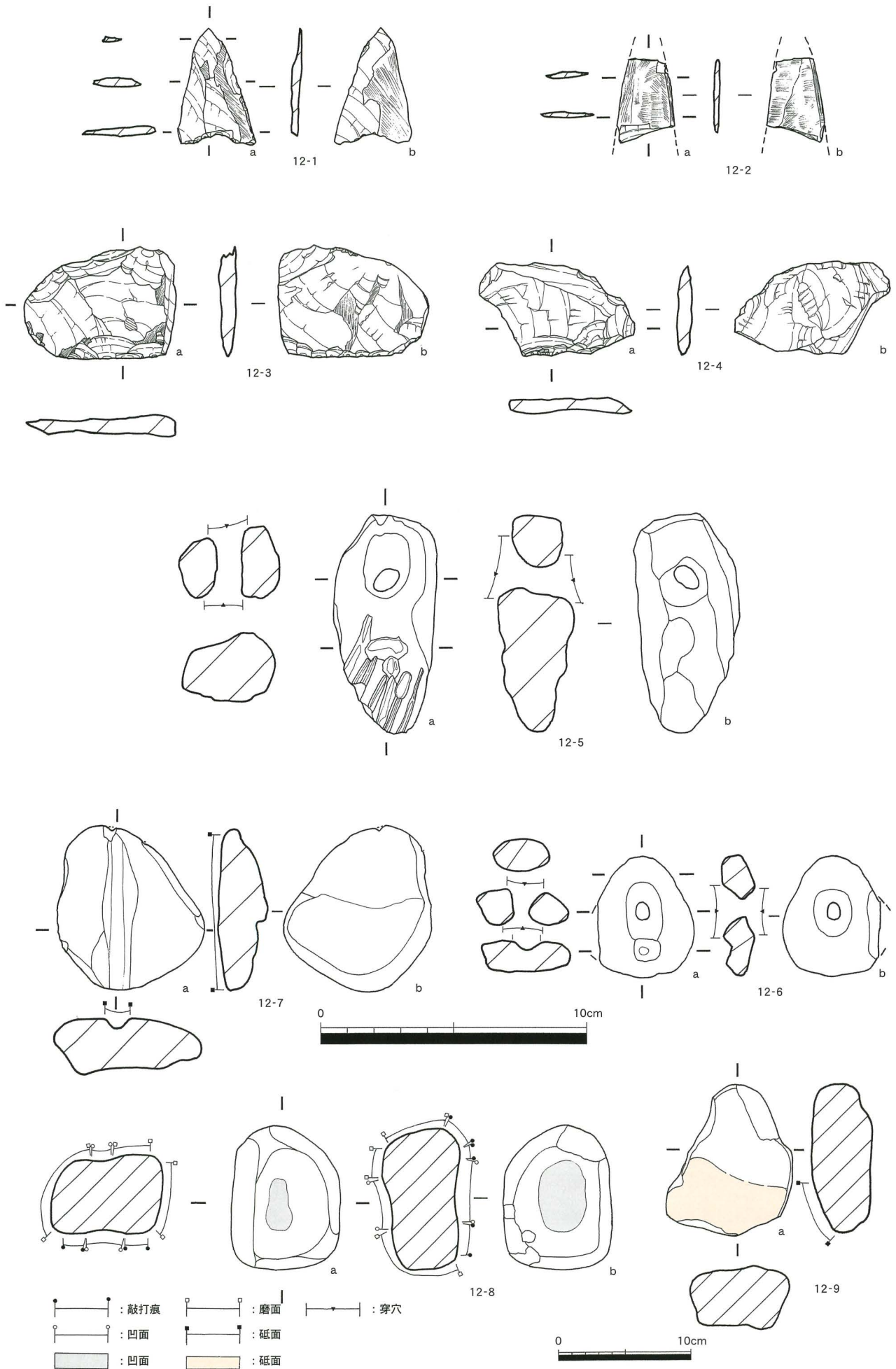


图98. 12層出土遺物実測図 (S=1/2·1/4)

3. 第12層出土の石器

①磨製石鏃（図98 12-1・2）

12-1は、研磨がa面・b面右側面に部分的に認められ、左側面は石鏃整形段階の剥離痕が認められる。基部は微細な調整で整形されている。

12-2は、a面・b面ともに丁寧に研磨されている。先端部と基部側が欠損しており、a面にはその欠損面の剥離痕が認められる。

②横刃形石器（図98 12-3・4）

12-3は、横長剥片を素材とした横刃形石器である。両面も剥離面の凸部のみに研磨が認められる。刃部は両面側からの加撃によって作出されており、断面形状がクサビ形を呈している。12-4は、横刃形石器の欠損品と考えられる。a面下端部に刃部が認められ、b面側からの加撃によって作出されている。

③軽石加工品（図98 12-5～7）

12-5は、全体的に整形された上部に穿穴が施されているものである。穴は両面側から穿穴されている。a面下端部には、少なくとも7条の沈線が切り込まれている。

12-6は、直径約8mmの半円形の溝（凹線）が認められるものである。時代は異なるものの、古墳時代の土器捨て場から出土した軽石製加工品（図41. 109）と同じ形態のものである。

12-7は、中央上部に1穴が穿穴されている。a面には、穿穴された穴の下部に貫通しない窪みが認められる。

④凹石（図98 12-8）

12-8は、両面中央部に凹面が認められる凹石である。a面において、凹面以外の面には敲打痕が認められる。また、b面においては凹面以外の面には磨面が認められる。b面左面下部に剥離痕が認められる。

番号	No.	層	器種名	石材	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重さ:g
1	1000	12	磨製石鏃	頁岩	4.4	2.9	0.40	4.9
2	968	12	磨製石鏃	頁岩	3.2	2.2	0.25	2.6
3	978	12	横刃形石器	頁岩	4.2	5.7	0.80	23.0
4	1046	12	横刃形石器	頁岩	3.5	5.8	0.50	16.0
5	一般	12	軽石加工品	軽石	8.2	3.9	2.5	20.0
6	1063	12	軽石加工品	軽石	4.6	3.7	1.3	5.90
7	1101	12	砥石	砂岩	6.2	5.6	2.10	50.0
8	1043	12	凹石	安山岩	10.7	8.3	6.00	906.0
9	1056	12	砥石	不明	11.4	9.5	4.30	519.0

⑤砥石（図98 12-9）

12-9は、不整形な礫を素材とした砥石である。a面下部に砥面が認められる。石器本体を平坦面に設置すると砥面は斜面となる。

4. 第12層出土の土器

第12層からも土器片が出土した。いずれも破片資料で、部位や器種を特定できるものは少量であった。以下に型式の推定が可能な資料を報告する。

12-10、11は、第12層a出土の甕形土器の口縁部破片である。口縁部に突帯が「L」字状に貼付され、跳ね上げぎみに上方にのびる。

12-12、13は第12層b出土の甕形土器の口縁部～突帯部の破片である。12-12は、口縁部に突帯が「L」字状に貼付され、上方に跳ね上がる。胴部には断面三角形の1条の突帯が巡る。12-10～12は、山ノ口式土器に該当するものと思われる。13も口縁部に突帯が「L」字状に貼付されるが短く跳ね上がらない。胴部にかけてやや膨らみを持ち1条の突帯が巡る。13は入来式土器に該当するものと思われる。なお、第12層c、dからも土器片が若干出土したが、いずれも細片であった。

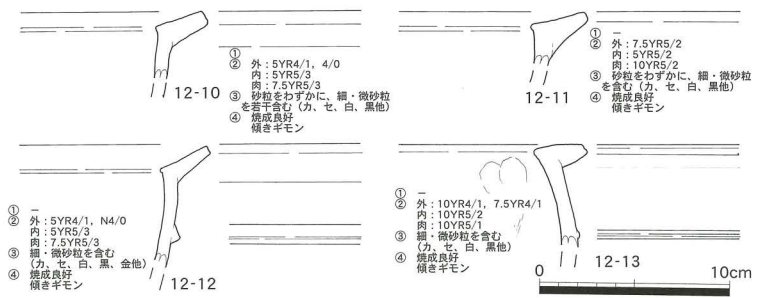


図99. 12層出土の土器

第4章 まとめ

第1節 調査地点の生活痕跡の変遷

今回の調査で、第12層 c・d 中から若干ではあるが遺物が出土した。同層形成時期には、調査地点を含めた近辺で人々の生活が営まれていたものと見られる。検出された遺構のうち、もっとも古いものは、第12層 c を埋土とするピット群であるが、建物等の構造物を示唆する状況は看守できなかった。第12層 a 及び b で検出された道跡 A・B や第12層 b からは、弥生時代中期前半に位置づけられている入来式土器が、12層 a からは中期後半に位置づけられている山ノ口式土器が出土していることから同時期の集落の存在が示唆されよう。その後開闢岳噴火によって第11層（暗紫コラ）が降下、上位に堆積した第9層 c の時期に竪穴式住居群と土器捨て場が形成されている。集落の廃絶後、第9層 a、第8層から遺物は出土するものの調査地点で遺構は検出されなかった。以下、主な調査成果と今後の課題を列挙しまとめにかえたい。

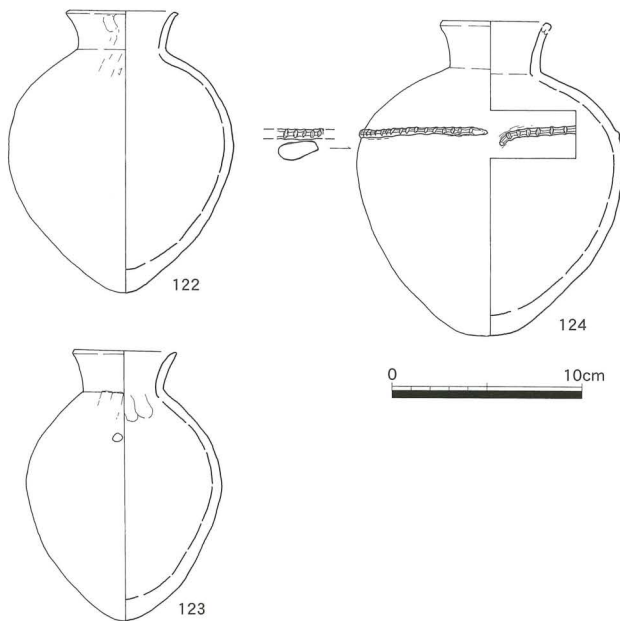


図100. 土器捨て場出土遺物実測図⑩

第2節 土器捨て場と出土土器について

土器捨て場の形成は、第9層 c 中から始まり第9層 b に至る。遺物には、甕、壺、鉢、皿、蓋、高坏、ミニチュア、凹石、磨石、砥石、台石、軽石加工品、礫などがあり土器が大半を占める。土器は、先述のとおり大半が割れた状態で出土しているが、122～124のように完形品もある。123は肩部に124は胴部に焼成後穿孔が施されたもので、祭祀に転用されたと見られる壺である。56、57の高坏や65～76のミニチュア、105、107、108の舟形軽石加工品、111～119の沈線や穿孔が施された軽石加工品も祭祀遺物であろう。

土器捨て場が祭祀の場として利用されたかどうかは、祭祀遺物はその役割を終えた後に単純に廃棄されたと見ることもできるため判断できない。

出土した各種土器は、中村直子氏の編年案に準拠すれば、成川式土器様式の中でも中津野式土器段階～東原式土器段階のものと見られる。時期的には、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられている。出土遺物は、ナンバーリングしたもので8600点、細片で一般遺物として取上げたものを含めれば、1万点を越える。時間的な制約もあり、出土状況の分析や型式分類まで至らなかったため、今後の課題としたい。

第3節 竪穴式住居群について

14基の竪穴式住居を平面的に検出した。竪穴式住居には、平面形態で大別して下表の3種類がある。

1	方形プラン	9・10・12～14号住居	
2	円形プラン	A	間仕切りが1箇所（あるいは1箇所と推定されるもの）
		B	間仕切りが複数で内部が花卉型を呈するもの
3	金魚形プラン	11号住居	

11・14号住居以外の各住居の主軸は、ほぼ東西南北方向に揃うため、切り合っているものも比較的近接した時期に建てられた可能性がある。10・13・14号住居のように2本の柱を中心軸にした方形住居には、類例として鹿屋市王子遺跡8号住居がある。中摩浩太郎は、弥生時代の竪穴式住居について柱配置から5つに分類している。10・13・14号住居は、中摩のいうⅠA型（柱配置が竪穴の中心軸を形成し、竪穴形状が単純な方形になるもの）に該当する。1～8号住居は、中央の落ち込みのコーナーに設けられた4本柱を主柱穴とし上部に井桁を組むもので、中摩のいうⅡA型（平行枠（井桁）主体とし、竪穴形状が円形のもの）に近い。類例として鹿屋市中ノ原遺跡3号住居がある。円形プランBのタイプの住居では、間仕切りが後で付け足されるケースが確認された一方、間仕切りの上に壁のような構造物があった証左は得られなかった。間仕切りを設ける理由が今後の出土例で明らかになることを期待したい。

いずれの住居も埋土中遺物、床直資料ともに少なく時期を特定しづらいが、例えば、SA01-1、2（図48）、SA03-1、3（図56）、SA08-1、2（図76）、SA09-1（図78）などから中津野式土器段階に該当するのではないかと思量される。

なお、植物珪酸体分析では各住居から比較的多量なススキのプラント・オパールが検出されている。隣接する橋牟礼川遺跡でも古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居からススキのプラント・オパールが多量に検出され屋根材として使用されたとみられている。本遺跡でも同様に屋根材として使用された可能性がある。

第4節 竪穴住居群と土器捨て場、一括出土遺物、道跡Cの関係について

図44のとおり、8号住居を除いて土器捨て場と住居群は切り合わない。道跡cは、11・12号住居を除いて、その他の遺構とは切り合わない。①土器捨て場南側の遺物分布は、ほぼ東西に直線的に収まり、その南側から10～14号住居が検出されていること、②土器捨て場内の土器も中津野式土器段階～東原式土器段階のものと見られること、③土器捨て場、竪穴式住居群、道跡cの各遺構の形成時期が第9層c中であることを考えると、8号住居以外の遺構は共時に存在した可能性がある。また、土器捨て場がもともと塚状に形成されたもので、その後崩れて8号住居の上位に堆積したと仮定すれば、8号住居も共時に存在した可能性も棄却できない。また、8号住居の周辺でグループB～Dの一括資料、土器捨て場2が検出されているが、8号住居との関連は不明である。

第5節 出土石器について

廃棄または遺棄された弥生時代終末の住居内出土遺物の中で、床面貼り付けまたは床面直上で取上げた石器は全て実測・掲載している。石器等が出土した住居は、1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号・13号住居である。住居内の石器等の組成は下表のとおりである。特記すべき点は、次のとおりである。

4・7号住居から出土している狩猟具の磨製石鏃はすべて完形品であること。磨製石器等の加工具である砥石が、5・6・7・13号で出土し、7号住居からは3点出土していること。食料加工具または道具加工具である台石、凹石、敲石、磨石の礫石器類が出土しており、砥石を含めたセット関係により各

	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	13号	合計
磨製石鏃				1			2		3
二次加工剥片				1					1
砥石					1	1	3	1	6
台石			1					1	2
凹石		1							1
磨石		1							1
敲石					1				1
礫	1	1		4					6
軽石加工品	1	1	1				1		4
磨面をもつ軽石		1	1						2
合計	2	5	3	6	2	1	6	2	27

住居内での作業内容が類推できること。加工・使用面が確認できない礫が出土していること。特に、4号住居からは4点の礫が出土し、4-11は被熱によるヒビが表面に見られることから、住居内での用途を推測する上での手がかりになると思われる。

軽石加工品や、磨面をもつ軽石が出土していること。特に、3号住居の3-7の軽石加工品は注視するものであり、a面左側面の削り面や、a面中央部の円弧状を呈した溝状の切込みは鋭利な刃物によるものと考えられる。近接する南摺ヶ浜遺跡では、当該期の鉄器が出土していることから軽石の加工に鉄製品が使われた可能性が高い。

土器捨て場から出土した石器・礫・軽石等504点の内訳は、剥片石器等19点、礫石器等87点、礫・礫片等193点、軽石を素材とした加工品94点、軽石・軽石片111点である。剥片石器等は狩猟具の石鏃、木材伐採・加工具の石斧、穂摘み具の石包丁などがある。植物珪酸体分析から遺跡周辺で稲作が行われていたことが示唆されており、2号住居からは石包丁形の軽石加工品も出土しているため、指宿地域では、弥生時代終末～古墳時代初頭まで石包丁が使われていた可能性が高い。礫石器等には、道具の製作具や食料加工具などがある。特に砥石が24点と多く、砥面の状態から加工対象具が磨製石器だけではなく、例えば鉄器等の製作・維持管理での使用も考慮すべきと考える。砥石はその利用石材の粒子に細かいもの、粗いもの等があり、砥石を用いた作業工程の違いによる使い分けが想定できよう。

軽石を素材とした加工品は、舟形軽石加工品をはじめ、祭祀に用いられたと考えられるものが主体を占める。舟形軽石加工品については、83や84の石錘の出土と合わせ漁業のあり方を示唆する資料でもある。加工面には鋭い刃物で削り取られた面が残されておりその加工具も検討課題である。整形はされないものの磨面をもつ軽石や、使用面も確認されない軽石については、その用途や遺跡地内へ搬入された目的についても検討が必要である。

土器捨て場の出土石器類の中で、写真125～128の4例の接合資料を得た（第12図・別図A）。125は2点接合（1.6m）で完形礫に復元できる。126は2点接合（4.3m）で下端部の縁辺に敲打痕が認められる敲石。127は、分割礫片の2点接合（1m）である。128は、2点の分割礫の接合（7.8m）である。剥片石器の石材のひとつである頁岩の母岩（9kg）であり、この接合資料の存在から遺跡地内での石材確保・石器製作が行われていたことが伺える。

第9層出土遺物の中で、土器捨て場の範囲外から出土した石器・軽石は5点である。内訳は、使用痕のある剥片2点（78・79）、石錘1点（83）、敲石1点（96）、舟形軽石加工品1点（106）である。図10で図示している道跡Aの西側から出土した石錘をはじめ、図12のピット群が検出された範囲から出土した舟型軽石加工品など、これからの石器等の出土位置と遺構との関連を踏まえた場の機能について検討していく必要がある。

第6節 橋牟礼川遺跡、南摺ヶ浜遺跡との関係

橋牟礼川遺跡で検出された古墳時代の住居群は、辻堂原式土器段階～笹貫式土器段階の時期のもので、本遺跡より新しい。また、本遺跡と同時期の住居は検出例がないため、その関係については論じることができない。あえて仮説として提示するならば、時代とともに居住域が西側に移り、結果として辻堂原式土器段階～笹貫式土器段階の集落が橋牟礼川遺跡に形成された可能性も考慮しておきたい。

南摺ヶ浜遺跡は、弥生時代終末～古墳時代（5世紀中ごろ）まで、壺棺墓、甕棺墓、立石、円形周溝墓、土壇墓が累々と営まれた墓域で、成川遺跡同様、南九州の墓制を考える上で極めて重要な遺跡である。土器型式をみれば、墓が造られはじめた時期と本遺跡の集落の時期は重なっているため、候補地の1つに数えられよう。



写真1 指宿市全景（東から）



写真2 19年度調査区全景（南西から）



写真3 20年度調査区全景（南から）



写真4 19年度調査区東壁1



写真5 19年度調査区東壁2



写真6 19年度調査区南壁



写真7 20年度調査区東壁1



写真8 19年度調査区旧河川上面検出状況



写真9 19年度調査区 旧河川掘削状況

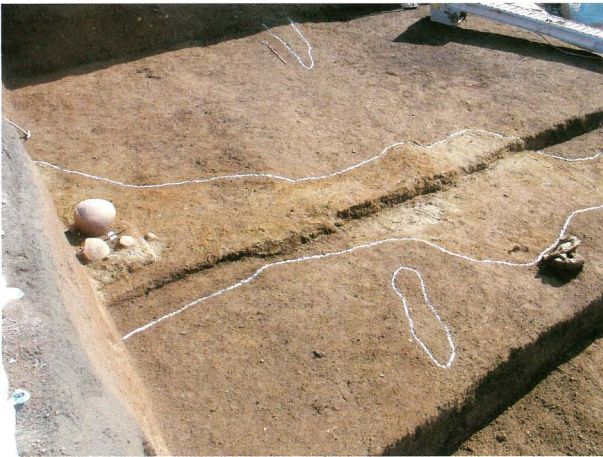


写真10 道跡A



写真11 硬化面A



写真12 道跡C



写真13 旧河川内壺1, 2出土状況



写真14 旧河川内壺3出土状況



写真15 グループA検出状況



写真16 グループB検出状況



写真17 グループC検出状況



写真18 グループD検出状況



写真19 19年度調査区土器捨て場1 検出状況①



写真20 19年度調査区土器捨て場1 検出状況②

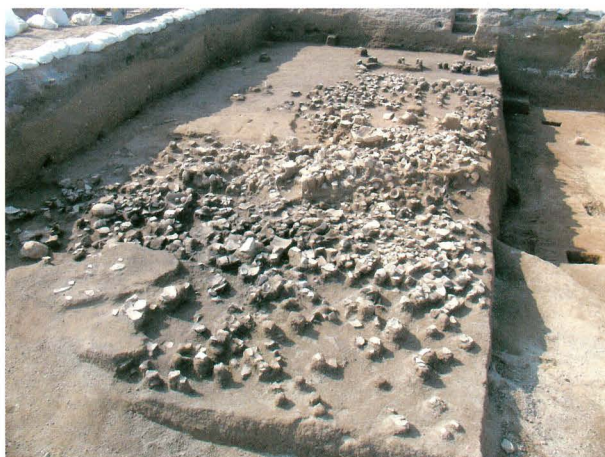


写真21 19年度調査区土器捨て場1 検出状況③(調査区拡張後東から)



写真22 19年度調査区土器捨て場1 検出状況④(調査区拡張後西から)



写真23 20年度調査区土器捨て場1 検出状況①(東から)



写真24 20年度調査区土器捨て場1 検出状況②(北から)



写真25 20年度調査区土器捨て場1 検出状況③(北から)

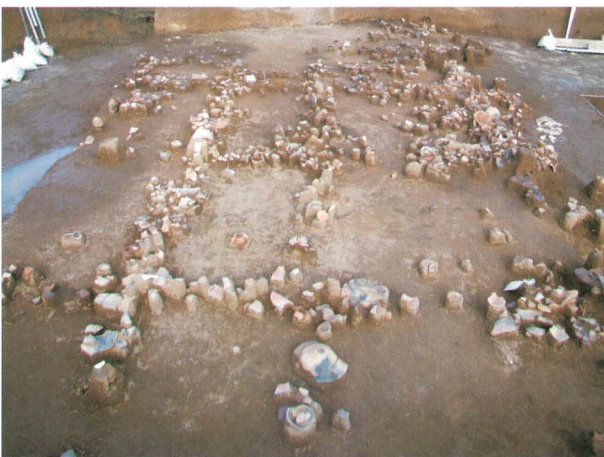


写真26 20年度調査区土器捨て場1 検出状況④(ベルト除去後西から)

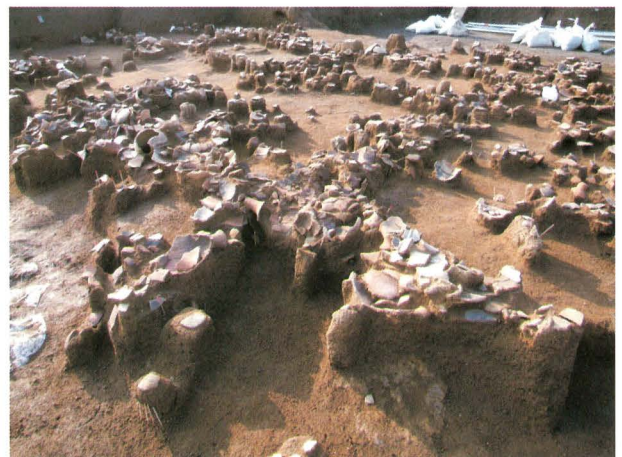


写真27 20年度調査区土器捨て場1 検出状況⑤(ベルト除去後南東から)



写真28 20年度調査区土器捨て場1 検出状況⑤



写真29 20年度調査区土器捨て場1 検出状況⑥



写真30 20年度調査区土器捨て場 1 検出状況⑦



写真31 19年度調査区土器捨て場 2 検出状況 3



写真32 19年度調査区土器捨て場 2 検出状況 4

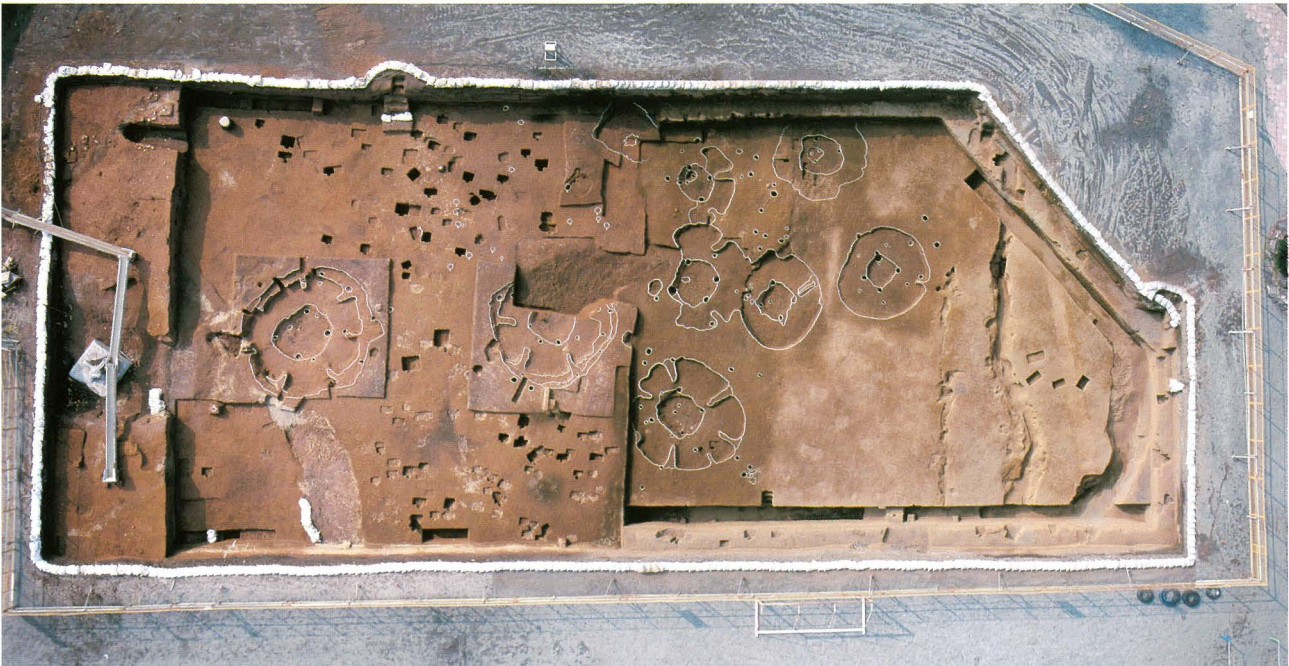


写真33 19年度調査区竪穴式住居検出状況



写真34 1号住居検出状況



写真35 1号住居埋土除去状況

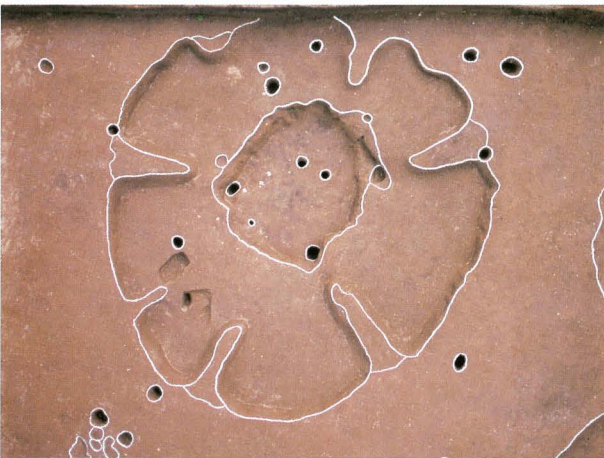


写真36 1号住居完掘状況



写真37 1号住居間仕切り a 断面



写真38 1号住居間仕切り b 断面



写真39 1号住居間仕切り c 断面



写真40 1号住居間仕切り d 断面



写真41 1号住居間仕切り e 断面



写真42 1号住居間仕切り f 断面



写真43 1号住居間仕切り g 平面



写真44 1号住居間仕切り g 断面



写真45 1号住居貼床断面



写真46 2号住居検出状況

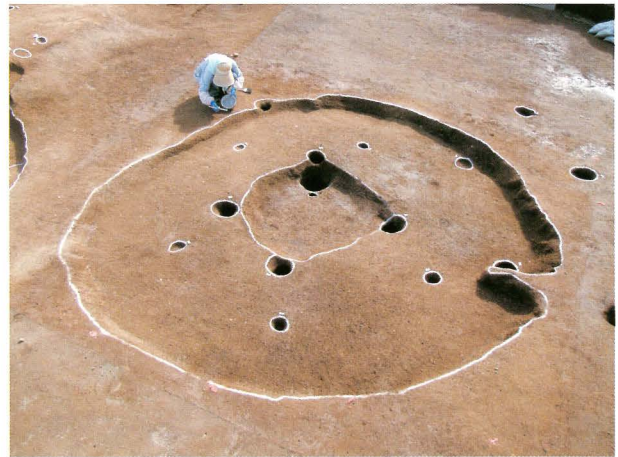


写真47 2号住居完掘状況①

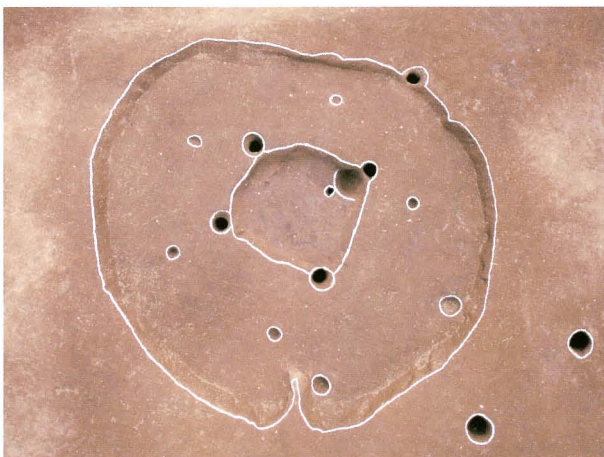


写真48 2号住居完掘状況②

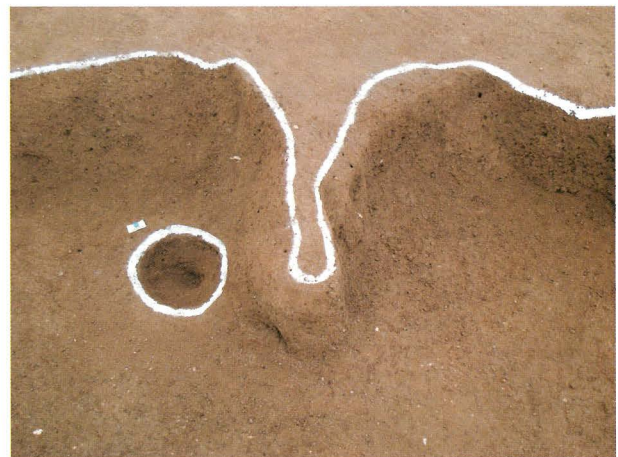


写真49 2号住居間仕切り部分

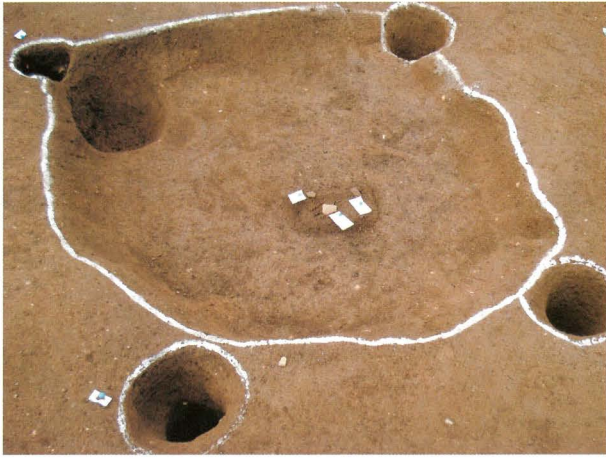


写真50 2号住居中央落ち込み部分



写真51 2号住居貼床断面



写真52 3号住居検出状況

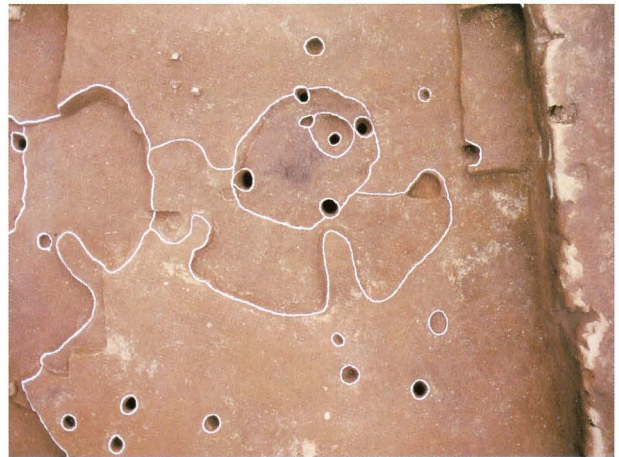


写真53 3号住居完掘状況



写真54 3号住居中央炉状況



写真55 4号住居検出状況①



写真56 4号住居検出状況②

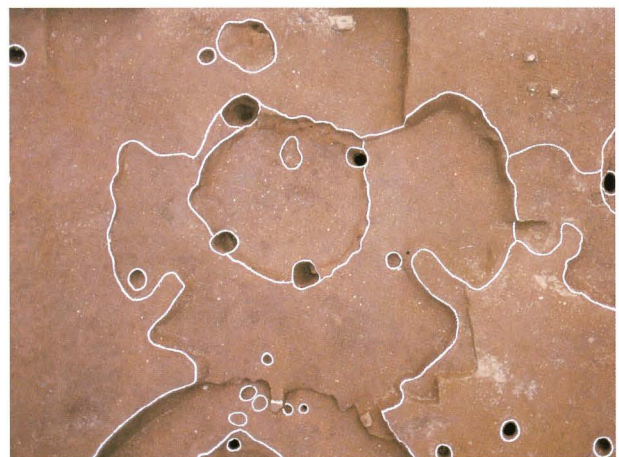


写真57 4号住居検出状況③



写真58 4号住居完掘状況



写真59 間仕切り a 断面



写真60 間仕切り b 平面



写真61 間仕切り b 断面

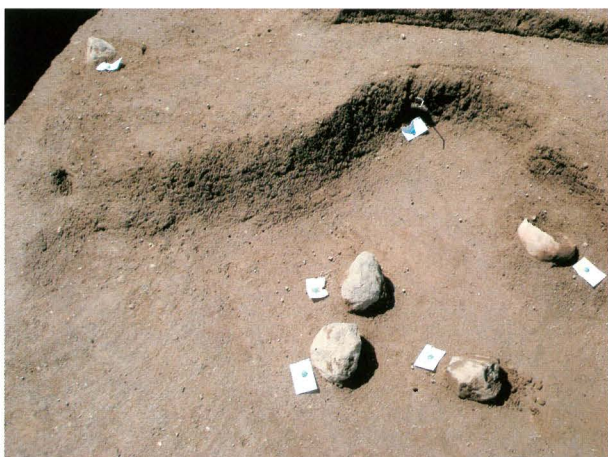


写真62 遺物出土状況 (SA04-2、8~11) ①



写真63 遺物出土状況 (SA04-1) ②



写真64 4号住居床面状況



写真65 5号住居検出状況①



写真66 5号住居検出状況②

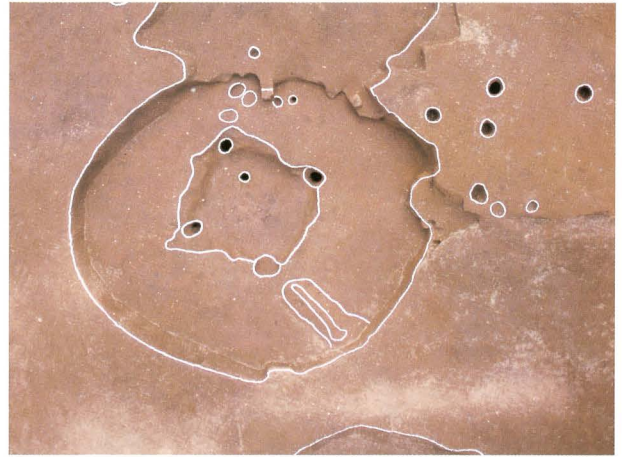


写真67 5号住居完掘状況①



写真68 5号住居完掘状況②

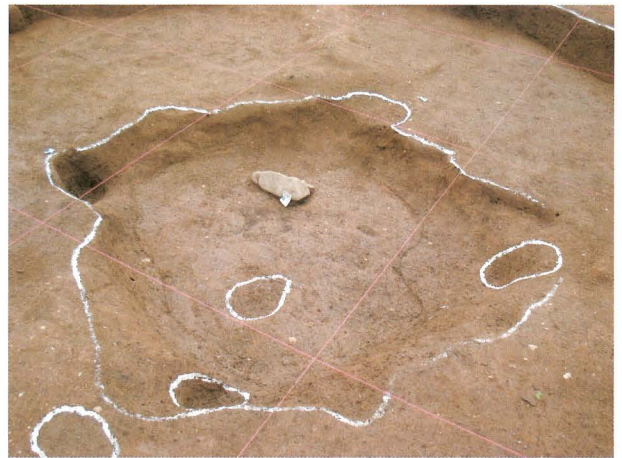


写真69 5号住居中央落ち込み部分



写真70 6号住居検出状況①



写真71 6号住居検出状況②

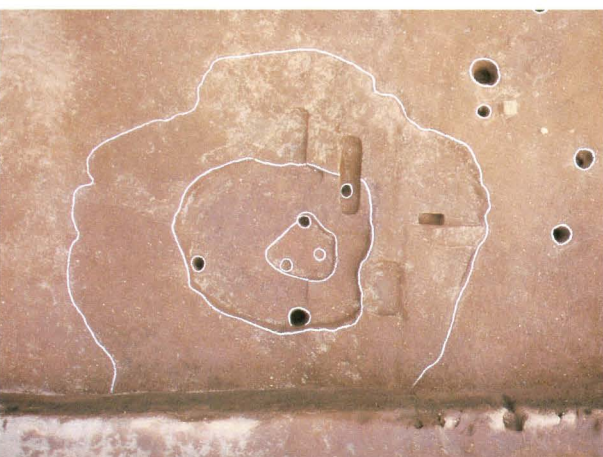


写真72 6号住居検出状況③



写真73 6号住居北側立ち上がり



写真74 6号住居南側立ち上がり



写真75 6号住居南側立ち上がり部分掘削状況



写真76 6号住居北側立ち上がり部分掘削状況



写真77 6号住居完掘状況

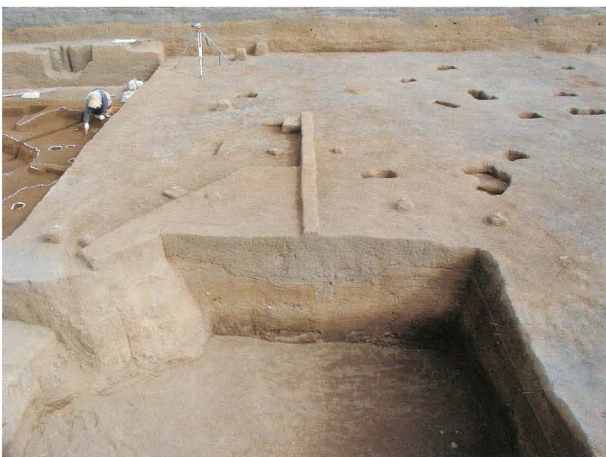


写真78 7号住居検出状況



写真79 7号住居立ち上がり



写真80 7号住居完掘状況①



写真81 7号住居完掘状況②



写真82 7号住居完掘状況③



写真83 7号住居断面①



写真84 7号住居断面②



写真85 7号住居間仕切り a 断面



写真86 7号住居間仕切り b 断面



写真87 7号住居間仕切り c 断面



写真88 8号住居検出状況①



写真89 8号住居検出状況②



写真90 8号住居完掘状況①



写真91 8号住居完掘状況②



写真92 8号住居間仕切り a 断面



写真93 8号住居間仕切り b 断面



写真94 8号住居間仕切り c 断面



写真95 8号住居間仕切り d 断面



写真96 8号住居間仕切り e 断面



写真97 8号住居間仕切り f 断面



写真98 8号住居間仕切り f 断面



写真99 8号住居柱穴断面



写真100 8号住居貼床断面



写真101 8号住居半裁状況



写真102 8号住居出土小壺 (SA08-1) ①



写真103 8号住居出土小壺 (SA08-1) ②



写真104 9号住居検出状況①



写真105 9号住居検出状況②



写真106 9号住居検出状況③



写真107 9号住居完掘状況①



写真108 9号住居中央炉



写真109 10号住居完掘状況



写真110 11号住居検出状況



写真111 11号住居立ち上がり



写真112 11号住居張り出し部分



写真113 11号住居完掘状況



写真114 12号住居検出状況



写真115 12号住居完掘状況



写真116 12号住居立ち上がり



写真117 12号住居断面①



写真118 12号住居断面②



写真119 12号住居断面③



写真120 13号住居検出状況①



写真121 13号住居検出状況②



写真122 13号住居検出状況③



写真123 13号住居検出状況④



写真124 13号住居完掘状況



写真125 14号住居検出状況①

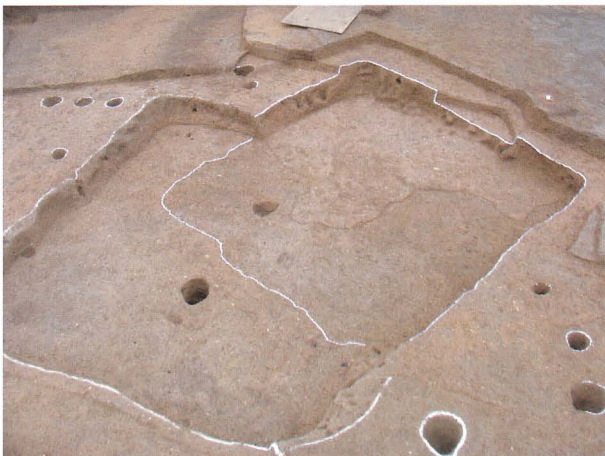


写真126 14号住居検出状況②



写真127 14号住居検出状況③



写真128 14号住居壁際の土坑検出状況



写真129 14号住居壁際の土坑掘削状況



写真130 14号住居完掘状況

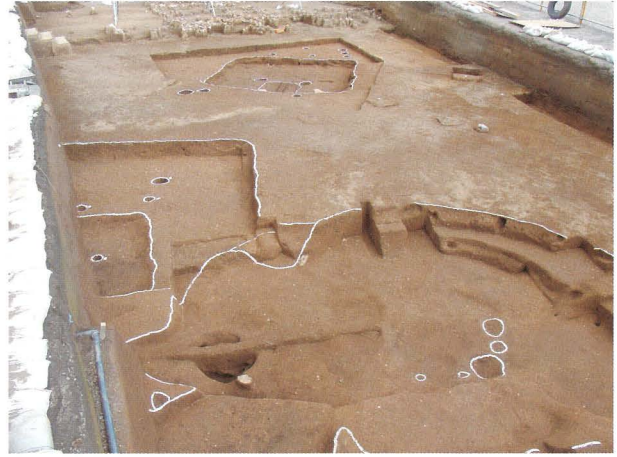


写真131 20年度調査区竪穴住居検出状況①



写真132 20年度調査区竪穴住居検出状況②



写真133 20年度調査区竪穴住居検出状況③

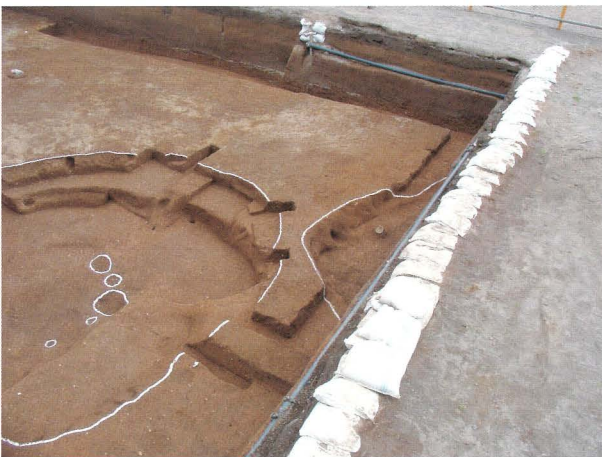


写真134 20年度調査区竪穴住居検出状況④

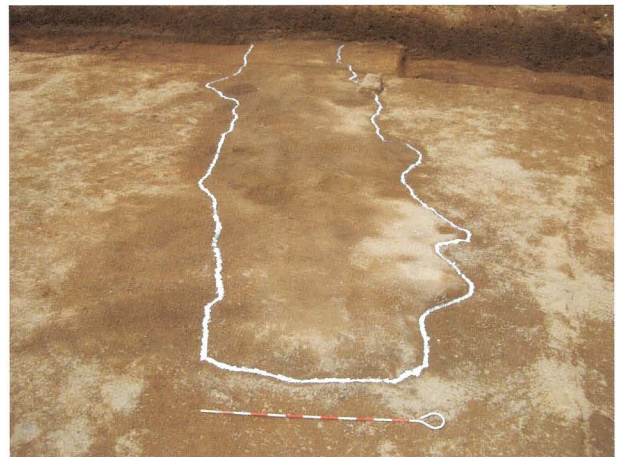


写真135 弥生時代道跡 A



写真136 弥生時代道跡 B



壺1



壺2



壺3



壺4



壺5



A-1



A-2



A-3



A-4



C-1



C-2



C-3



D-1



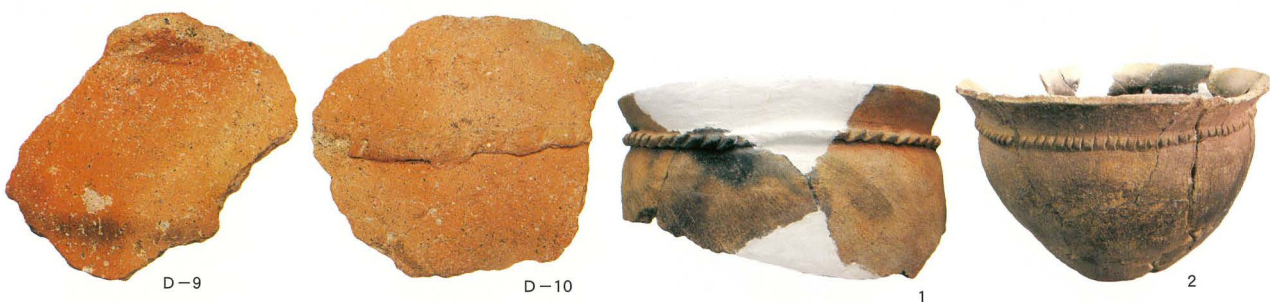
D-2



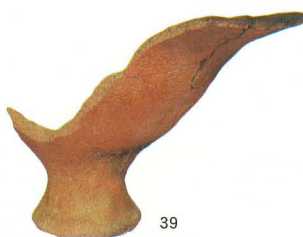
D-3



D-4

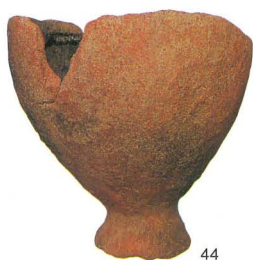








43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74





91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



119



120



121



122



123



124



124 (穿孔部分)



125



126



127



128

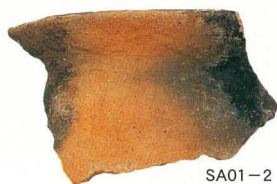


128 (接合)





SA01-1



SA01-2



SA01-3



SA01-4



SA02-1



SA02-2



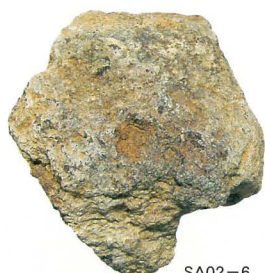
SA02-3



SA02-4



SA02-5



SA02-6



SA03-1



SA03-2



SA03-3



SA03-4



SA03-5



SA03-6



SA03-7



SA04-1



SA04-2



SA04-3



SA04-4



SA04-5



SA04-6



SA04-7



SA04-8



SA04-9



SA04-10



SA04-11



SA05-1



SA05-2



SA05-3



SA05-4



SA05-5



SA06-1



SA06-2



SA06-3



SA07-1



SA07-2



SA07-3



SA07-4



SA07-5



SA07-6



SA07-7



SA07-8



SA07-9



SA07-10



SA07-11



SA08-1



SA08-2



SA09-1



SA09-2



SA09-3



SA10-1



SA12-1



SA13-1



SA13-2



SA13-3



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-6



12-7



12-8



12-9



12-10



12-11



12-12



12-13

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみたんば							
書名	南丹波遺跡Ⅱ							
副書名	丹波小学校校舎整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次	-							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	中摩浩太郎 渡部 徹也 鎌田 洋昭							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL: 0993-23-5100							
発行年月日	平成22年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南丹波遺跡	指宿市湯の浜 3-2-6	46210				2007. 4. 16～ 2008. 3. 31 2008. 10. 10～ 2009. 2. 27	1,516m ²	小学校校舎建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南丹波遺跡	集落遺跡	弥生中期 弥生終末～古墳初頭	道跡 竪穴式住居 土器捨て場 道跡 ピット群	入来式土器・山ノ口土器 中津野式土器～東原式土器、石器		内部に間仕切りをもつ円形住居出土		

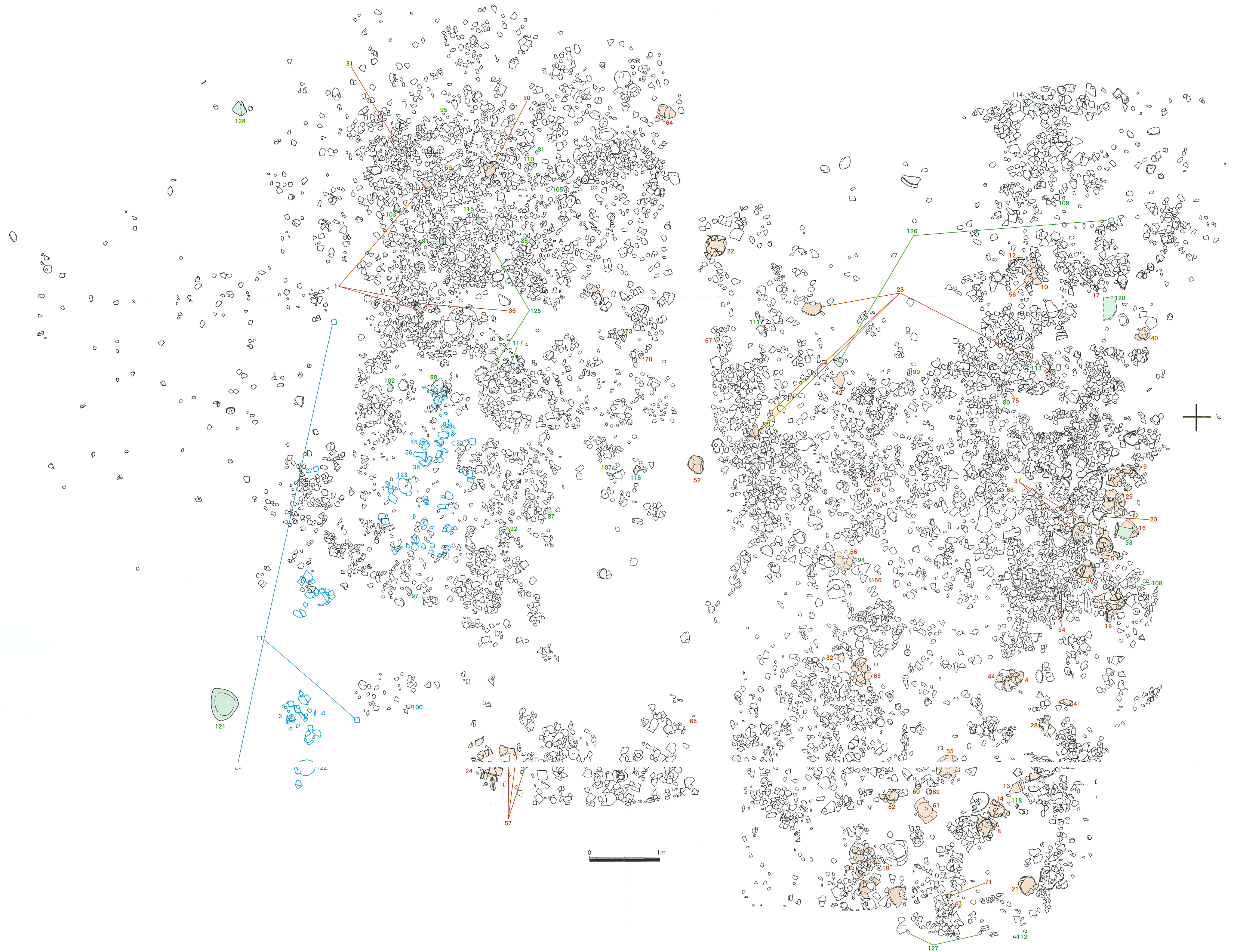
南丹波遺跡Ⅱ

丹波小学校校舎整備事業に伴う発掘調査報告書

発行日 2010年3月

発行 指宿市教育委員会社会教育課
〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290
TEL (0993) 23-5100

印刷所 野田印刷
〒891-0402 指宿市十町247-3
TEL (0993) 22-4141



別図A 土器捨て場報告書掲載遺物出土位置図 (S=1/40)

南丹波遺跡Ⅱ正誤表

ページ	誤	正
7ページ10行目	図11のP4、P6、P7の3基	図11のP1、P2、P3、及び図13のP4、P6、P7の6基
21ページ最後の行	図54の5	図28の5
25ページ4行目	別図2	別図A
54ページ	表中の層の欄、9を9c、8bを9aに変更	
57ページ7行目	P1～P3、及びP4が	P1～P3、及びP10が
67ページ6行目	SA03-1は、3号住居の東側から出土した甕形土器の口縁部の破片である。確実に住居伴うと断定はしえないが、出土位置からその可能性があるものとしてここで取上げる。口縁部は外反するが、	SA03-1は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部は外反するが、
75ページ8行目	P1～P4、及びP10が主柱穴と思われる。	P1～P4が主柱穴と思われる。
75ページ9行目	また、床面でP7～P9の3基の	また、床面でP6、P7の2基の
84ページ 図72	図中のキャプション「P14」を「P4」に訂正	
85ページ 図74	上の断面図中のキャプション「P14」を「P13」に訂正	
87ページ12行目	間仕切りbの上に位置するP10を除いて	間仕切りbの上に位置するP10と間仕切りcの上に位置するP18を除いて
87ページ14行目	住居の床面からP4、P5の2基を	住居の床面からP3、P4の2基を
87ページ15行目	P6～P13、P17、P18の15基の柱穴を検出した。このうちP7～P13、P17は住居の際に	P5～P11、P14～17、P18の12基の柱穴を検出した。このうちP6～P11、P14、18は住居の際に
87ページ16行目	P14については、試掘トレンチ断面で埋土中に柱穴のラインを確認した。住居の埋没過程では柱が残っていたものと推定される。	P15、16については、試掘トレンチ断面で埋土中に柱穴のラインを確認した。P15については、住居の埋没過程で柱が残っていた可能性も推定される。
89ページ 図77	図中のキャプション「掘りかたライン」を「掘りかたライン」に訂正	
95ページ16行目	土坑2とP5の間には	土坑2とP3の間には
95ページ18行目	住居の内部からP1～P7の	住居の内部からP1～P5、P11の
95ページ18行目	P3、P7は	P5、P11は
95ページ19行目	P2、P6は浅いが、P1、P3は30cm程度の	P2～4は浅いが、P1、P5、P6は30cm以上の
105ページ8行目	8a層から12c層までの	8層から12層cまでの
106ページ13行目	9-10層	9層c
106ページ17行目	8c層（試料4）では、	9層b（試料4）では、
106ページ18行目	8b層（試料2、3）では	9層a（試料2、3）では
106ページ19行目	8a層（試料1）では 中略 8a層ではマンサク科	8層（試料1）では 中略 8層ではマンサク科
106ページ35行目	9-10層	9層c
107ページ6行目	9-10層	9層c
107ページ11行目	8c層	9層b
107ページ13行目	8a層	8層
110ページ	模式柱状図中の層 8aを8、8bを9a、8cを9b、9-10を9cに	
118ページ14行目	12-6は、	12-7は、
118ページ16行目	12-7は、	12-6は、
113・114ページ 図95	図中のキャプション「道跡D」、「道跡E」を「道跡A」、「道跡B」にそれぞれ訂正	
121ページ19行目	写真125～128の	写真146（125～128）の

